秋田県文化財調査報告書第231集

一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

―― 萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡 ――

１９９３・３

秋田県教育委員会

一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

—— 萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡 ——

１９９３・３

秋田県教育委員会

1．萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景（1）

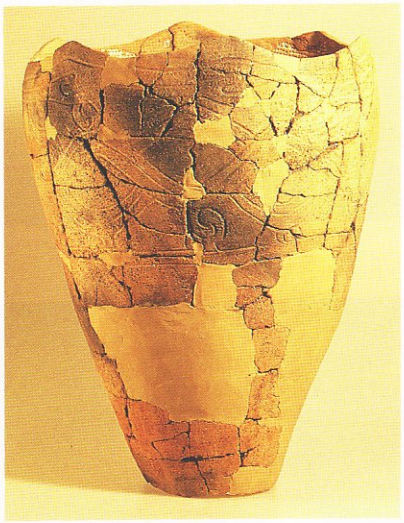
2．萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景（2）

1．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（1）

2．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（2）

1．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（3）

2．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（4）



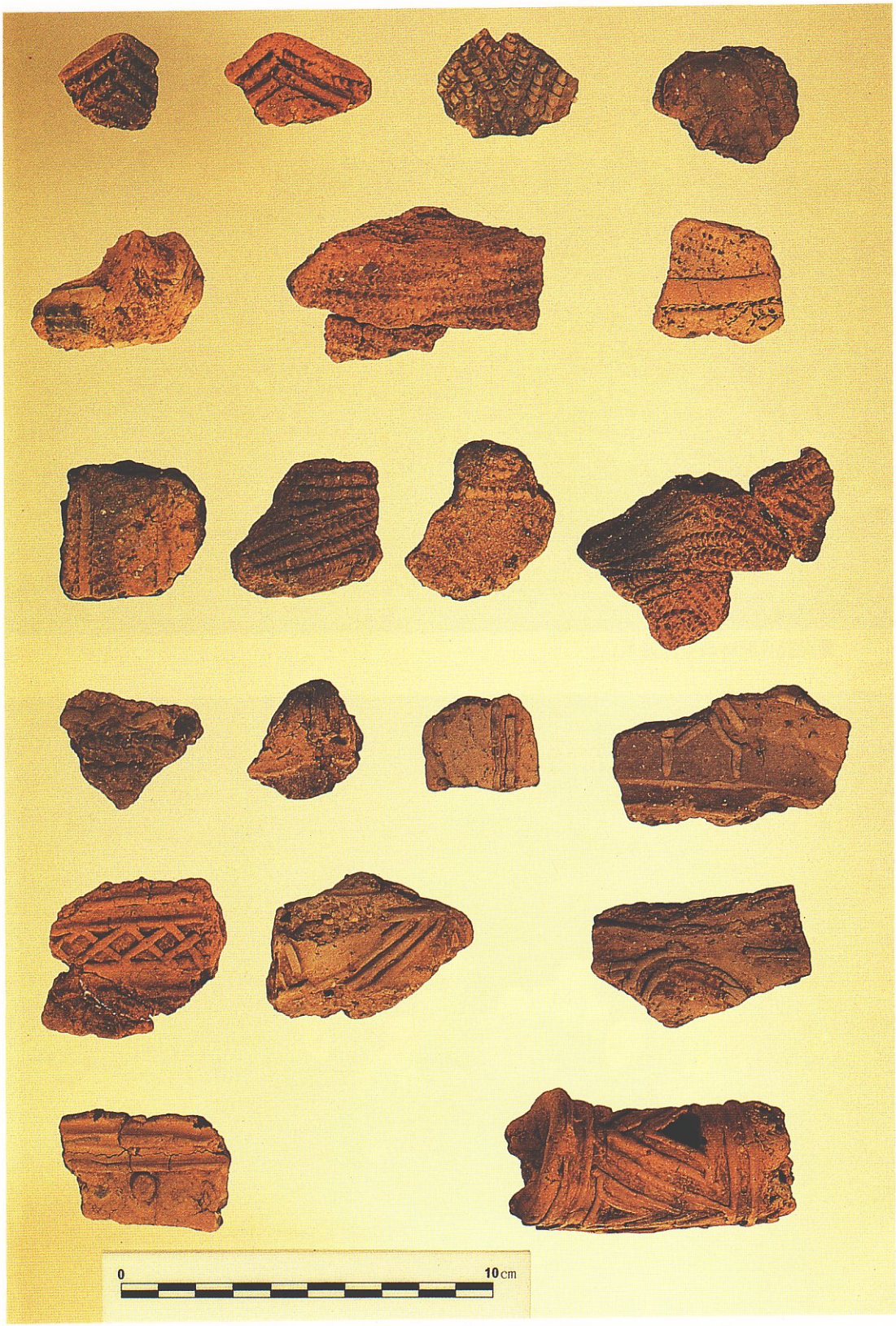
萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（1）

萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（２）－土偶

萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（３）－軽石製品・環状石斧

1．萱刈沢Ⅱ遺跡調査区遠景

2．萱刈沢Ⅱ遺跡SKF09



萱刈沢Ⅱ遺跡出土遺物－北陸系土器

序

秋田県には、先人の残した多くの文化財があります。これらの文化遺産は、現代に生きるわたしたちの責任で保護し、未来に継承していくべきものであります。

このほど建設省東北地方建設局能代工事事務所により一般国道７号琴丘能代道路が計画されました。この工事は周知の遺跡である萱刈沢遺跡にかかることが判明し、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、萱刈沢Ｉ遺跡では沢の中から縄文時代後期前葉の捨場が発見され、大量の土器・石器等の遺物が出土しました。このような沢地は、従来発掘調査の対象からはずされがちであった所であり、調査の必要性を再認識することとなりました。また、萱刈沢II遺跡からは縄文時代前期から中期にかけての竪穴住居跡、フラスコ状土坑等が発見されるとともに北陸系の土器が出土し、彼の地との交流が５千年以前から行われていたことが明らかになりました。

本書はこの成果をまとめたものでありますが、文化財に対する御理解と歴史研究の上でいささかでも役立てば幸いと存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで御指導、御協力下さった建設省東北地方建設局能代工事事務所、八竜町教育委員会ならびに関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成５年３月10日

秋田県教育委員会

教育長　橋本顕信

例　言

1　本書は、秋田県教育委員会が主体となって調査を行った萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の編集・執筆は小畑　巌が行った。本書の作成にあたり、遺物写真の撮影及び現像・焼付は小林　克が行い、遺物の復元・実測・トレース図の作成は多くの整理作業員さんの手になるものである。

3　萱刈沢Ⅰ遺跡出土の遺物（土器・土製品・石器のほとんど）の実測図の作成にあたっては、シン航空写真株式会社作成の正射投影写真を利用した。

4　付編「萱刈沢Ⅱ遺跡の土壙に残存する脂肪の分析」は、株式会社ズコーシャによる分析報告書である。

5　土層及び遺物の色調観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帳』を使用した。

6　周辺の遺跡図に使用した地形図は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図である。

凡　例

1　遺構及び遺物実測図の縮尺は、各挿図ごとにスケールの近くに付してある。何も記載のないものの縮尺については、任意である。

2　遺構に付した番号は、調査時のものを変えずに使用しているが、略号については報告時に変更したものがある。その場合は、遺構名の後に括弧付けで調査時の遺構名を付した。

なお、遺構略号は以下のとおりである。

ＳＩ（竪穴住居跡）　ＳＫ（土坑）　ＳＫＦ（袋状土坑・フラスコ状土坑）

ＳＤ（溝状遺構）　ＳＫＰ（柱穴様ピット）

3　挿図中に使用したスクリーントーンは、次のとおりである。

地　山　　焼　土　　炭化物

アスファルト　　磨り面　　凹　部

被熱面　　● 土　器　　△ 石　器

目　次

序…… i

例言・凡例…… ii

目次…… iii

はじめに…… 1

調査に至る経過…… 1

調査要項…… 2

周辺の地形…… 4

周辺の遺跡…… 6

《萱刈沢Ⅰ遺跡》

第１章　調査の概要…… 9

第１節　遺跡の概観…… 9

第２節　調査の方法…… 9

第３節　調査の経過…… 11

第２章　調査の記録…… 13

第１節　遺跡の基本土層…… 13

第２節　出土遺物…… 13

第３章　まとめ…… 85

《萱刈沢Ⅱ遺跡》

第１章　調査の概要…… 109

第１節　遺跡の概観…… 109

第２節　調査の方法…… 109

第３節　調査の経過…… 111

第２章　調査の記録…… 115

第１節　遺跡の基本土層…… 115

第２節　検出遺構と出土遺物…… 115

第３節　遺構外出土遺物…… 146

第３章　まとめ…… 158

付　編　萱刈沢Ⅱ遺跡の土壙に残存する脂肪の分析…… 181

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 1
第２図　萱刈沢Ⅰ・萱刈沢Ⅱ遺跡周辺地形及び調査区…… 3
第３図　周辺の地形図…… 5
第４図　周辺の遺跡図…… 7
萱刈沢Ⅰ遺跡
第５図　萱刈沢Ⅰ遺跡グリッド配置図…… 10
第６図　基本土層図…… 13
第７図　調査終了時の地形測量図…… 14
第８図　グリッド別出土土器個体数…… 15
第９図　第Ⅰ群、第Ⅱ群土器…… 16
第10図　第Ⅱ群土器（９～11）、第Ⅲ群土器深鉢Ａ類（12～16）…… 17
第11図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類…… 19
第12図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類…… 20
第13図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類…… 21
第14図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類（30）・深鉢Ｃ類（31・32）…… 22
第15図　第Ⅲ群土器深鉢Ｃ類…… 24
第16図　第Ⅲ群土器深鉢Ｃ類…… 25
第17図　第Ⅲ群土器深鉢Ｃ類（39）・深鉢Ｄ類（40・41）…… 26
第18図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類…… 27
第19図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類…… 28
第20図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類…… 29
第21図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類（52・53）・深鉢Ｅ類（54～56）…… 31
第22図　第Ⅲ群土器深鉢Ｅ類…… 32
第23図　第Ⅲ群土器深鉢Ｅ類…… 33
第24図　第Ⅲ群土器深鉢Ｆ類…… 34
第25図　第Ⅲ群土器深鉢Ｇ類…… 35
第26図　第Ⅲ群土器深鉢Ｇ類…… 36
第27図　第Ⅲ群土器壺Ａ類…… 39
第28図　第Ⅲ群土器壺Ｂ類…… 40
第29図　第Ⅲ群土器壺Ｂ類（90～92）・壺Ｃ類（93～101）…… 41
第30図　第Ⅲ群土器壺Ｄ類（102～106）・壺Ｅ類（107～115）…… 42
第31図　第Ⅲ群土器浅鉢Ａ類（116・117）・浅鉢Ｂ類（118）・浅鉢Ｃ類（119～121）・浅鉢Ｄ類（122・123）・浅鉢Ｅ類（124・125）… 44
第32図　第Ⅲ群土器台付浅鉢Ａ類（126）・台付浅鉢Ｂ類（127）・台付浅鉢脚部（128～131）…… 45
第33図　第Ⅲ群土器…… 46
第34図　第Ⅲ群土器…… 47
第35図　第Ⅲ群土器…… 48
第36図　第Ⅲ群土器…… 49
第37図　第Ⅲ群土器…… 50
第38図　第Ⅲ群土器…… 51
第39図　第Ⅲ群土器…… 52
第40図　第Ⅲ群土器…… 53
第41図　第Ⅲ群土器…… 54
第42図　ミニチュア土器…… 55
第43図　第Ⅳ群土器…… 55
第44図　土製品（１）－土偶…… 57
第45図　土製品（２）－土偶…… 58
第46図　土製品（３）－土偶…… 59・60
第47図　土製品（４）－鐸形土製品・土錘・盤状土製品…… 61
第48図　グリッド別石器出土状況…… 62
第49図　出土石器（１）…… 63
第50図　出土石器（２）…… 65
第51図　出土石器（３）…… 66
第52図　出土石器（４）…… 67
第53図　出土石器（５）…… 68
第54図　出土石器（６）…… 69
第55図　出土石器（７）…… 70
第56図　出土石器（８）…… 71
第57図　出土石器（９）…… 72

第58図　出土石器（10）…… 73
第59図　出土石器（11）…… 74
第60図　出土石器（12）…… 75
第61図　出土石器（13）…… 77
第62図　出土石器（14）…… 78
第63図　出土石器（15）…… 79
第64図　出土石器（16）…… 80
第65図　出土石器（17）…… 81
第66図　出土石器（18）…… 82
第67図　出土石器（19）…… 83
第68図　出土石器（20）…… 84
萱刈沢Ⅱ遺跡
第69図　萱刈沢Ⅱ遺跡グリッド配置図…… 110
第70図　萱刈沢Ⅱ遺跡遺構配置図…… 113・114
第71図　萱刈沢Ⅱ遺跡基本土層図…… 115
第72図　ＳＩ25竪穴住居跡実測図…… 117・118
第73図　上位面遺構内出土遺物…… 120
第74図　ＳＩ03・04・19竪穴住居跡・ＳＫ18
土坑実測図……121・122
第75図　ＳＫＦ06フラスコ状土坑実測図…… 123・124
第76図　ＳＫＦ07フラスコ状土坑実測図…… 125
第77図　ＳＫＦ08・09フラスコ状土坑実測図…… 127
第78図　ＳＫＦ21フラスコ状土坑実測図…… 129
第79図　ＳＫ11・15・24土坑実測図…… 130
第80図　ＳＫ13・16土坑実測図…… 131
第81図　ＳＤ01・02溝状遺構実測図……133・134
第82図　斜面部遺構内出土遺物…… 135
第83図　ＳＩ05竪穴住居跡実測図……137・138
第84図　ＳＩ17竪穴住居跡・ＳＫ28土坑実測図…… 140
第85図　ＳＩ17竪穴住居跡遺物出土状況図…… 141
第86図　ＳＫ10土坑実測図…… 143
第87図　柱穴実測図…… 144
第88図　下位面遺構内出土遺物（１）…… 145
第89図　下位面遺構内出土遺物（２）…… 146
第90図　遺構内出土石器…… 147
第91図　遺構外出土遺物（１）…… 149
第92図　遺構外出土遺物（２）…… 150
第93図　遺構外出土遺物（３）…… 152
第94図　遺構外出土遺物（４）…… 153
第95図　遺構外出土遺物（５）…… 154
第96図　遺構外出土遺物（６）…… 155
第97図　遺構外出土遺物（７）…… 156

表目次

第１表　周辺の遺跡一覧表…… 8
第２表　萱刈沢Ⅱ遺跡出土石器計測表…… 157

図版目次

巻頭図版１　１．萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景（１）
２．萱刈沢Ⅰ遺跡調査風景（２）
巻頭図版２　１．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（１）
２．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（２）
巻頭図版３　１．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（３）
２．萱刈沢Ⅰ遺跡遺物出土状況（４）
巻頭図版４　萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（１）
巻頭図版５　萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（２）－土偶
巻頭図版６　萱刈沢Ⅰ遺跡出土遺物（３）－軽石製品・
環状石斧
巻頭図版７　１．萱刈沢Ⅱ遺跡調査区遠景
２．萱刈沢Ⅱ遺跡SKF09
巻頭図版８　萱刈沢Ⅱ遺跡出土遺物－北陸系土器
萱刈沢Ⅰ遺跡

図版１　１．萱刈沢Ⅰ遺跡調査前の状況（西から）
２．萱刈沢Ⅰ遺跡調査状況①（北東から）
図版２　１．萱刈沢Ⅰ遺跡調査状況②（北東から）
２．萱刈沢Ⅰ遺跡調査終了後の状況（南から）
図版３　１．遺物出土状況①（LT53グリッド）
２．遺物出土状況②（LS52グリッド）
３．遺物出土状況③（LS51グリッド）
図版４　１．遺物出土状況④（MC51グリッド）
２．遺物出土状況⑤－土偶（LS52グリッド）
３．遺物出土状況⑥－軽石製品（LS52グリッド）
図版５　出土遺物（１）
図版６　出土遺物（２）
図版７　出土遺物（３）
図版８　出土遺物（４）
図版９　出土遺物（５）
図版10　出土遺物（６）
図版11　出土遺物（７）
図版12　出土遺物（８）
図版13　出土遺物（９）
図版14　出土遺物（10）
図版15　出土遺物（11）
図版16　出土遺物（12）
図版17　出土遺物（13）
図版18　出土遺物（14）
図版19　出土遺物（15）
図版20　出土遺物（16）
萱刈沢Ⅱ遺跡
図版21　１．萱刈沢Ⅱ遺跡調査前近景（南西から）
２．上位面調査終了後近景（南から）
図版22　１．斜面部調査状況（北東から）
２．下位面調査終了後近景（東から）
図版23　１．SI25土層断面（北西から）
２．SI25完掘状況（南から）
図版24　１．SI25完掘状況（西から）
２．SI03・04・19検出状況（西から）
図版25　１．SI03・04・19土層断面（北から）
２．SI03・04・19完掘状況（西から）
図版26　１．SI03・04・19内土坑土層断面（北西から）
２．SI03・04・19内土坑土層断面（西から）
３．SI03・04・19内土坑完掘状況（西から）
図版27　１．SKF06検出状況（東から）
２．SKF06土層断面（西から）
３．SKF06調査状況（南から）
図版28　１．SKF06完掘状況（西から）
２．SKF07遺物出土状況（西から）
３．SKF09土層断面（西から）
図版29　１．SKF07（左）・SKF09（右）完掘状況
（西から）
２．SKF08遺物出土状況（北西から）
３．SKF08土層断面（北西から）
図版30　１．SKF08完掘状況（南から）
２．SKF21検出状況（南から）
３．SKF21土層断面（南から）
図版31　１．SK11完掘状況（南から）
２．SK13完掘状況（南西から）
３．SK15完掘状況（南から）
図版32　１．SK16土層断面（東から）
２．SK16完掘状況（東から）
３．SK24完掘状況（西から）
図版33　１．SD01・02全景及び土坑群（東から）
２．SD01土層断面（西から）
図版34　１．SI05完掘状況（西から）
２．SI05地床炉検出状況（西から）
図版35　１．SI17・SK28検出状況（東から）
２．SI17土層断面（東から）
図版36　１．SI17遺物出土状況（東から）
２．SI17・SK28完掘状況（東から）
図版37　１．SK10土層断面（南から）
２．SK10完掘状況（北から）
３．調査風景
図版38　１．萱刈沢Ⅱ遺跡第Ⅰ群土器（表面）
２．萱刈沢Ⅱ遺跡第Ⅰ群土器（裏面）
図版39　萱刈沢Ⅱ遺跡第Ⅱ群土器（北陸系）
図版40　萱刈沢Ⅱ遺跡第Ⅲ群土器（上）・出土石器（下）

はじめに

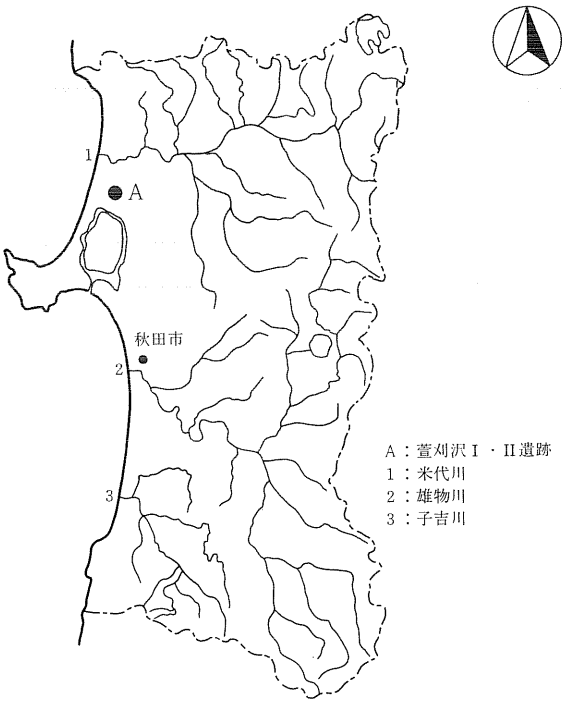
調査に至る経過

一般国道７号琴丘能代道路は、現在の国道７号線に代わって、輸送幹線道路としての機能を拡大・強化することを目的として、建設省東北建設局能代工事事務所から計画が提出されたものである。昭和57年度に一般国道７号八竜能代道路として計画説明がなされたが、平成元年度に事業計画が変更された。その結果、山本郡琴丘町鹿渡地内から能代市浅内地内に至る延長17kmが計画路線となった。

計画路線が示された段階で、秋田県教育委員会と建設省東北建設局能代工事事務所は協議を経て、路線上での分布調査を行い、現状保存が不可能な遺跡については発掘調査による記録保存の措置を講じることとした。

秋田県教育委員会では、昭和60年から分布調査と範囲確認調査を継続的に行い、昭和60年に８遺跡（北から寒川II、寒川Ⅰ、十二林、石丁、福田、萱刈沢II、萱刈沢Ⅰ、館の上[註]）を確認した。昭和61年には、十二林遺跡と石丁遺跡の間に蟹子沢遺跡を新たに発見している。事業計画の変更に伴い、平成元年には萱刈沢II遺跡の北側に鴨子台、八幡台の２遺跡を確認している。　発掘調査は、用地買収の完了した能代市側から実施され、昭和61年に寒川Ⅰ、寒川II、昭和62年に十二林、蟹子沢、石丁、福田の各遺跡について行われ、発掘調査報告書もすでに刊行されている。

本報告書にとりあげる萱刈沢II遺跡は平成元年に、萱刈沢Ⅰ遺跡は１年置いた平成３年に発掘調査が実施されたものである。両遺跡とも盛土工法が採用されることから、掘削を受ける工事用道路と橋脚部分のみ調査を行うことが協議



第１図　遺跡位置図

により決定され、調査対象面積は当初より大幅に減少している。

註）館の上遺跡は、その中に中世城館を含んでおり、1990（平成２）年発行の秋田県遺跡地図（中央版）では館跡の範囲を新たに線引きし、館の上遺跡と館の上館を区別している。

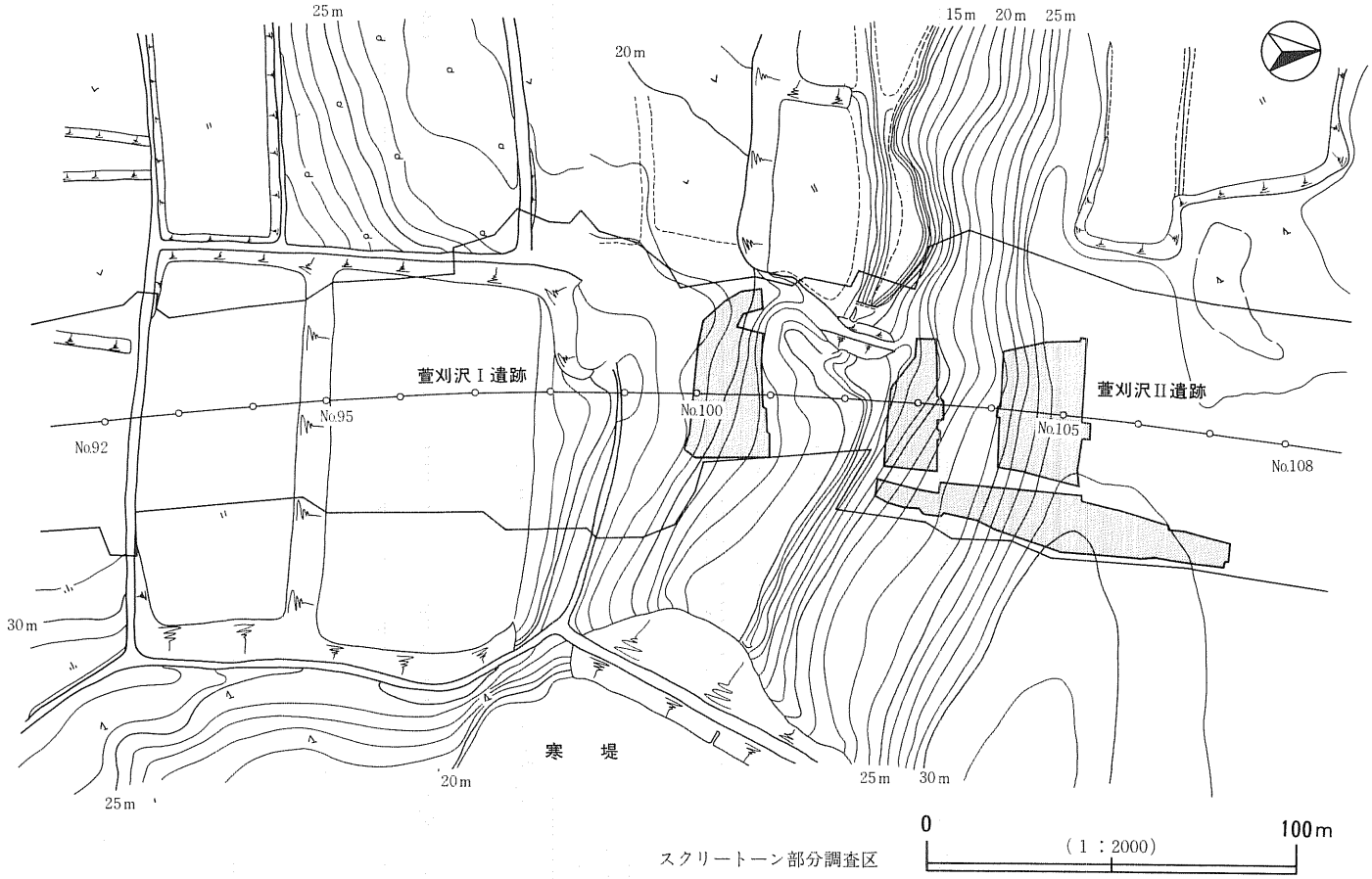
調査要項

１．萱刈沢Ⅰ遺跡

遺跡名称	萱刈沢Ⅰ遺跡　※遺跡略号　３ＫＫＺ－Ⅰ
所在地	秋田県山本郡八竜町鵜川字萱刈沢７－２外
遺跡状況	山林
調査対象面積	800m²
調査面積	800m²
遺跡性格	縄文時代遺物散布地
遺跡時期	縄文時代
調査目的	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前調査
調査期間	平成３年10月14日～11月15日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	庄内昭男（秋田県埋蔵文化財センター文化財主査）
	小畑　巌（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
総務担当者	佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査　平成４年３月転出）
	皆川　清（秋田県埋蔵文化財センター主査　平成４年４月転入）
	佐々木　真（秋田県埋蔵文化財センター主任）
調査協力機関	建設省東北地方建設局能代工事事務所
	八竜町教育委員会

２．萱刈沢Ⅱ遺跡

遺跡名称	萱刈沢Ⅱ遺跡　※遺跡略号　３ＫＫＺ－Ⅱ
所在地	秋田県山本郡八竜町鵜川字萱刈沢５－１外
遺跡状況	山林、原野
調査対象面積	2,000m²
調査面積	2,000m²
遺跡性格	縄文時代集落、平安時代集落



第2図　萱刈沢Ⅰ・萱刈沢Ⅱ遺跡周辺地形及び調査区

遺跡時期	縄文時代、平安時代
調査目的	一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る事前調査
調査期間	平成元年10月２日～11月30日
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当者	高橋忠彦、小林　克、栗沢光男 （以上　秋田県埋蔵文化財センター文化財主事） 利部　修、榮　一郎、小畑　巌、高橋　学、谷地　薫、武藤祐浩 （以上　秋田県埋蔵文化財センター学芸主事） 和泉昭一、小山内　透、鎌田　茂、藤原　司、三浦光男、吉田　真 （以上　秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員）
総務担当者	佐田　茂（秋田県埋蔵文化財センター主査　平成４年３月転出） 皆川　清（秋田県埋蔵文化財センター主査　平成４年４月転入） 佐々木　真（秋田県埋蔵文化財センター主任　平成３年４月転入） 高橋忠太郎（秋田県埋蔵文化財センター主事　平成３年３月転出）
調査協力機関	建設省東北地方建設局能代工事事務所 八竜町教育委員会

周辺の地形

東から西へ地形を概観すると、山地、丘陵地、台地、低地の４つに分けることができ、低地の西には日本海が広がっている。

山地は、奥羽脊梁山地から分岐する太平山山地の北の延長に位置するものであり、日本海海岸線の方向に平行するように南北に長く発達している。北から七座山山地、房中山山地、房住山山地など標高300～400ｍの山地がみられる。

丘陵地は、いわゆる出羽丘陵と呼称される丘陵の一部であり、東部の山地と西部の台地に挟まれた地域である。東西の幅は約10kmに達し、標高により大きく２段に分けることができる。東部の山地に接する側には標高200ｍ前後の丘陵地がみられ、北から羽立、谷地の沢、西の又の各丘陵地がある。西部の台地に接する側には標高100～150ｍの丘陵地がみられ、北から檜山・山本、石倉山、鹿渡の各丘陵地がある。

台地は、山地から西流して八郎潟に注ぐ三種川を境に北側ではよく発達し、志戸橋野、金光寺野、成合などの台地がある。三種川の南側では、丘陵地と大潟人工干拓低地に挟まれて南北に細長く認められ、横長根、鹿渡などの台地がみられる。これらの台地には大きく４つの段丘

第３図　周辺の地形図

面が認められ、さらに第一段丘および第三段丘については上位と下位２面が認められる。各段丘面の標高は、第一段丘45～100m、第二段丘および第三段丘20～60m、第四段丘10～20mである。

低地は、鵜川川および三種川により形成された谷底平野（鵜川川低地、三種川低地）、浅内海岸低地、八郎潟湖岸低地と大潟人工干拓低地、日本海岸砂丘地などがみられる。浅内海岸低地は、東の成合台地と西の日本海岸砂丘に挟まれた低平な海岸低地である。東西の幅が1.1～1.5kmあり、標高８m前後である。日本海岸砂丘地は、日本海海岸線に沿って発達した砂丘地であり、東西の最大幅が1.7kmに達する。標高は、10数mから65mと起伏に富んでいる。この砂丘地の内側には大小の湖沼が認められ、北から小沼、浅内沼、蓮沼、赤沼などがある。これらは、砂丘地伏流水の溢出による湖沼である。

以上のように周辺の地形を概観してきたが、遺跡は、南北に長い成合台地の南よりに位置している。段丘面でいうと、第三段丘の上位面に相当する。この成合台地は、東の鵜川川低地と西の浅内海岸低地に挟まれた東西約2.3km、南北約８kmの台地である。台地の東縁は、鵜川川の支流の浸食により大小の谷が入り組んでいる。これに対して、台地西縁は直線的であり、浸食が広範囲に及んでいない。本台地の基盤層は潟西層と呼ばれ、温暖な気候下における高海

面期の沿岸性堆積物とされ、礫・砂および粘土・泥から成り、場所によっては泥炭を伴うものである。

（参考文献）

秋田県農政部農地整備課 『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』 1984（昭和59年）

周辺の遺跡

ここでは成合台地南半を中心とした地域に所在する遺跡を概観し、萱刈沢ⅠおよびⅡ遺跡と関連のある縄文時代および平安時代の遺跡のうち、調査された遺跡について取り上げてみたい。なお、「調査に至る経過」の中で述べた琴丘能代道路建設に係る遺跡のうち、寒川Ⅰおよび寒川Ⅱ遺跡は寒川家上Ａ遺跡（２）に含まれるものである。計画路線は、寒川家上Ａ遺跡のほぼ中央部を南北に縦断するように通り、沢を挟んだ北側を寒川Ⅱ遺跡、南側を寒川Ⅰ遺跡としている。また、八幡台（８）、萱刈沢Ⅰ（10）、萱刈沢Ⅱ（９）の各遺跡は、萱刈沢遺跡（32）に含まれるものである。

成合台地上には旧石器時代から中世までの遺跡が分布しており、それらの分布状況は成合台地上の西側と南側に片寄る傾向が認められる。台地の西には小沼、浅内沼などの湖沼と日本海があり、南には八郎潟があることから、水上交通や魚介類などの食料の確保などの面からこのような分布傾向を示しているものと推測される。

縄文時代の遺跡では、寒川Ⅰ、寒川Ⅱ、萱刈沢貝塚（31）などがある。

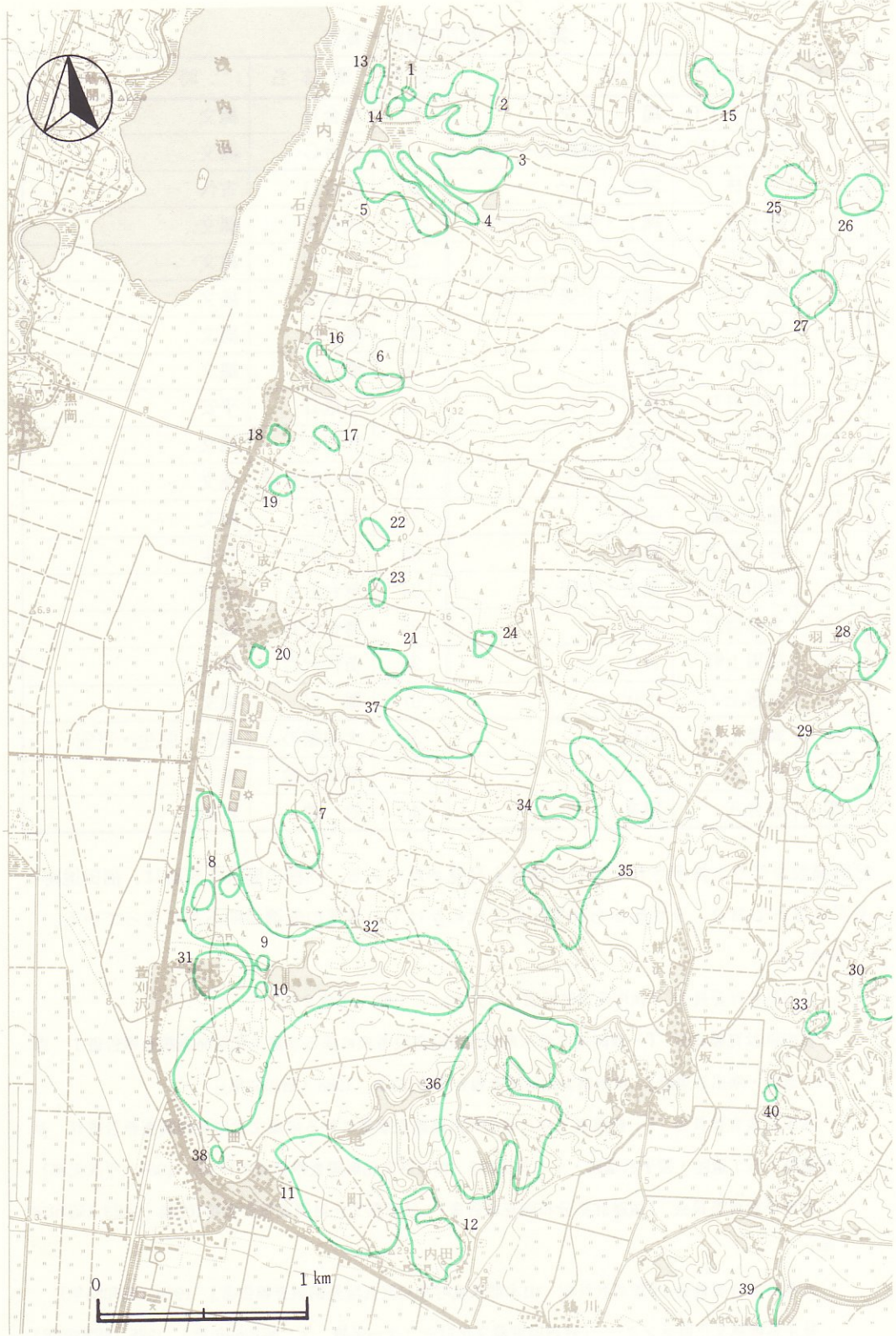
寒川Ⅰ遺跡では、早期末葉から前期初頭、中期から後期にかけての竪穴住居跡が検出され、集落が営まれていたことが明らかになっている。早期から前期初頭の竪穴住居跡周辺からは、石錘がまとまって出土していることから、この時期に漁撈活動が行われていたことが窺われる。

寒川Ⅱ遺跡は、特に続縄文文化期の土壙墓の発見により注目された遺跡である。縄文時代では、前期末から中期初頭のフラスコ状土坑、中期末から後期初頭の竪穴住居跡などが発見されている。

萱刈沢貝塚は、これまで６回にわたって調査が行われ、前期末葉から中期中葉にかけて営まれた遺跡であることが明らかにされている。貝層は、竪穴住居跡やフラスコ状土坑の埋土上層に認められ、80％以上が汽水性のヤマトシジミにより占められている。貝層中には魚類の他に獣の骨も認められており、その食生活の基盤が多岐にわたっていたことが知られる。

平安時代の遺跡では、十二林（３）、福田（６）、前述の寒川Ⅱ遺跡などがある。

十二林遺跡は、10世紀初頭から11世紀代に営まれた集落であるが、須恵器窯、土器焼成遺構、製鉄炉が検出されており、生産遺跡としての性格が濃厚である。また、柱列や有溝柱列などの


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
0
1 km

第 4 図　周辺の遺跡図

第１表　周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	寒川家上B	縄文・平安	21	成合B	縄文
2	寒川家上C	縄文・続縄文・平安	22	成合C	縄文
3	十二林	縄文・平安	23	成合D	古代
4	蟹子沢	縄文・平安・中近世	24	成合E	縄文
5	石　丁	縄文	25	逆　川	縄文
6	福　田	縄文・平安・中世	26	五本松	縄文
7	鴨子台	旧石器	27	渡　道	縄文
8	八幡台	縄文	28	館　城	縄文
9	萱刈沢II	縄文・平安	29	保竜II	平安
10	萱刈沢I	縄文	30	和田I	縄文
11	館の上	縄文・平安	31	萱刈沢貝塚	縄文
12	館の上館	中世	32	萱刈沢	縄文
13	寒川家下	縄文	33	上大沢	弥生
14	寒川家上C	縄文・平安	34	舞台沢I	縄文
15	大館南沢	古代	35	舞台沢II	縄文
16	福田上野	古代	36	苗代沢台	縄文
17	頭無上I	古代	37	雛　沢	縄文
18	頭無上II	古代	38	大曲家の上	縄文・弥生・平安
19	向　山	弥生	39	扇田谷地	縄文
20	成合A	縄文	40	放　龍	続縄文

区画施設を伴うと推測される竪穴住居跡も発見されている。同様の竪穴住居跡は、福田遺跡でも発見されており、９世紀から10世紀前半代にかけての集落の変遷が明らかになっている。

（参考文献）

秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（中央版）』　1990（平成２年）

秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第167集　1988（昭和63年）

秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡』秋田県文化財調査報告書第178集　1989（平成元年）

秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第103集　1983（昭和58年）

八竜町教育委員会『萱刈沢貝塚　山本郡八竜町萱刈沢貝塚発掘調査報告書』1979（昭和54年）

秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報　3　昭和59年度』1985（昭和60年）

萱刈沢Ⅰ遺跡

（3KKZ－Ⅰ）

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

萱刈沢Ｉ遺跡は、北緯40°６′38″、東経140°０′46″に位置する。能代市から国道７号線を秋田市方向に南下し、八竜町に入って間もなく萱刈沢の集落に至る。集落の北側にはやや大きな沢が形成されており、遺跡はその沢を東に500ｍほど逆上った右手の台地上に立地している。

台地は、沢に向かって若干張り出しており、その南北長は70～100ｍ、東西長は約100ｍである。台地上は、耕作地の造成のため改変を受けており、原地形をとどめていない状況であった。地形図から原地形を推測すると、標高25～30ｍで北側の沢へ緩く傾斜する台地縁辺部と考えられる。

計画道路は、沢（北）に向かって張り出した台地の西側を南北に貫くように通り、その幅は50～70ｍである。平成元年５月に遺跡範囲確認調査が行われ、その結果沢寄りの1,600m²に遺構・遺物が広がっていることが明らかになった。その後、盛土工法がとられることから掘削を受ける橋脚部分のみが調査の対象とされた。調査区は、平成元年の範囲確認調査対象地のやや北寄りにあり、沢に落ち込む北側斜面部にあたる。その範囲は、南北約20ｍ、東西約40ｍである。標高は、台地縁辺部で約21ｍ、沢の底面部で約14ｍであり、７ｍほどの比高差がある。

なお、本遺跡と沢を挟んだ北側の台地には萱刈沢II遺跡が立地している。また、調査区の東約60ｍには寒堤と呼ばれる溜池が沢を利用して造られている。

第２節　調査の方法

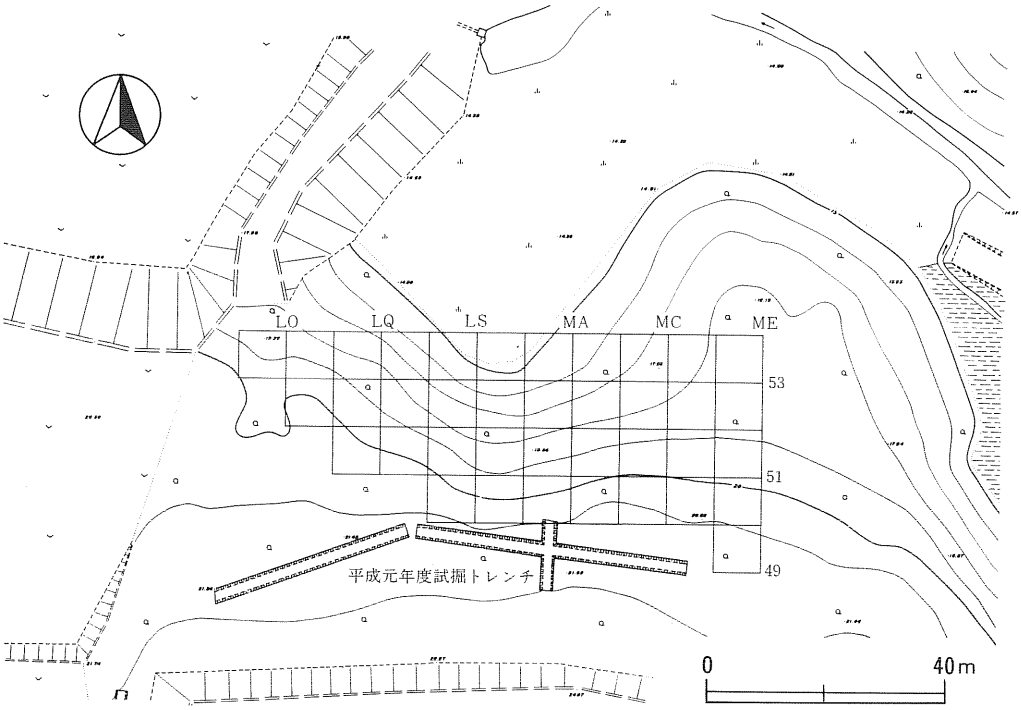
１．調査区の設定

調査を計画的に進めるために、調査対象区に４ｍ×４ｍのグリッド（方眼）を設定した。

遺跡内に所在する道路計画センター杭No.100を原点として国家座標第Ｘ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直交するラインを東西基線Ｘ軸とした。基準交点No.100をＭＡ50とし、Ｙ軸に２桁の算用数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

２．発掘方法および記録の作成

調査区の大部分が斜面であることから、遺構検出の可能性が高い比較的平坦な面が認められる東側から着手し、順次西へ調査を進めていくこととした。



第5図　萱刈沢Ⅰ遺跡グリッド配置図

遺跡の地形測量は、平板を用いて一部測量を行ったが、急斜面であることと悪天候のためやむを得ず変更し、グリッド杭ごとに地山面の標高を記録し、グリッド杭間の距離からコンターラインを割り出している。

遺物の取り上げは、主なものについて出土位置とレベルを記録し、小破片についてはグリッド名と層位のみ記録している。

写真による記録は、35mm判と6×4.5判のカメラを用いて行い、モノクローム、カラーリバーサルの2種類のフィルムを使用した。このほかに、ポラロイドカメラも適宜使用した。

3．遺物整理の方法

出土した遺物は、コンテナ（内寸55×34×15cm）80箱分である。これらの遺物を洗浄し、出土位置、出土年月日等を注記後接合を行った。整理期間が限られていたことから、文様の複雑な土器・土製品と剥片石器については、シン航空写真株式会社作成の正射投影写真を直接トレースしている。

第3節　調査の経過

10月14日　調査区内の立木の伐採と下草刈りの作業と並行して、発掘機材の荷下ろし、プレハブハウスの設置を行った。

10月16日　粗掘りを開始。国立歴史民俗博物館　阿部義平教授来跡。

10月17日　ベルトコンベアーを稼働させて東側から粗掘りを続行中。地表面から地山までの深さは、49～51ラインまでは約30cm、51ライン以降徐々に深くなり60～70cmとなっている。遺物は、ＭＥ51・52グリッドの地山近くで出土している。

10月18日　ＭＤ～ＭＦラインについて粗掘りの範囲を北側に拡張した。地表面からの深さは、90cmに達する。

10月19日　発掘機材収納用のプレハブが雨の中設置される。

10月22日　ＭＤ50～54、ＭＣ51～54グリッドについて粗掘りと遺物取り上げを行った。

10月24日　ＭＣ51・52、ＭＤ51・52グリッドで遺物がやや集中して出土し始める。ＭＣ52、ＭＤ52グリッドでは、黒褐色土→褐色土→黒色土の順に土層堆積がみられ、褐色土を挟んで上の黒褐色土から縄文後期の土器、下の黒色土から縄文中期の土器が出土している。このため、ＭＤラインに土層観察用のベルトを設定し、それに沿ってトレンチ掘りを行ったところ、焼土と壁と思われる立ち上がりを検出した。しかし、床面が平坦でなく、しっかりしていないことから、遺構と断定できないでいる。

国立歴史民俗博物館　西本豊弘助教授来跡。

10月25日　雨のため、遺構検出作業を断念し、ＭＢライン以西の粗掘りのみ行う。ＭＢ～ＭＡライン間の遺物の密度はやや希薄になっている。

ＬＴ～ＬＲライン間は斜面の傾斜が急になっており、小さな沢が入っていることが予想された。この部分の土量を考えると、排土場所を確保することが問題として浮上してきた。そこで、寒堤からの流水を考慮して斜面上方に排土していたものを、斜面下方に行うこととし、その排土は調査終了後に建設省側で調査区内に返してもらうこととした。

10月28日　ＭＡ～ＬＳラインの粗掘りを行った。ＬＴ52グリッド杭を中心とする4グリッドからの遺物出土量が著しく多い。遺物は、縄文後期の土器が多く、それに石器も伴っている。

10月30日　沢部分の遺物包含層の厚さは1ｍ50cmを越えており、作業の進捗状況はかなり遅れている。

11月2日　ＬＳ51・52グリッドⅢ層中で焼土を検出した。平面図を作成し断面を観察したと

ころ、その場所で火を使用した痕跡が見られず、土器等の遺物とともに捨てられたものであることが推定された。また、９日までの調査期間を15日まで延長することになった。

11月５日　ＬＰ53・54、ＬＱ53・54グリッドについては、寒堤の遊水池の堤にあたることから、トレンチを入れて様子をみることとした。北西から南東方向に幅１ｍのトレンチを入れて遺構・遺物の検出にあたったが皆無であった。このため、この範囲についてはトレンチを入れるにとどめた。

11月６日　ＬＲ54グリッドⅢ層中で石を円盤状に加工し、中央部に穴をあけた石製品が出土した。弥生時代の環状石斧に形態が似ている。

11月７日　沢部分の土層の記録をグリッド杭で残った土の柱を参考に行った。その結果、Ⅰ層：黒色土、Ⅱ層：褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層が黄橙色地山となっており、Ⅰ層とⅡ層の間に部分的に黒褐色土が、そしてⅢ層中に崩落した地山土が部分的にみられる。また、これまでⅡ層として遺物を取り上げてきたものが、実はⅢ層であることが判明した。そこで、明日からの取り上げ層位の記載は、本日明らかになった基本層位に沿ったものに改めることとした。

11月８日　ＭＣ51グリッド杭を中心とする４グリッドについては、10月24日の調査以来住居跡等遺構の存在が予想されていたが、これまでの調査の結果やや急に落ち込む斜面に倒木痕が重なっていたことが明らかになった。倒木痕は、褐色土（マウンド）の周囲に焼土及び黒色土が観察され、その中から縄文後期の遺物が出土している。褐色土の中からは遺物はほとんど出土していない。

11月12日　ＭＤラインに設定した土層観察用ベルト断面の写真撮影と実測を行った。また、沢から出土している遺物の取り上げを終日行った。

11月14日　調査区全景の写真撮影のため午前に全体の精査を行い、午後写真を撮影した。撮影後、基本土層図の作成、地形測量、遺物の取り上げを行った。

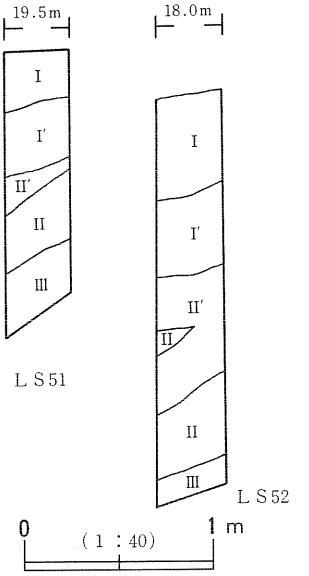
11月15日　地形測量と遺物の取り上げを行い、ベルトコンベアー等を斜面上方に運び上げて調査を終了した。

第２章　調査の記録

第１節　遺跡の基本土層

調査区は、北に面した斜面部にあたり、その中で地形に若干の違いがみられる。東側は傾斜面の下方に平坦な面が認められ、一方の西側では沢の切れ込みは小さいが比高差のある沢地形となっている。土の堆積状況は、この地形により影響を受けていると推測される。すなわち、東側では土の堆積状況にそれほど複雑さは認められないが、西側では崩落と思われる部分的な土の堆積が多く認められた。また、東側では地山漸移層が認められたが、西側の沢の中では認められなかった。

第６図には沢の中のLS51,LS52グリッドの土層図を示した。Ⅰ～Ⅲ層に大別され、Ⅰ・Ⅰ′層は黒色(10YR2/1)ないし黒褐色(10YR2/2)の表土であり、Ⅰ層中には木の根が多く入り込んでいる。Ⅱ・Ⅱ′層は暗褐色土(10YR3/3～3/4)を呈し、地山粒を含むことから崩落土と推測される。Ⅲ層は、黒褐色(10YR3/2)の土層であるが、その中に地山の崩落土が部分的に認められる。



第６図　基本土層図

第２節　出土遺物

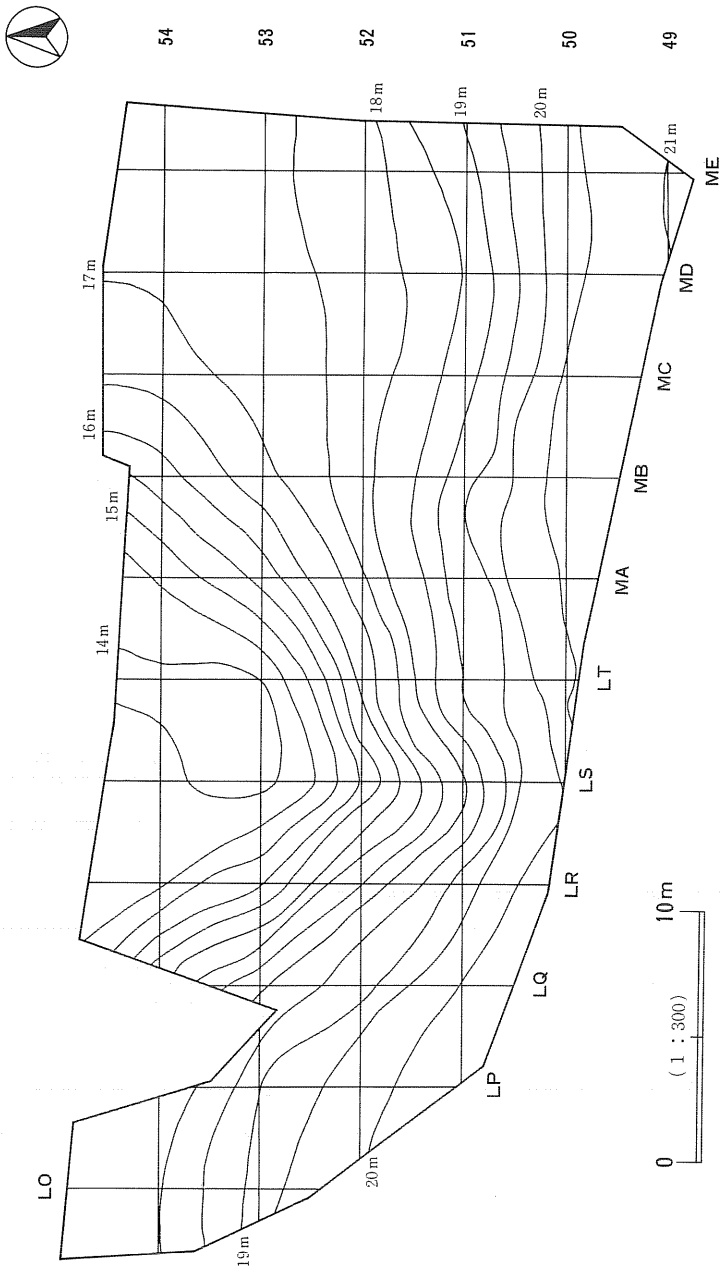
調査の結果、沢地を利用した捨場であることが判明し、縄文時代前期から後期の土器・石器等が多数出土した。このうち主体をなすのは、後期前葉の遺物であり、全遺物の９割以上を占めている。

沢に堆積した土は、Ⅰ～Ⅲ層に大別された。ⅡないしⅢ層が遺物包含層であり、Ⅲ層にほとんどの遺物が包含されていた。また、Ⅲ層中には地山に含まれる砂質土の部分的な堆積が認められ、Ⅲ層が形成される段階で数度にわたって地山が崩落していることが窺われる。

出土量は、縦34cm×横54cm×深さ18cmのコンテナで80箱にのぼった。以下大きく１．土器、土製品、２．石器に分け分類を行っている。

１．土器、土製品

(1)土器



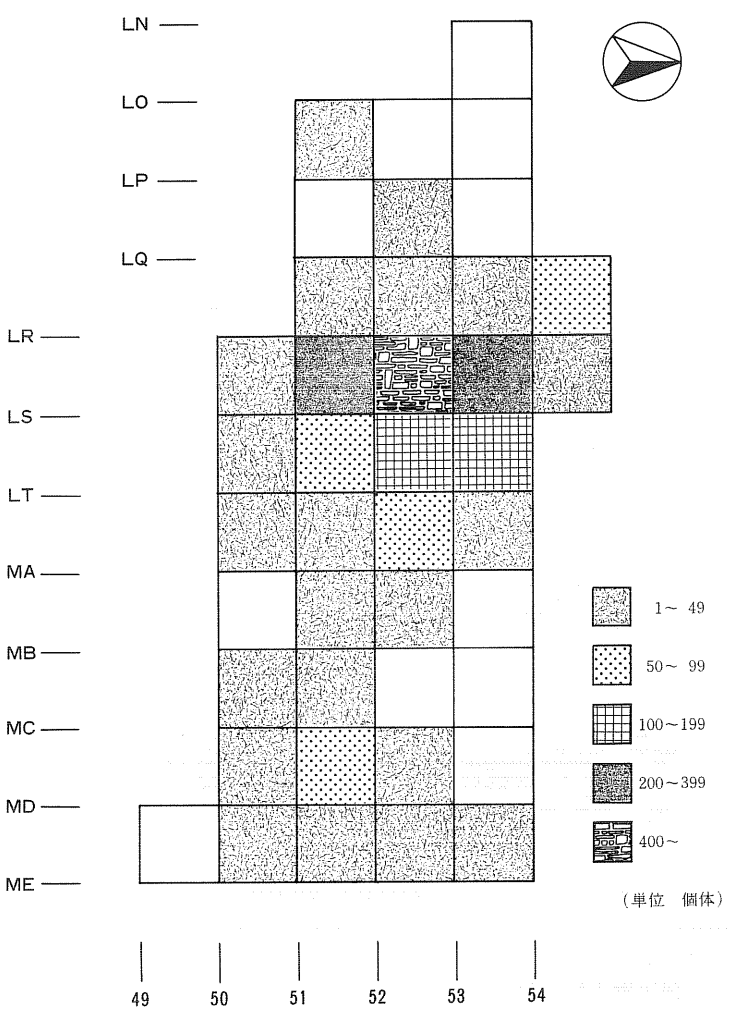
第7図　調査終了時の地形測量図

土器底部数から推定される個体数は、1,843個体である。グリッドごとにみた場合の個体数は、LSライン945個体（51%）、LTライン424個体（23%）、LRライン146個体（8%）となっており、沢の最も深い部分に多い。最も多いLSラインの中でグリッド毎にみると、LS52・466個体、LS51・231個体、LS53・228個体となっている。

土器は以下のように時期により分類した。そして、特に第Ⅲ群土器については完形土器又は

完形に近い土器については、器種ごとに器形と文様帯により分類し、破片資料については、文様により細分した。また、実測図を第９図から第41図までに示し、１～212までの通し番号を付けている。

第Ⅰ群　縄文時代前期
第Ⅱ群　縄文時代中期
第Ⅲ群　縄文時代後期
第Ⅳ群　平安時代以降



第８図　グリッド別出土土器個体数

第Ⅰ群土器（第９図）

１類　結節状浮線文を施すものである（1）。

２類　隆帯で区画した幅の狭い口縁部に縄文原体の側面圧痕を施すものである（2・3）。

第Ⅱ群土器（第９・10図）

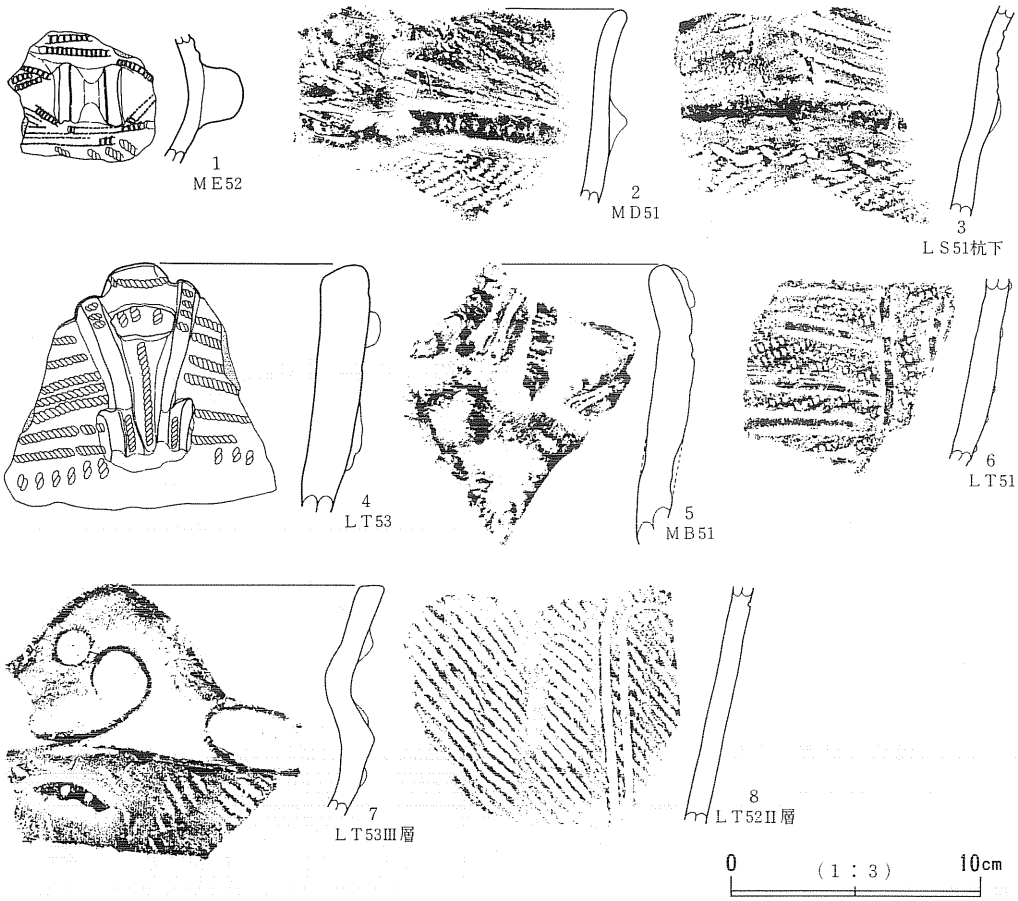
１類　口縁部の文様が縄文原体の側面圧痕と隆帯により構成されるものである（4・5）。

２類　隆帯により文様が施されるものである（6・7・9・10）。

９は弧状又は三角形状に貼り付けられた細い隆帯とそれに沿って施された爪形文が認められる。隆帯上にはやや細かい刻みが施されている。10は８単位ほどの波状口縁となるキャリパー状の深鉢で、複節斜縄文を施した後口縁部に細い粘土紐を貼り付けている。口縁部内面に煤状炭化物が付着している。また、口縁部の張り出した部分に穿孔されている。

３類　縄文の地文上に沈線で文様が施されるものである（8・11）。

11は胴部に最大径を有する深鉢で、３単位の突起をもち口唇部に縄文原体(LR)の圧痕を施している。口縁部には、３条一組の沈線が口縁に沿ってと突起間を弧状に結ぶように巡っている。



第9図　第Ⅰ群、第Ⅱ群土器

第Ⅲ群土器（第10～41図）

本群土器は、完形又は図上復元が可能なものが比較的多かったことから、破片資料と別にして記述する。また、文様よりは器形と文様帯により分類したことから、破片資料と異なる類別とした。

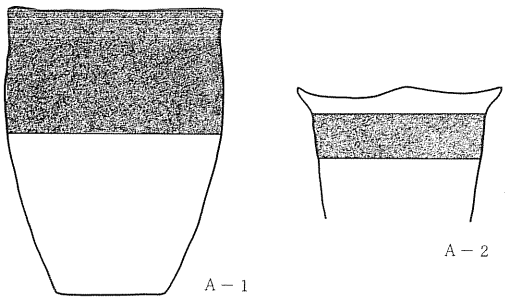
完形又は図上復元が可能な土器は、深鉢、壺、浅鉢、台付浅鉢の4つの器種に分類された。以下器種ごとに記述する。

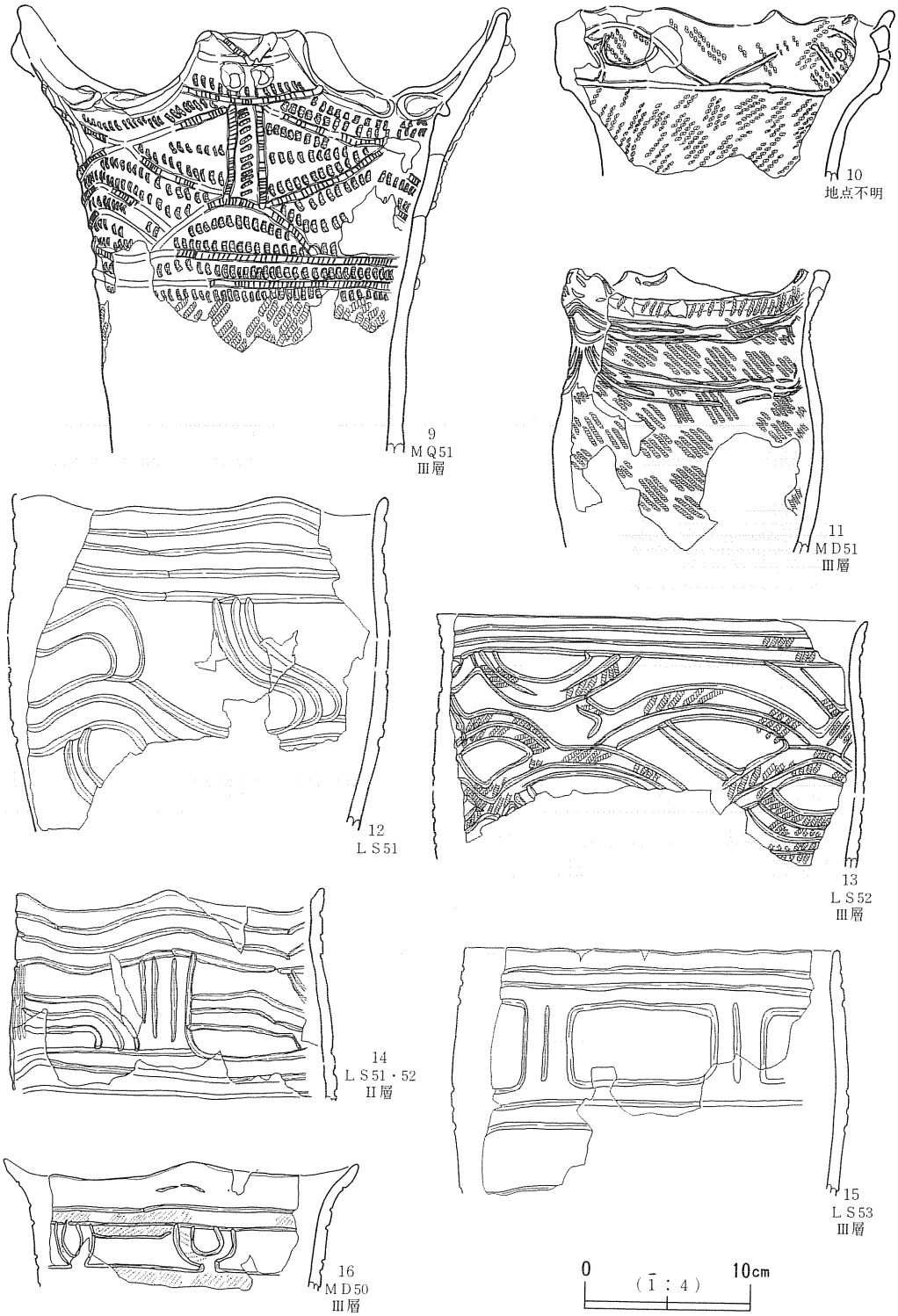
［深　鉢］

A類　　直線的な器形のもの（第10図）。

A－1　底部から直線的に立ち上がるが、胴部に若干のふくらみのあるもの（12～15）。

《文様帯》口縁部から胴部中ごろに





第10図　第Ⅱ群土器（９～11）、第Ⅲ群土器深鉢Ａ類（12～16）

かけて。

〈施文手法〉①沈線のみにより文様が施されるもの（12・14・15）と②磨消縄文手法のもの（13）に分けられる。

〈文様要素〉①では波状、「h」状、長方形等、②では弧状の文様が描かれる。

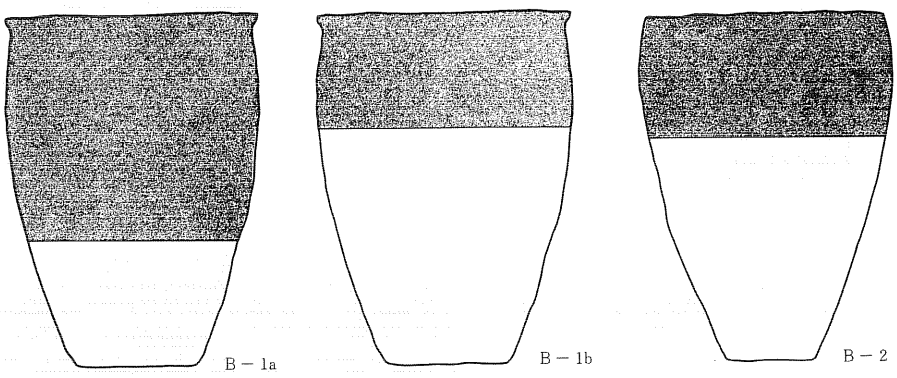
A－2　口縁部が直線的にひらくもの（16）。

《文様帯》口縁直下に無文帯をもつが、概ね口縁部に限られると推測されるもの。

〈施文手法〉磨消縄文手法。

〈文様要素〉「U」状の文様が描かれる。

B類　胴部がややふくらむ器形のもの（第11～14図）。



B－1　胴部がややふくらみ、口縁部が小さく外反するもの。文様帯により、2つに分けられる。

《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの（17～24）。

〈施文手法〉①沈線のみのものと、②磨消縄文のものがある。

〈文様要素〉①ではひし形状＋渦巻状、弧線を組み合わせるもの、「X」状、②では長楕円＋長方形、不規則なアメーバー状、入組状の文様が描かれる。

《文様帯b》口縁部から胴部上半にかけて文様帯が認められるもの（25・26）。

〈施文手法〉①沈線のみのものと、②磨消縄文手法のものがある。

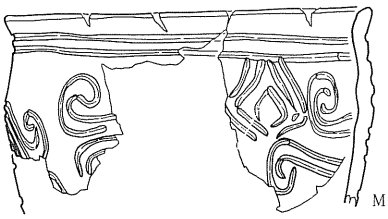
〈文様要素〉①では波状、②では稲妻状の文様が描かれる。

B－2　胴部がややふくらみ、口縁部が内傾するもの（27～30）。

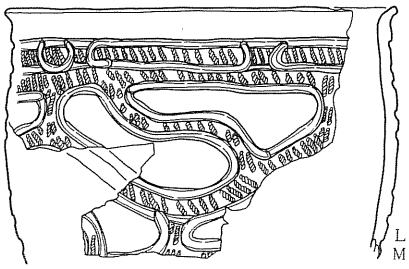
《文様帯》口縁部から胴部上半にかけて。

〈施文手法〉①沈線のみのもの、②磨消縄文手法のもの、③地文＋沈線のものがある。

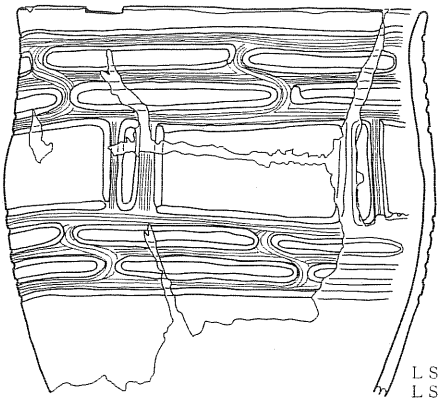
〈文様要素〉①では入組状、長方形、②では波状、③では入組状の文様が描かれる。



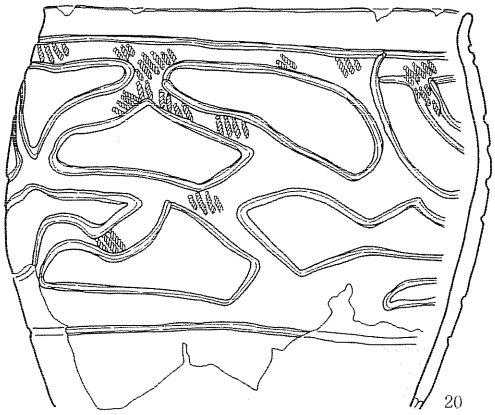
17
ＭＡ52・53



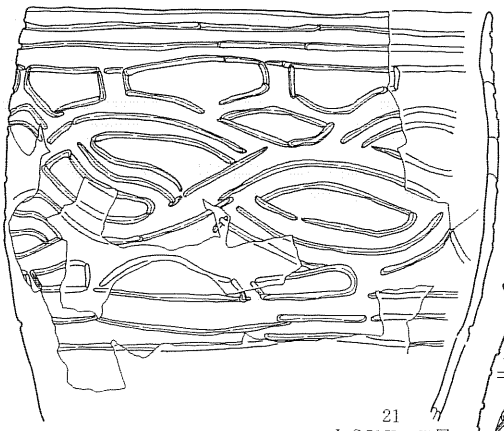
18
ＬＴ52
ＭＡ52



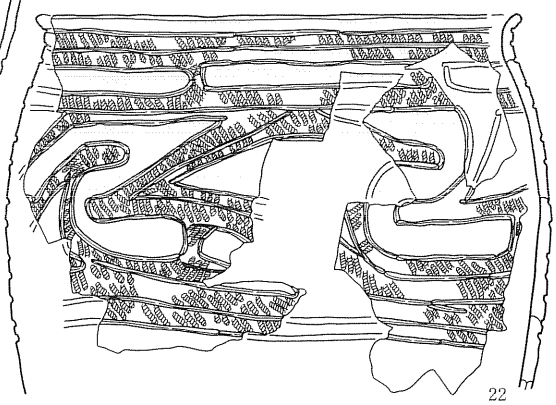
19
ＬＳ51Ⅲ層
ＬＳ52Ⅲ層



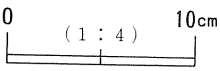
20
ＬＳ52
Ⅲ層



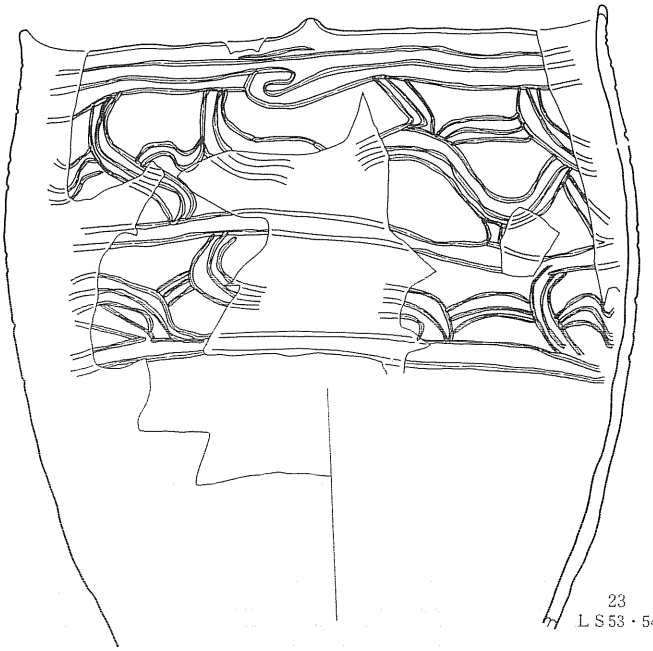
21
ＬＳ51Ⅱ・Ⅲ層
ＬＳ52Ⅲ層

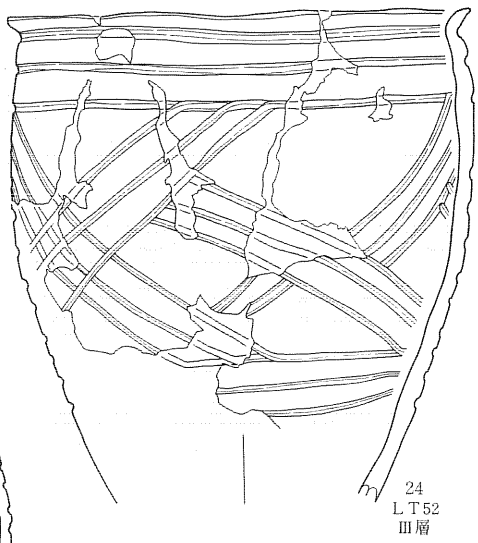


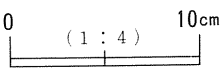
22
ＬＳ51



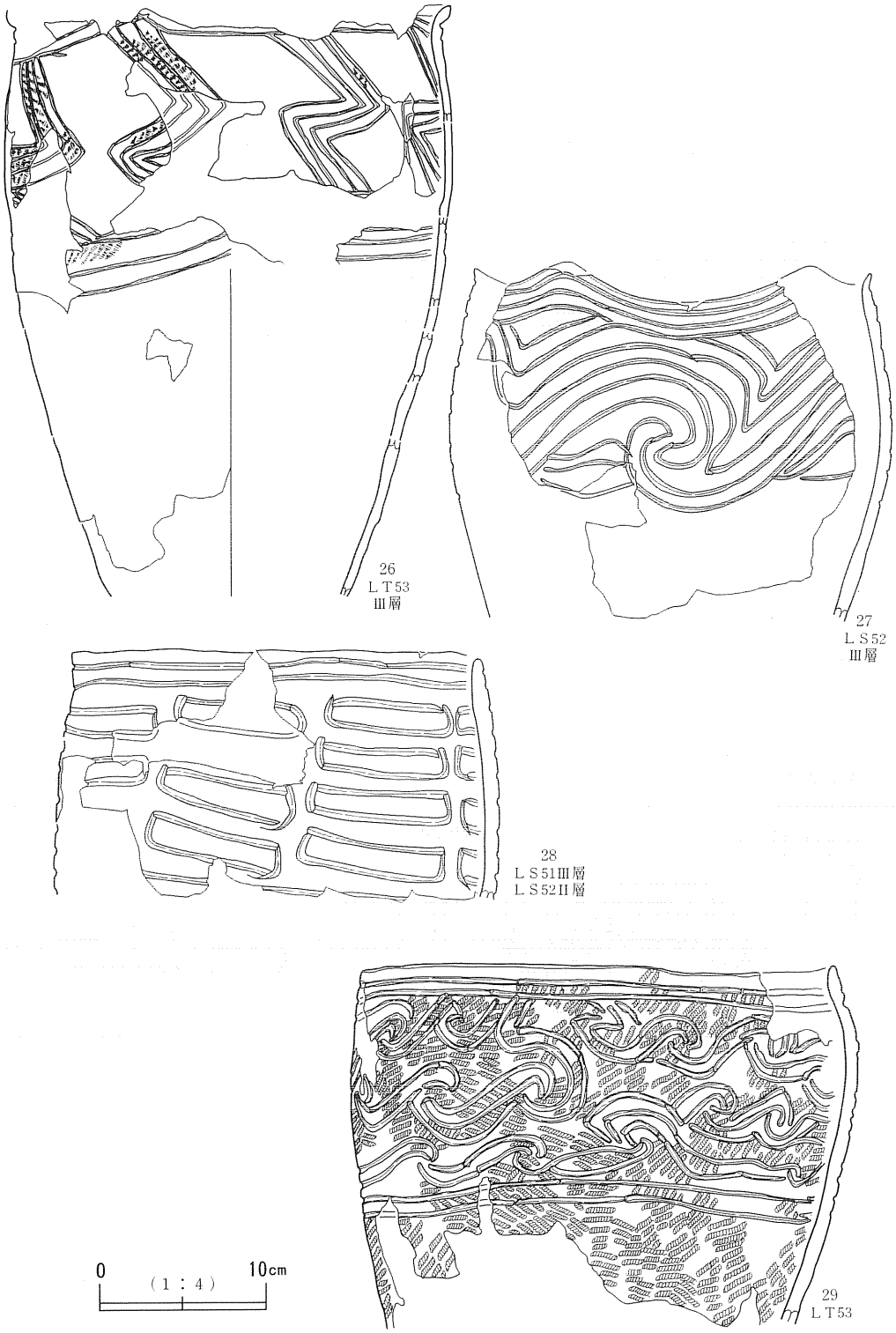
第11図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類



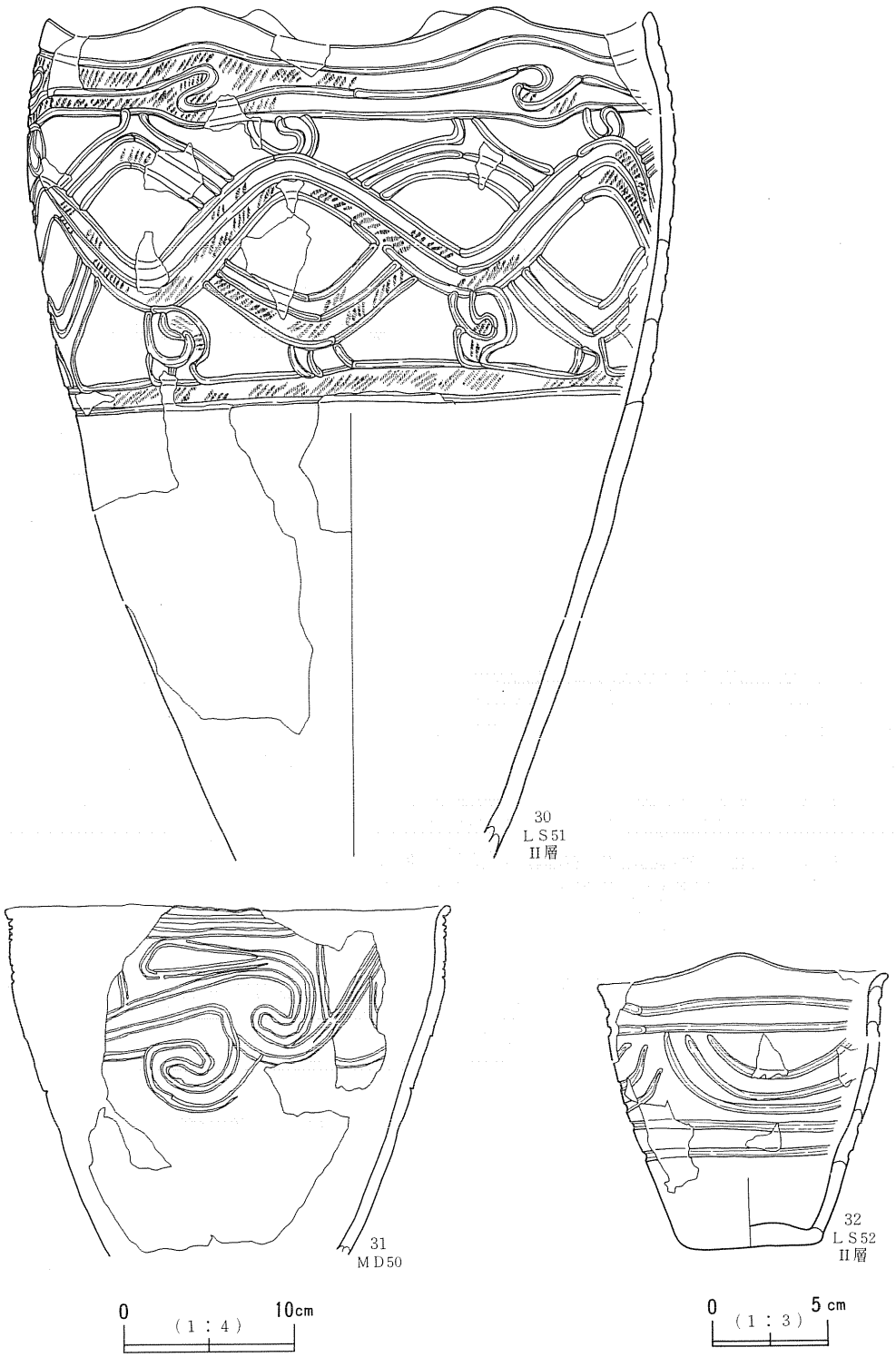




第12図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類

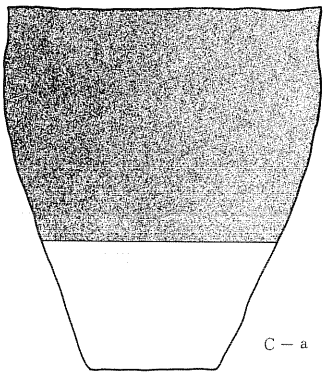


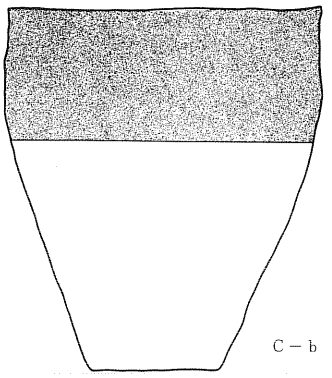
第13図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類



第14図　第Ⅲ群土器深鉢Ｂ類（30）・深鉢Ｃ類（31・32）

Ｃ類　口縁部付近に最大径をもつもので、断面形がバケツ形を呈する（第14～17図）。文様帯の位置により、２つに分けられる。





《文様帯ａ》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの（31～38）。文様帯下端を区画しないものが１例ある（31）。

〈施文手法〉①沈線のみにより文様が施されるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

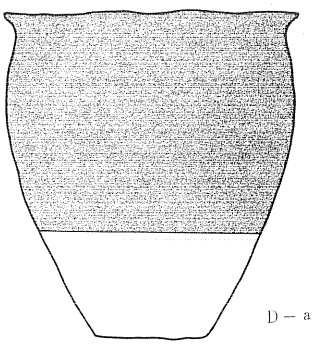
〈文様要素〉①では渦巻状、弧状、波状、入組状、ひし形状、②では入組状＋不規則な曲線が描かれる。

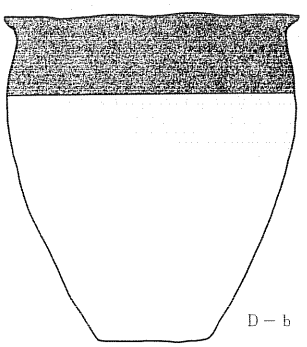
《文様帯ｂ》口縁部から胴部上半にかけて認められるもの（39）。

〈施文手法〉沈線のみにより文様が施される。

〈文様要素〉カギ状の文様が描かれる。

Ｄ類　胴部上半の張りが強く、口縁部が小さく外反するもの（第17～21図）。文様帯の位置により、２つに分けられる。



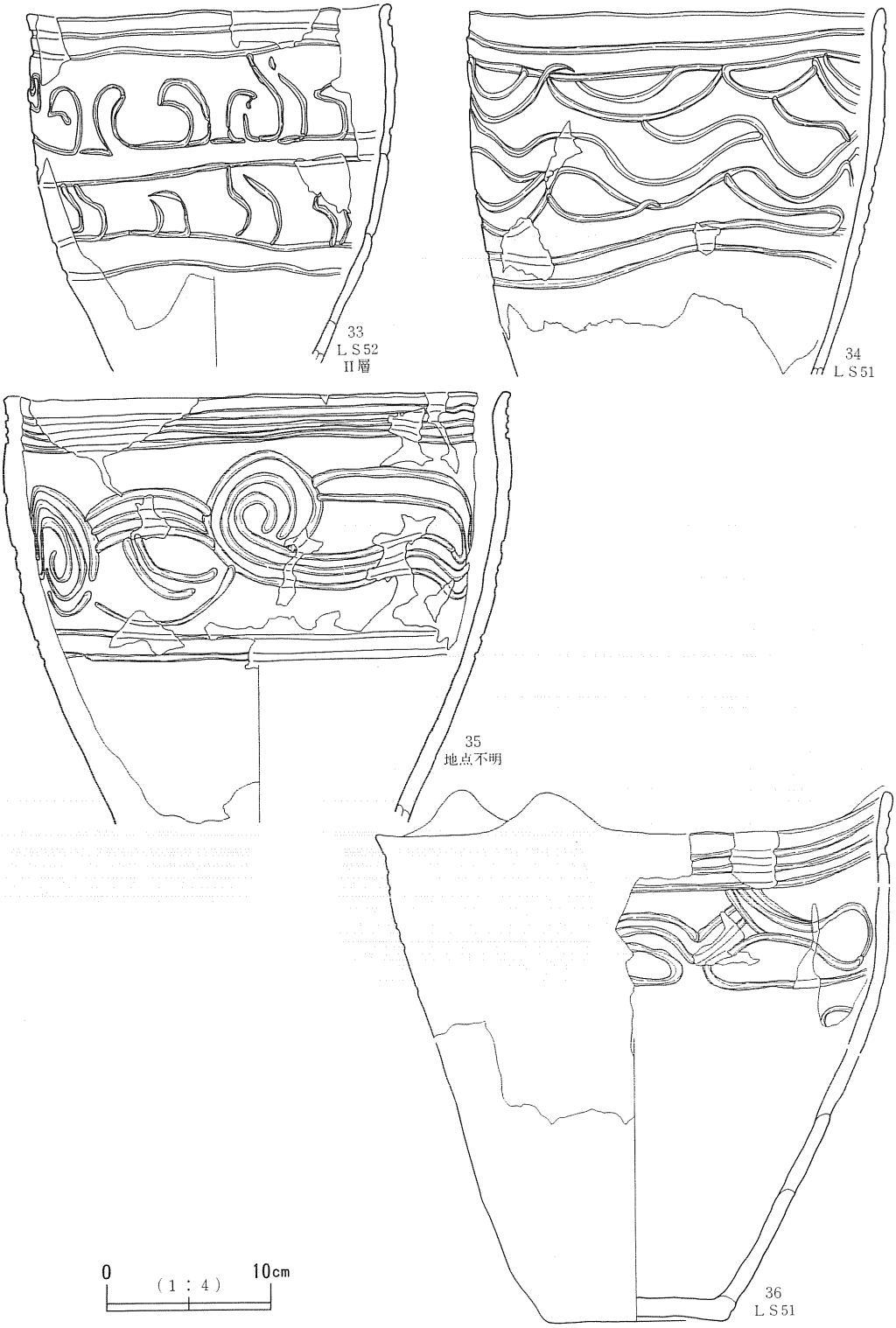


《文様帯ａ》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの（40～47）。大型のものが多い。

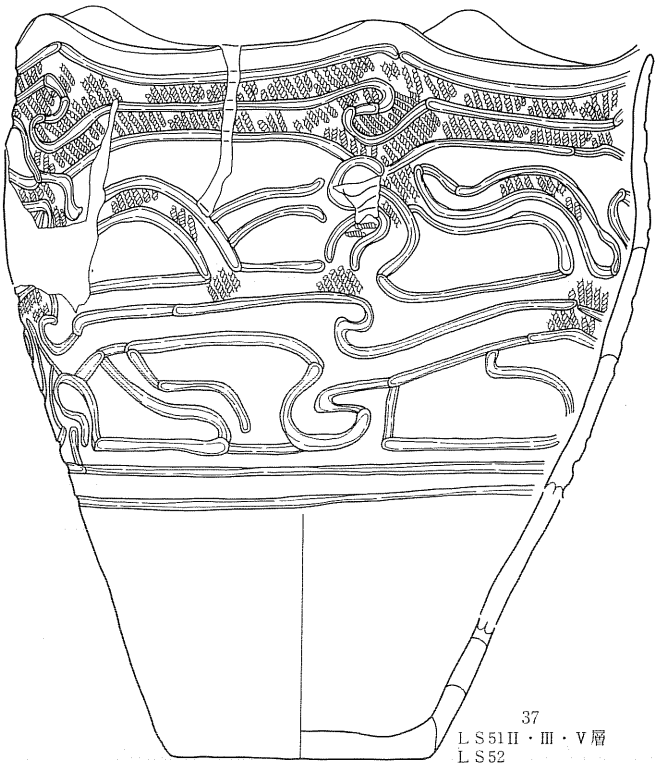
〈施文手法〉①沈線のみで文様が施されるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

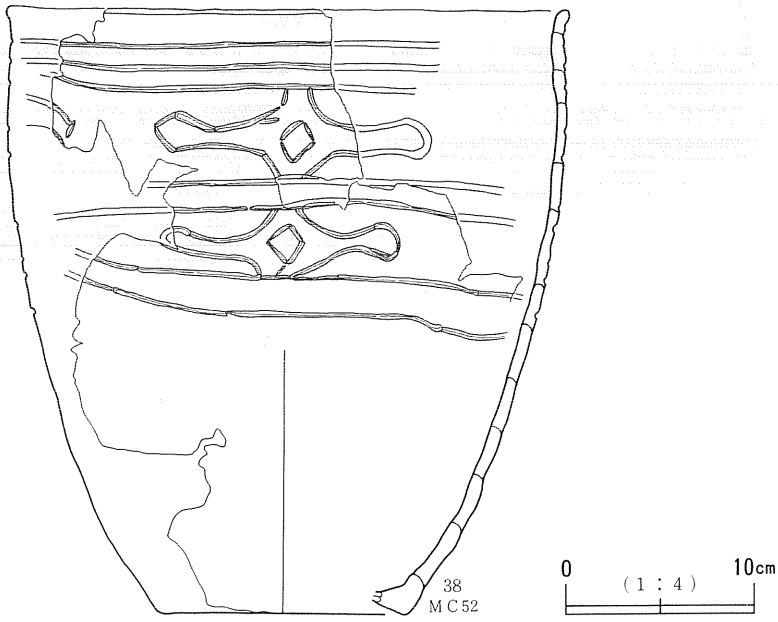
〈文様要素〉①ではひし形状、アルファベットのＳとＩを重ねたような文様、渦巻状＋入組状、②ではカギ状、渦巻＋「カニのハサミ」＋逆「く」の字状、長楕円状の文様が描かれる。

《文様帯ｂ》口縁部から胴部上半にかけて認められるもの（48～53）。小型のものが

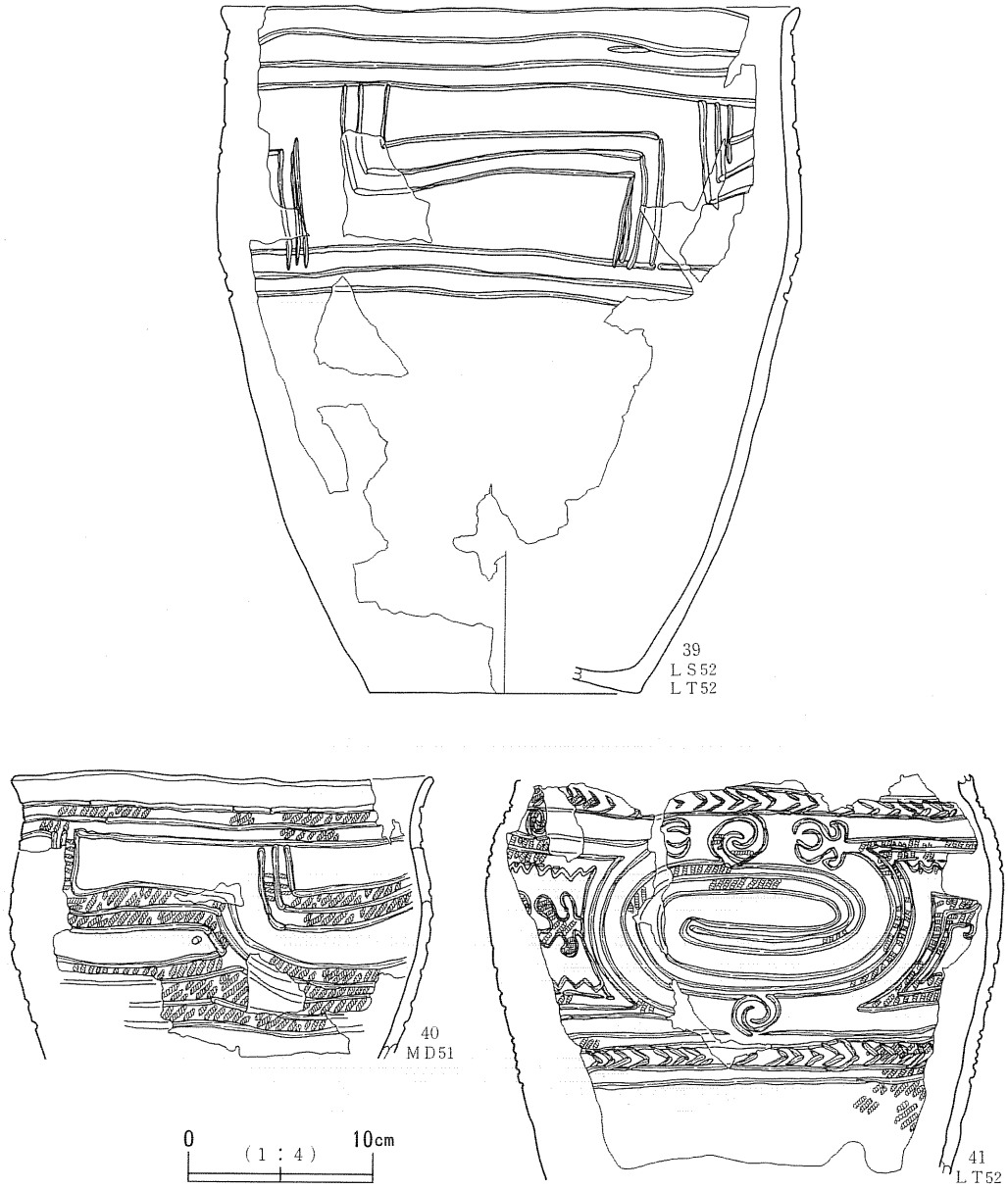


第15図　第Ⅲ群土器深鉢C類





第16図　第Ⅲ群土器深鉢Ｃ類

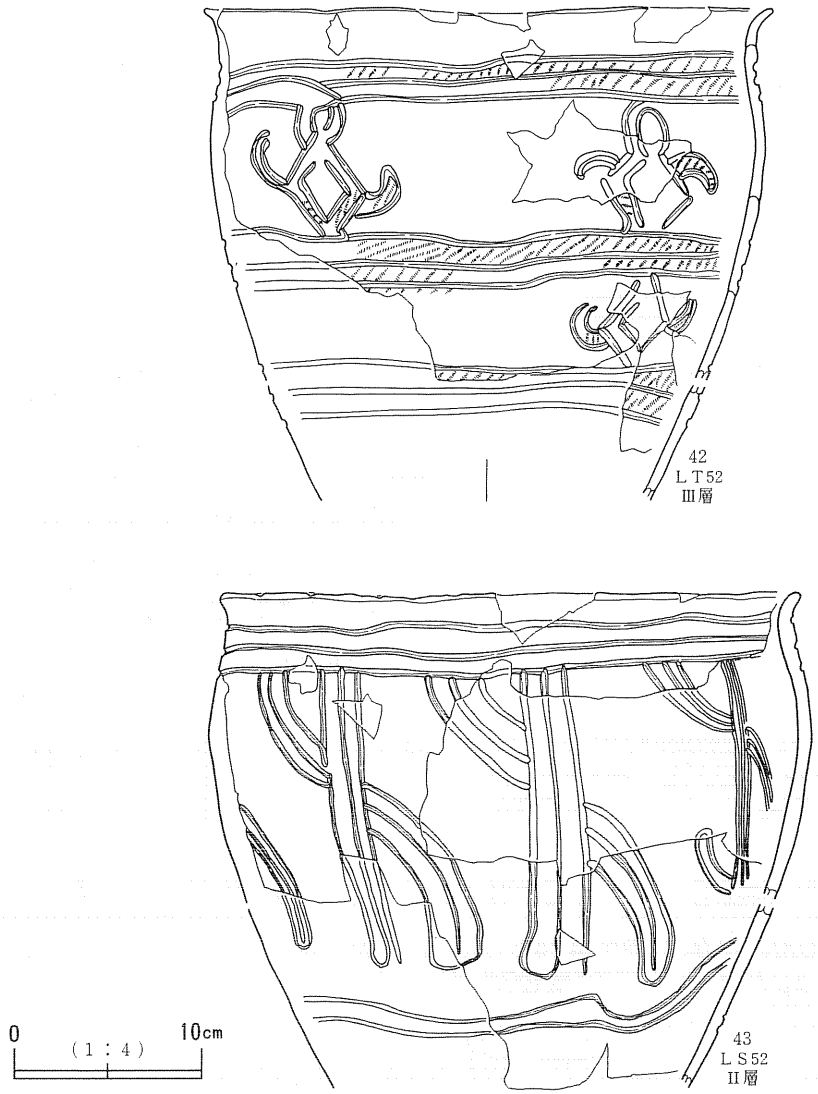


第17図　第Ⅲ群土器深鉢C類（39）・深鉢D類（40・41）

多い。

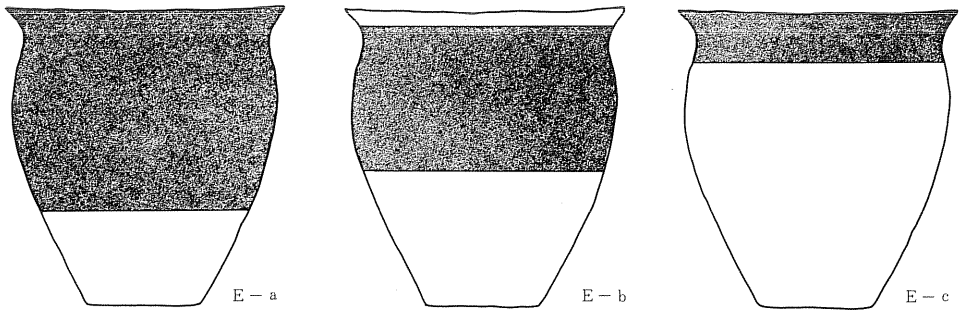
〈施文手法〉①沈線のみで文様が施されるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

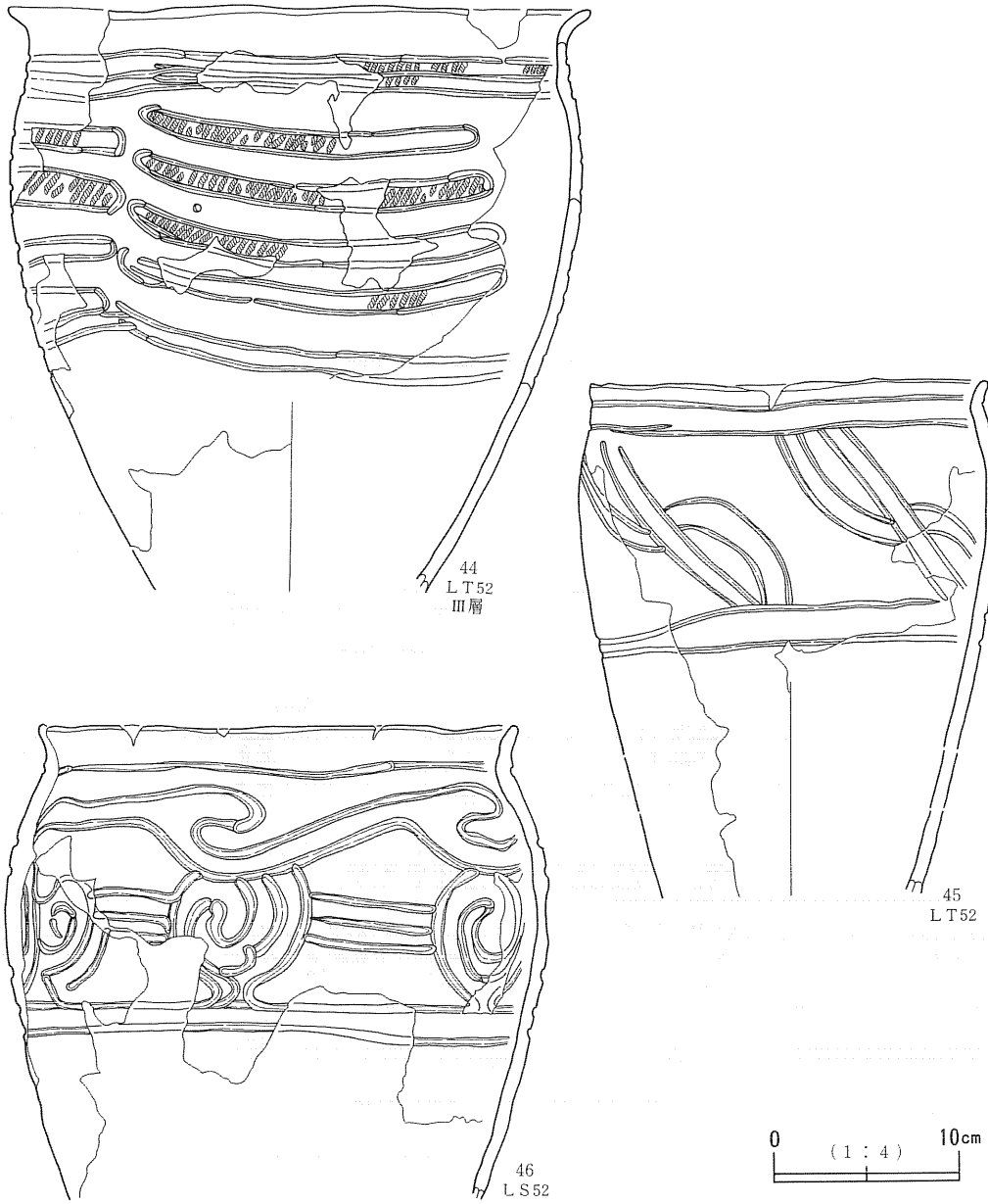
〈文様要素〉①では長楕円形、波状、縦位の直線、②では縦位と横位の直線を交互に組み合わせたもの、ひし形状の文様が描かれる。



第18図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類

Ｅ類　　口縁部に屈曲を有するもの。文様帯により３つに分けられる（第21～23図）。





第19図　第Ⅲ群土器深鉢D類

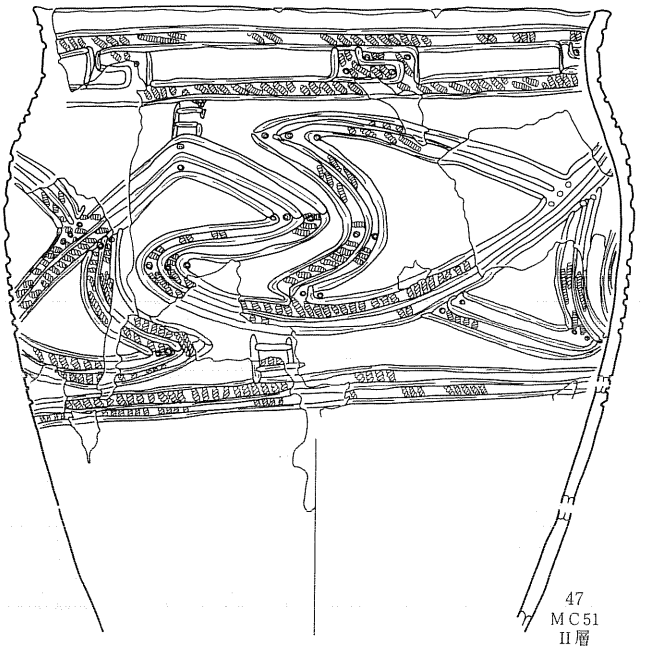
《文様帯a》口縁部から胴部下半にかけて認められるもの（54～59）。

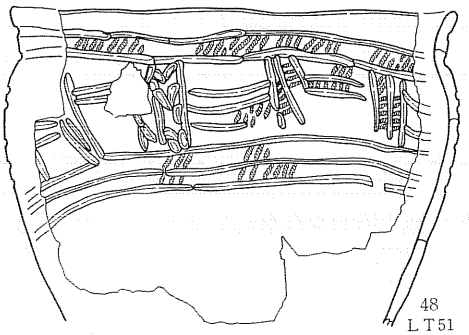
〈施文手法〉磨消縄文手法による。

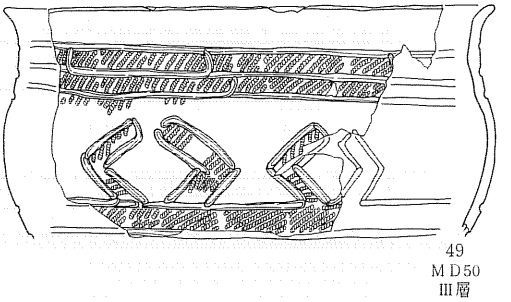
〈文様要素〉渦巻＋不規則文、逆「S」字状の入組文、渦巻＋「カニのハサミ」状、波状の文様が描かれる。

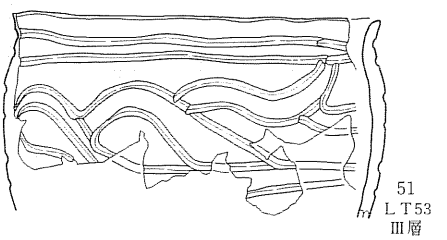
《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて認められるもの（60～63）。

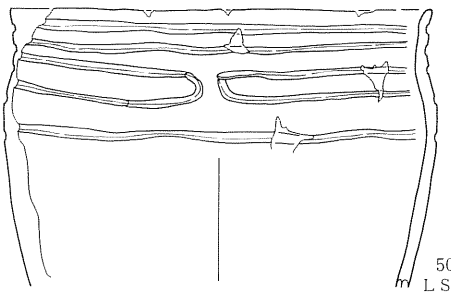
〈施文手法〉沈線のみで文様が施される。

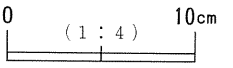












第20図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類

〈文様要素〉渦状＋逆「く」の字状、弧状、入組状、「H」状の文様が描かれる。

《文様帯ｃ》口縁部に文様帯が限られるもの（64）。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉長楕円形の文様が描かれる。

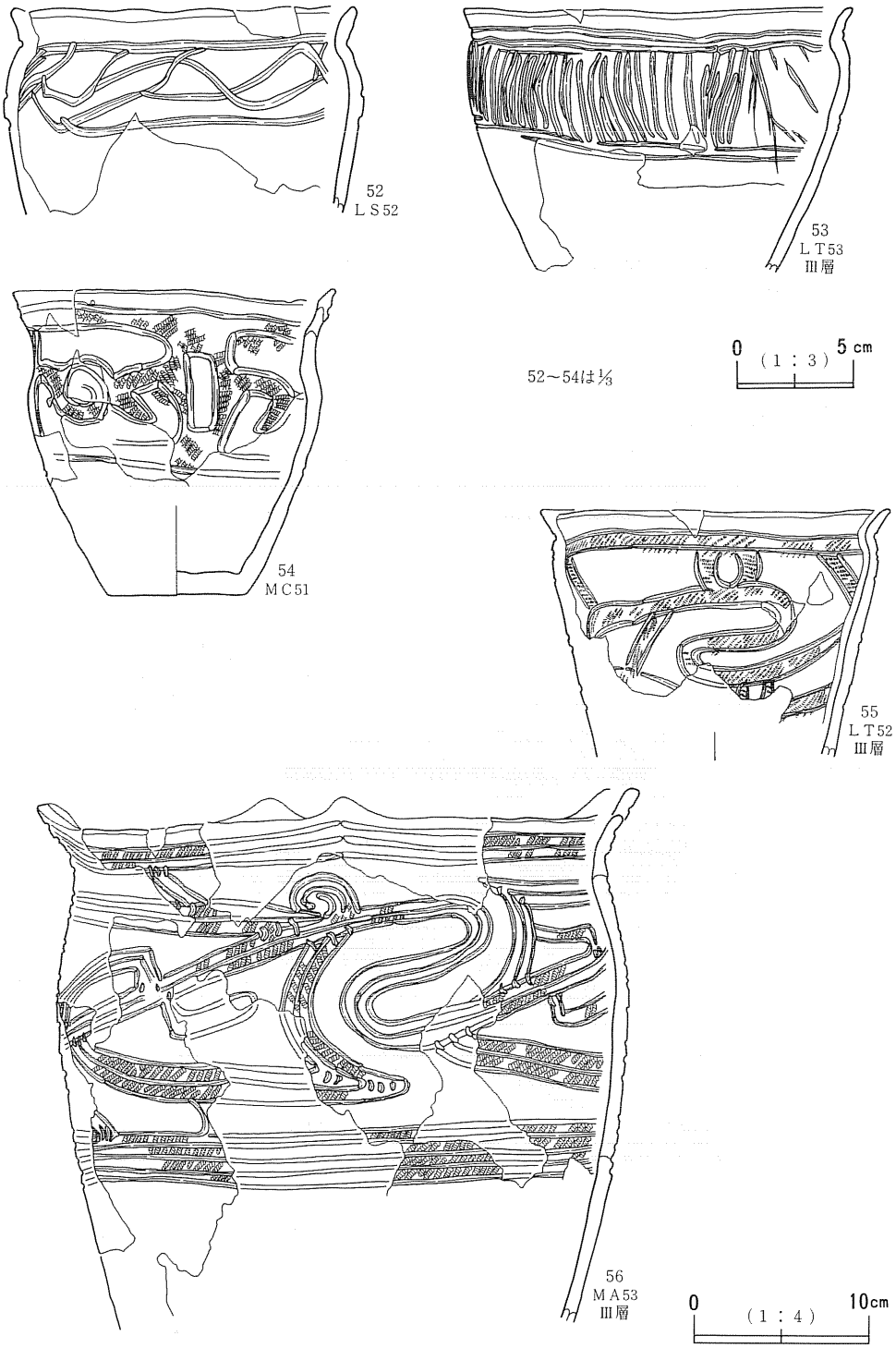
F類　器形が不明なものを本類とした（第24図）。

65は、渦文とひし形文が磨消縄文手法で交互に描かれている。66は、不規則に描かれた沈線間に朱が塗布された胴部下半の資料である。文様は、底部付近まで施されているものと推測される。67～69は、それぞれ横位に展開する入組状文、ひし形状文、雷文が施され、沈線間に縄文が充塡されている。69の雷文の上に施されている文様は不明である。

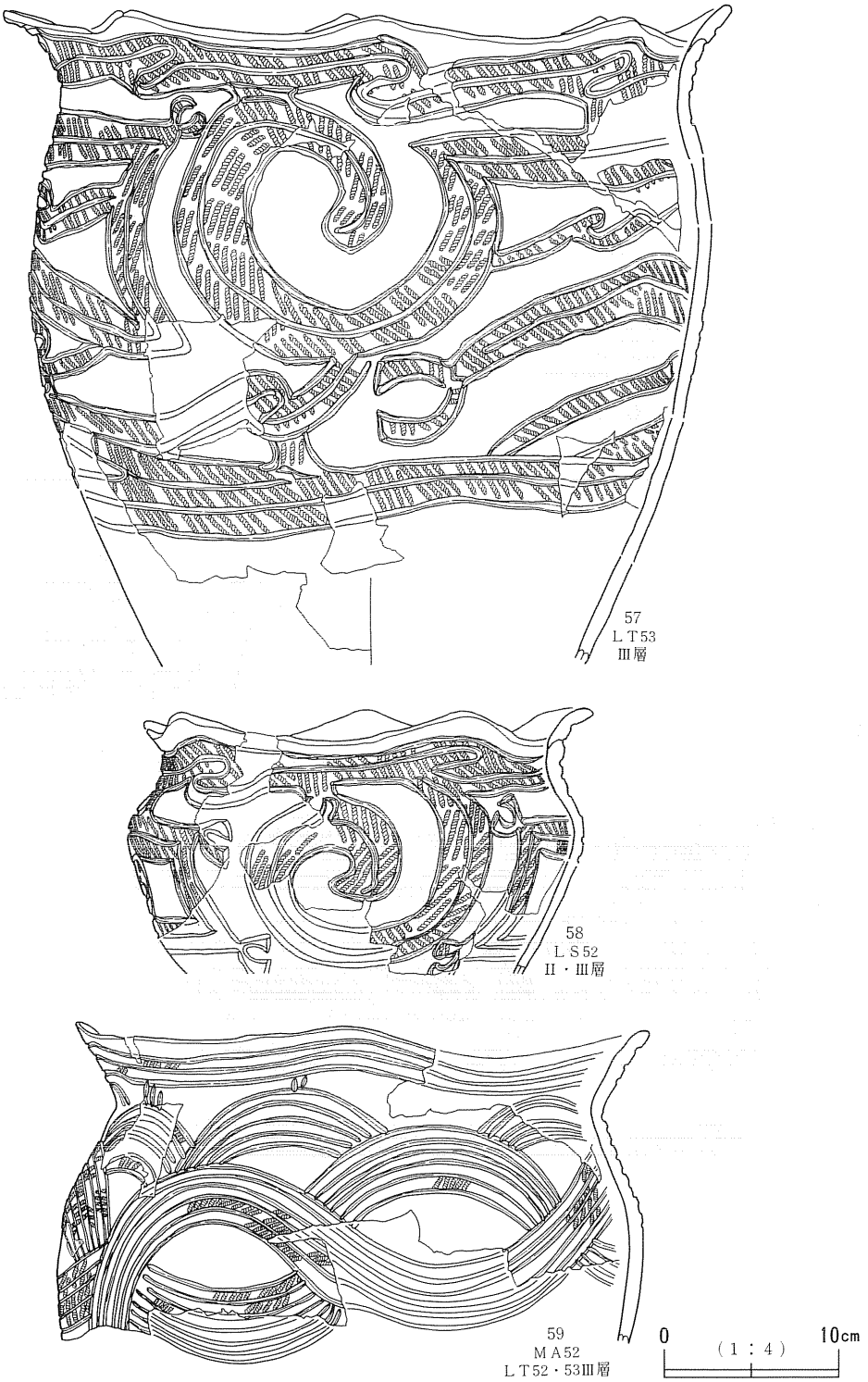
G類　地文以外の文様帯をもたないもの（第25・26図）。

70～72は、小型の深鉢であり、70はやや上げ底のつくりである。その中央部に木葉痕が消されずに残っている。71はB1類に近い器形であり、口縁部は波状を呈し2単位の波頂部を有する。胎土は1～2mmの砂粒を含み、焼成は良好である。内面は丁寧に調整されている。また、内外面に煤状炭化物の付着が認められる。72は、内面に漆とおもわれる黒褐色の物質が付着している。

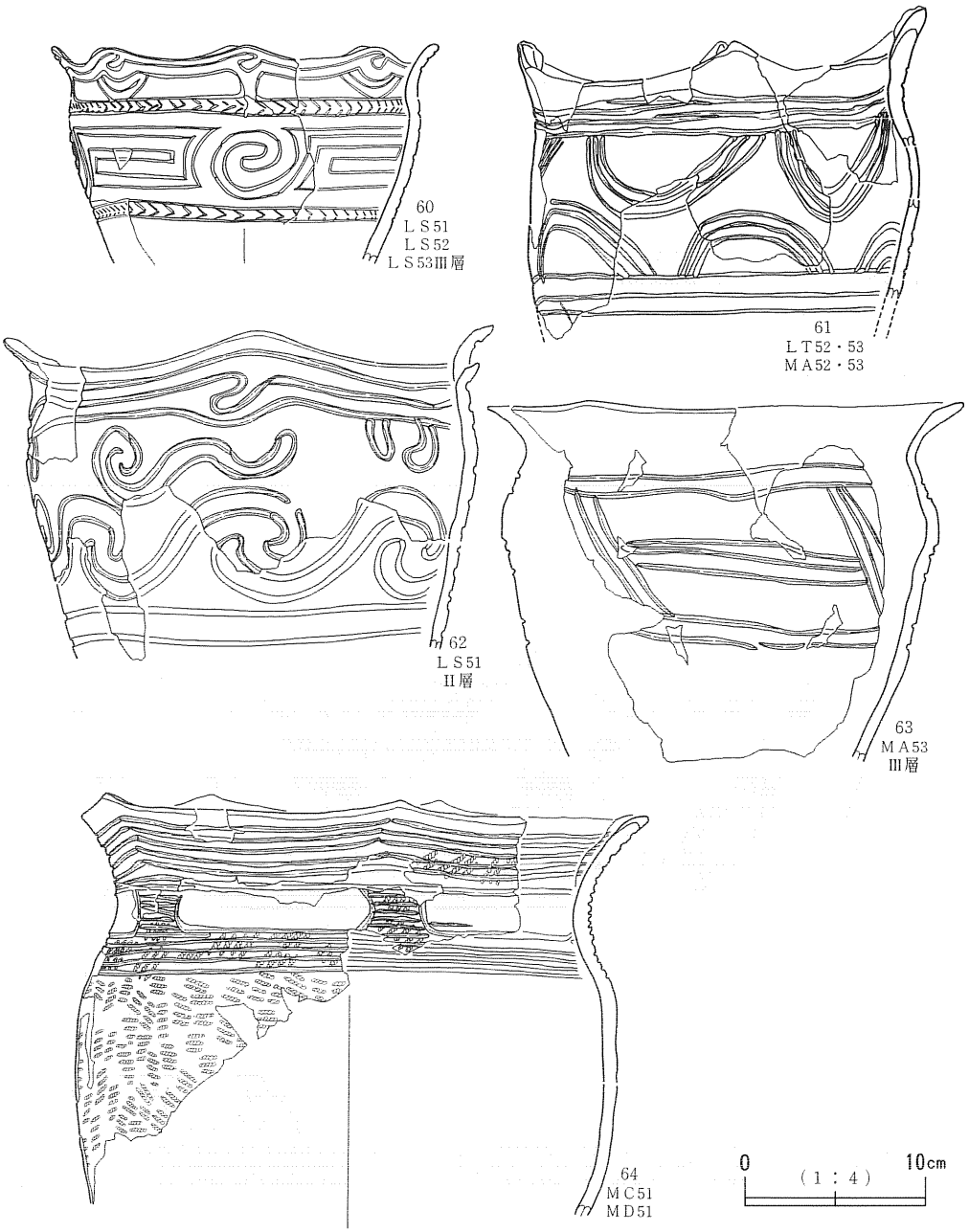
73は無節縄文（L）が施され、76は口径に比して底径が小さい。77は器形の上ではB1類に含まれ、口縁部に縄文原体(RL)の側面圧痕が施されている。78はB2類に含まれ、5単位の波状口縁に並行して1条の沈線が巡る。79はE類に含まれ、口縁は5単位の波状である。78・79とも火熱を受けた痕跡が認められる。



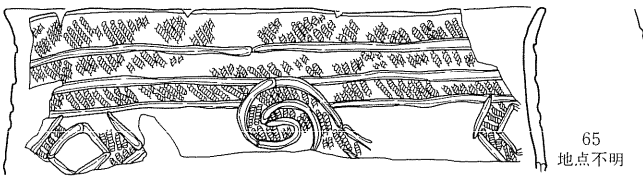
第21図　第Ⅲ群土器深鉢Ｄ類（52・53）・深鉢Ｅ類（54～56）



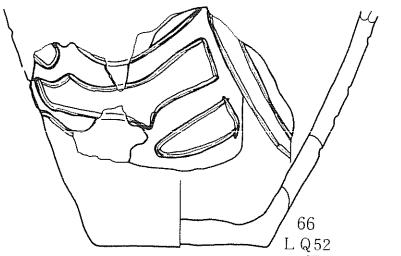
第22図　第Ⅲ群土器深鉢E類



第23図　第Ⅲ群土器深鉢Ｅ類



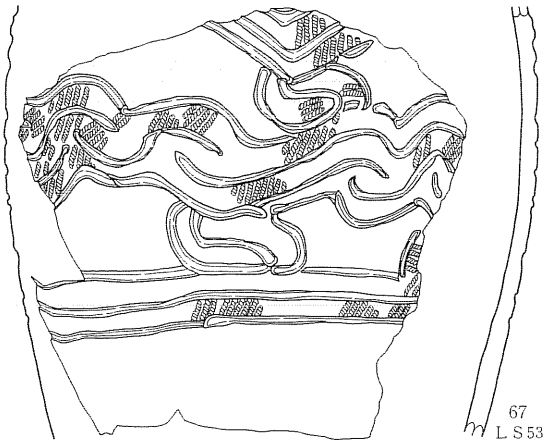
65
地点不明



66
LQ52
II層

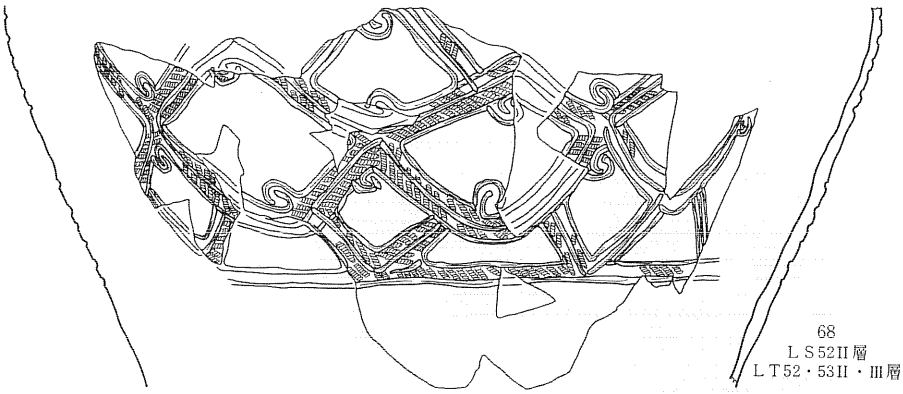
66のみ1/3

0 (1:3) 5cm

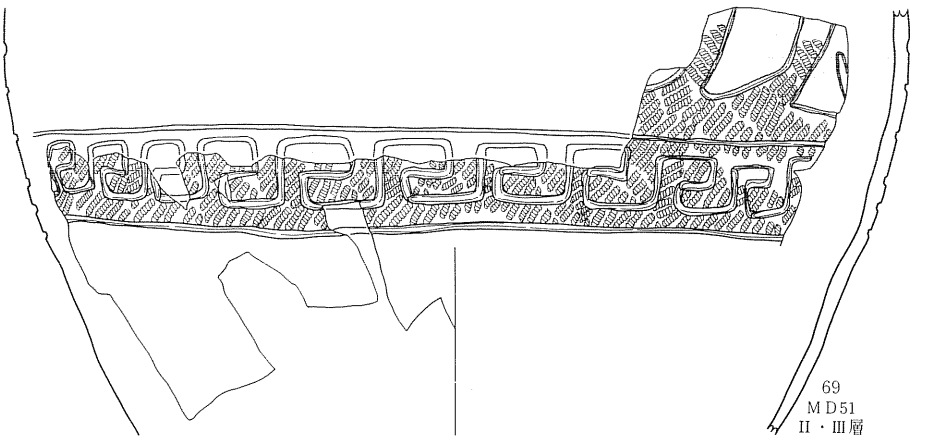


67
LS53

0 (1:4) 10cm

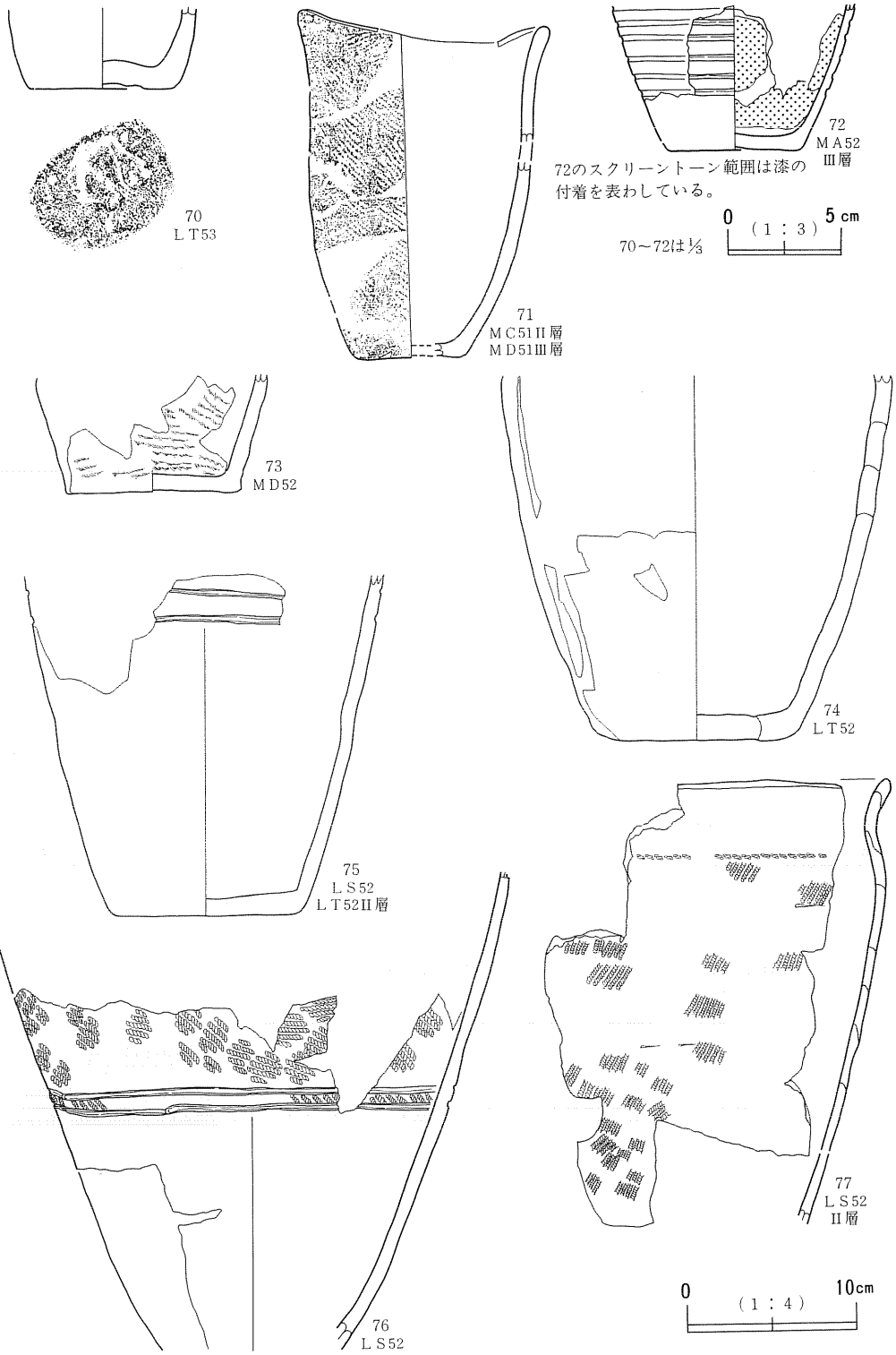


68
LS52II層
LT52・53II・III層

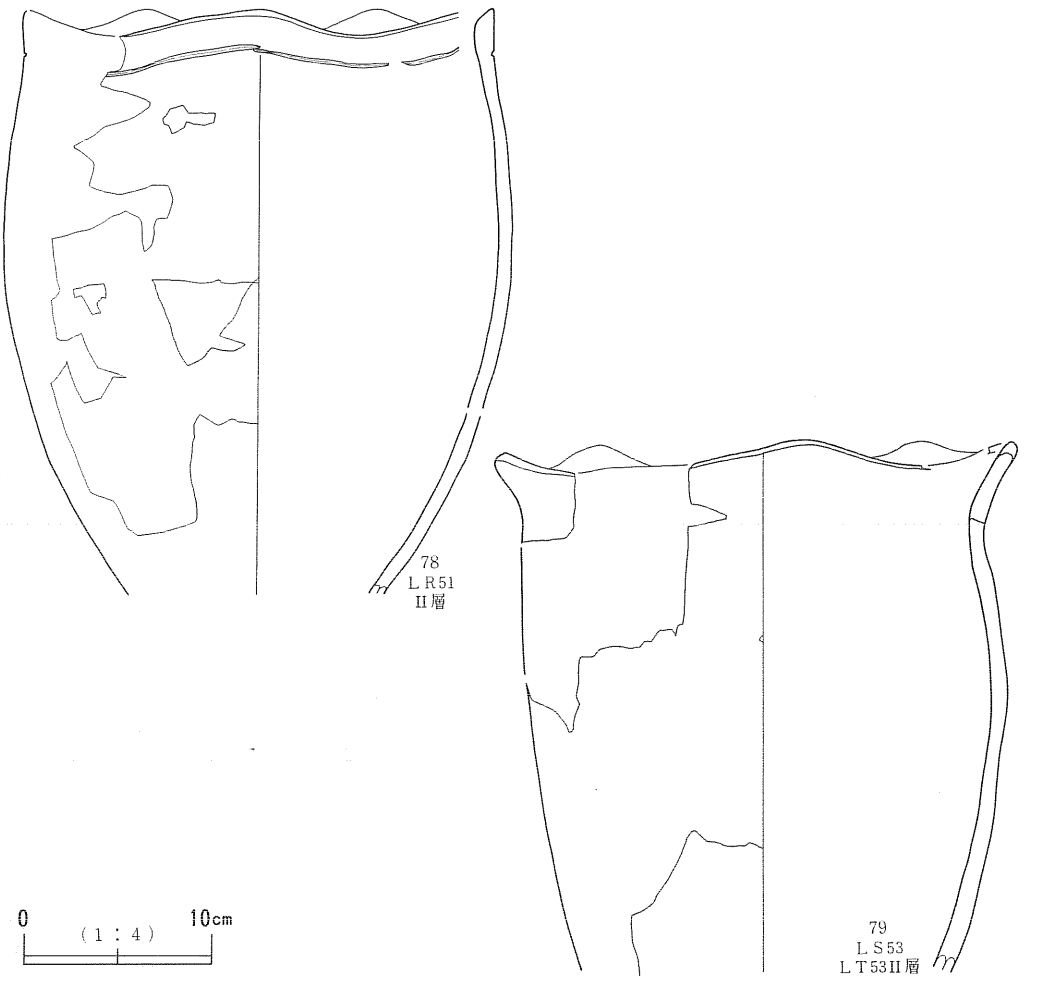


69
MD51
II・III層

第24図　第Ⅲ群土器深鉢Ｆ類



第25図　第Ⅲ群土器深鉢Ｇ類



第26図　第Ⅲ群土器深鉢G類

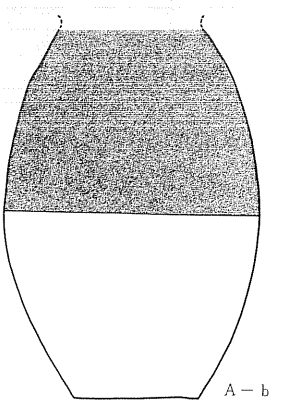
［壺］

A類　胴部がタマゴ形を呈するもの。文様帯により、2つに分けられる（第27図）。

《文様帯a》口縁部から文様が施されているものと推測されるが、文様帯の下端が不明なもの。

〈施文手法〉①粘土紐を貼り付けた隆起線により文様を施すもの（80）と、②貼り付けた粘土紐に沿って沈線を施す彫刻的なもので、隆線上に縄文が施される（81）

〈文様要素〉①では入組状の不規則な文様、②では「U」字＋方形の文様が描かれる。



《文様帯b》口縁部から胴部中ごろにかけて認められる

もの（82）。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

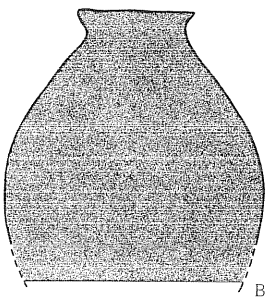
〈文様要素〉「Ｕ」字状＋長方形の文様。

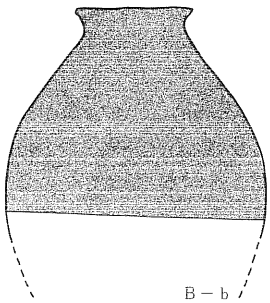
Ｂ類　胴部がふくらむが、肩は張らずになめらかなもの。文様帯又は文様から３つに分けられる（第28・29図）。

《文様帯ａ》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの（83～85）。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉波状、長方形状の文様が描かれる。





《文様帯ｂ》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの（86～89）。

〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文によるものがある。

〈文様要素〉①では玉ネギ又は球根状、②では入組状の文様が描かれる。

《文様帯ｃ》文様帯の下端が不明なもの又は文様帯を有しないもの（90～92）。

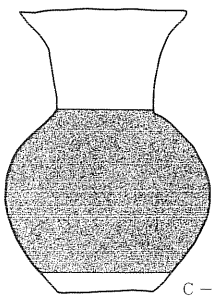
90・91は小型のものであり、90は４単位の把手をもち、やや丁寧なつくりである。92は、磨消縄文手法により入組状文や曲線文を施している。胎土は2～3mmで焼成は良好である。

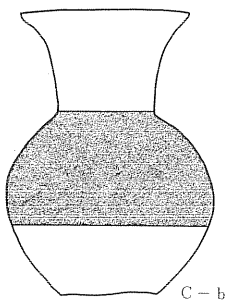
Ｃ類　胴部が球形を呈するもの。小型のものが多い。文様帯等により３つに分けられる（第29図）。

《文様帯ａ》底部付近まで文様帯が認められるもの（93）。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉方形状の文様が描かれているようであるが、はっきりしない。





《文様帯ｂ》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの（94～99）。

〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文手法によるものがある。

〈文様要素〉①では方形、波状＋不規則な文様、②では入組状、「Ｕ」字状の文様が描かれる。

《文様帯ｃ》文様帯の下端が不明なものまたは無文のもの（100・101）。

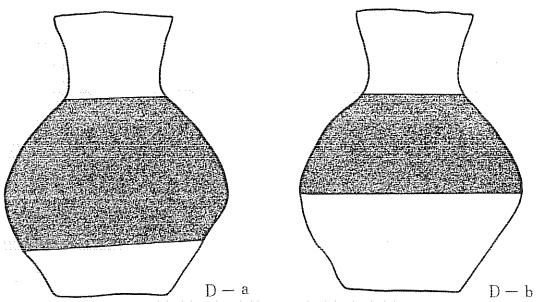
100は頸部の屈曲部に３条の沈線が横走し、その下に方形状の文様が磨消縄文手法により施される。内面に指頭によるヨコナデの痕跡が認められる。

D類　胴部中央又は下半に強い張りをもつもの。文様帯により２つに分けられる（第30図）

《文様帯ａ》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの（102・105・106）

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉入組状の文様が描かれる。



《文様体ｂ》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの（103）。

〈施文手法〉沈線のみによるもの。

〈文様要素〉カギ状の文様が描かれる。

E類　無文のもの又は文様帯が不明なもの（第30図）。

小型のものほとんどであり、胎土に1～2mmの砂粒を含む。焼成は良好、色調は灰白色10YR8/1から浅黄橙色10YR8/3、にぶい橙色7.5YR7/4である。

111・113は、２単位の波状口縁を呈するものであり、111は波頂部に粘土紐を貼り付けており、113は波頂部に対応して穿孔されている。112の口縁部は、真上からみると楕円形を呈しており、その短軸方向の両端に力を加えて内側に折り曲げ、口縁部に変化を与えている。115は、頸部の無文帯を挟み口縁部と胴部に横走する沈線が密に施され、その下に三角形状又は方形状の文様が描かれた後その屈折部に円形の刺突文が施されている。胎土に3～4mmの砂粒を多く含み、その脱落が認められる。

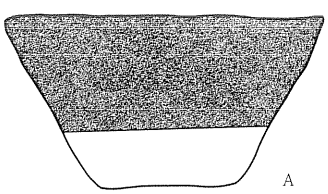
［浅鉢］

A類　底部から口縁部に直線的に立ち上がるもの。小型のものである（第31図116・117）。

《文様帯》口縁部から胴部下半にかけて。

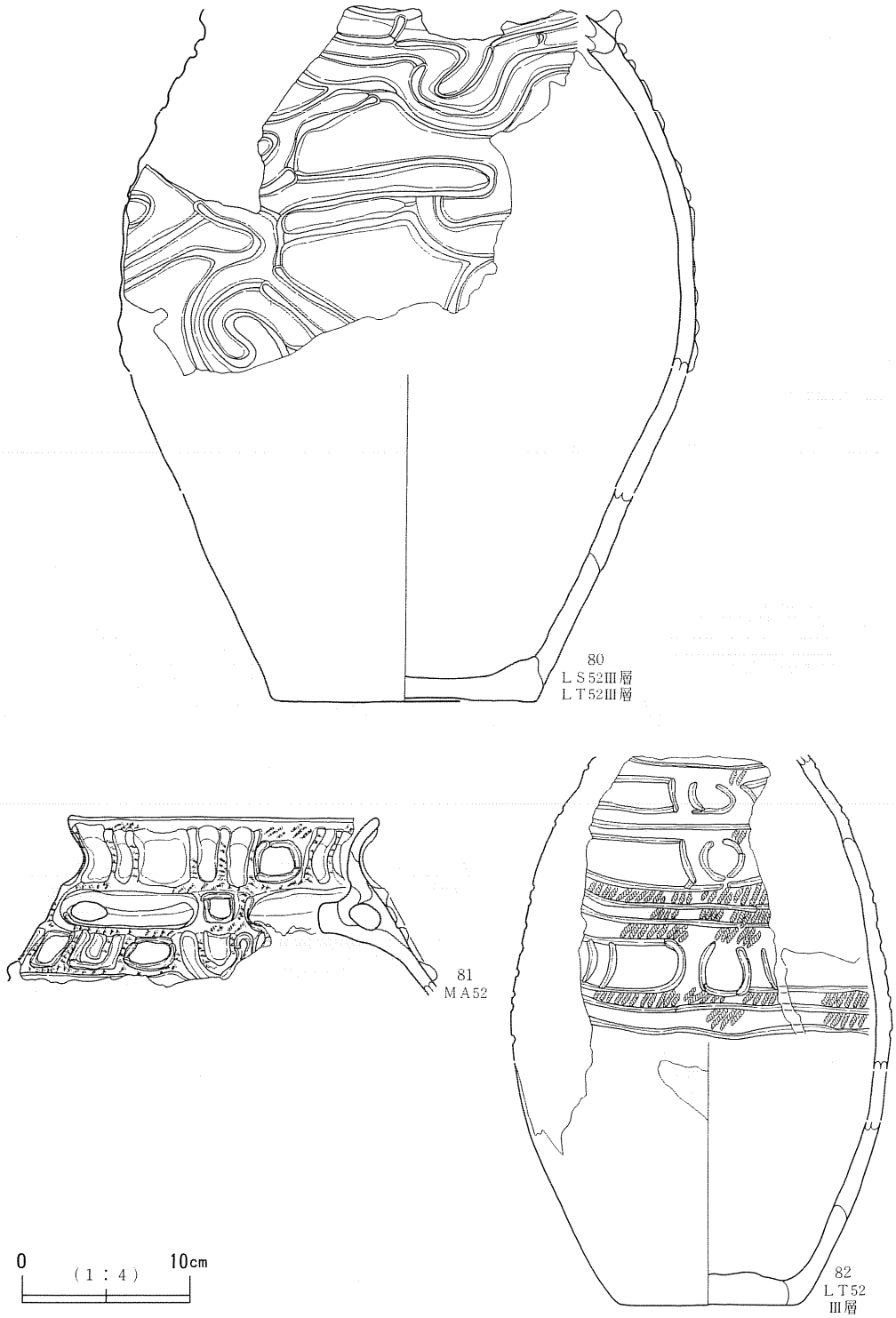
〈施文手法〉沈線のみにより文様が施される。

〈文様要素〉放射状又は並行する直線の文様が描かれる。

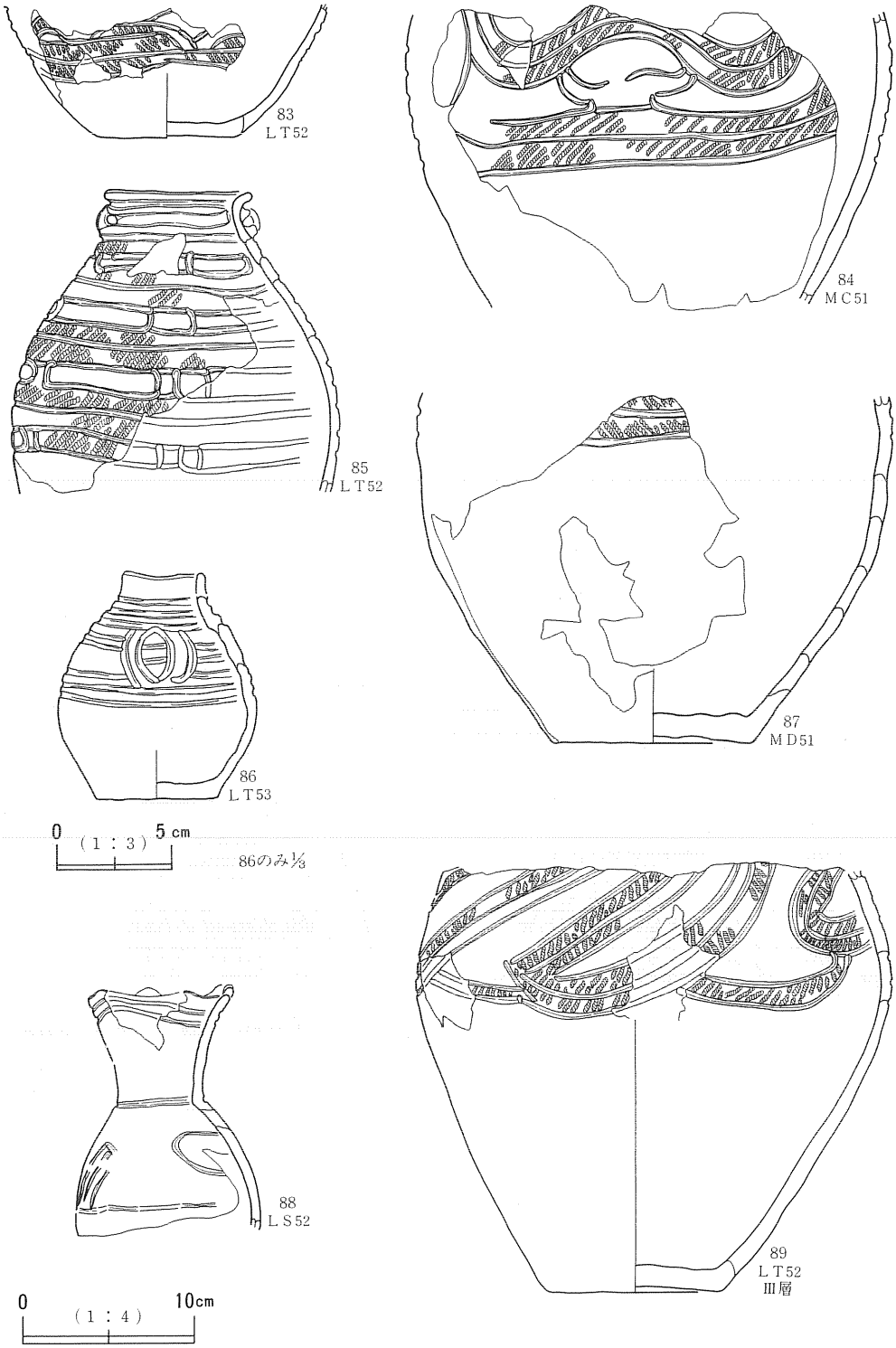


B類　底部から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がるもの（第31図118）。

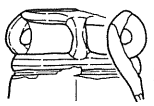
《文様帯》口縁部。

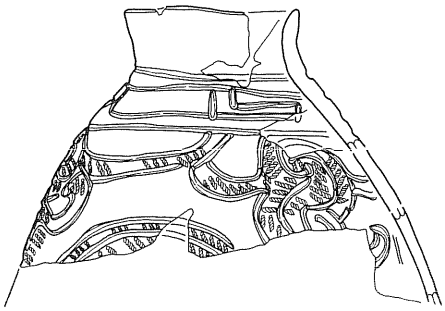


第27図　第Ⅲ群土器壺Ａ類

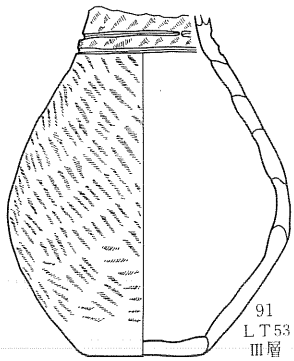


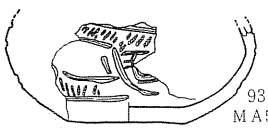
第28図　第Ⅲ群土器壺Ｂ類

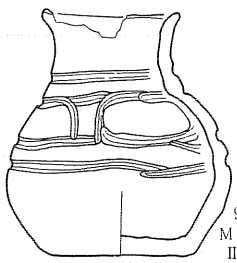

90
ＬＴ52
Ⅲ層

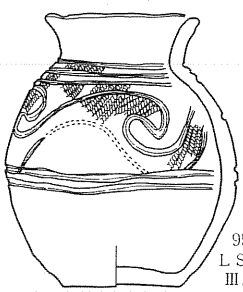

92
ＬＳ52

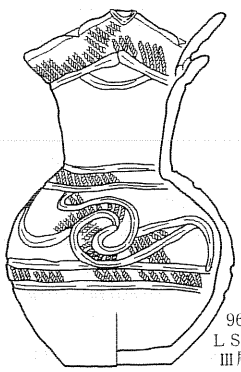
0　（１：４）　10cm

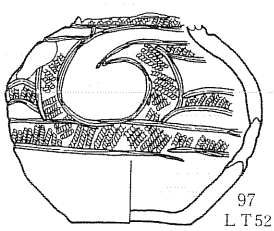

91
ＬＴ53
Ⅲ層

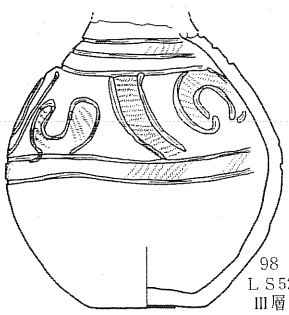

93
ＭＡ52

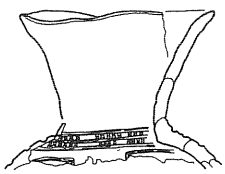

94
ＭＡ53
Ⅲ層

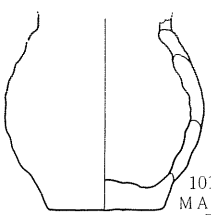

95
ＬＳ53
Ⅲ層

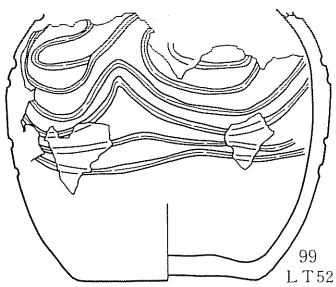

96
ＬＳ52
Ⅲ層


97
ＬＴ52


98
ＬＳ52
Ⅲ層


100
ＭＡ52・53

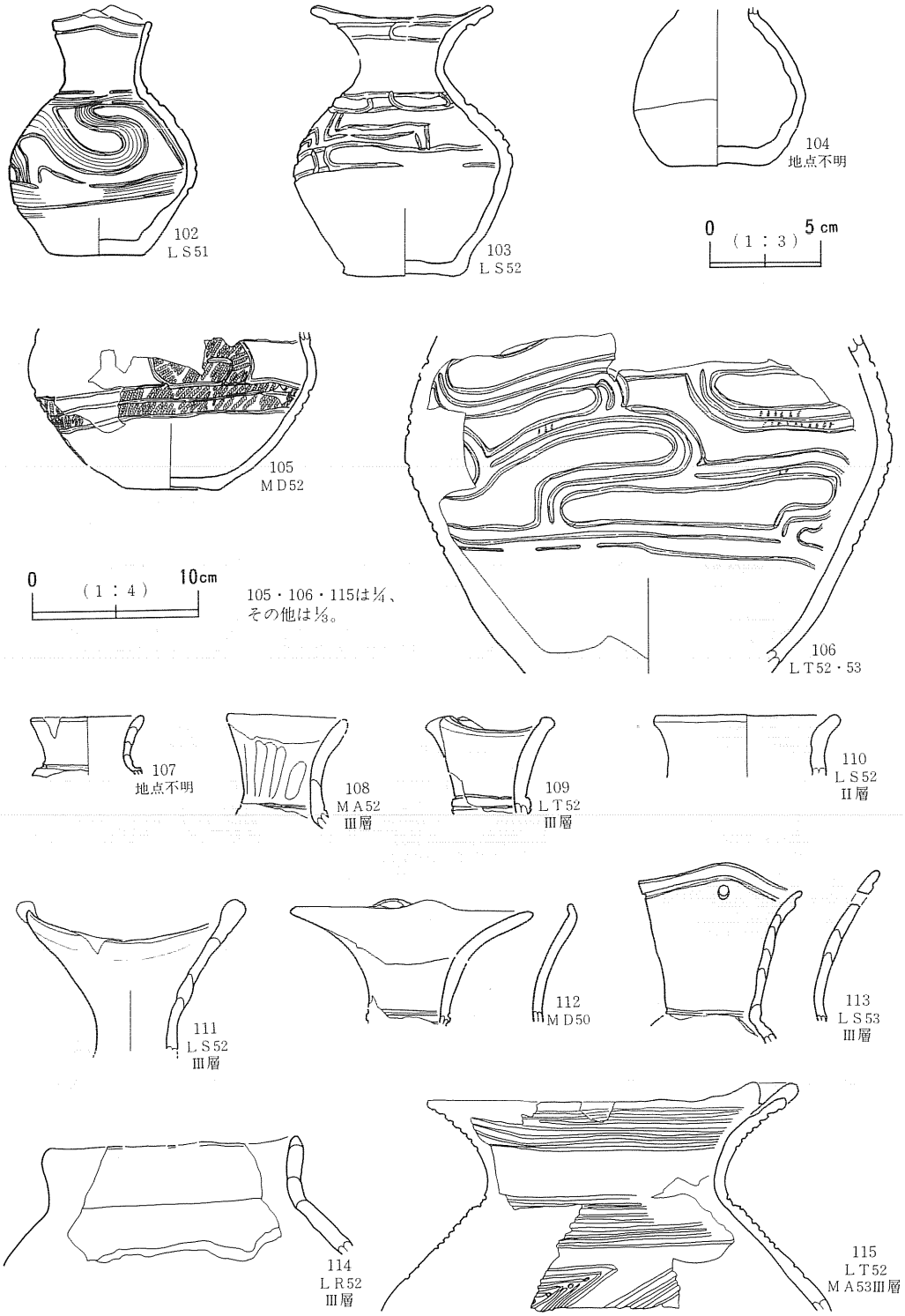

101
ＭＡ53
Ⅲ層


99
ＬＴ52

92のみ¼、その他は⅓

0　（１：３）　5 cm

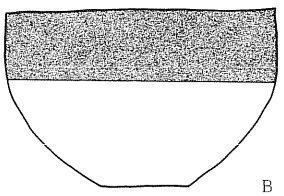
第29図　第Ⅲ群土器壺Ｂ類（90～92）・壺Ｃ類（93～101）



第30図　第Ⅲ群土器壺Ｄ類（102～106）・壺Ｅ類（107～115）

〈施文手法〉磨消縄文手法。

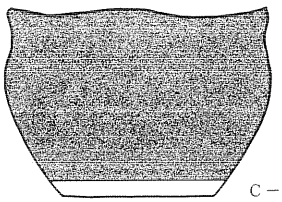
〈文様要素〉「Ｕ」字又は「Ｏ」字状の文様が描かれる。

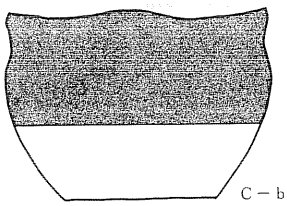

Ｂ

Ｃ類　胴部がふくらみ、口縁部が緩く外反するもの（第31図119～121）。文様帯により、２つに分けられる。

《文様帯ａ》口縁部から底部付近にかけて文様帯が認められるもの（119）。

〈施文手法〉沈線による施文を主体とするが、粘土紐貼り付けによる隆帯もみられる。


Ｃ－ａ


Ｃ－ｂ

〈文様要素〉入組状の文様が描かれる。

《文様帯ｂ》口縁部から胴部中ごろにかけて文様帯が認められるもの（120・121）。

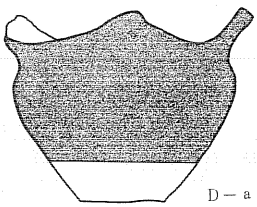
〈施文手法〉①沈線のみによるものと、②磨消縄文手法によるものに分けられる。

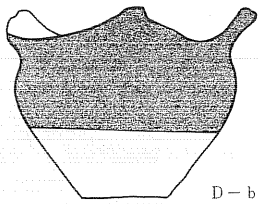
〈文様要素〉①ではメガネ状、②では不整方形の文様が施される。

Ｄ類　胴部が張り、口縁部がくびれるもの（第31図122・123）。文様帯により２つに分けられる。

《文様帯ａ》口縁部から胴部下半にかけて文様帯が認められるもの（122）。

〈施文手法〉磨消縄文手法によるもの。


Ｄ－ａ


Ｄ－ｂ

〈文様要素〉不規則な曲線が施される。

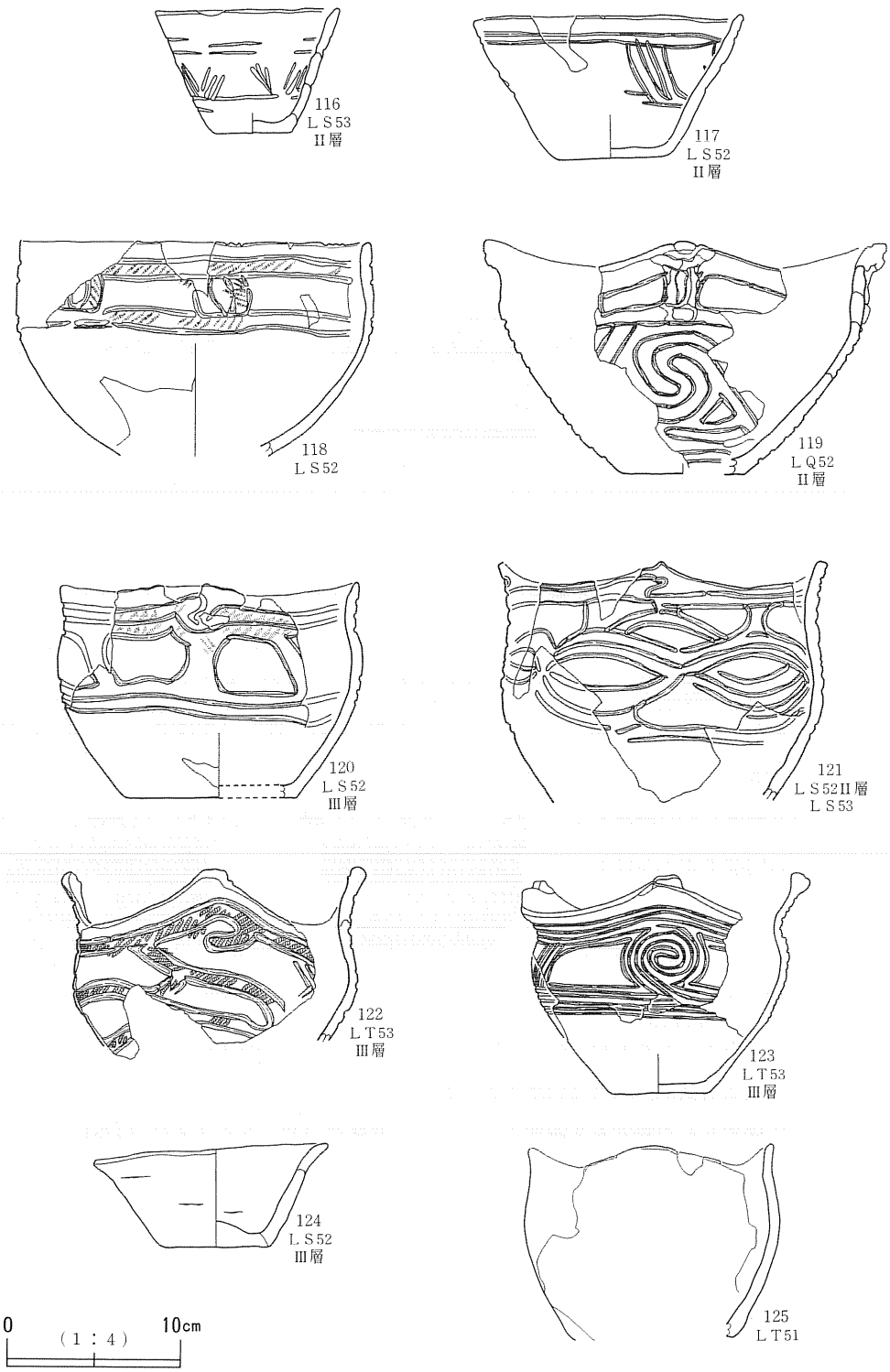
《文様帯ｂ》口縁部から胴部上半にかけて文様帯が認められるもの（123）。

〈施文手法〉沈線のみによるもの。

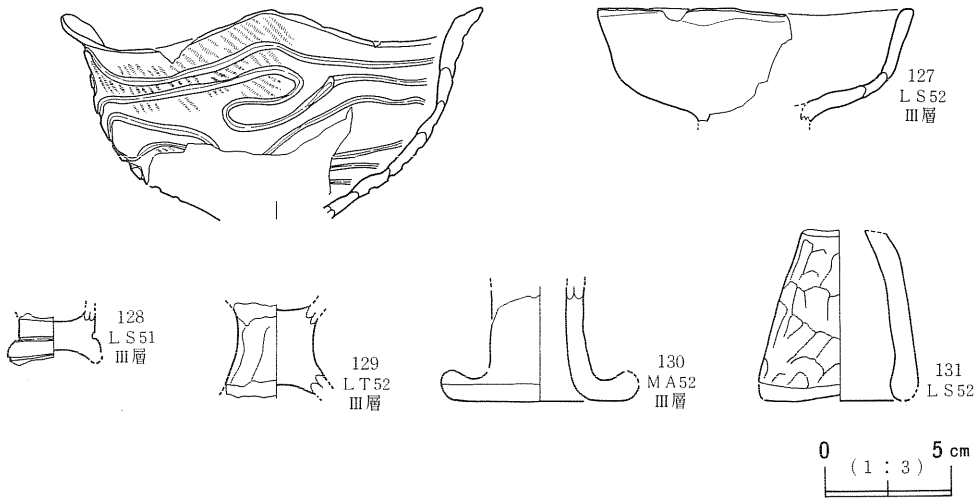
〈文様要素〉渦巻文。

Ｅ類　無文のもの（第31図124・125）。

器形上は124がＡ類、125がＢ類に含まれる。



第31図　第Ⅲ群土器浅鉢Ａ類（116・117）・浅鉢Ｂ類（118）・浅鉢Ｃ類（119～121）・浅鉢Ｄ類（122・123）・浅鉢Ｅ類（124・125）



第32図　第Ⅲ群土器台付浅鉢Ａ類（126）・台付浅鉢Ｂ類（127）・台付浅鉢脚部（128～131）

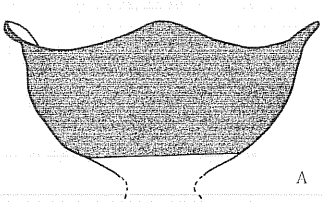
［台付浅鉢］

Ａ類　　胴部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部がひらくもの（第32図126）。

《文様帯》口縁部から胴部下半にかけて。

〈施文手法〉磨消縄文手法による。

〈文様要素〉不規則なアメーバー状の文様が施される。



Ｂ類　　胴部が「く」字状に屈曲し、口縁部にいたる無文のもの（第32図127）。

その他の資料

第32図128～131は、台部の資料である。131は、身の部分と台部とを接合した部分で壊れている。

第Ⅲ群土器破片資料

１類　粘土紐貼り付けによる隆帯と沈線による文様が施されるもの（第33図）。

ａ．口縁部に粘土紐の貼付けを行うもの（132・133・135）。

ｂ．口縁部文様帯に粘土紐の貼付けを行い半肉刻的な感じを与えるもの（134）。

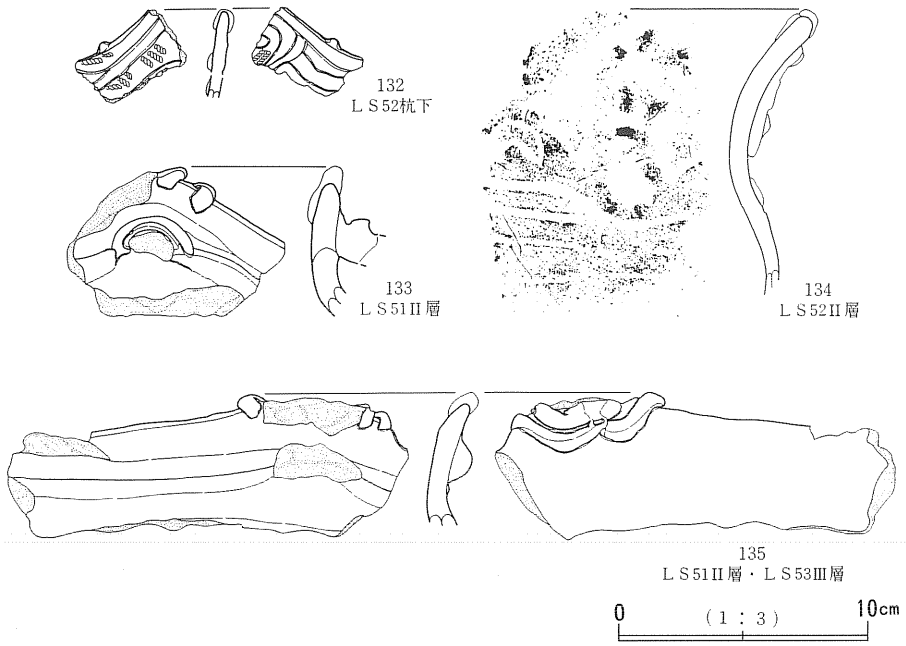
２類　地文上に沈線を施すもの（第34図136～138）。

ａ．地文が縄文原体の回転によるもの（136・137）。

ｂ．地文が横方向の条線状のもの（138）。

３類　磨消縄文手法によるもの（第34図139～第38図172）。

ａ．弧線又は入組状の不規則文を描くもの（139～154）。



第33図　第Ⅲ群土器

b．「カニのハサミ」状の文様を描くもの（155）。

c．文様帯の上下を斜方向の線によりつなぐもの（156～158）。

d．渦巻状の文様を描くもの（159）。

e．長楕円状の文様を描くもの（160・161）。

f．方形基調の文様を描くもの（162～168）。

g．櫛目状の文様を描くもの（169～172）。いずれも無文地に櫛目状の文様を施しており、170は櫛目状の条線が全体の文様の流れに対して直交する方向に施されている。

4類　沈線により文様が施されるもの（第38図173～第41図204）。

a．弧線又は直線により不規則な文様を描くもの（173～191）。

b．方形基調の文様を描くもの（192～195）。

c．カギ状文を描くもの（196～199）。

d．三角形状の文様を描くもの（200）。

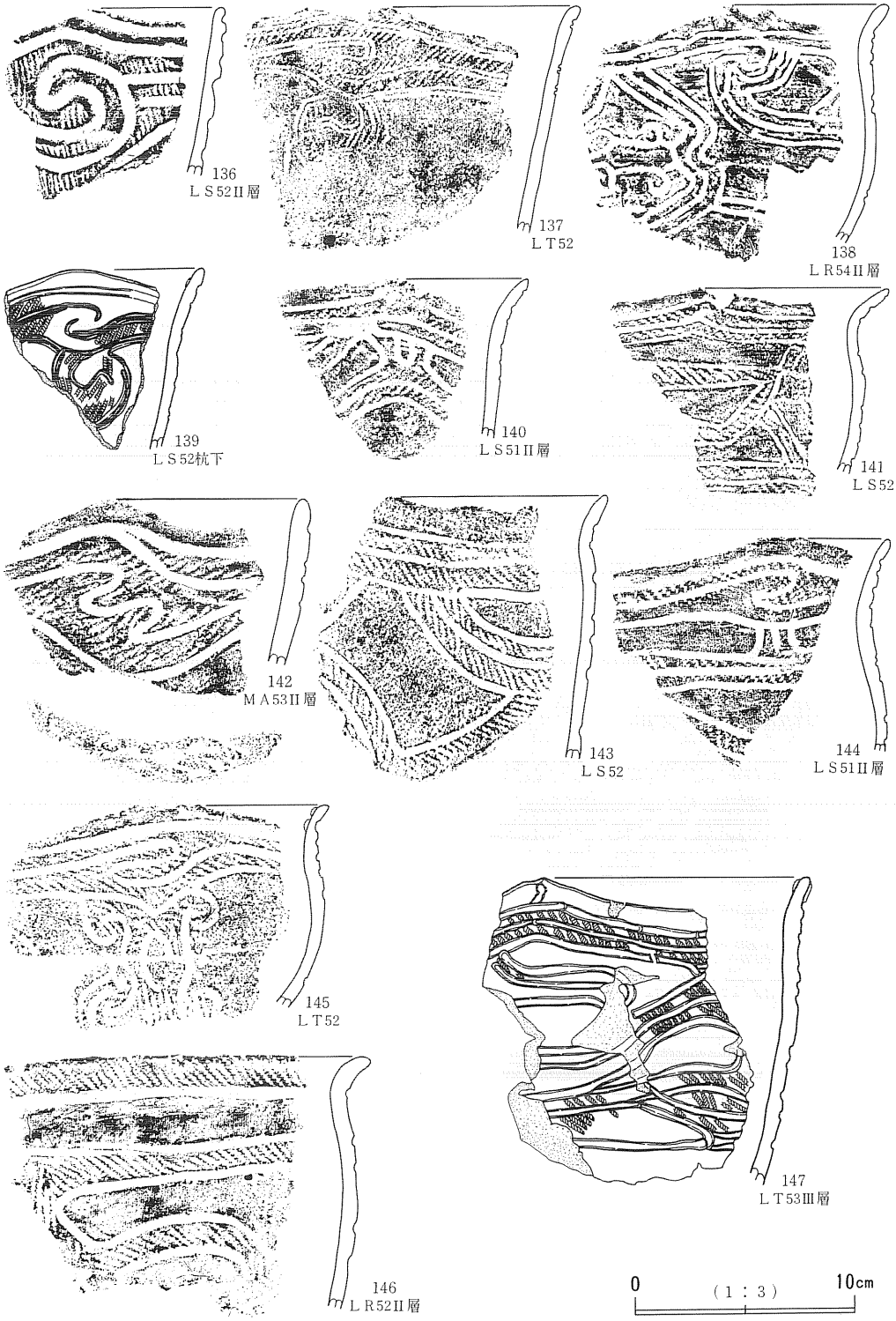
e．渦巻状の文様を描くもの（201・202）。

f．錨状の文様を描くもの（203）。

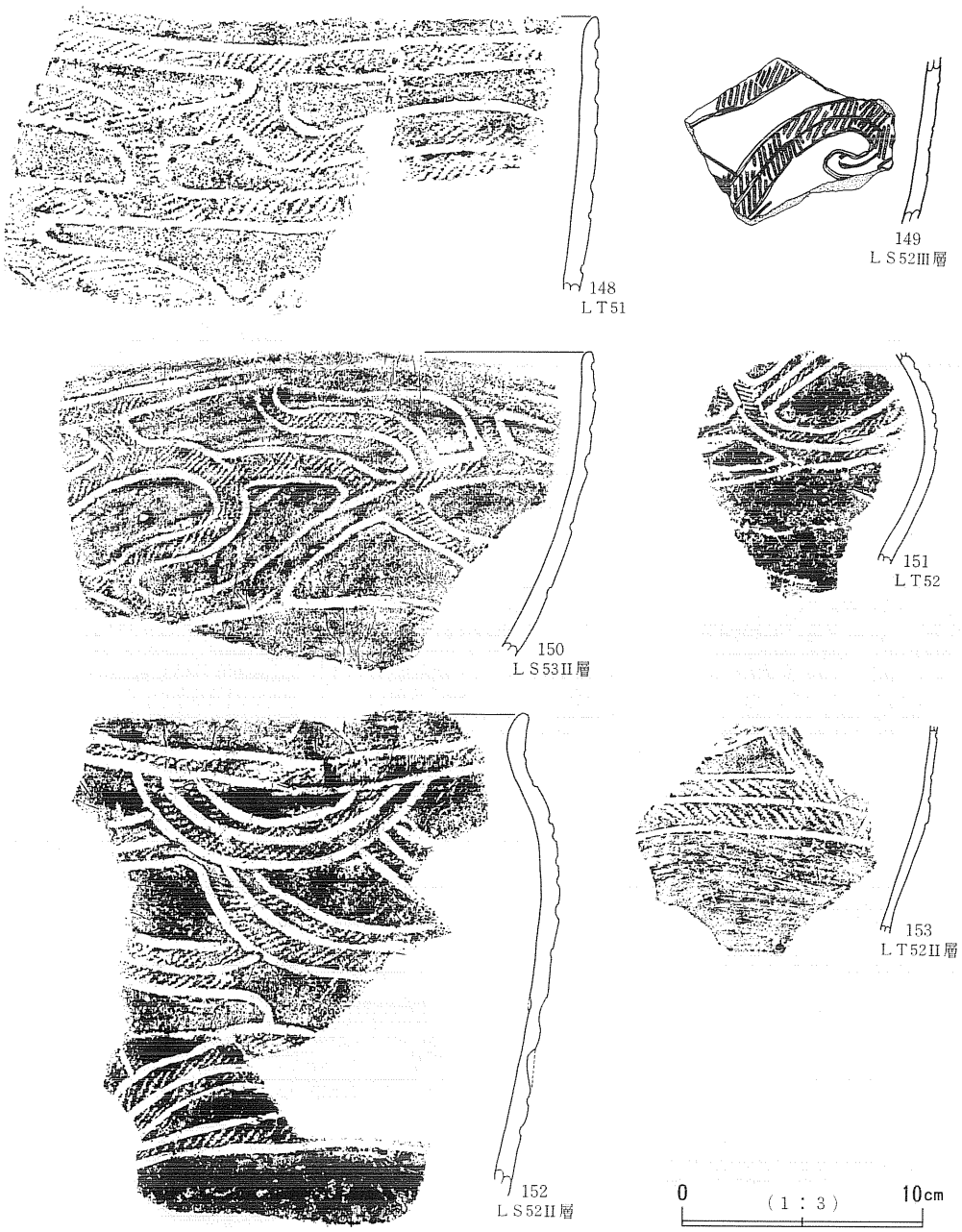
g．横位の平行沈線をやや密に描くもの（204）。

第Ⅲ群土器のうち、これまでの分類に入らないものについて、以下に述べる。

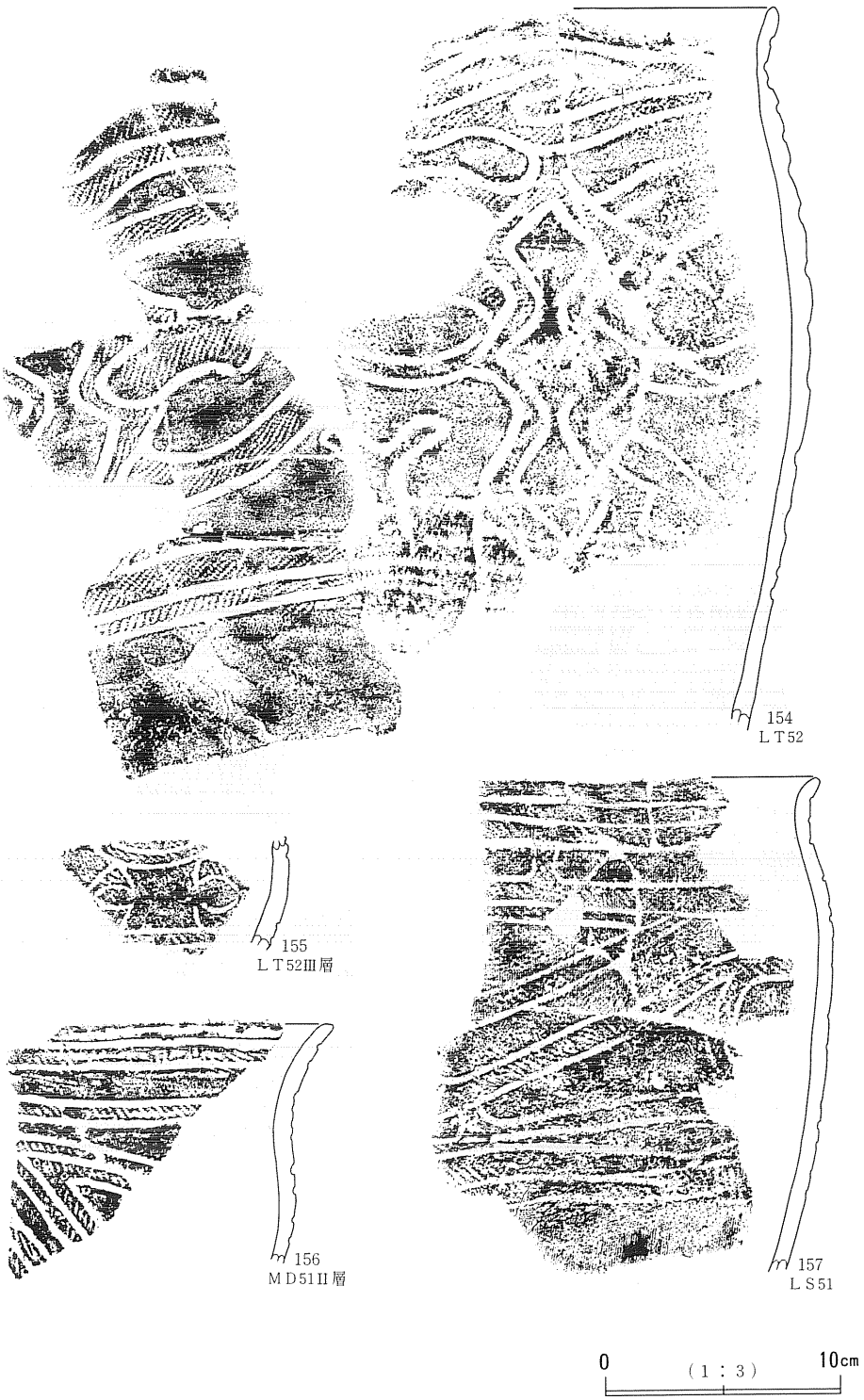
①無文又は地文のみのもの（第41図205～208）。


136
ＬＳ52Ⅱ層
137
ＬＴ52
138
ＬＲ54Ⅱ層
139
ＬＳ52杭下
140
ＬＳ51Ⅱ層
141
ＬＳ52
142
ＭＡ53Ⅱ層
143
ＬＳ52
144
ＬＳ51Ⅱ層
145
ＬＴ52
147
ＬＴ53Ⅲ層
146
ＬＲ52Ⅱ層
0
（１：３）
10cm

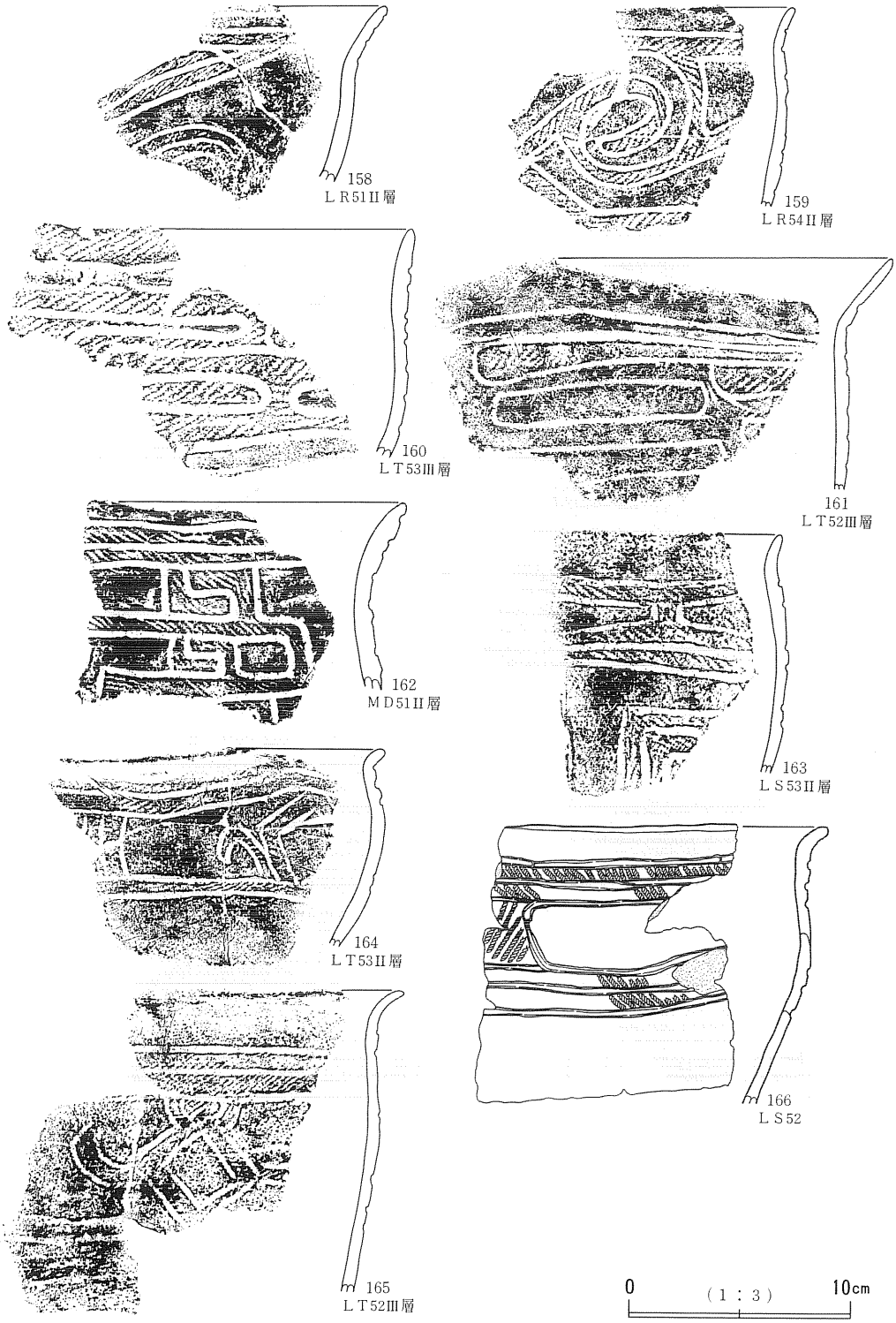
第34図　第Ⅲ群土器


148
L T51
149
L S52Ⅲ層
150
L S53Ⅱ層
151
L T52
152
L S52Ⅱ層
153
L T52Ⅱ層
0
（1：3）
10cm

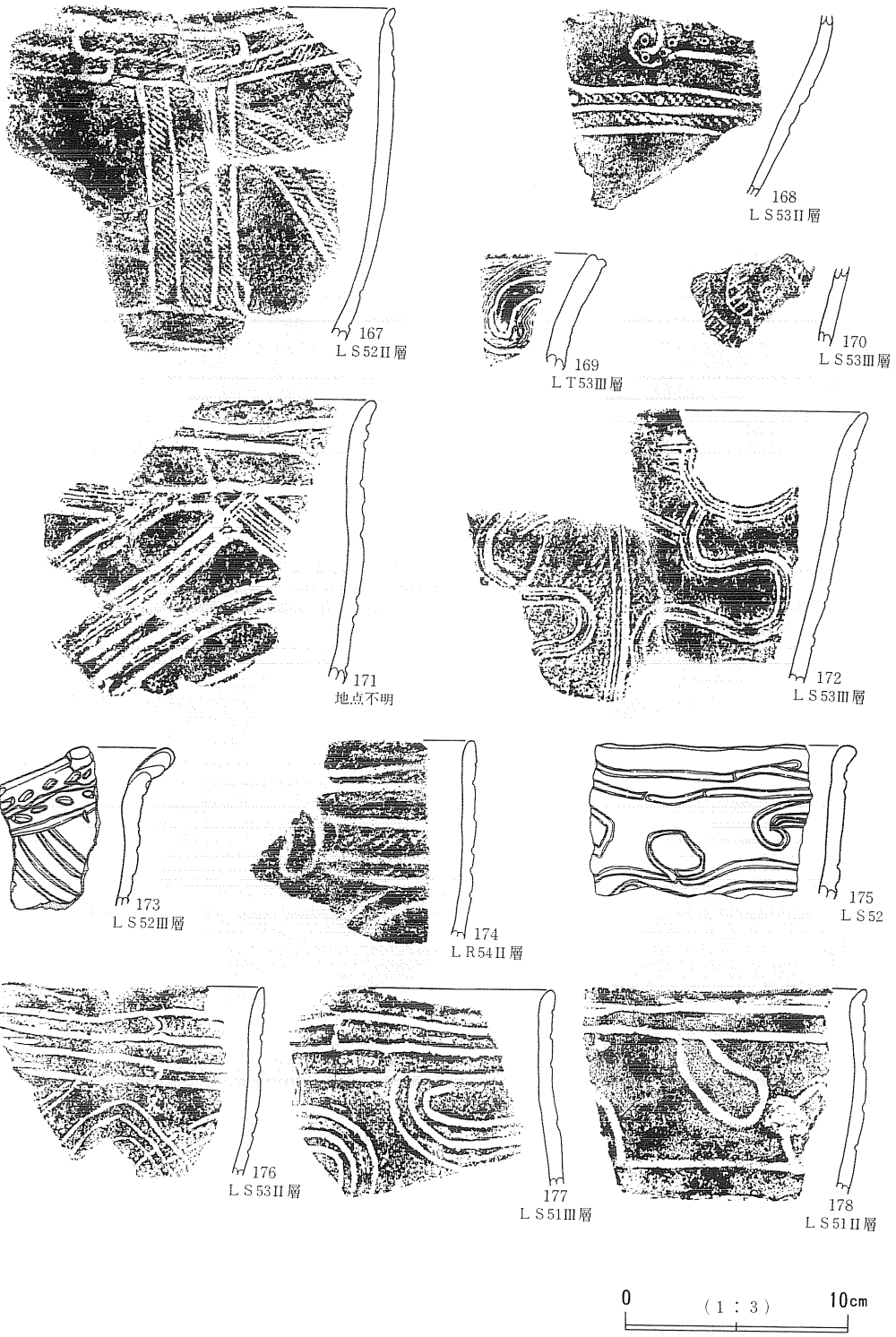
第35図　第Ⅲ群土器



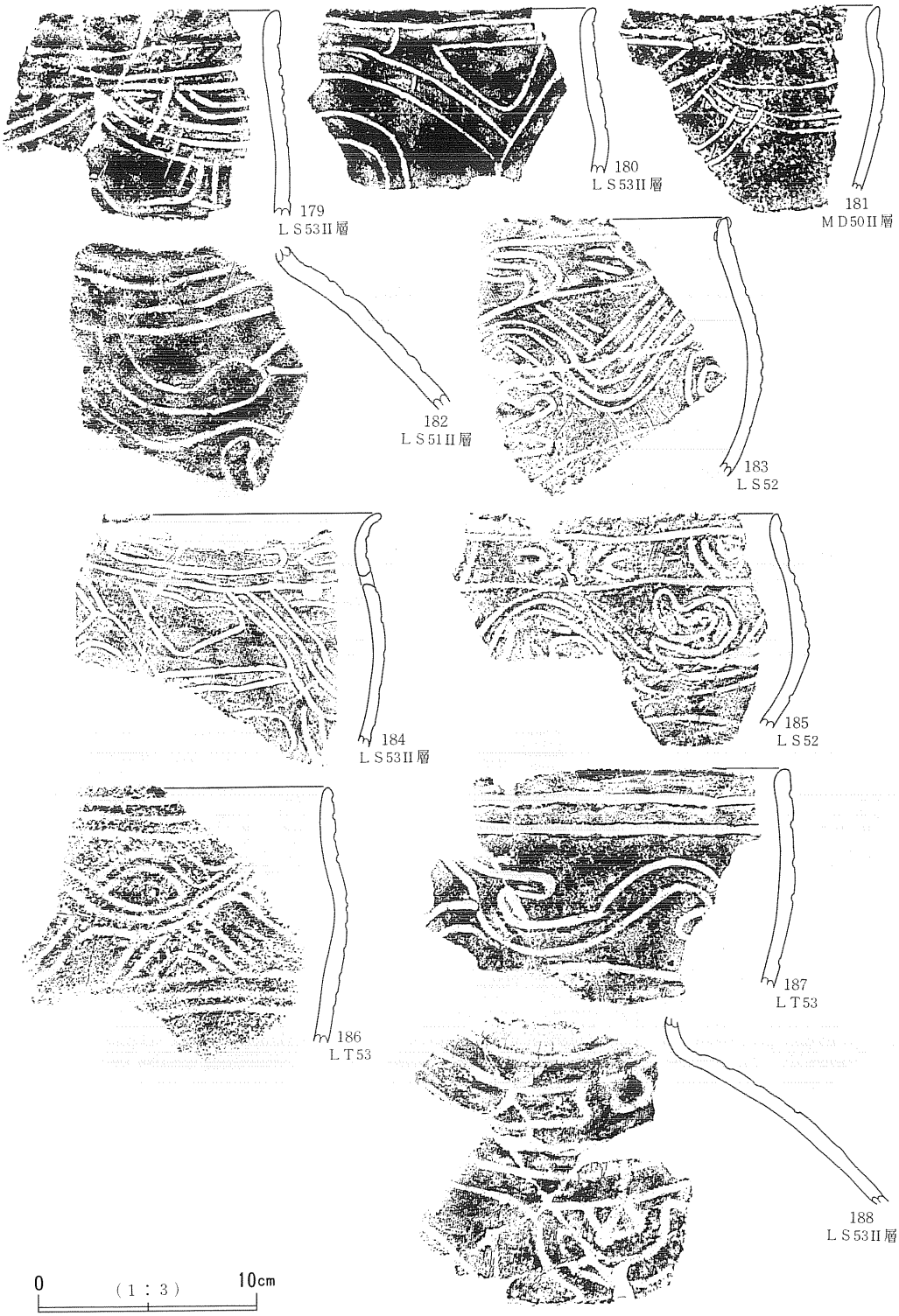
第36図　第Ⅲ群土器


158
L R51 II層
159
L R54 II層
160
L T53III層
161
L T52III層
162
M D51 II層
163
L S53 II層
164
L T53 II層
166
L S52
165
L T52III層
0
(1 : 3)
10cm

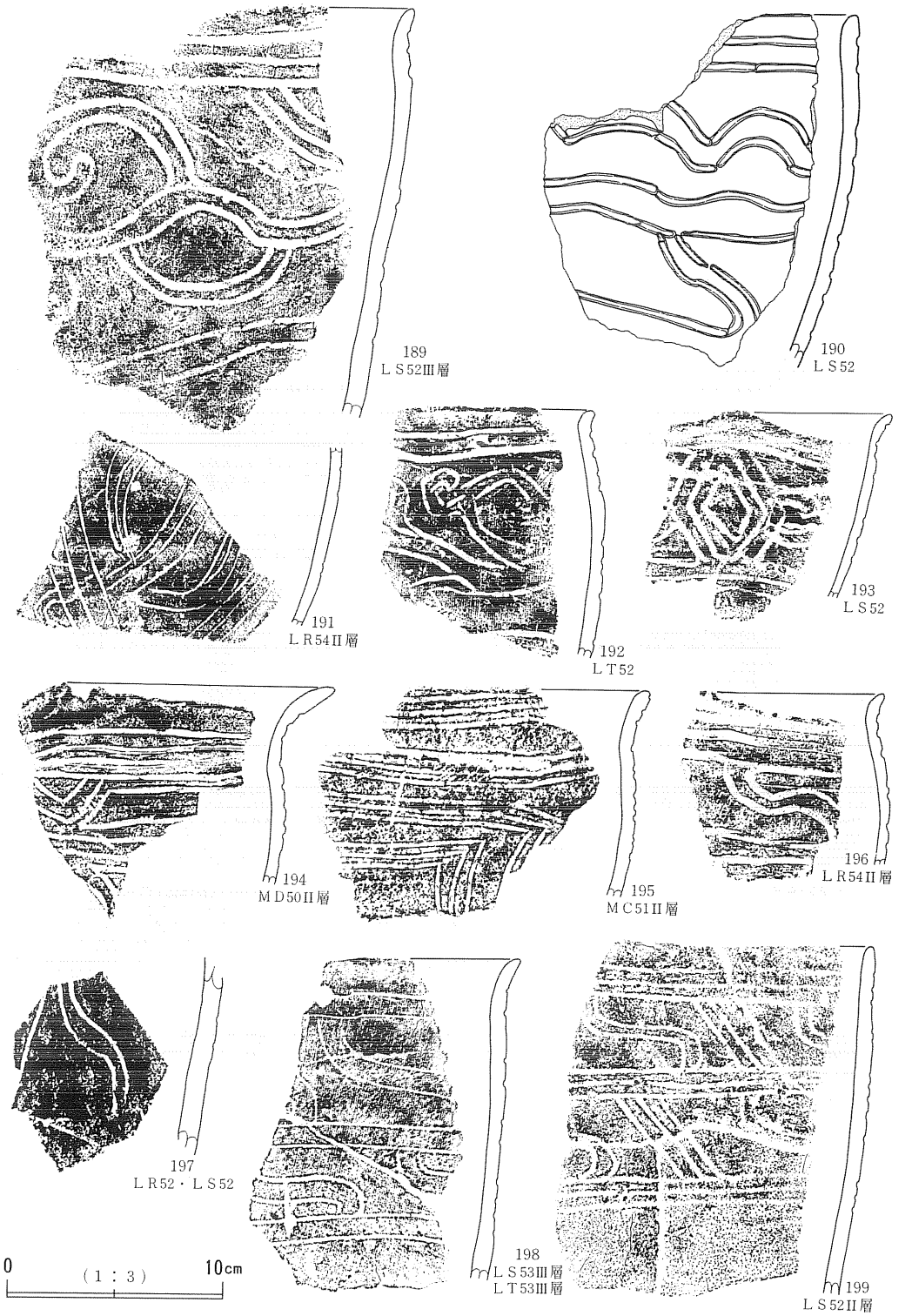
第37図　第Ⅲ群土器


167
ＬＳ52Ⅱ層
168
ＬＳ53Ⅱ層
169
ＬＴ53Ⅲ層
170
ＬＳ53Ⅲ層
171
地点不明
172
ＬＳ53Ⅲ層
173
ＬＳ52Ⅲ層
174
ＬＲ54Ⅱ層
175
ＬＳ52
176
ＬＳ53Ⅱ層
177
ＬＳ51Ⅲ層
178
ＬＳ51Ⅱ層
0
（１：３）
10cm

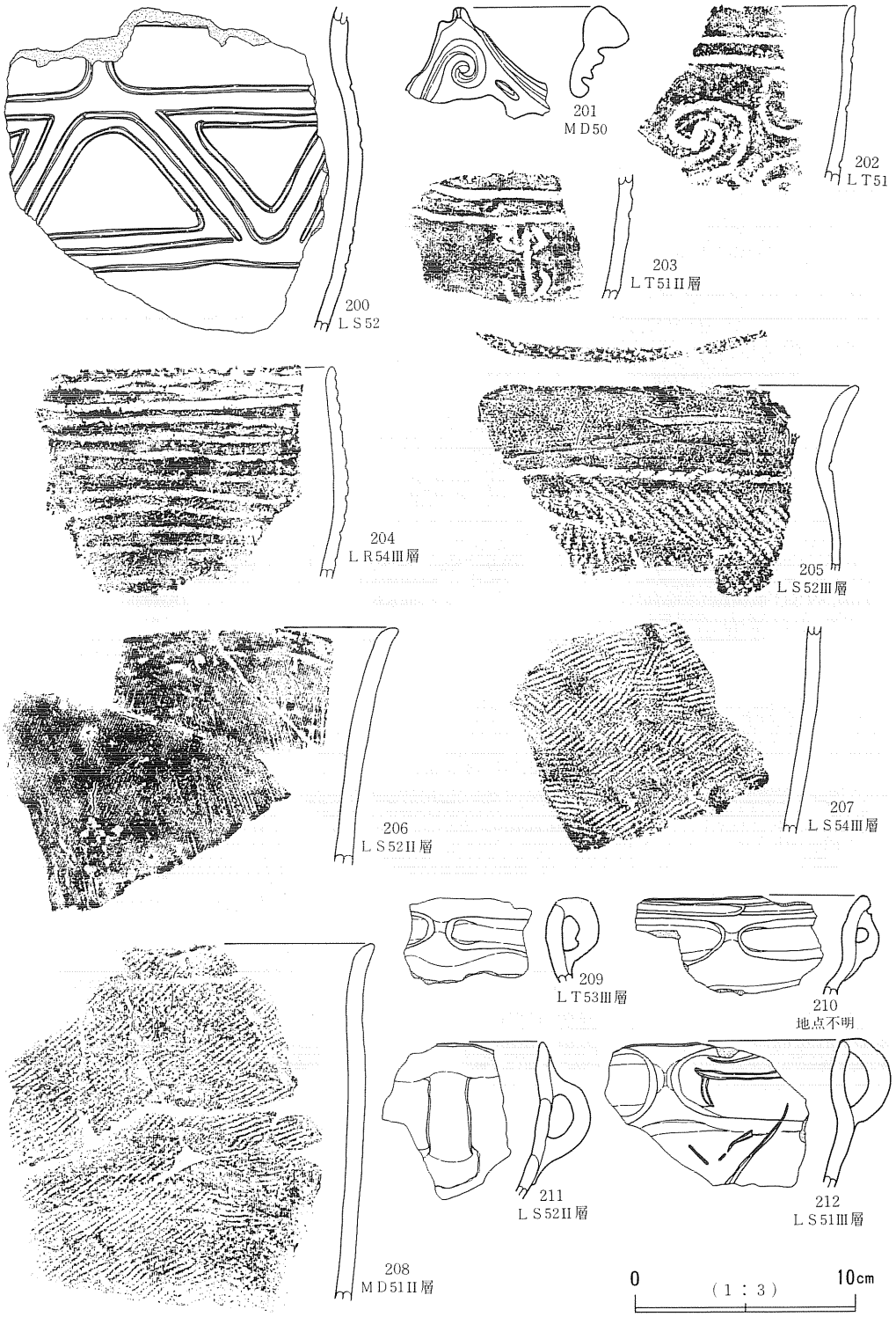
第38図　第Ⅲ群土器


179
L S53II層
180
L S53II層
181
M D50II層
182
L S51II層
183
L S52
184
L S53II層
185
L S52
186
L T53
187
L T53
188
L S53II層
0
(1 : 3)
10cm

第39図　第Ⅲ群土器


189
ＬＳ52Ⅲ層
190
ＬＳ52
191
ＬＲ54Ⅱ層
192
ＬＴ52
193
ＬＳ52
194
ＭＤ50Ⅱ層
195
ＭＣ51Ⅱ層
196
ＬＲ54Ⅱ層
197
ＬＲ52・ＬＳ52
198
ＬＳ53Ⅲ層
ＬＴ53Ⅲ層
199
ＬＳ52Ⅱ層
0
（１：３）
10cm

第40図　第Ⅲ群土器


200
L S 52
201
M D 50
202
L T 51
203
L T 51 II 層
204
L R 54 III 層
205
L S 52 III 層
206
L S 52 II 層
207
L S 54 III 層
208
M D 51 II 層
209
L T 53 III 層
210
地点不明
211
L S 52 II 層
212
L S 51 III 層
0
(1 : 3)
10cm

第41図　第Ⅲ群土器

a．口縁部に撚紐の側面圧痕文が施されるもの（205）。

b．条線又は櫛目状の文様が施されるもの（206）。

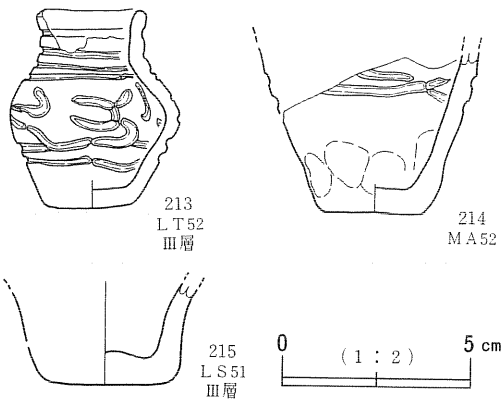
c．地文のみのもの（207・208）。

②把手部の資料である（第41図209～212）。

口唇部から把手が取り付くもの（209・212）とそうでないもの（210・211）がある。

③ミニチュア土器である（第42図）。

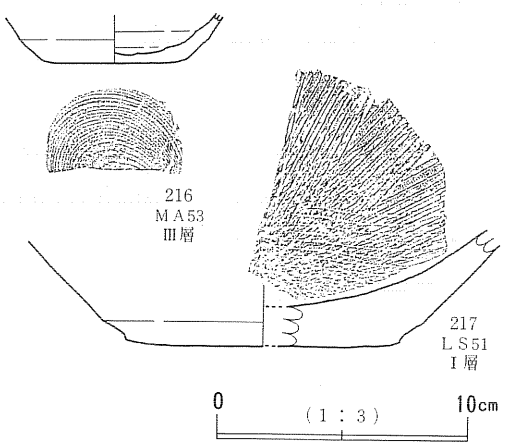
213は器高5.2cm、横走する沈線間に弧状文が施されている。胎土に2～5mmの砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。色調は、にぶい黄橙色(10YR7/3)を呈する。



第42図　ミニチュア土器

第Ⅳ群土器（第43図）

216は土師器坏の底部破片である。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。色調は、外面がにぶい赤褐色(5YR5/4)、内面が浅黄橙色(10YR8/3)を呈する。217は擂鉢の底部破片である。15条1単位の卸し目を施している。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調は、暗赤褐色(2.5YR3/3)を呈する。



第43図　第Ⅳ群土器

(2)土製品

土製品として掲載したものは、土偶、鐸形土製品、土錘、盤状土製品である。出土地点は、いずれもLT,LS,LRラインの遺物が最も集中して出土している部分であり、土器・石器と一緒に出土している。

①土偶（第44図～第46図）

218は目と鼻が抽象的に表現された頭部の資料である。首のつき方から顔を前方に突き出した姿を推測させる。

219～223は腕の部分の資料である。219は背面が平になるように面取りされており、右腕

と推測される。220～222は、上部は欠損しておらず、その横の部分に欠損が認められることから、腕の部分と推測された。いずれも橙色に塗彩されている。222は、断面が円形、空洞の細い工具により一定の間隔に刺突が行われている。223も橙色に塗彩された痕跡が認められ、やや粗いケズリ調整が加えられている。

224は腰の部分の資料と推測され、屈折像土偶の可能性が考えられるものである。

225は脚部の資料であり、立ててみるとO脚である。縦方向のケズリ調整を行い、欠損部付近の正面から内側にかけて2条の沈線が施されている。欠損部にはアスファルトが付着している。

226～232は、胴部を中心とする資料である。226の胎土には石英、雲母の混入が認められる。227は腕が短く完結しており、肩のあたりに紐を通したと思われる貫通孔が認められる。頭部は胴部と一体としてはつくらず、その代わりにくぼみだけを設けている。そのくぼみの部分にアスファルトが付着していることから、別につくった頭部をくぼみに接着したものと推測される。また、胴部の欠損面をみると、焼成前についたと推測される溝状のくぼみが観察された。228は、首の部分が前面に伸びていることから、218と同じように顔が前に突き出た土偶が想像される。また、228は219と同一個体と推測される。231は細い沈線により文様が描かれており、背面は三角形状にくぼみが認められる。欠損面をみると、227と同様に焼成前についたと考えられる円形ないし楕円形のくぼみが観察される。232は223と同一個体であり、橙色に塗彩された痕跡が認められる。腹面と背面に2ないし3本一組の沈線により「X」字状の文様が描かれ、沈線間に縄文(RL)が充塡されている。肩の部分に227と同じような貫通孔が認められる。

②鐸形土製品（第47図）

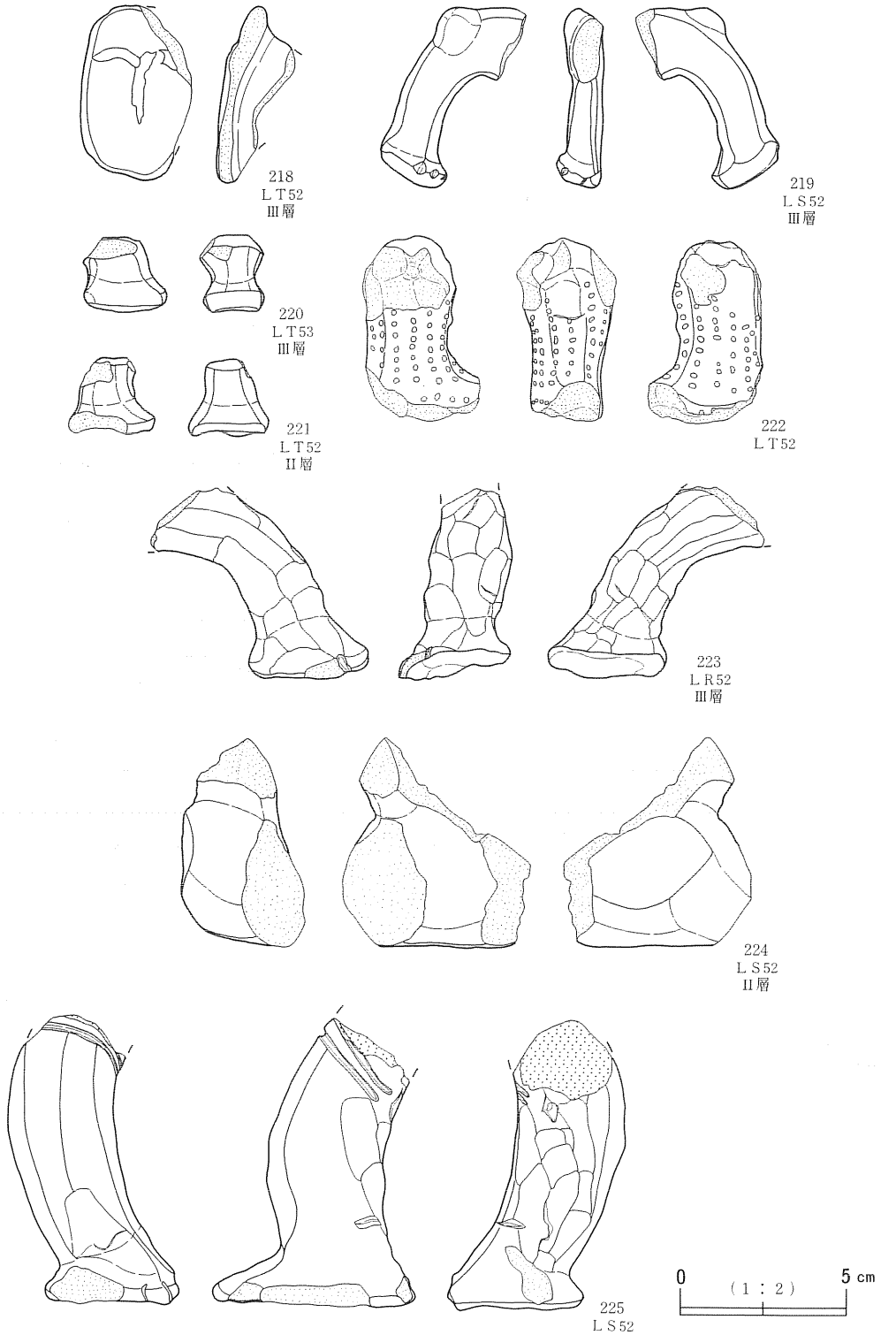
234・235いずれも鰭状の突帯を有し、234には穿孔しようとした痕跡が両側に認められる。235にはローマ数字の「X」状の文様が施され、下底に近い両側に貫通孔が穿たれている。236は235同様下底に近い両側に貫通孔が認められる。内面には煤状炭化物が付着している。

③土錘（第47図237）

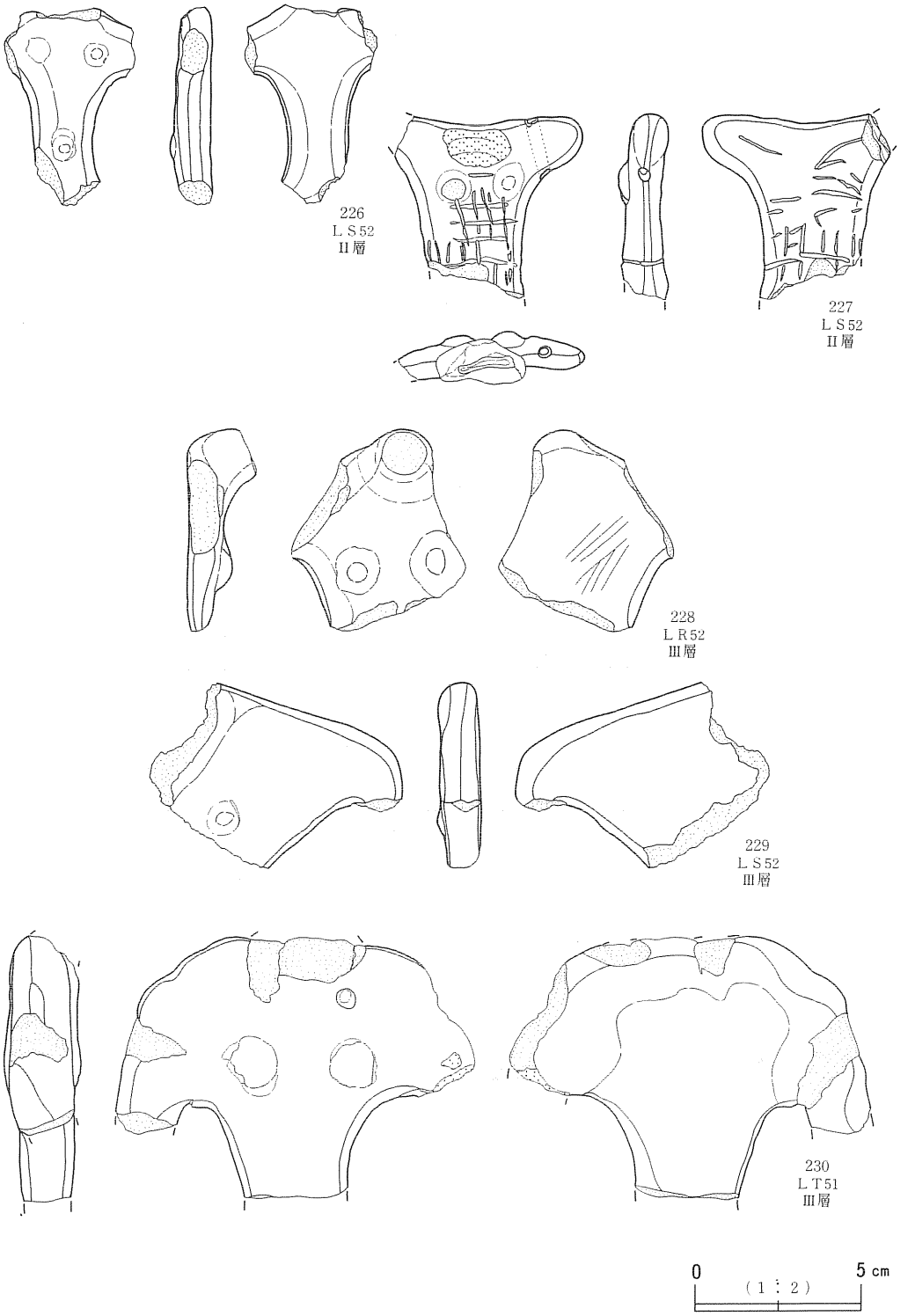
1点のみの出土である。胎土に5mmぐらいの砂粒を少量含む。焼成は普通である。

④盤状土製品（第47図238～243）

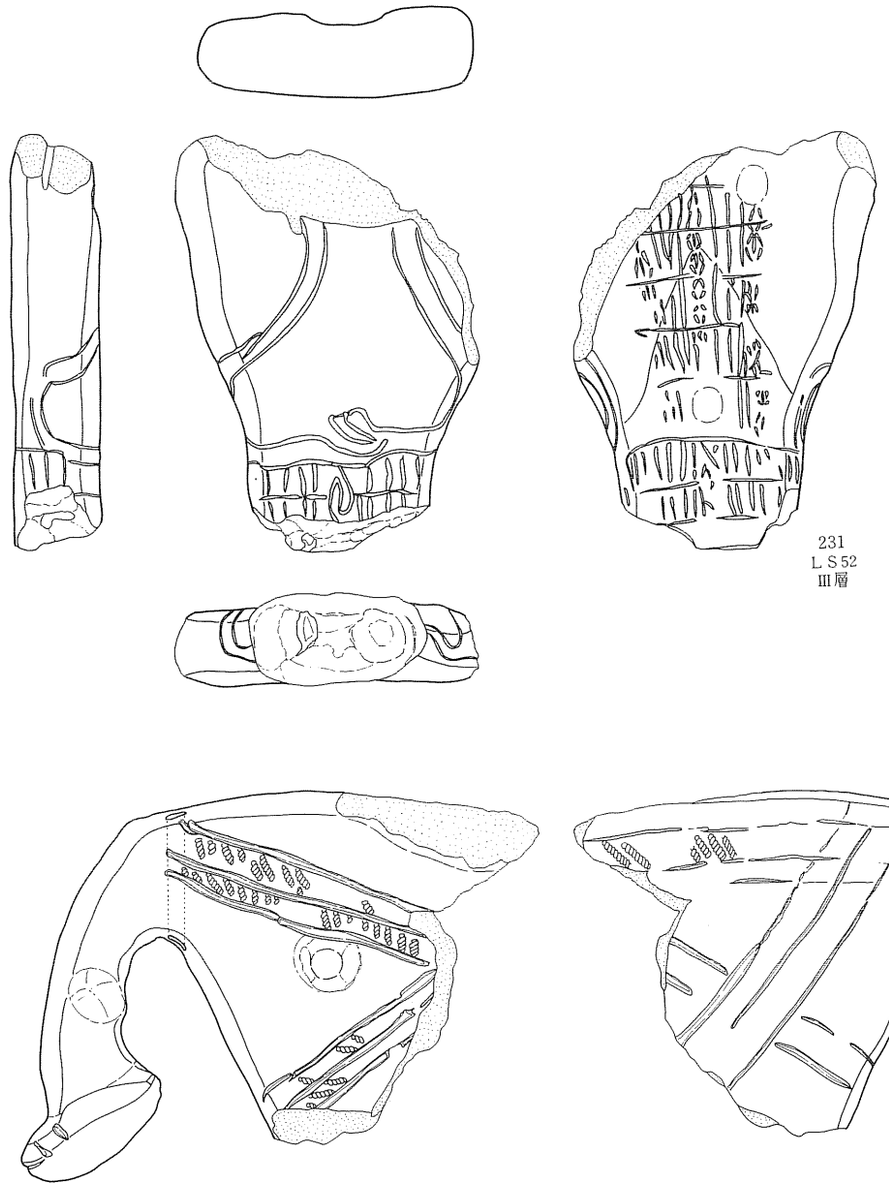
239は朱が塗彩された土器破片、240は土器底部破片を転用したものである。


218
ＬＴ52
Ⅲ層
219
ＬＳ52
Ⅲ層
220
ＬＴ53
Ⅲ層
221
ＬＴ52
Ⅱ層
222
ＬＴ52
223
ＬＲ52
Ⅲ層
224
ＬＳ52
Ⅱ層
225
ＬＳ52
0
（１：２）
5 cm

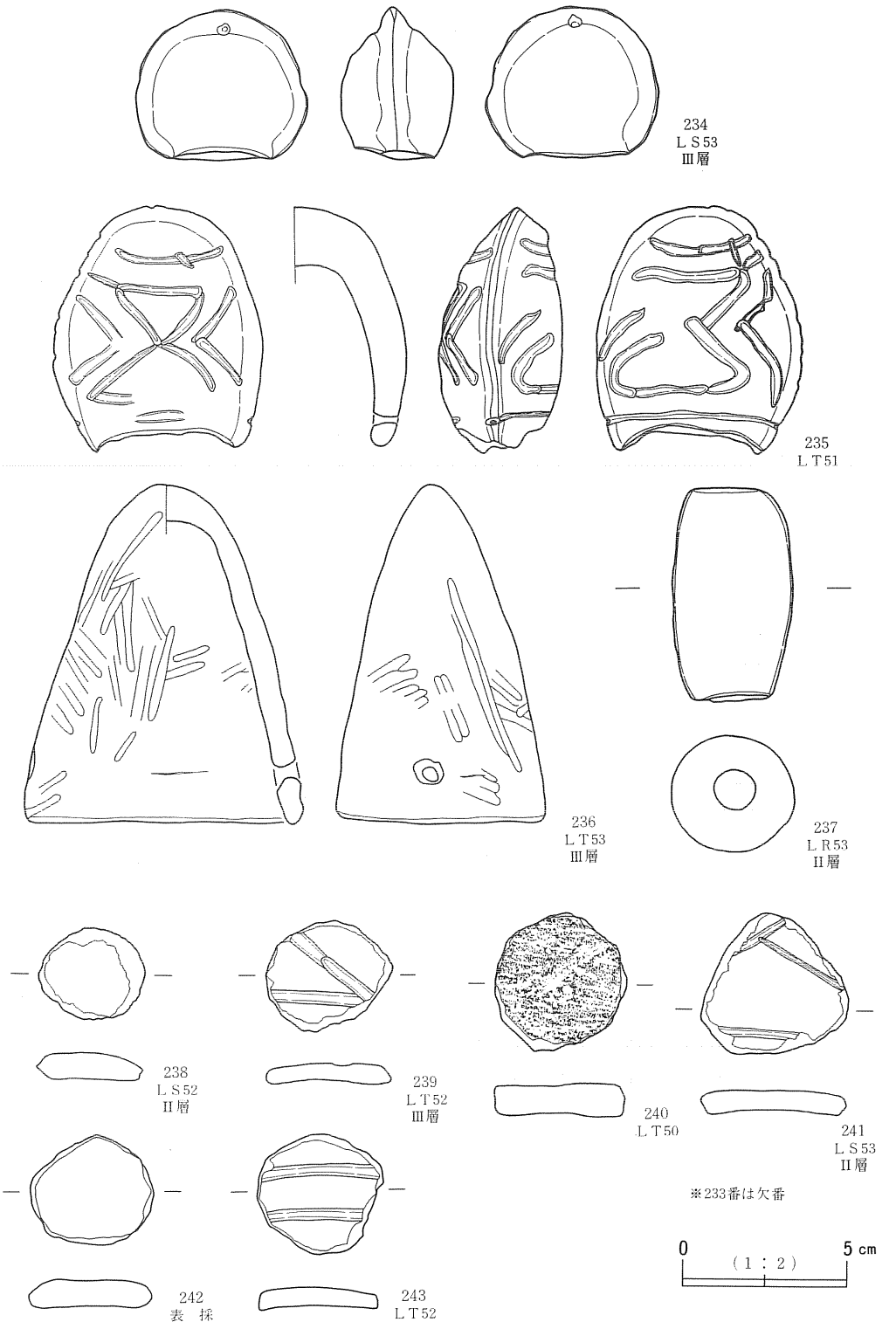
第44図　土製品（１）－土偶


226
L S52
II層
227
L S52
II層
228
L R52
III層
229
L S52
III層
230
L T51
III層
0
5 cm
（1：2）

第45図　土製品（2）－土偶



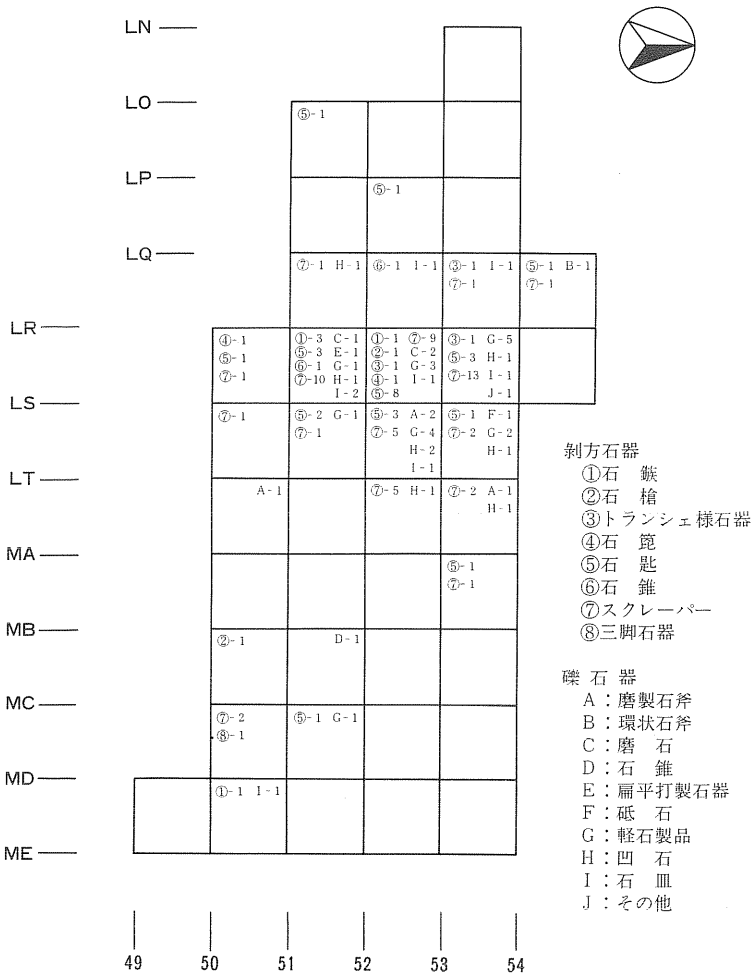
第46図　土製品（３）－土偶



第47図　土製品（４）－鐸形土製品・土錘・盤状土製品

2．石器

出土した石器は、剥片石器96点、礫石器48点、その他剥片がコンテナ１箱である。出土地点は、LS52グリッドを中心とする沢の中からほとんどのものが出土している。以下に剥片石器と礫石器とに分けて記述する。



第48図　グリッド別石器出土状況

(1)剥片石器

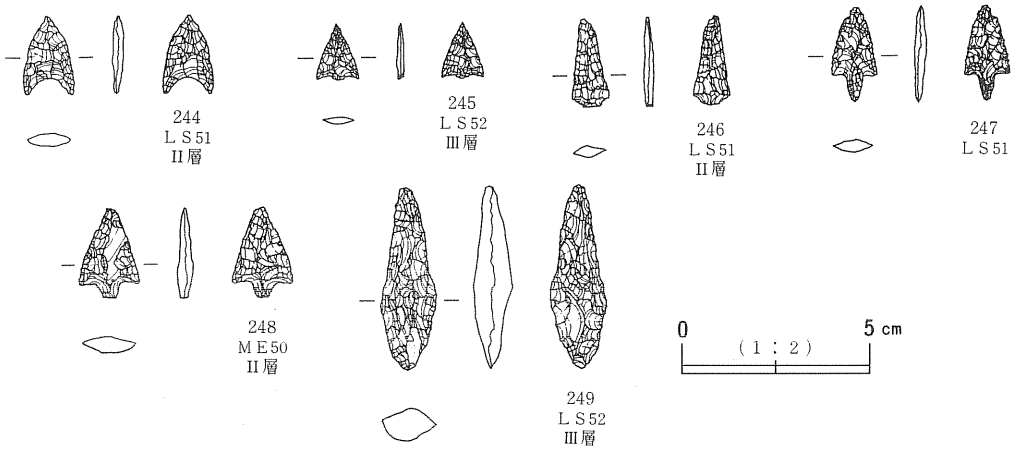
①石鏃（第49図244～248）　無茎のもの（244）と有茎のもの（245～248）がある。無茎のものは、基部に抉入がある。有茎のものは、基部に抉入があるもの（245）、基部が直線的なもの（247・248）、基部が突出ぎみのもの（246）がある。244を除き、いずれも基部または先端部付近に欠失部分が認められる。

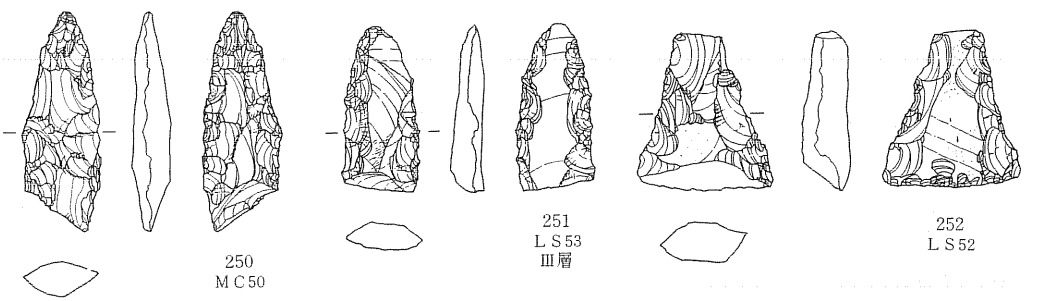
②石槍（第49図249・250）　いずれも柳葉形を呈し、全面に調整が加えられている。

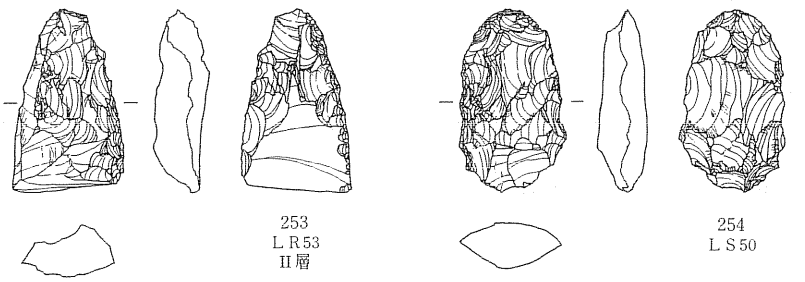
③トランシェ様石器（第49図251～253）　腹面及び背面に第一次加工面を残し、かつ刃部に第二次加工が施されないものである。ここに掲載したものは、縦長剥片を用いている。形態の上では、二等辺三角形状を呈し側縁にふくらみをもつもの（251・253）、撥形を呈し側縁がくびれるもの（252）に分けられる。

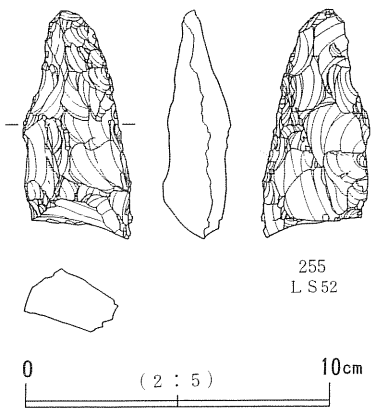
④石篦（第49図254・255）　楕円形に近い形態のもの（254）と頭部から刃部にかけて開く形態のもの（255）がある。

⑤石匙（第50図256～第52図283）　縦形のもの（256～274）と横形のもの（275～283）に分









番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
244	ＬＳ51	石鏃	2.1	1.4	0.3	0.71	頁岩
245	ＬＳ52	〃	1.5	1.1	0.2	0.23	玉髄
246	ＬＳ51	〃	2.3	1.0	0.3	0.57	安山岩
247	ＬＳ51	〃	2.5	1.2	0.3	0.69	頁岩
248	ＭＥ50	〃	2.4	1.4	0.4	1.17	玉髄
249	ＬＳ52	〃	4.8	1.4	1.0	5.07	頁岩
250	ＭＣ50	石槍	7.3	2.6	1.4	20.6	〃
251	ＬＳ53	トランシェ様石器	5.5	2.6	1.0	13.9	〃
252	ＬＳ52	〃	5.2	4.5	1.5	33.0	〃
253	ＬＲ53	〃	6.1	3.6	1.6	36.6	〃
254	ＬＳ50	石匙	6.0	3.6	1.6	35.5	〃
255	ＬＳ52	〃	7.6	3.6	2.1	44.7	〃

第49図　出土石器（１）

けられる。調整を施す部位は端部又は側縁であるが、259は背面のほぼ全面に調整が施されている。265のつまみ部は、石錐としても使用された可能性がある。つまみと腹面のバルブの位置は一致する場合が多いが、そうでないものもある。260・271はバルブが端部にあり、262・273はつまみの横に認められる。その場合には、つまみ部の厚みがなく貧弱になる。取り出した剥片の形状をうまく利用し、つまみをつくり出し易い部位を選んでいるものと推測される。279・283のつまみの部分にはアスファルトが付着している。

⑥石錐（第52図284） 逆三角形状の剥片の端部の両面に調整を施し、断面が三角形の錐部をつくり出している。

⑦スクレーパー（第53図285～第58図338） 刃部の形成される部位により分類される。

A類 腹面の縁辺に調整を行い刃部を形成するもの（285～292）。

B類 B1類 背面の縁辺に調整を行い刃部を形成するもの（293～319）。

B2類 背面全体に調整を行うもの（320）。

AB類 腹面と背面にそれぞれ調整を行い刃部を形成するもの（321～324）。

C類 両面から調整を行い刃部を形成するもの（325～338）。

B1類の中の294・298～301については、長方形の剥片の端部から側縁にかけて刃部が形成されている。

⑧三脚様石器（第58図339） 三脚状の形態の石器であり、1点のみ出土した。表面と裏面に自然面を残す。

［礫石器］

①磨製石斧（第59図340～343） 340～342の断面は隅丸方形を呈するものであり、両側縁が良く研磨されている。340の頭部については、ほとんど研磨されていない。

②環状石斧（第59図344） 表面は円盤状の礫の自然面をそのまま留め、裏面は偏平になるように打ち欠き鈍い刃部をつくり出している。中心に貫通孔をもつ。

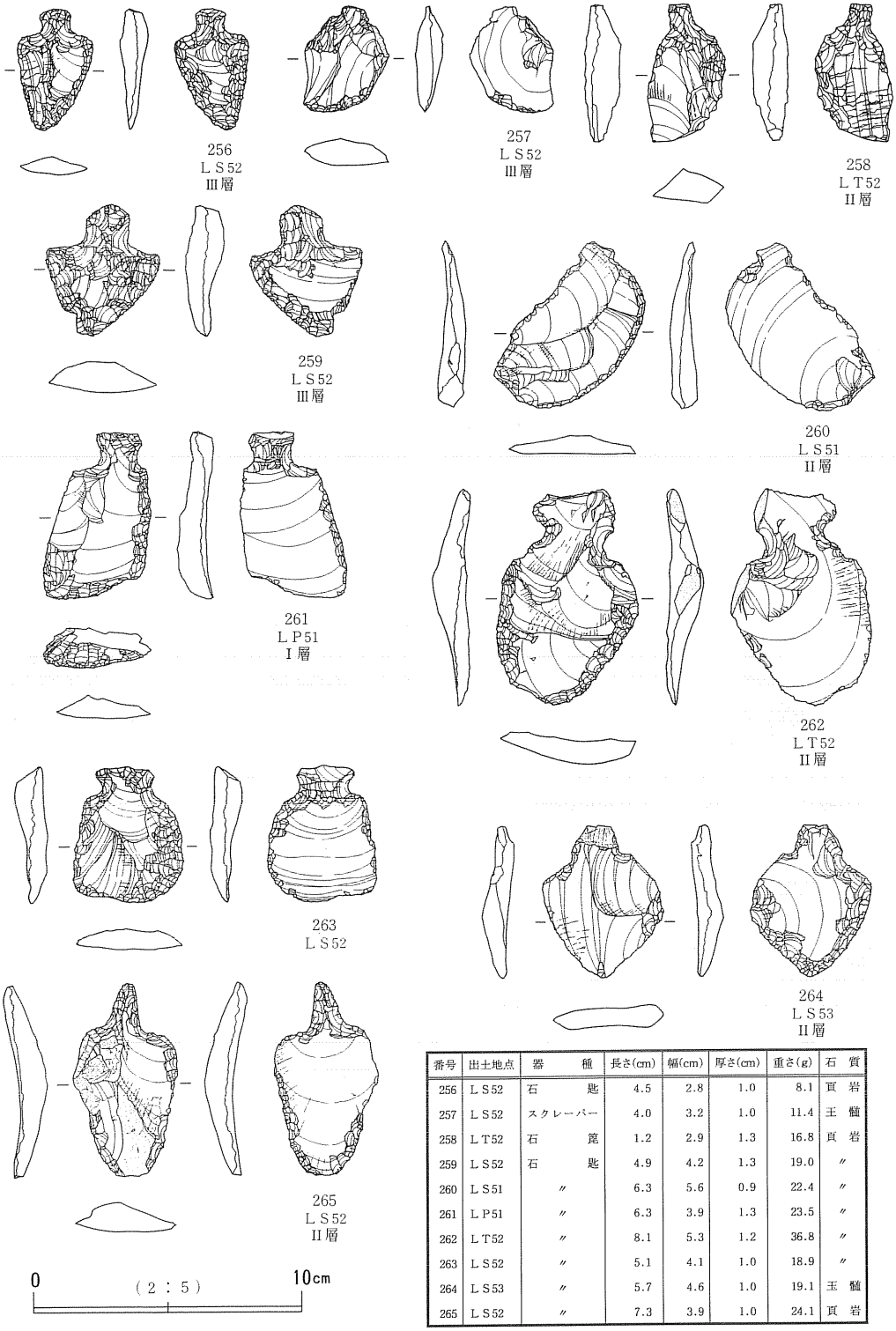
③磨石（第60図345～347） 346は最終的にそのような形状にすることを意図したものかもしれない。亀裂が入り、脆くなっている。

④石錘（第60図348） 扁平な円礫の両端を打ち欠いたもので、1点のみの出土である。

⑤砥石（第60図349） 平らな面に置くと安定しないが、掌に入れた場合しっくりくるような形状である。

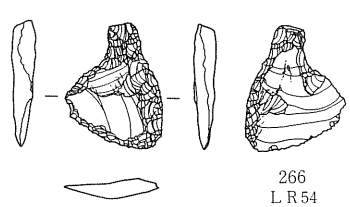
⑥扁平打製石器（第60図350） 扁平な礫の両面に調整を施したもので、1点のみの出土である。

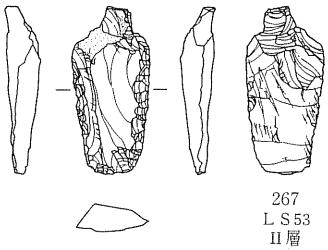
⑦軽石製品等（第61図～第64図369） 軽石に加工を加えたものであるが、石器か石製品か区別ができなかったものである。このため便宜上、軽石製品等としてここに掲載した。その分

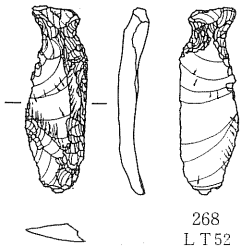


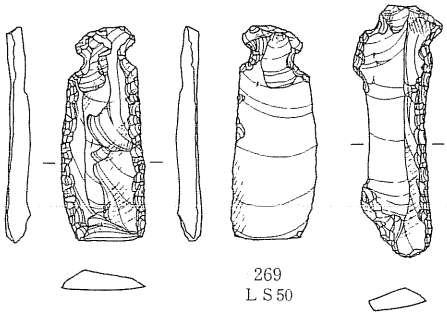
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
256	ＬＳ52	石匙	4.5	2.8	1.0	8.1	頁岩
257	ＬＳ52	スクレーパー	4.0	3.2	1.0	11.4	玉髄
258	ＬＴ52	石篦	1.2	2.9	1.3	16.8	頁岩
259	ＬＳ52	石匙	4.9	4.2	1.3	19.0	〃
260	ＬＳ51	〃	6.3	5.6	0.9	22.4	〃
261	ＬＰ51	〃	6.3	3.9	1.3	23.5	〃
262	ＬＴ52	〃	8.1	5.3	1.2	36.8	〃
263	ＬＳ52	〃	5.1	4.1	1.0	18.9	〃
264	ＬＳ53	〃	5.7	4.6	1.0	19.1	玉髄
265	ＬＳ52	〃	7.3	3.9	1.0	24.1	頁岩

第50図　出土石器（２）

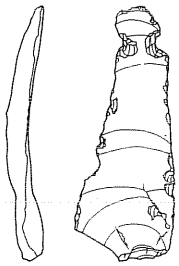

266
L R54
II層

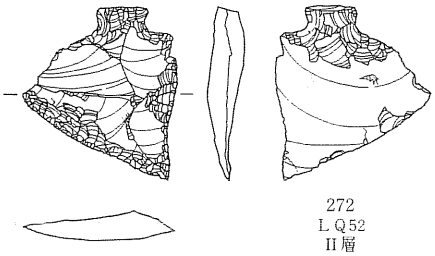

267
L S53
II層

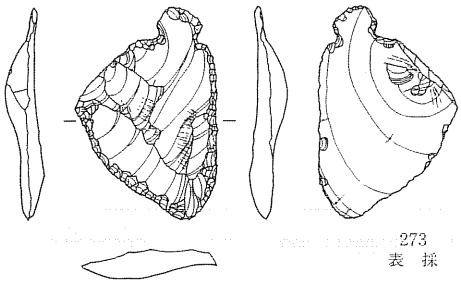

268
L T52
II層


269
L S50

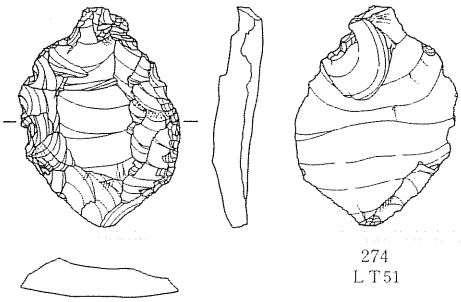
270
L S51
II層

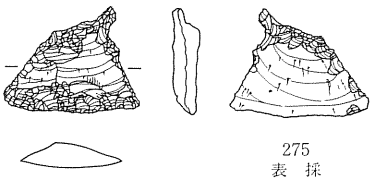

271
L S53
II層


272
L Q52
II層


273
表　採

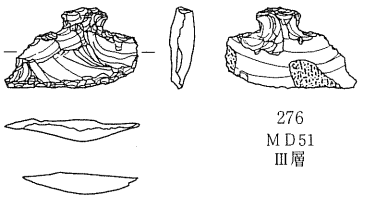
0　（2：5）　10cm


274
L T51

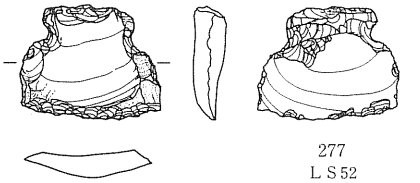

275
表　採

番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
266	L R54	石　匙	4.2	3.3	0.7	7.3	頁　岩
267	L S53	〃	9.5	2.6	1.1	13.9	玉　髄
268	L T52	〃	6.2	2.0	0.8	8.1	頁　岩
269	L S50	〃	7.1	2.8	0.8	15.6	〃
270	L S51	〃	9.3	2.9	0.9	17.7	〃
271	L S53	〃	8.5	3.3	0.7	19.1	〃
272	L Q52	〃	5.7	5.1	1.1	22.3	〃
273	表採	〃	7.0	4.6	1.0	23.1	玉　髄
274	L T51	〃	7.3	5.3	1.3	46.8	頁　岩
275	表採	〃	1.5	4.6	0.8	9.5	〃

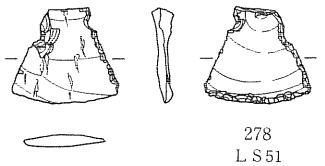
第51図　出土石器（3）



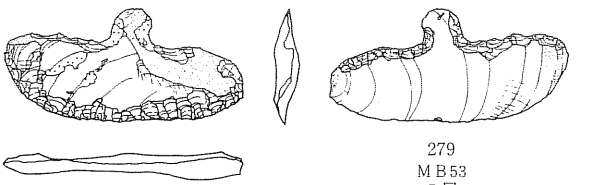
276
ＭＤ51
Ⅲ層



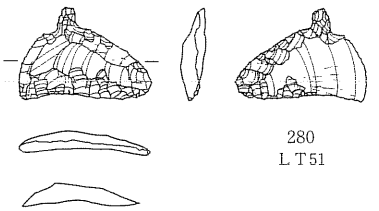
277
ＬＳ52



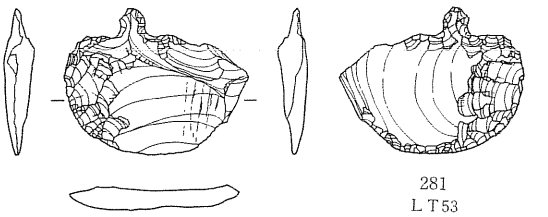
278
ＬＳ51
Ⅲ層



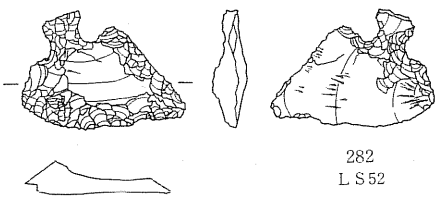
279
ＭＢ53
Ⅰ層



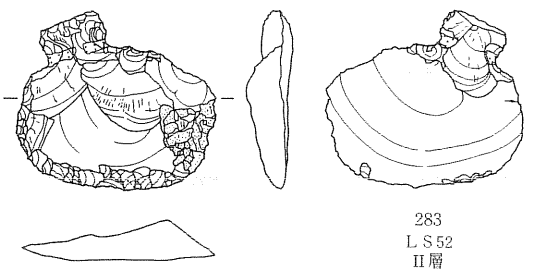
280
ＬＴ51



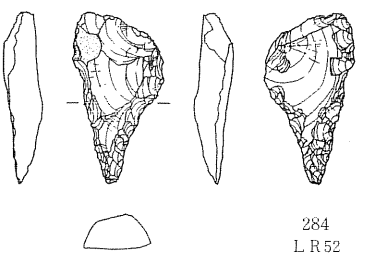
281
ＬＴ53
Ⅲ層



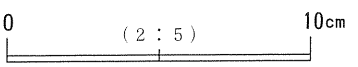
282
ＬＳ52



283
ＬＳ52
Ⅱ層

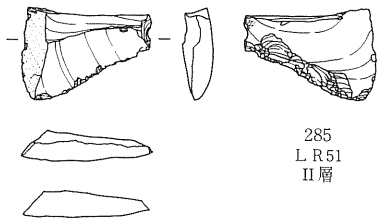


284
ＬＲ52
Ⅱ層

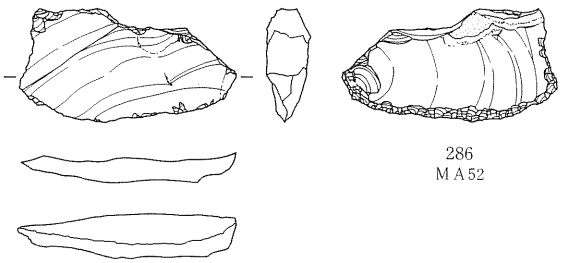


番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
276	ＭＤ51	石匙	2.7	4.4	0.8	6.1	玉髄
277	ＬＳ52	〃	3.8	4.6	1.0	17.2	頁岩
278	ＬＳ51	〃	3.1	3.6	0.7	5.0	玉髄
279	ＭＢ53	〃	3.8	7.8	0.9	17.9	頁岩
280	ＬＴ51	〃	3.1	4.3	0.8	6.2	〃
281	ＬＴ53	〃	4.7	6.1	0.9	21.2	〃
282	ＬＳ52	〃	3.9	5.5	1.1	12.2	〃
283	ＬＳ52	〃	5.9	6.5	1.4	41.1	〃
284	ＬＲ52	石錐	5.6	3.0	1.1	17.5	〃

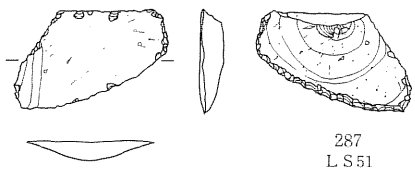
第52図　出土石器（４）



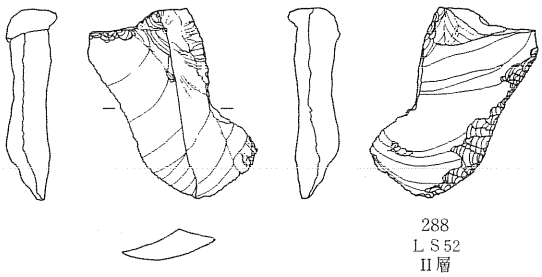
285
L R51
II層



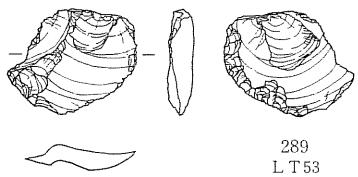
286
M A52



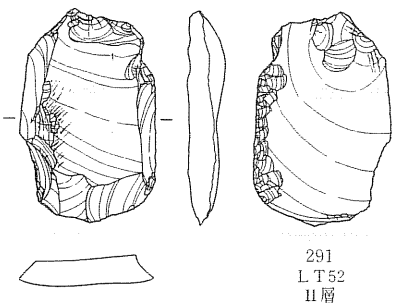
287
L S51
II層



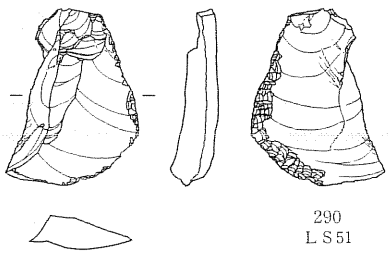
288
L S52
II層



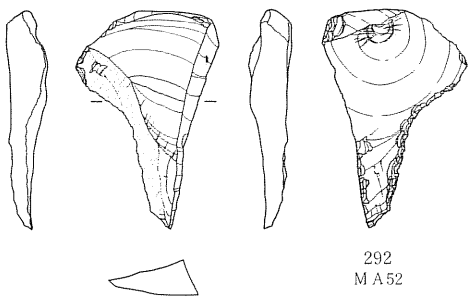
289
L T53



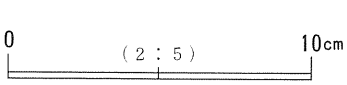
291
L T52
II層



290
L S51

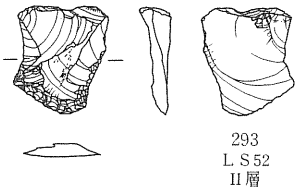


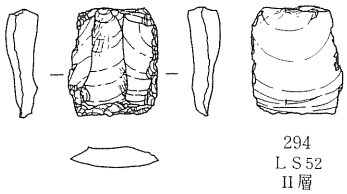
292
M A52

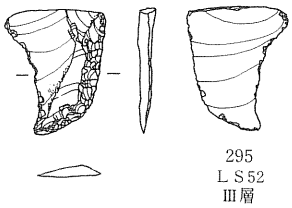


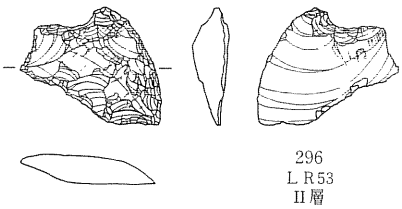
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
285	L R51	スクレーパー	3.0	4.4	1.0	11.3	頁岩
286	M A52	〃	3.8	7.1	1.5	34.0	〃
287	L S51	〃	3.5	5.1	0.8	10.6	〃
288	L S52	〃	3.5	4.3	0.8	10.4	〃
289	L T53	〃	6.3	5.5	1.4	22.6	〃
290	L S51	〃	5.8	4.3	1.3	23.4	〃
291	L T52	〃	7.1	4.5	1.2	41.1	〃
292	M A52	〃	7.2	4.8	1.2	25.3	〃

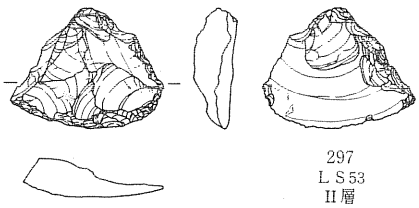
第53図　出土石器（5）

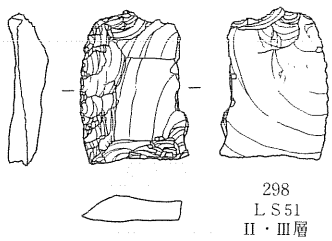

293
ＬＳ52
Ⅱ層

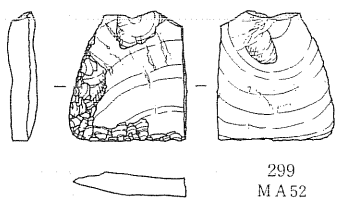

294
ＬＳ52
Ⅱ層

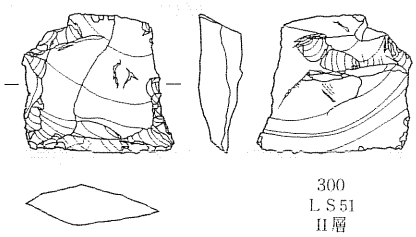

295
ＬＳ52
Ⅲ層

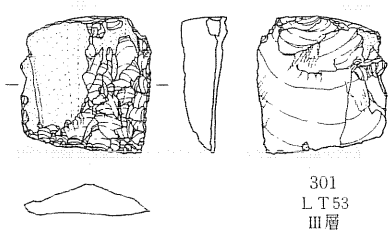

296
ＬＲ53
Ⅱ層

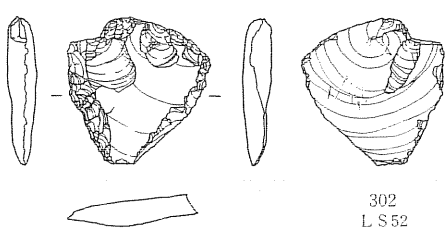

297
ＬＳ53
Ⅱ層

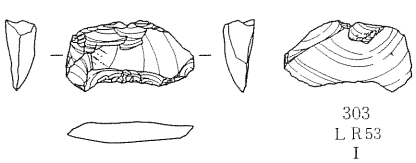

298
ＬＳ51
Ⅱ・Ⅲ層

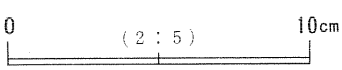

299
ＭＡ52
Ⅲ層


300
ＬＳ51
Ⅱ層


301
ＬＴ53
Ⅲ層

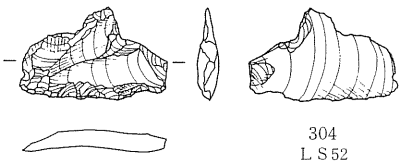

302
ＬＳ52
Ⅱ層


303
ＬＲ53
Ⅰ

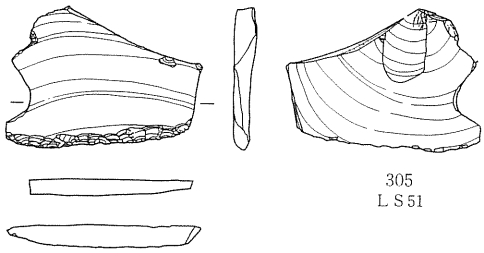


番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
293	ＬＳ52	スクレーパー	5.5	3.1	0.9	7.1	頁　岩
294	ＬＳ52	〃	3.5	3.0	1.0	11.1	〃
295	ＬＳ52	〃	4.1	3.3	0.5	5.4	〃
296	ＬＳ53	〃	3.8	4.6	1.1	14.2	〃
297	ＬＳ53	〃	4.0	5.0	1.3	20.6	玉　髄
298	ＬＳ51	〃	5.1	3.6	1.0	21.9	〃
299	ＭＡ52	〃	4.3	3.9	0.8	16.7	頁　岩
300	ＬＳ51	〃	4.6	5.2	1.4	29.2	〃
301	ＬＴ53	〃	4.5	4.3	1.3	26.0	〃
302	ＬＳ52	〃	4.9	4.7	1.0	20.8	〃
303	ＬＲ53	〃	2.4	4.1	1.0	8.7	〃

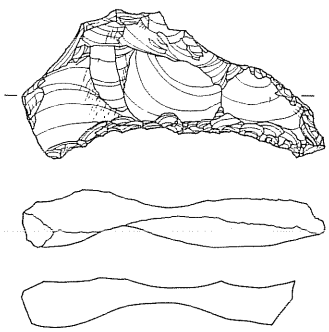
第54図　出土石器（６）

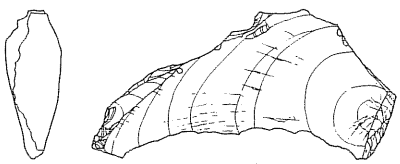


304
LS52



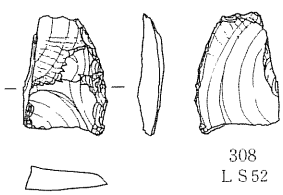
305
LS51



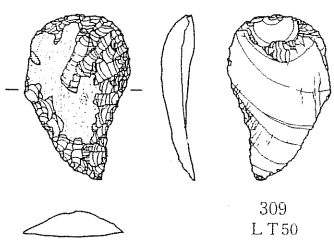


306
MD50
II層

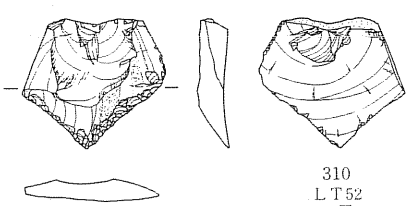
307
LS53
II層



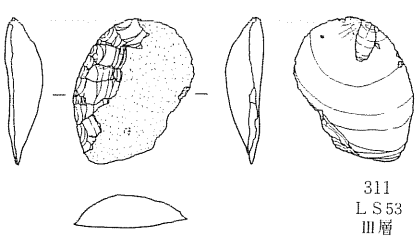
308
LS52



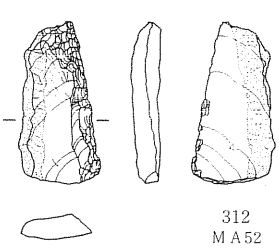
309
LT50



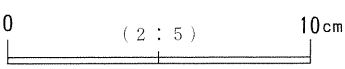
310
LT52
II層



311
LS53
III層

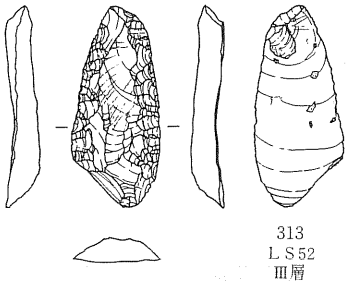


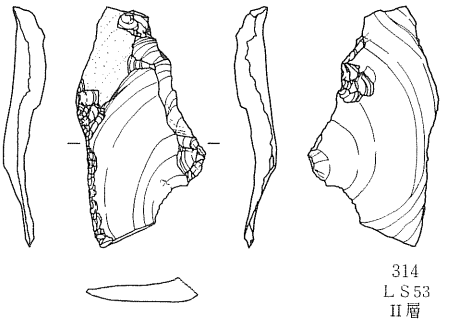
312
MA52

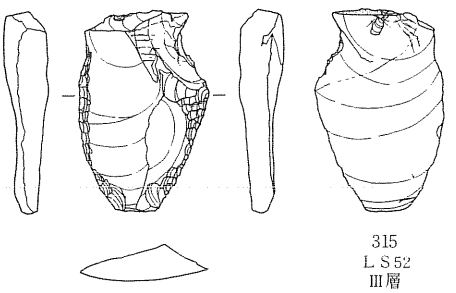


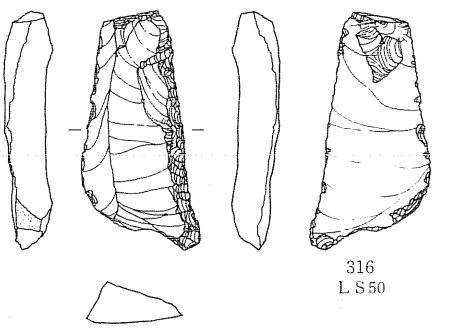
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
304	LS52	スクレーパー	3.1	4.9	0.7	6.3	頁岩
305	LS51	〃	4.7	6.4	0.7	21.0	〃
306	MD50	〃	4.9	10.0	1.9	62.0	〃
307	LS53	〃	3.6	2.3	0.9	4.7	〃
308	LS52	〃	4.0	2.8	0.7	8.7	泥岩
309	LT50	〃	5.5	3.5	1.0	15.9	頁岩
310	LT52	〃	4.2	4.8	0.8	14.9	〃
311	LS53	〃	4.8	4.0	1.2	19.3	〃
312	MA52	〃	5.4	2.7	0.9	13.2	〃

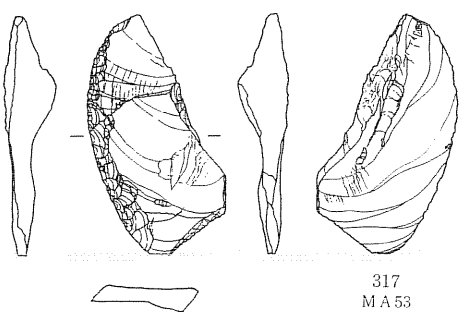
第55図　出土石器（7）

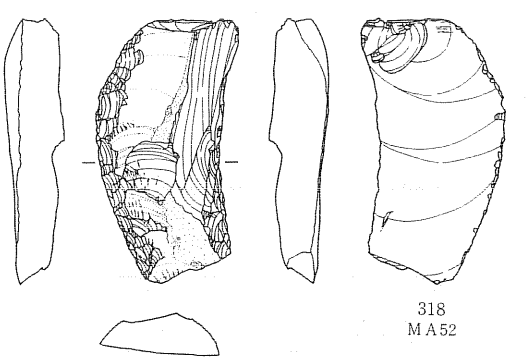

313
ＬＳ52
Ⅲ層

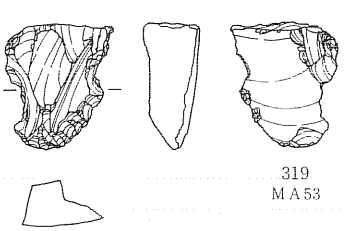

314
ＬＳ53
Ⅱ層

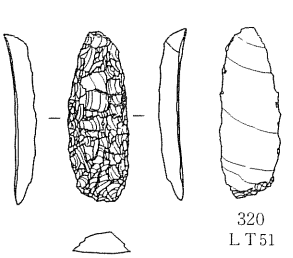

315
ＬＳ52
Ⅲ層

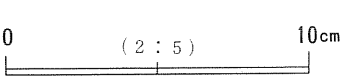

316
ＬＳ50


317
ＭＡ53


318
ＭＡ52

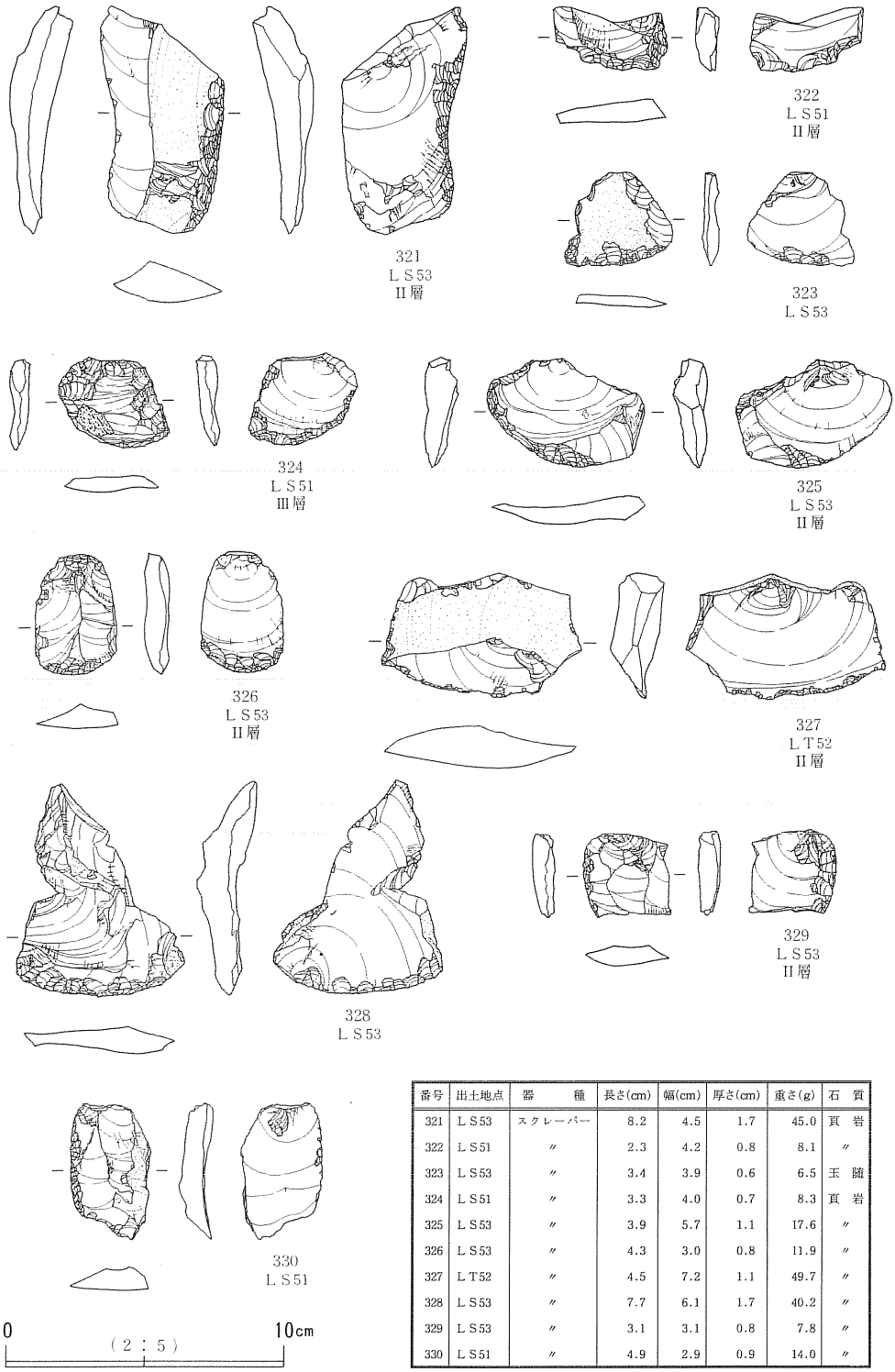

319
ＭＡ53


320
ＬＴ51



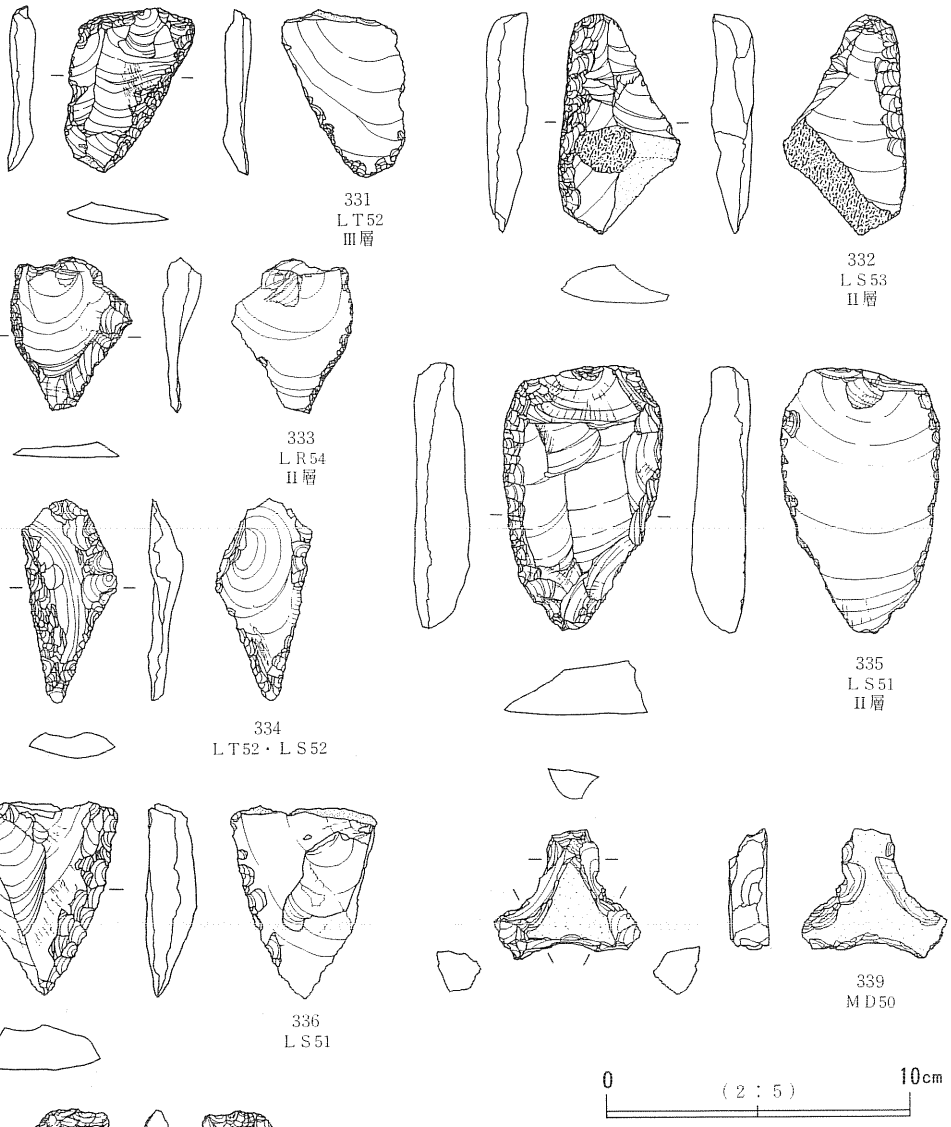
番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
313	ＬＳ52	スクレーパー	6.6	3.0	1.0	18.3	玉　髄
314	ＬＳ53	〃	7.9	4.4	1.0	24.3	頁　岩
315	ＬＳ52	〃	6.6	4.3	1.4	28.5	〃
316	ＬＳ50	〃	7.9	4.0	1.5	43.9	〃
317	ＭＡ53	〃	7.9	4.6	1.7	29.3	〃
318	ＭＡ52	〃	8.8	4.8	1.8	73.5	〃
319	ＭＡ53	〃	4.2	4.6	1.8	23.9	頁　岩
320	ＬＴ51	〃	5.6	2.0	0.6	9.4	〃

第56図　出土石器（８）



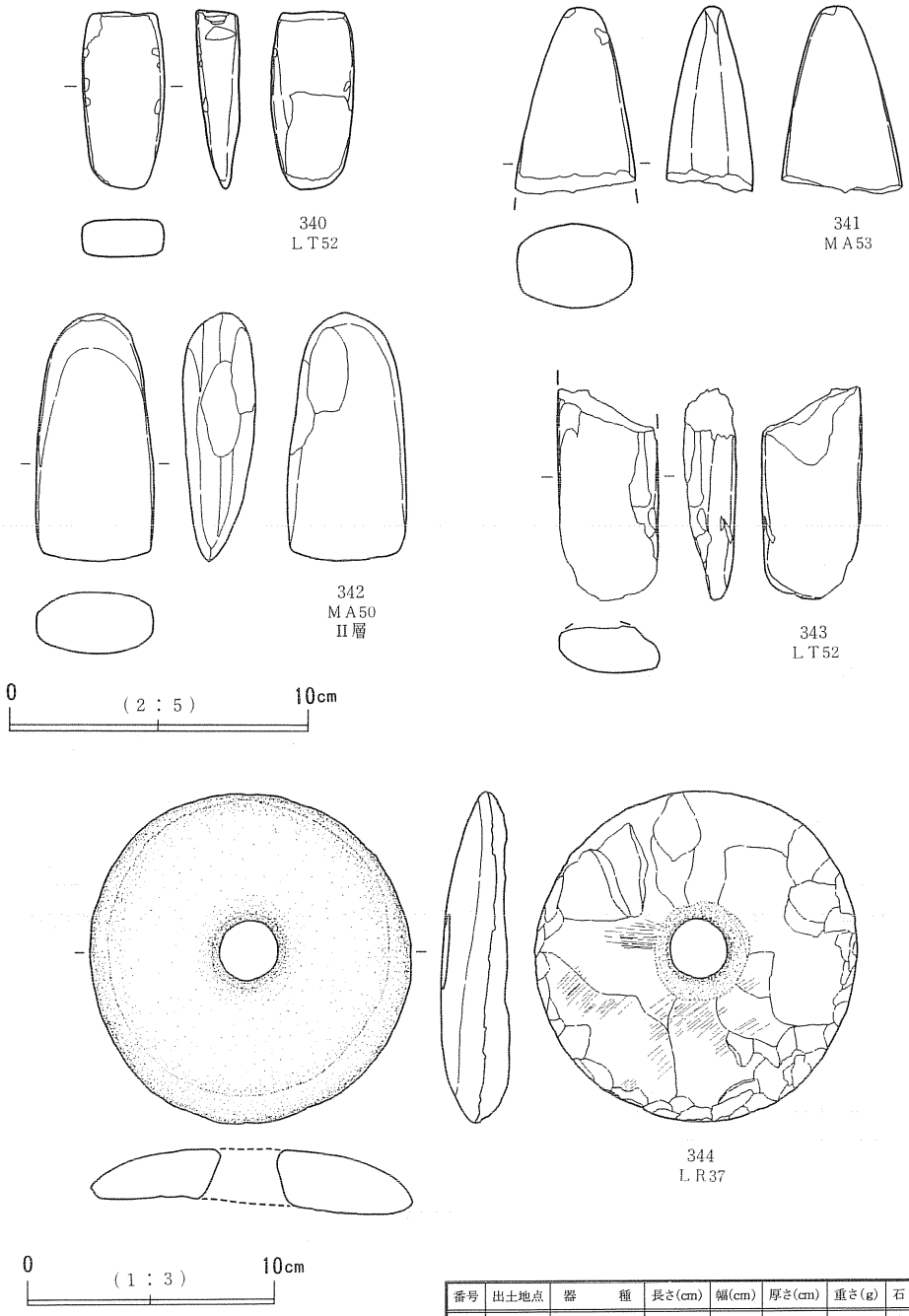
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
321	L S53	スクレーパー	8.2	4.5	1.7	45.0	頁岩
322	L S51	〃	2.3	4.2	0.8	8.1	〃
323	L S53	〃	3.4	3.9	0.6	6.5	玉髄
324	L S51	〃	3.3	4.0	0.7	8.3	頁岩
325	L S53	〃	3.9	5.7	1.1	17.6	〃
326	L S53	〃	4.3	3.0	0.8	11.9	〃
327	L T52	〃	4.5	7.2	1.1	49.7	〃
328	L S53	〃	7.7	6.1	1.7	40.2	〃
329	L S53	〃	3.1	3.1	0.8	7.8	〃
330	L S51	〃	4.9	2.9	0.9	14.0	〃

第57図　出土石器（9）



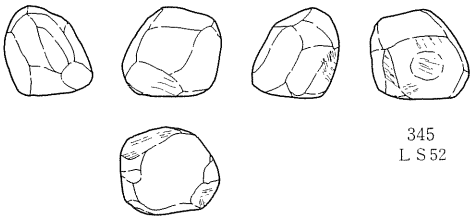
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
331	LT52	スクレーパー	5.5	4.2	0.8	14.3	頁岩
332	LS53	〃	7.3	4.1	1.3	31.7	〃
333	LR54	〃	5.1	4.0	1.2	12.5	〃
334	LT52・LS52	〃	6.7	3.2	1.1	14.2	玉髄
335	LS51	〃	8.8	5.2	1.8	90.3	頁岩
336	LS51	〃	6.4	4.8	1.7	42.9	〃
337	LS53	〃	2.4	3.1	0.8	6.5	〃
338	MD50	〃	4.0	2.4	0.9	9.8	〃
339	MD50	三脚石器	4.3	4.8	1.4	19.4	〃

第58図　出土石器（10）

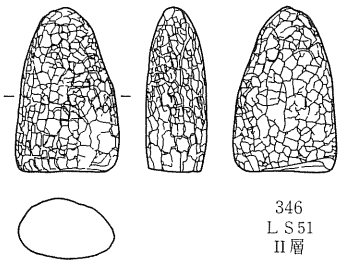


番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
340	L T52	磨製石斧	6.0	2.8	1.3	40.3	片岩
341	M A53	〃	6.3	4.0	2.8	88.4	流紋岩
342	M A50	〃	8.3	4.0	2.4	123.0	凝灰岩
343	L T52	〃	8.5	3.9	2.0	86.7	〃
344	L R37	環状石斧	13.3	12.9	2.7	571.8	安山岩

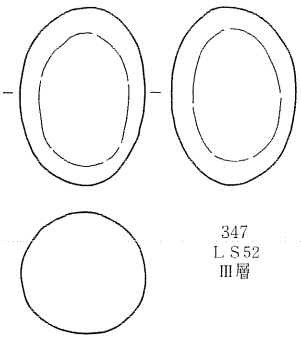
第59図　出土石器（11）



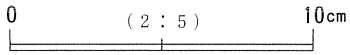
345
ＬＳ52



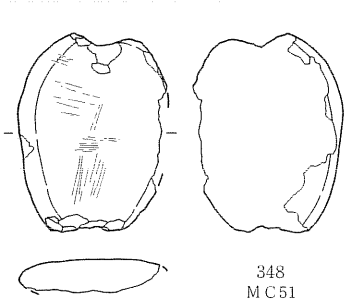
346
ＬＳ51
II層



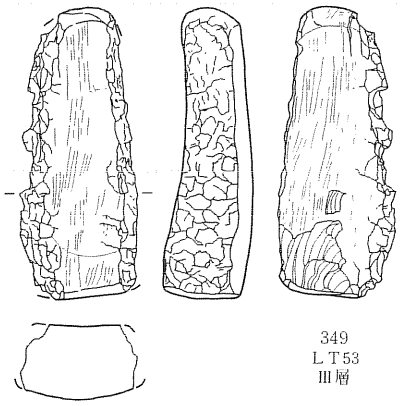
347
ＬＳ52
III層



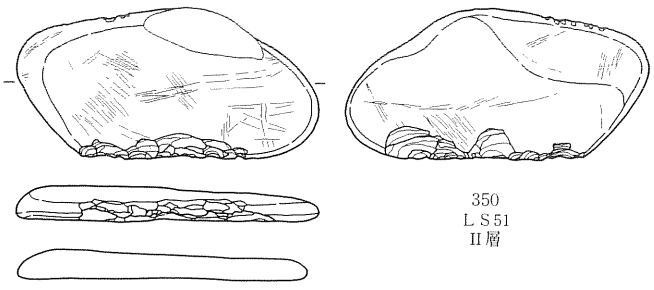
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
345	ＬＳ52	磨石	3.0	3.4	2.7	12.2	凝灰岩
346	ＬＳ51	〃	6.5	4.0	2.4	29.4	〃
347	ＬＳ52	〃	7.0	5.0	4.8	229.8	凝灰岩 質礫岩
348	ＭＣ51	石錘	7.9	5.8	1.6	94.1	安山石
349	ＬＴ53	砥石	11.5	4.6	3.3	99.1	凝灰岩
350	ＬＳ51	敲石	5.9	12.1	1.4	80.8	安山岩



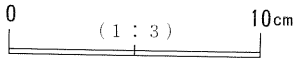
348
ＭＣ51



349
ＬＴ53
III層



350
ＬＳ51
II層



第60図　出土石器（12）

類と特徴は、以下のとおりである。

ⅰ．断面形がａ長方形又は台形状のもの（351～354・357）、ｂかまぼこ状のもの（355・356・358～364・366・368・369）、ｃ円形又は楕円形状のもの（365・367）に分けられる。

ⅱ．ａはほぼ全面が擦られ、平滑である。

ⅲ．ｂは特に弦の部分が擦られ、平滑になっている。擦られた面は、平坦なものと湾曲したもの（359・363）が認められる。

ⅳ．ｃはほぼ全面が擦られ、端部が斜めに擦られる共通点が認められる。うち１点は上半部に貫通孔が認められる（365）。

ⅴ．小型の2、3のものは水に浮くが、その他のものは始め浮いているが、時間がたつにつれ水分を吸収してやがて沈んでしまう。

ⅵ．端部に溝を有するものが認められる（368）。

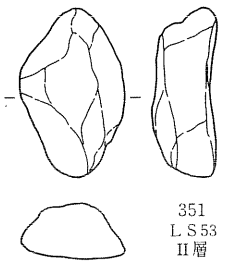
⑧凹石（第64図371～第66図379）　その一部にくぼみをもつ石器であり、372・377は石皿を転用したものである。

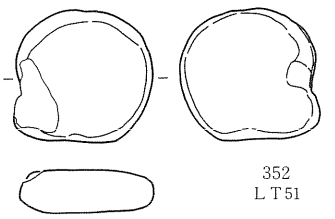
⑨石皿（第66図380～第68図）　382・383・384には、裏面も使用された痕跡が認められる。382の裏面には溝状のくぼみが少なくても２条認められ、383は裏面も石皿として使用されたものと推測され、中央部にいくにしたがって厚みがなくなっているのがわかる。384の裏面には線条痕が認められる。

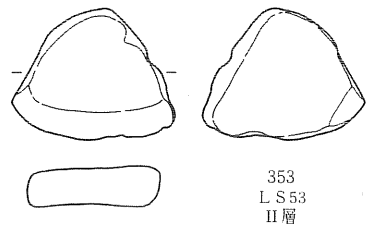
⑩その他（第64図370）　棒状の礫の破片であり、火熱を受けた痕跡と擦痕が認められる。

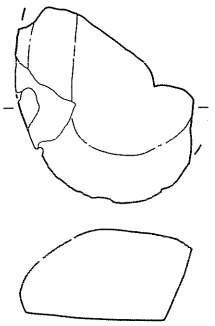
（参考文献）

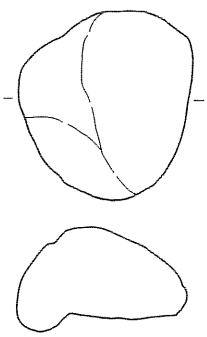
鈴木道之助 『図録　石器の基礎知識Ⅲ　縄文』 柏書房　1981（昭和56年）

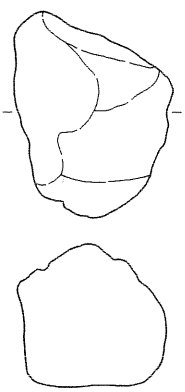

351
ＬＳ53
Ⅱ層

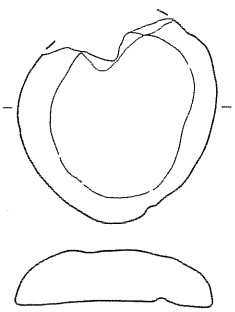

352
ＬＴ51

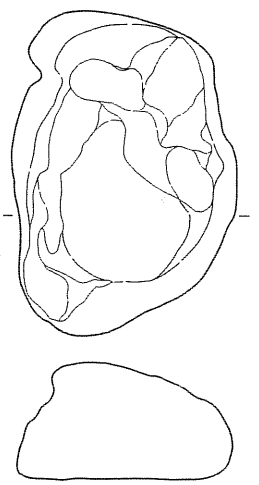

353
ＬＳ53
Ⅱ層

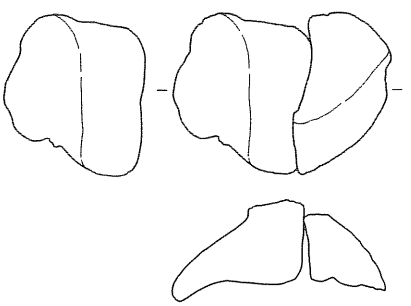

354
ＭＤ51

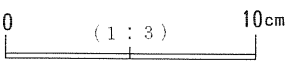

355
ＬＳ52
Ⅲ層


356
ＬＴ52


357
ＬＳ53
Ⅲ層

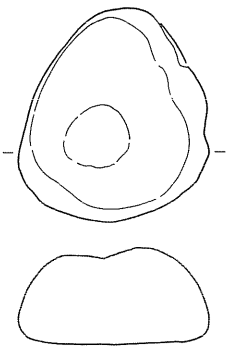

358
ＬＳ51


359
ＬＳ52

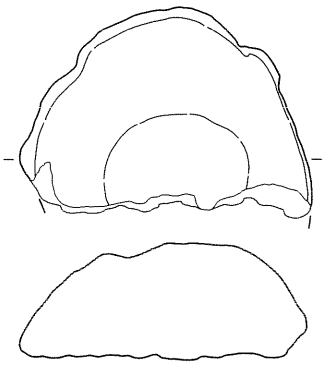


番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
351	ＬＳ53	軽石製品	6.7	4.1	2.3	9.3	軽石
352	ＬＴ51	〃	5.3	4.7	1.7	11.9	〃
353	ＬＳ53	〃	5.0	6.4	1.7	6.8	〃
354	ＭＤ51	〃	7.8	7.0	3.7	36.3	〃
355	ＬＳ52	〃	7.5	6.8	4.1	49.3	〃
356	ＬＴ52	〃	8.2	5.3	5.6	40.8	〃
357	ＬＳ53	〃	8.1	7.8	2.1	97.3	〃
358	ＬＳ51	〃	12.7	8.9	4.8	128.9	〃
359	ＬＳ52	〃	6.3	8.7	3.2	21.5	〃

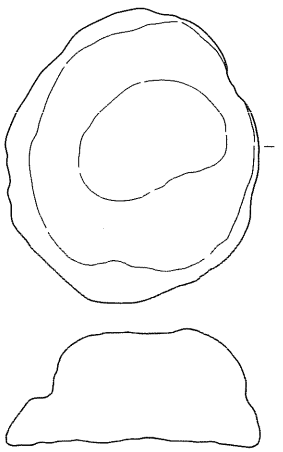
第61図　出土石器（13）



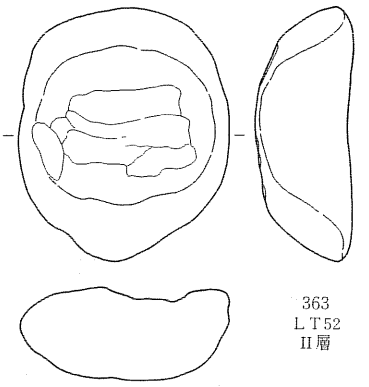
360
L T53
II層



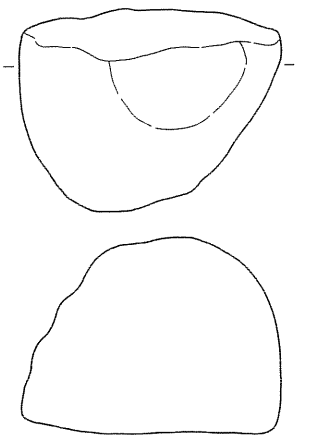
361
L T53
III層



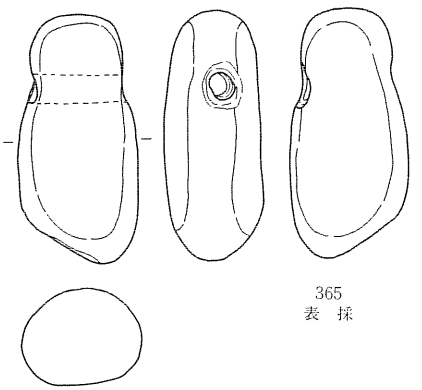
362
L T52
III層



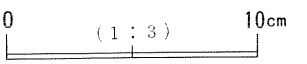
363
L T52
II層



364
L T52
III層

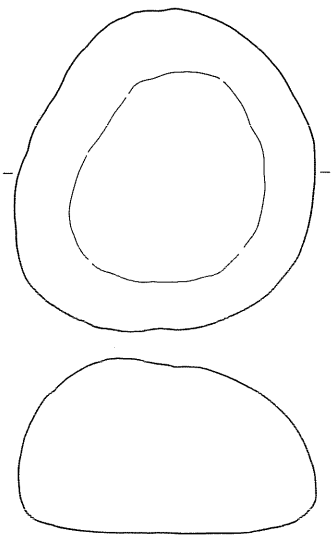


365
表 採

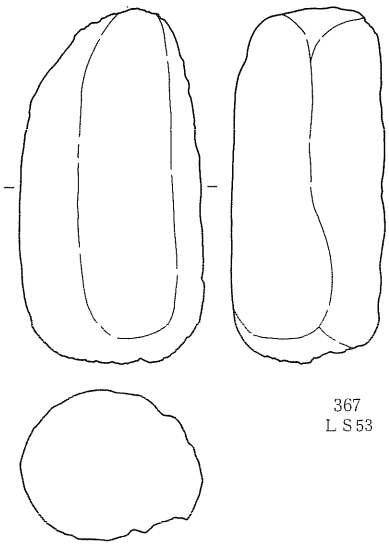


番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
360	L T53	軽石製品	8.5	7.6	4.0	72.8	軽石
361	L T53	〃	8.1	11.6	4.7	93.0	〃
362	L T52	〃	11.6	10.0	4.6	140.5	〃
363	L T52	〃	10.0	8.3	3.7	112.2	〃
364	L T52	〃	7.9	10.4	7.7	180.4	〃
365	表採	〃	9.9	4.7	3.8	49.0	〃

第62図　出土石器（14）

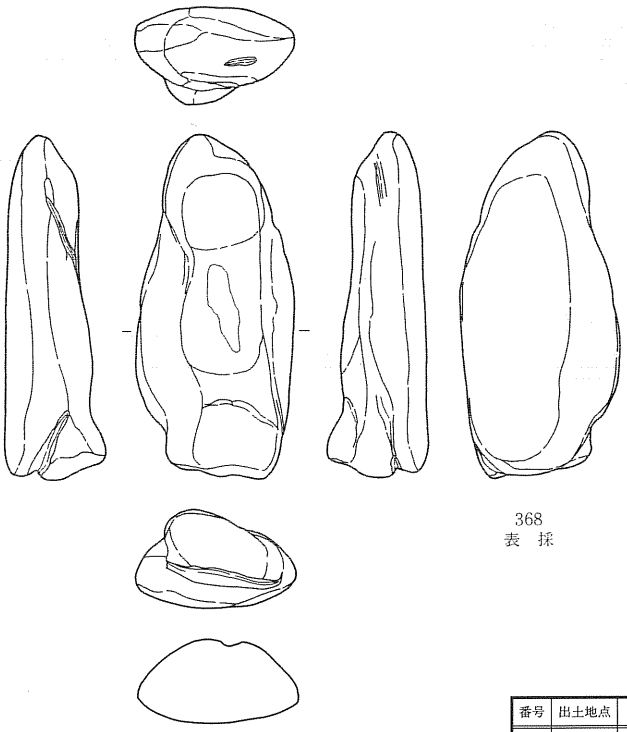


366
ＬＳ53



367
ＬＳ53

0　（１：３）　10cm

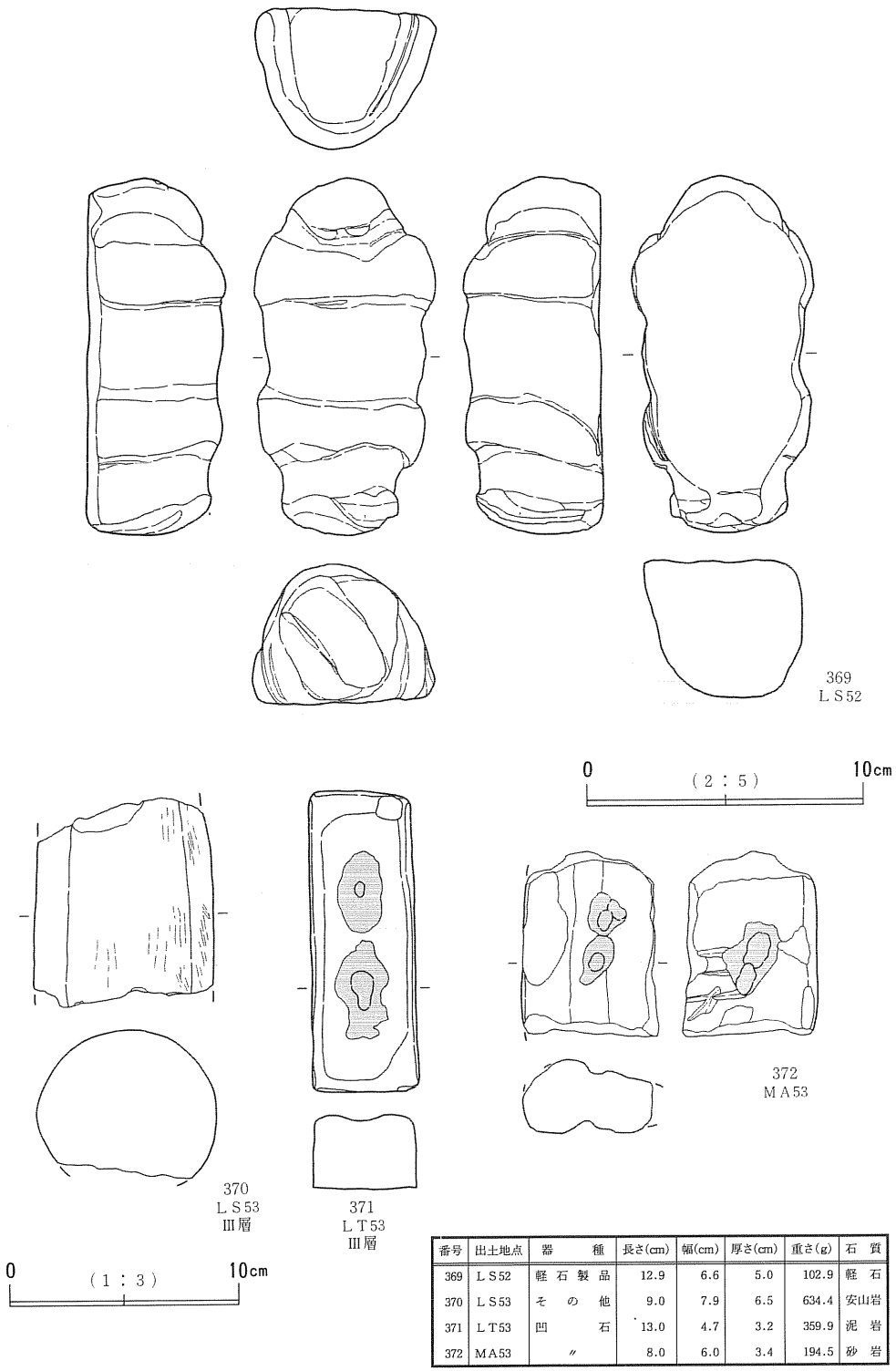


368
表　採

0　（２：５）　10cm

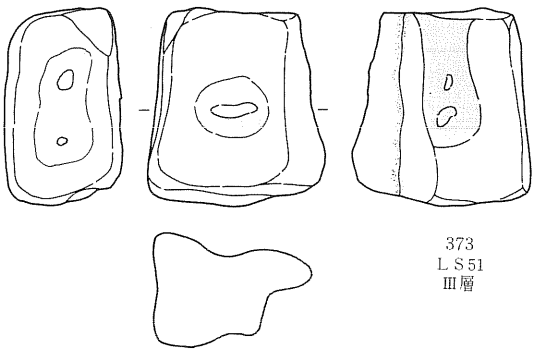
番号	出土地点	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　質
366	ＬＳ53	軽石製品	12.8	11.9	6.9	427.4	軽　石
367	ＬＳ53	〃	11.4	5.3	3.3	28.3	〃
368	表採	〃	14.0	7.4	6.0	113.1	〃

第63図　出土石器（15）

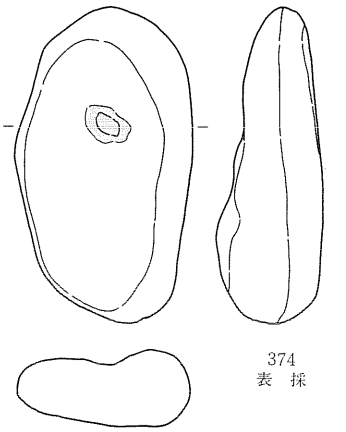


番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
369	L S52	軽石製品	12.9	6.6	5.0	102.9	軽石
370	L S53	その他	9.0	7.9	6.5	634.4	安山岩
371	L T53	凹石	13.0	4.7	3.2	359.9	泥岩
372	M A53	〃	8.0	6.0	3.4	194.5	砂岩

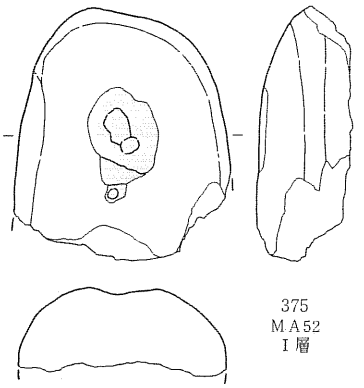
第64図　出土石器（16）



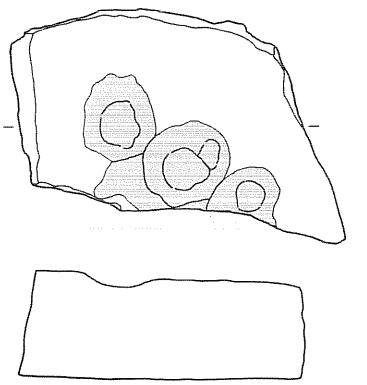
373
ＬＳ51
Ⅲ層



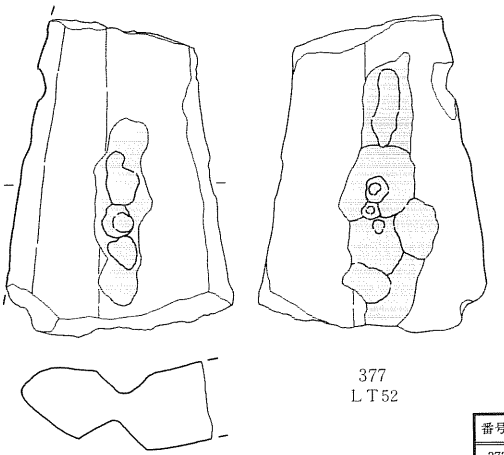
374
表　採



375
ＭＡ52
Ⅰ層



376
ＬＲ51
Ⅱ層

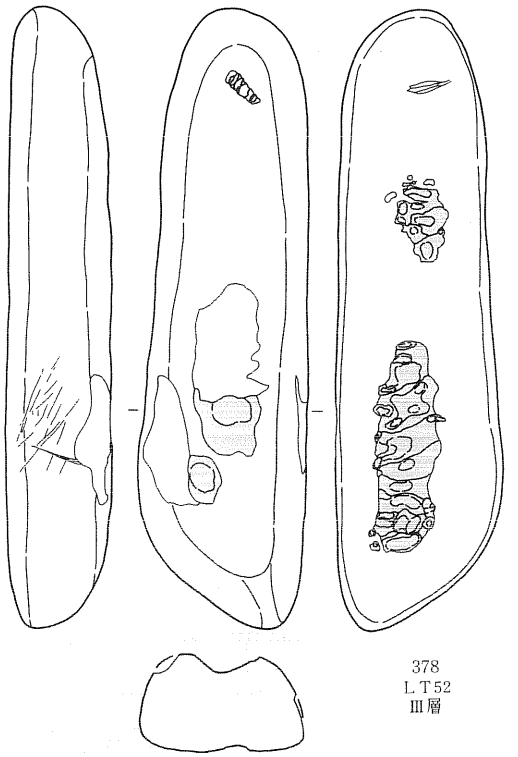


377
ＬＴ52

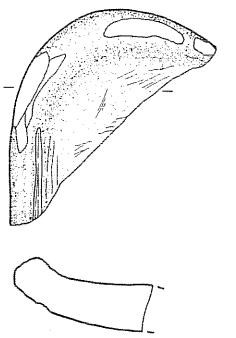
0　（１：３）　10cm

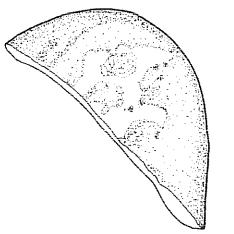
番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
373	ＬＳ51	凹石	7.8	7.1	4.6	188.5	凝灰岩
374	表採	〃	12.4	7.0	4.2	417.5	安山岩
375	ＭＡ52	〃	9.9	8.6	3.5	346.1	〃
376	ＬＲ51	〃	9.3	13.2	4.2	503.3	凝灰岩
377	ＬＴ52	〃	12.5	9.0	3.2	426.7	〃

第65図　出土石器（17）



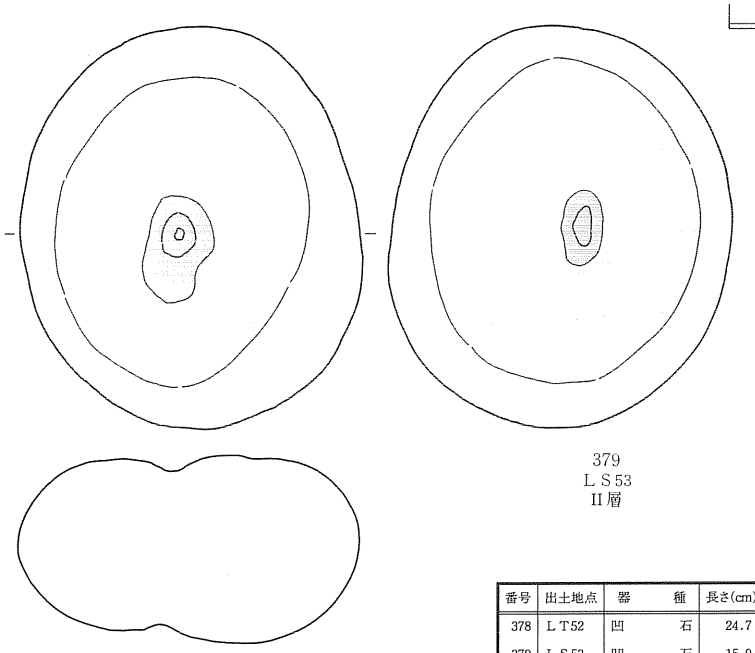
378
L T52
Ⅲ層





380
L S51
Ⅲ層

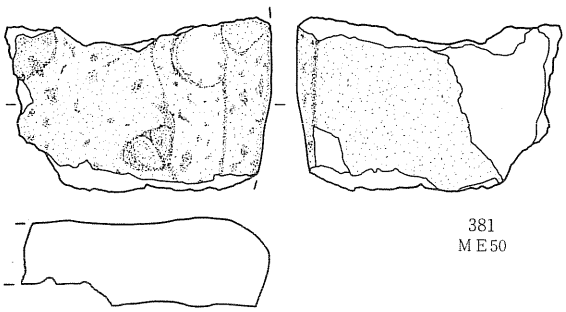
0 （1：3） 10cm



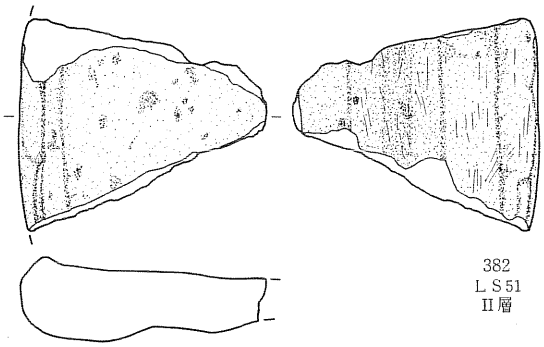
379
L S53
Ⅱ層

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
378	L T52	凹石	24.7	6.7	4.1	569.8	凝灰岩
379	L S53	凹石	15.9	13.7	7.5	2175.5	〃
380	L S51	石皿	8.6	8.1	2.1	108.5	〃

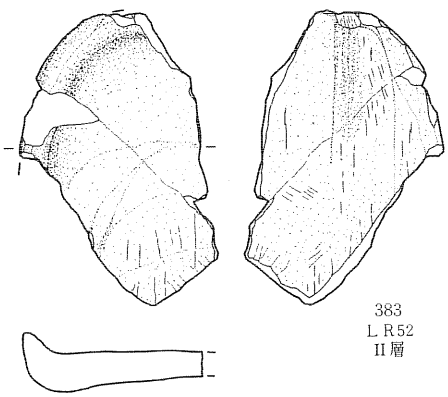
第66図　出土石器（18）



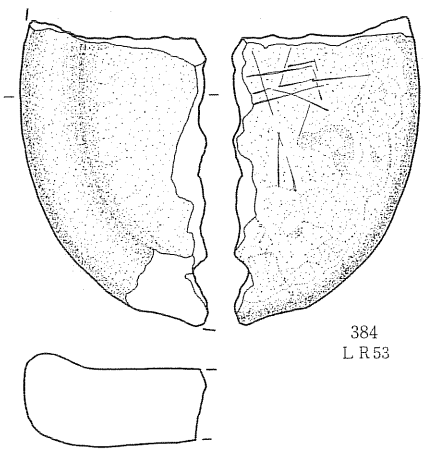
381
ＭＥ50



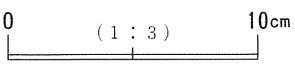
382
ＬＳ51
Ⅱ層



383
ＬＲ52
Ⅱ層

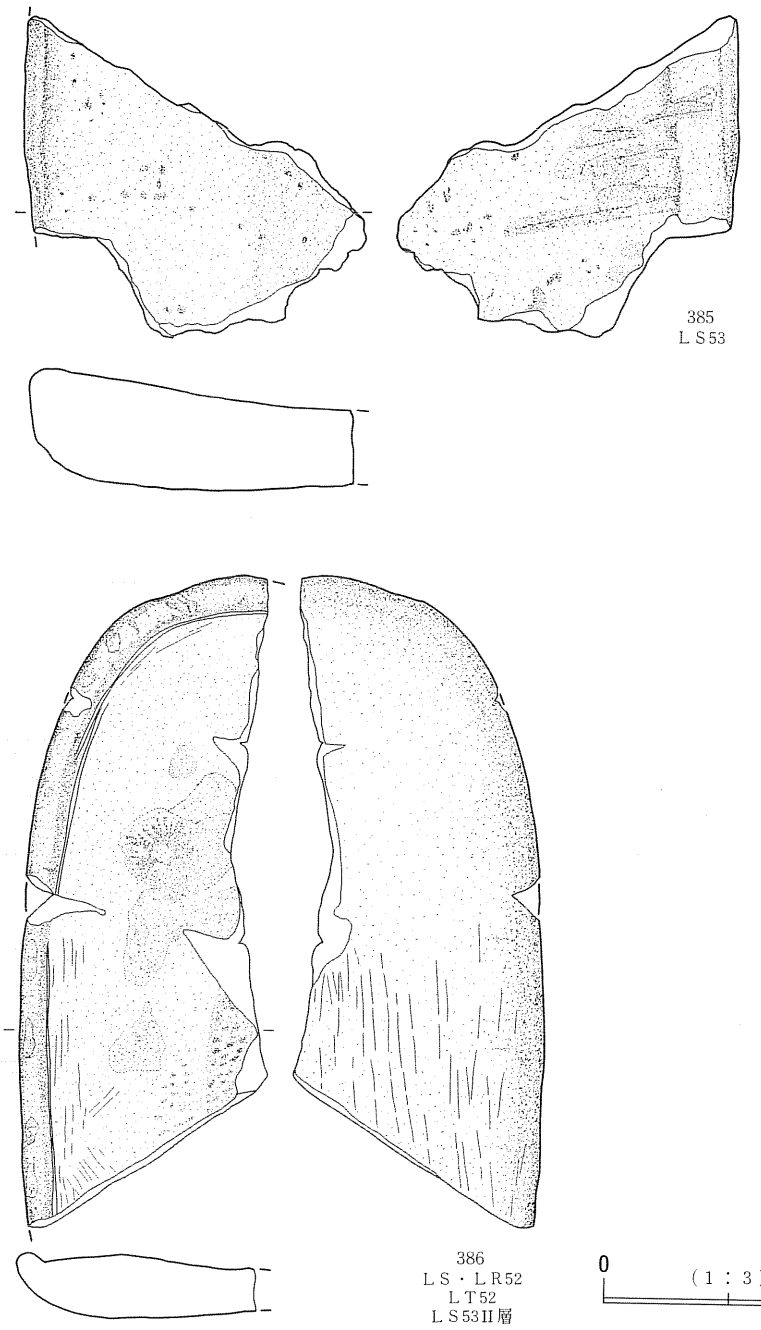


384
ＬＲ53



番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
381	ＭＥ50	石皿	6.8	11.6	3.6	365.0	安山岩
382	ＬＳ51	〃	8.3	9.8	3.0	203.7	凝灰岩
383	ＬＲ52	〃	11.6	7.9	1.7	120.1	〃
384	ＬＲ53	〃	12.2	7.4	3.4	348.0	〃

第67図　出土石器（19）



番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
385	ＬＳ53	石皿	12.6	13.6	4.3	649.3	安山岩
386	LSLR52 LT52LS53	〃	25.9	9.8	2.4	710.2	凝灰岩

第68図　出土石器（20）

第3章　まとめ

萱刈沢Ⅰ遺跡の調査によって、台地北側の斜面が捨て場であったことが明らかになり、そこから縄文後期の遺物、特に土器と石器が発見された。ここでは、捨て場と縄文後期の土器（第Ⅲ群土器）について述べ、まとめとしたい。

1．捨て場のあり方について

捨て場は北に萱刈沢Ⅱ遺跡、南に萱刈沢Ⅰ遺跡がそれぞれ立地する台地に挟まれた沢の急斜面にある。この捨て場からは、前述のように1,800個体をこえる土器及び土製品、石器等が発見された。遺物の出土状態については、特異な点は認められなかった。但し、土器が潰れた状況で出土する場合もみられたことから、そういうものについては斜面上方から投げ捨てられたものではなく、「置かれた」状況を推測できる。

また、出土遺物の中に少数ではあるが中期の土器も認められた。このことは、平成元年に行われた範囲確認調査の結果と微妙にかかわってくるように思われる。この時の調査は、捨て場の南側台地上を対象としたものであるが、中期の竪穴住居跡を検出している。したがって、中期にこの地に生活を営んだ人々は、北側の斜面を捨て場としてほとんど使用しなかったことが窺われる。

以上のことから、縄文時代の中期と後期とでは捨て場とする場所の選定、さらには捨て場に対する意識の違いが認められるのではなかろうか。これについて小林氏は、「前期から中期の遺跡では、集落跡と捨場とがセットになる場合が多く、晩期の遺跡では、墓域と対になる場合が多い。」とし、『物』に対する意識の変化を見い出している。そして、そういう意識の変革期として縄文後期を位置付けている[1)]。捨て場という用語からは、廃棄物の処分場という意味合いしか感じ取れないが、少なくとも縄文後期以降にあっては、人を葬ると同じように物を葬ったひとつの空間と言えるのかもしれない。

2．第Ⅲ群土器について

ここでは本遺跡出土遺物の中で90％以上を占める第Ⅲ群土器について、若干述べてみたい。これまでの調査で知り得た第Ⅲ群土器の特徴を列挙すると、以下のとおりである。

①器種の点からみると、縄文中期以前の深鉢形のみの単一構成から壺、浅鉢、台付浅鉢など

多様化した器種構成に変化している。ただし、器種間の比率の上では、深鉢が主体であることに変わりはない。

②文様帯をもつものがほとんどであり、文様帯の下端を区画しないものは、ほんの一例にすぎない（31）。また、文様帯の幅については、深鉢でみる限りでは胴部下半までのものと胴部中ごろまでのものがあり、前者の比率が高いようである。

③施文手法としては、沈線文、磨消縄文、櫛目状文、粘土紐貼り付けによる隆線文が認められる。沈線文は、２ないし３本が一組となり、文様が描かれるものが多い（12・13・14・24・26・30・39・45・47・56など）。

④横方向に文様が展開するものが多い。これは深鉢において顕著に認められるもので、横位に展開する波状文（25・30・59など）、入組状文（27・29・47など）、カギ状文（39・40）雷文（69）等がそれである。

⑤完形及び図上復元できた土器をみる限り、深鉢Ｅ類に波状口縁の土器が多いという傾向が認められる。

⑥北海道の大津式に類似の文様をもつものがある。その文様としては、「カニのハサミ」状文（41・57・58・155）、逆「く」の字状文（41・60）、雷文（69）、櫛目状文（102・169～172）などが認められる。

⑦底部外面に網代痕や木葉痕を残すものがほとんど認められない。底部に木葉痕が認められたものは、70の底部資料のみである。

⑧上げ底の底部を有するものが少数認められる（38・39）。

以上の①～⑧まで特徴を要約すると、

ａ：①～④の特徴から、本群土器が縄文後期前葉に位置付けられるものと認められる。

ｂ：①⑤⑦及び⑧の特徴は、萱刈沢Ⅰ遺跡に固有のものである。

ｃ：⑥の特徴は、地域間の交流を示すものと理解される。

このように、３点にまとめることができる。それを個々にみていくと、

ａの型式編年上の位置としては、十腰内Ⅰ式があてられる。本群土器の中でも第27図80・81は、やや古い要素を持つものと推測され、十腰内Ⅰ式よりも前に位置するものと思われる。

十腰内Ⅰ式については、本土器型式を設定した磯崎氏により、中期末葉の土器から十腰内Ⅰ式にいたる間に一、二型式の介在を必要とするとしたことから[2]、新型式の設定及び十腰内Ⅰ式の細分が試みられている。成田氏の編年によれば、前入江・十腰内様式と入江・十腰内様式に大きく二分し、さらに前者を三型式、後者を二型式（十腰内ＩＡ式と十腰内ＩＢ式）に分類している[3]。この編年によれば、本群土器のほとんどは、後者のうちの十腰内ＩＢ式に含まれるものと思われる。

bに要約された特徴について、県内の同じ時期の主な遺跡と比較すると、

器形の種類では、大湯環状列石、高屋館跡には蓋形の土器がみえるが、本群土器中には認められない。

底部外面の網代痕又は木葉痕は、大湯環状列石でも痕跡を残しているものは少ないようであり、高屋館跡では粗製土器に多く認められる。

底部のつくりでは、上げ底は認められるが、38・39のような極端なものはみられないようである。

cについては、⑥に述べた文様が本遺跡のほか大湯環状列石や青森県にも認められるが、北海道南部にその出土頻度が高いようである。[4)]

註1）　秋田県教育委員会　『八木遺跡発掘調査報告書　—公害防除特別土地改良事業八木地区に係る埋蔵文化財発掘調査—』　秋田県文化財調査報告書第181集　1989（平成元年）

註2）　今井富士雄・磯崎正彦　『十腰内　青森県弘前市十腰内縄文式遺跡調査予報』　十腰内遺跡調査団　1969（昭和44年）

註3）　成田滋彦　「入江・十腰内式土器様式」『縄文土器大観4　後期　晩期　続縄文』小学館　1989（平成元年）

註4）　大津式の中には櫛目状の文様が認められるが、大沼氏はこれと同様の土器が礼文島の遺跡から出土していることに注目し、沿海州方面の櫛目文土器との関連を考えている。これに関連して、山田氏は縄文時代を日本だけの視点で考えるより、周辺の国々との関連でとらえる必要性を説いておられる。事実朝鮮半島咸鏡北道西浦項貝塚やロシア共和国アムール川流域等に縄文後期の土器に類似のものが認められるが、それらの編年が不十分であることが、日本の縄文土器と対比するうえで障害になっているようである。

財団法人　北海道埋蔵文化財センター　『木古内町　建川1・新道4遺跡　—津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—』　1986（昭和61年）

後藤　直　「櫛目文土器」『世界考古学事典　上』　平凡社　1979（昭和54年）

佐藤達夫　「1　朝鮮有紋土器の変遷」『日本の先史文化—その系統と年代—』河出書房新社　1978（昭和53年）

山田昌久　「『縄紋文化』の構図（下）　—東アジア始源文化の動向と“縄紋文化”の位相—」『古代文化』　第42巻第12号　財団法人　古代学協会　1990（平成2年）

（参考文献）

加藤邦雄　「5　縄文文化後期・晩期」『北海道考古学講座』　みやま書房　1980（昭和55年）

財団法人　北海道埋蔵文化財センター『木古内町　建川２・新道４遺跡　―津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書（４）―』1987（昭和62年）

財団法人　北海道埋蔵文化財センター『木古内町　新道４遺跡　―津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書（５）』1988（昭和63年）

虻田町教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター『入江遺跡　～教職員住宅並びに汚水５号幹線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～』1990（平成２年）

成田滋彦　「３．後期の土器　青森県の土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』雄山閣　1981（昭和56年）

青森県教育委員会　『沖付（２）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第101集　1986（昭和61年）

青森県八戸市教育委員会　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　―丹後谷地遺跡―』八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集　1986（昭和61年）

青森県八戸市教育委員会　『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ　田面木平遺跡（１）』八戸市埋蔵文化財発掘調査報告書第20集　1988（昭和63年）

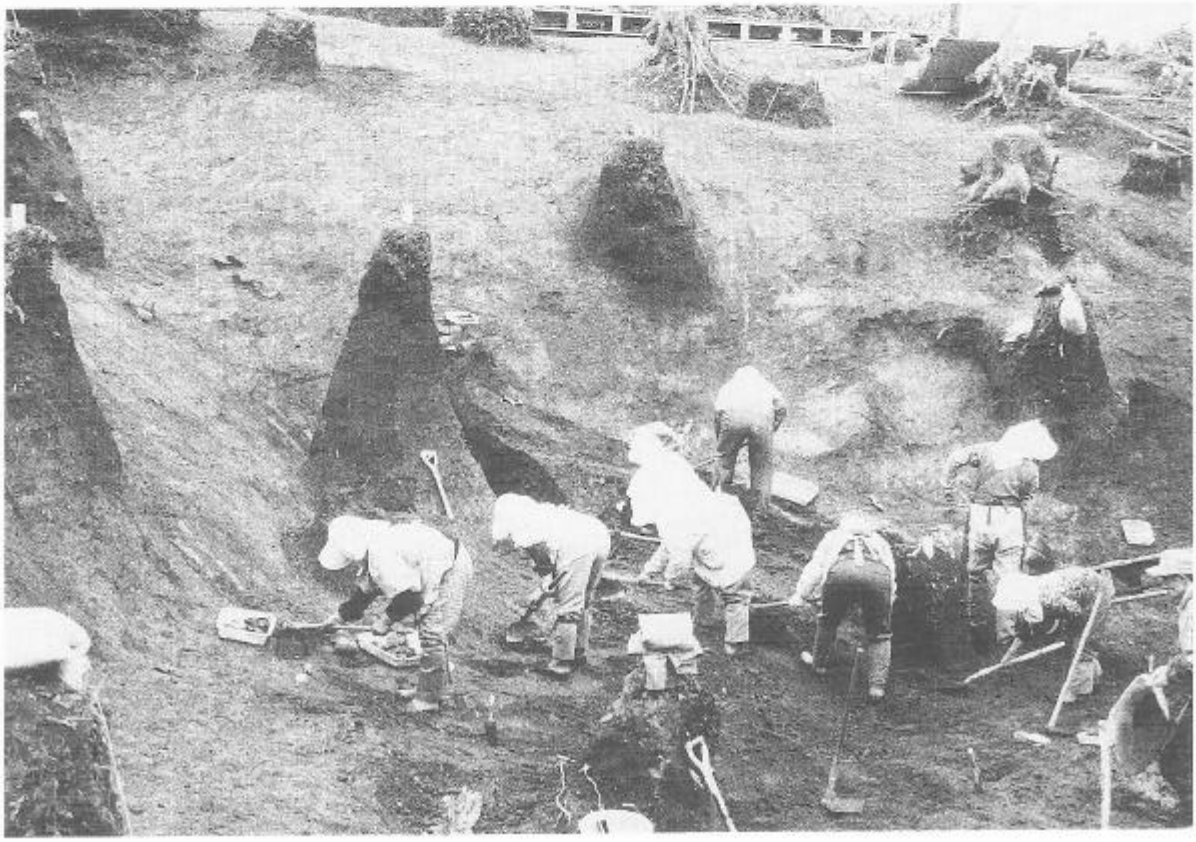
秋田県鹿角市教育委員会　『大湯環状列石発掘調査報告書（８）』　鹿角市文化財調査資料43　1992（平成４年）

秋田県教育委員会　『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ　―居熊井遺跡・湯瀬館遺跡・大地平遺跡・上山田遺跡・堂の上遺跡・上葛岡Ⅲ遺跡―』秋田県文化財調査報告書第78集　1981（昭和56年）

秋田県教育委員会　『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　―高屋館跡―』秋田県文化財調査報告書第198集　1990（平成２年）

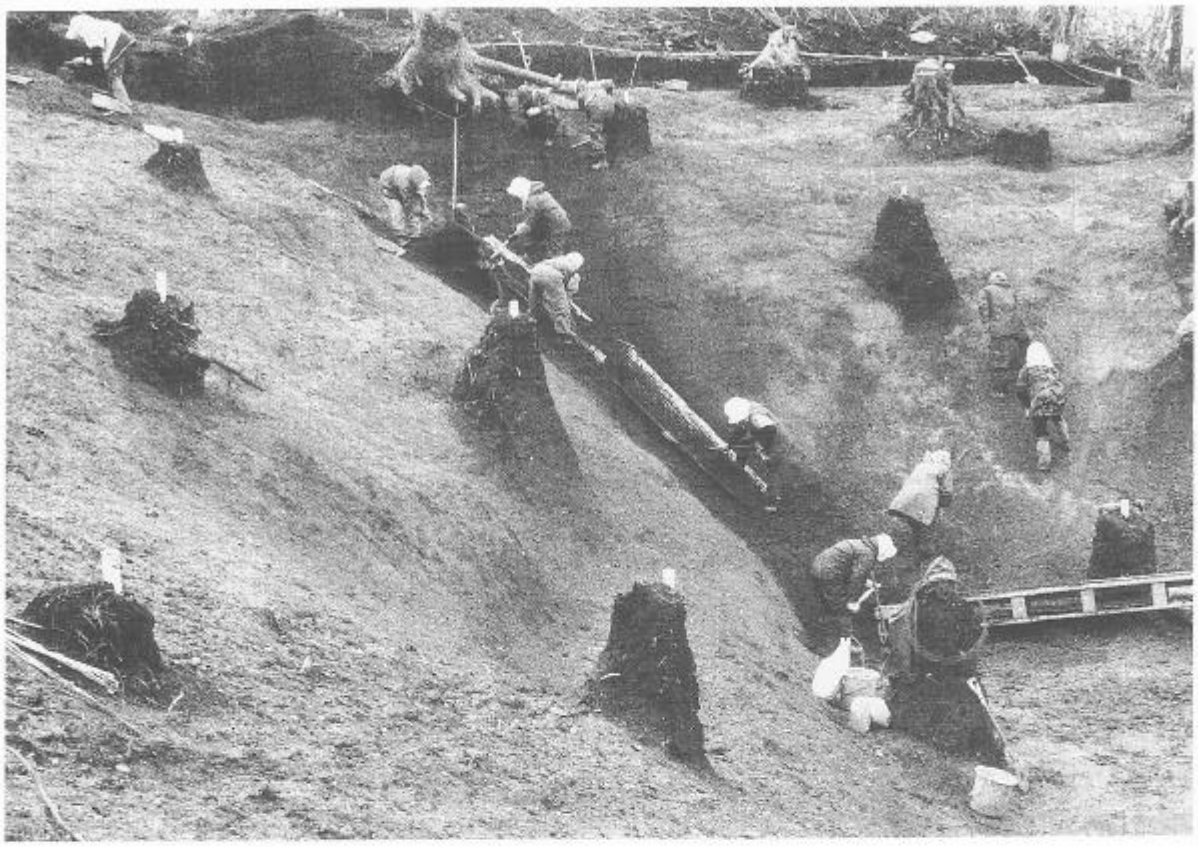
秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第201集　1990（平成２年）

1．萱刈沢Ⅰ遺跡調査前の状況（西から）

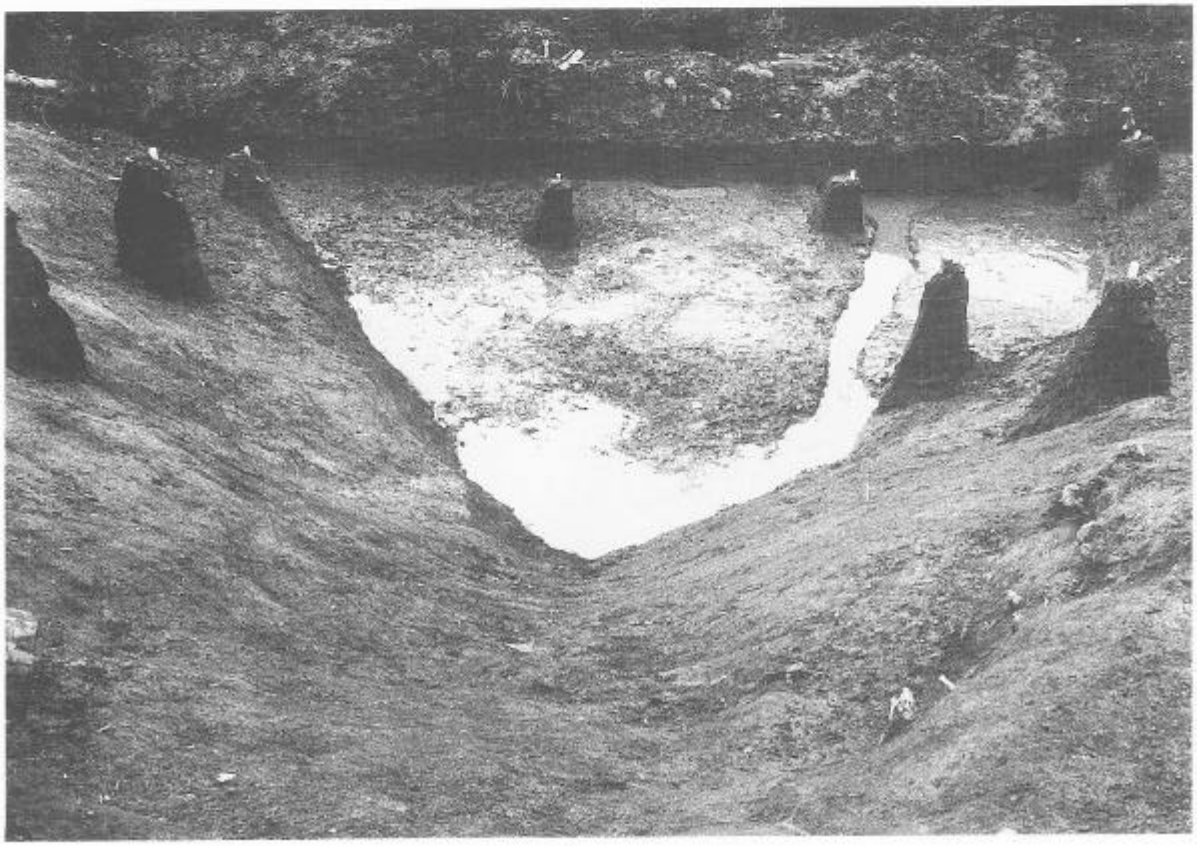


2．萱刈沢Ⅰ遺跡調査状況①（北東から）

図版2

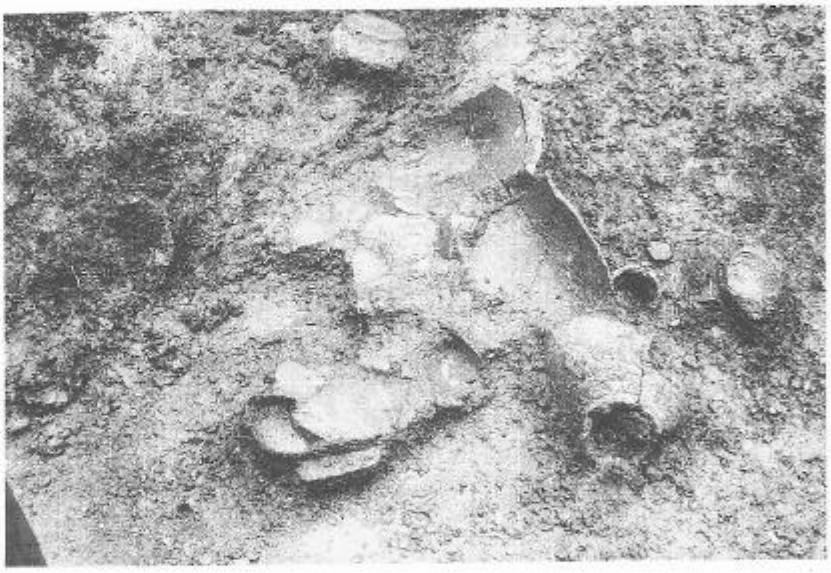


1．萱刈沢Ⅰ遺跡調査状況②（北東から）



2．萱刈沢Ⅰ遺跡調査終了後の状況（南から）

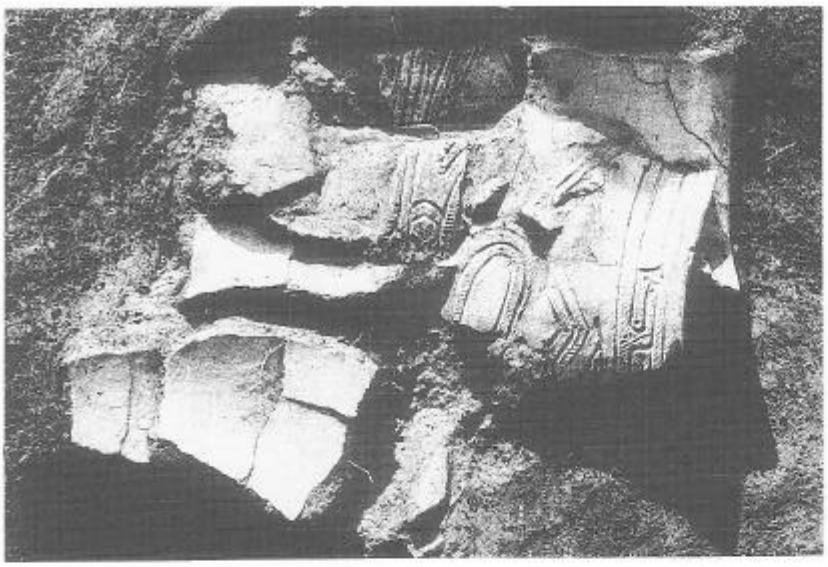
1．遺物出土状況①
（LT53グリッド）



2．遺物出土状況②
（LS52グリッド）

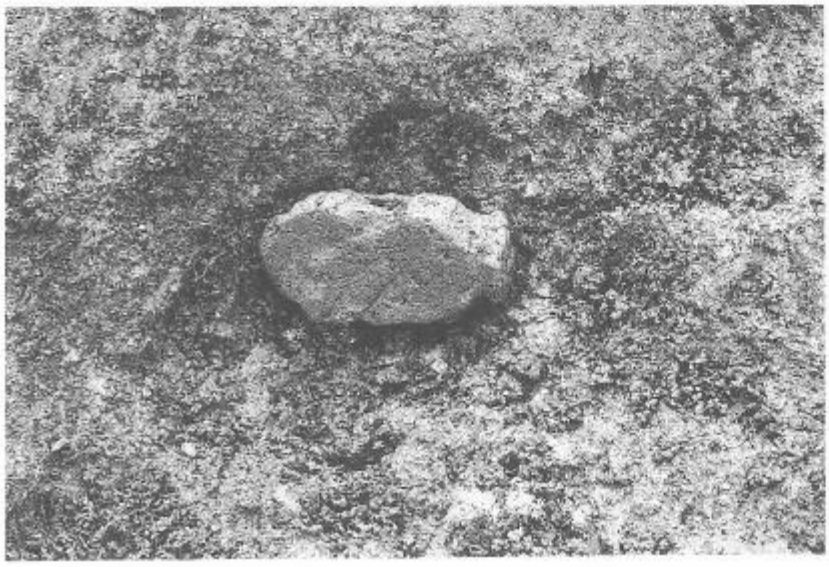
3．遺物出土状況③
（LS51グリッド）

図版4

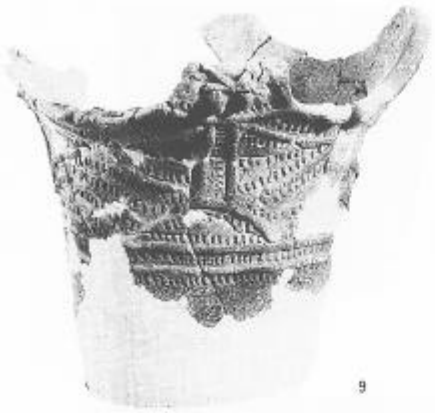


1．遺物出土状況④
（MC51グリッド）

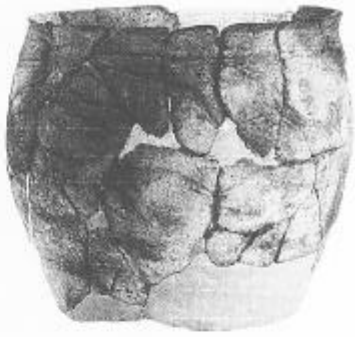
2．遺物出土状況⑤
－土偶（LS52グリッド）



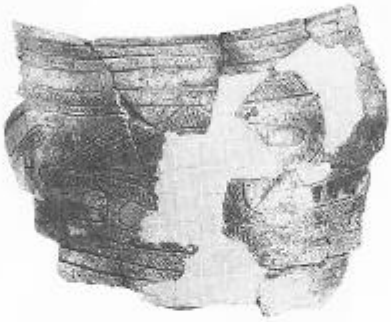
3．遺物出土状況⑥
－軽石製品（LS52グリッド）

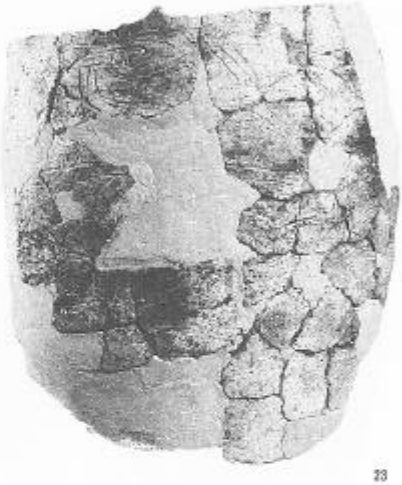

9

19


20

21


22


23

24

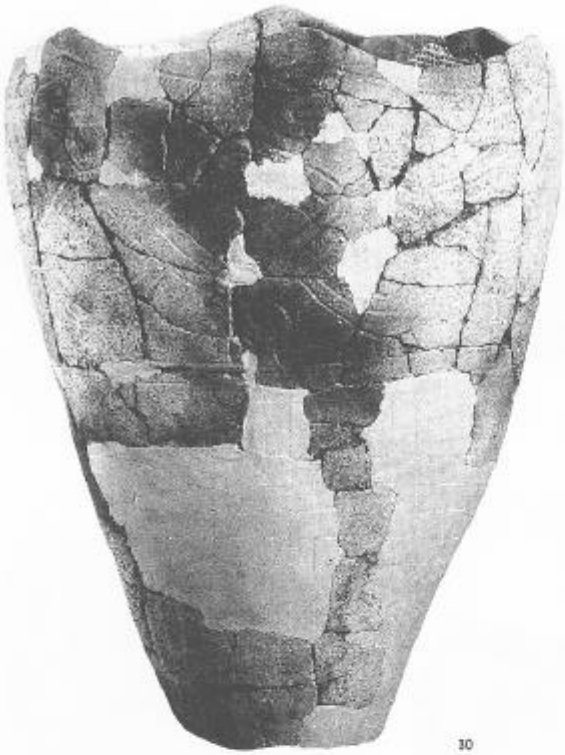
26

28

29

出土遺物（1）

図版6



30

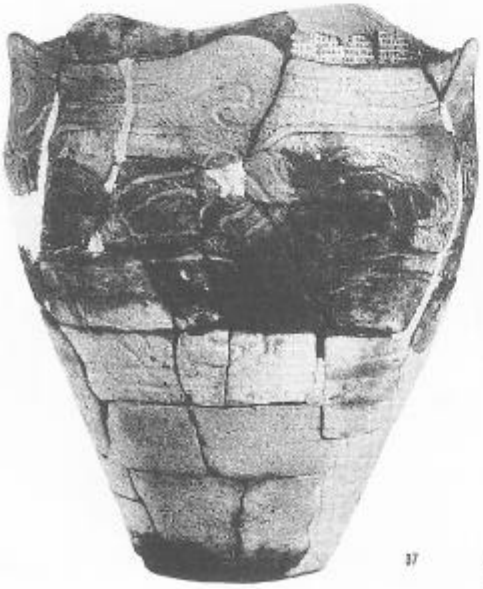
33

34

35

36

40



37

38

出土遺物（2）

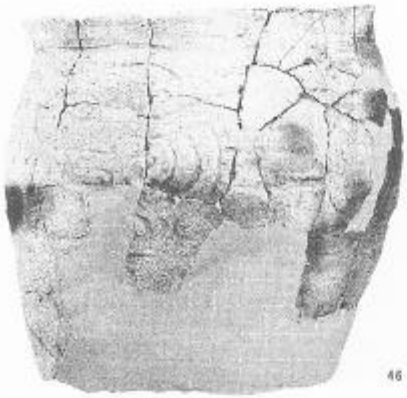
41

43

42

44

45



46

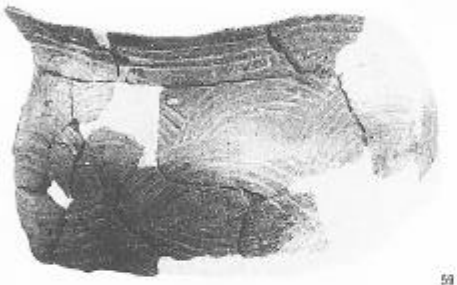
47

出土遺物（3）

図版8

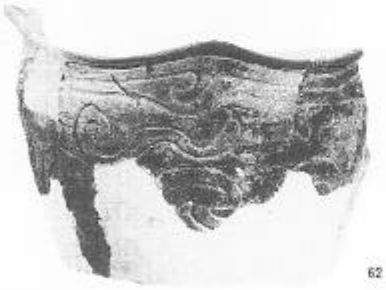
56

57



59

58



62

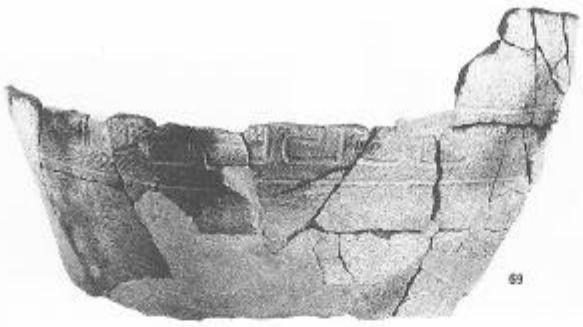
61

65

64

68

出土遺物（4）


69

75

74

76

78

79

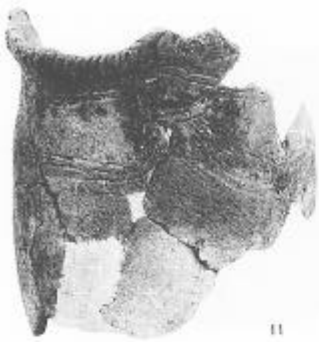
82

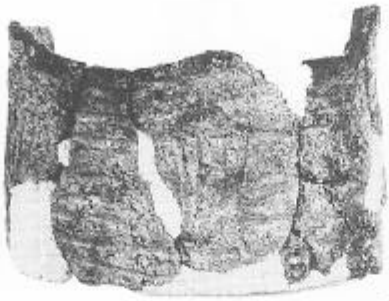
87

89

出土遺物（5）

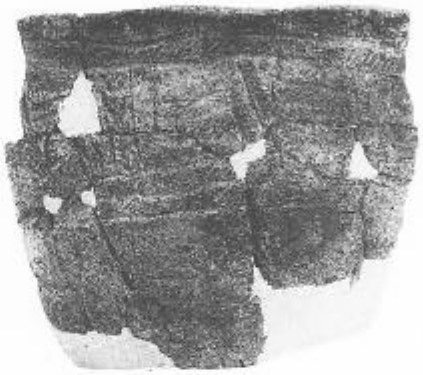
図版10


11

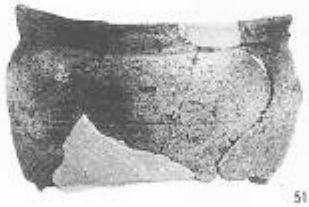

14

17

32


48

50


51

54

55

60

66

出土遺物（6）

81

83

86

88

91

92

94

95

96

98

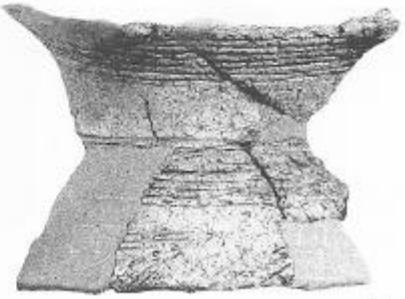
99

100

102

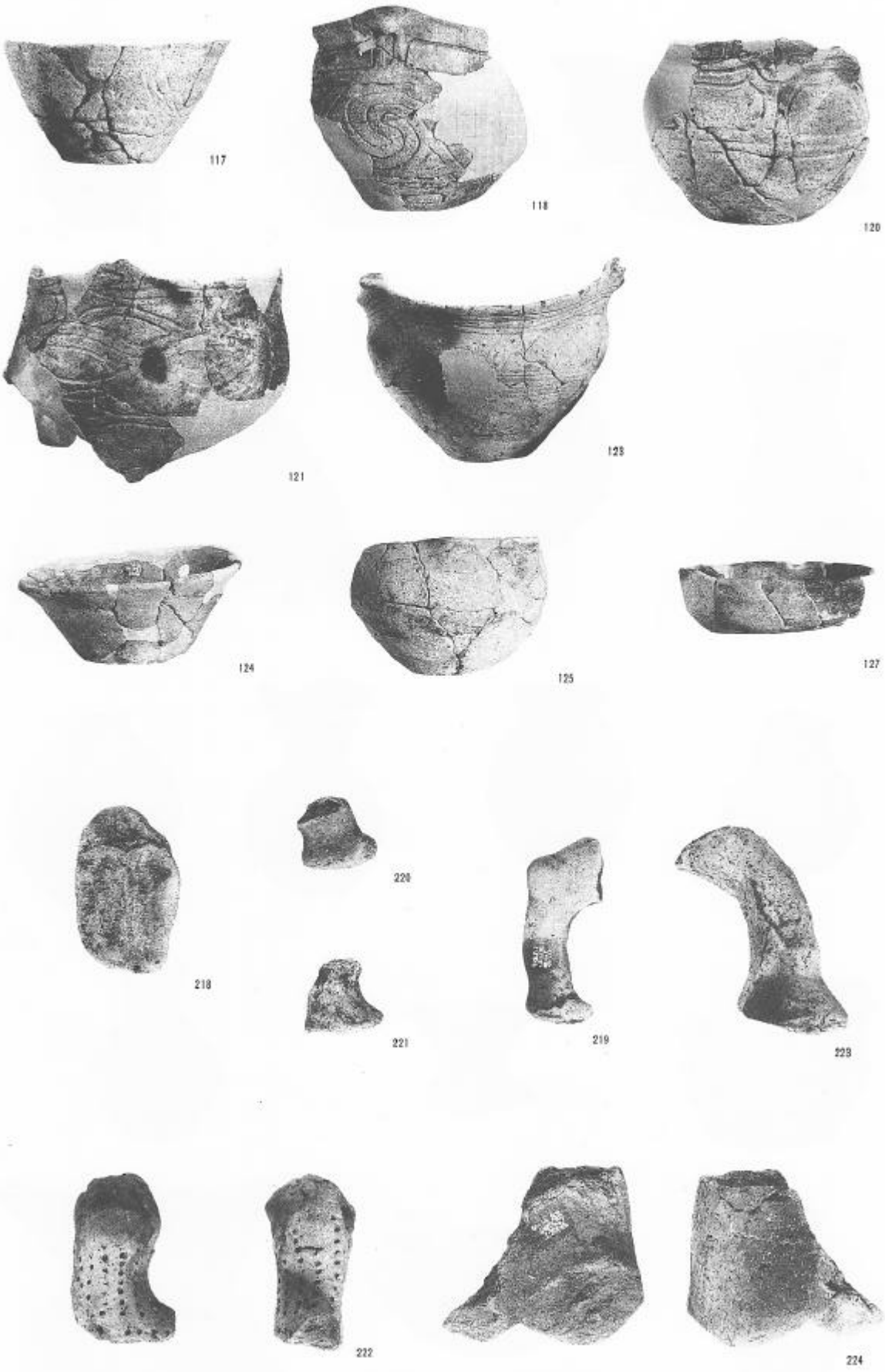
103

105

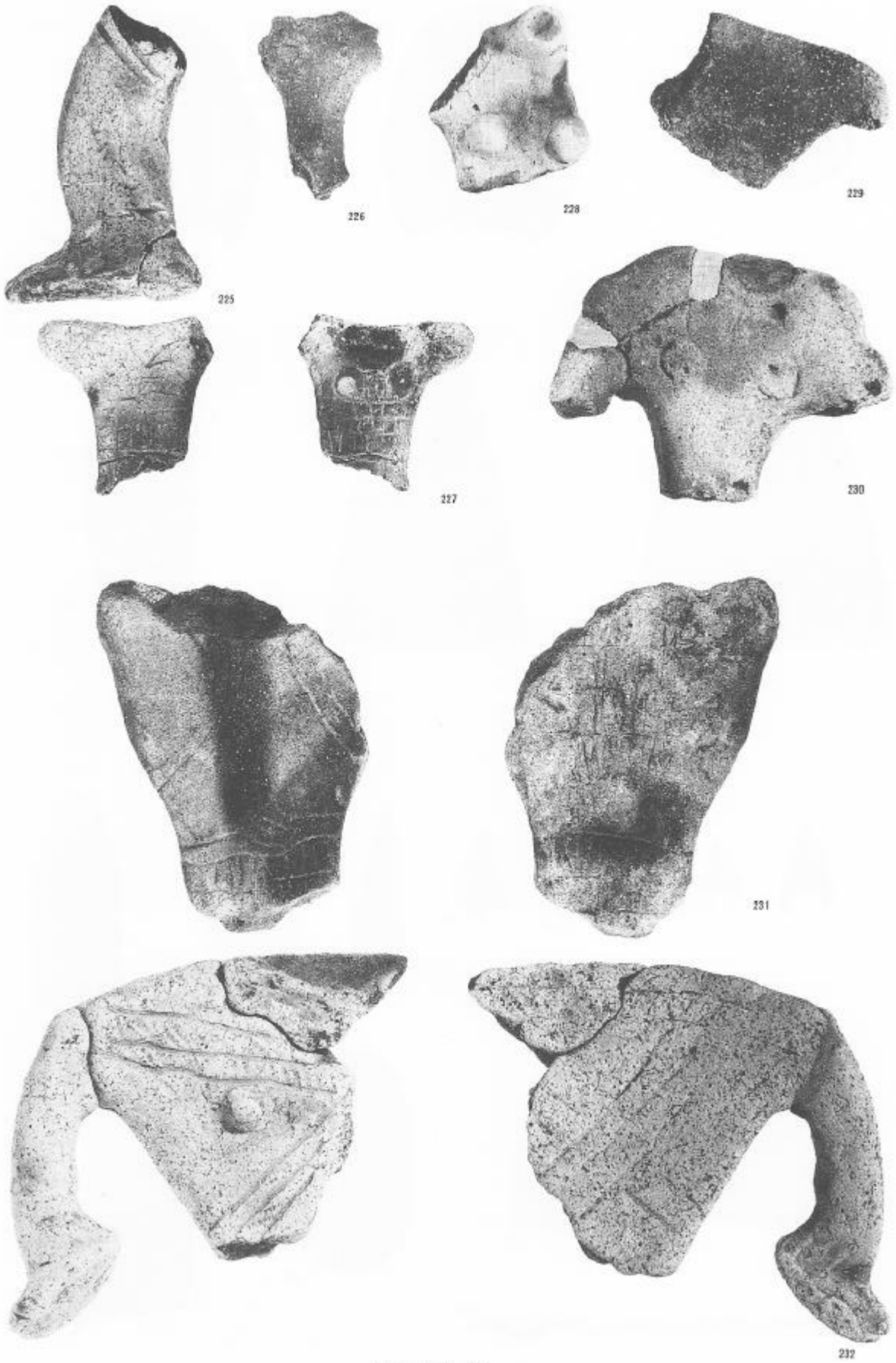

115

出土遺物（7）

図版12

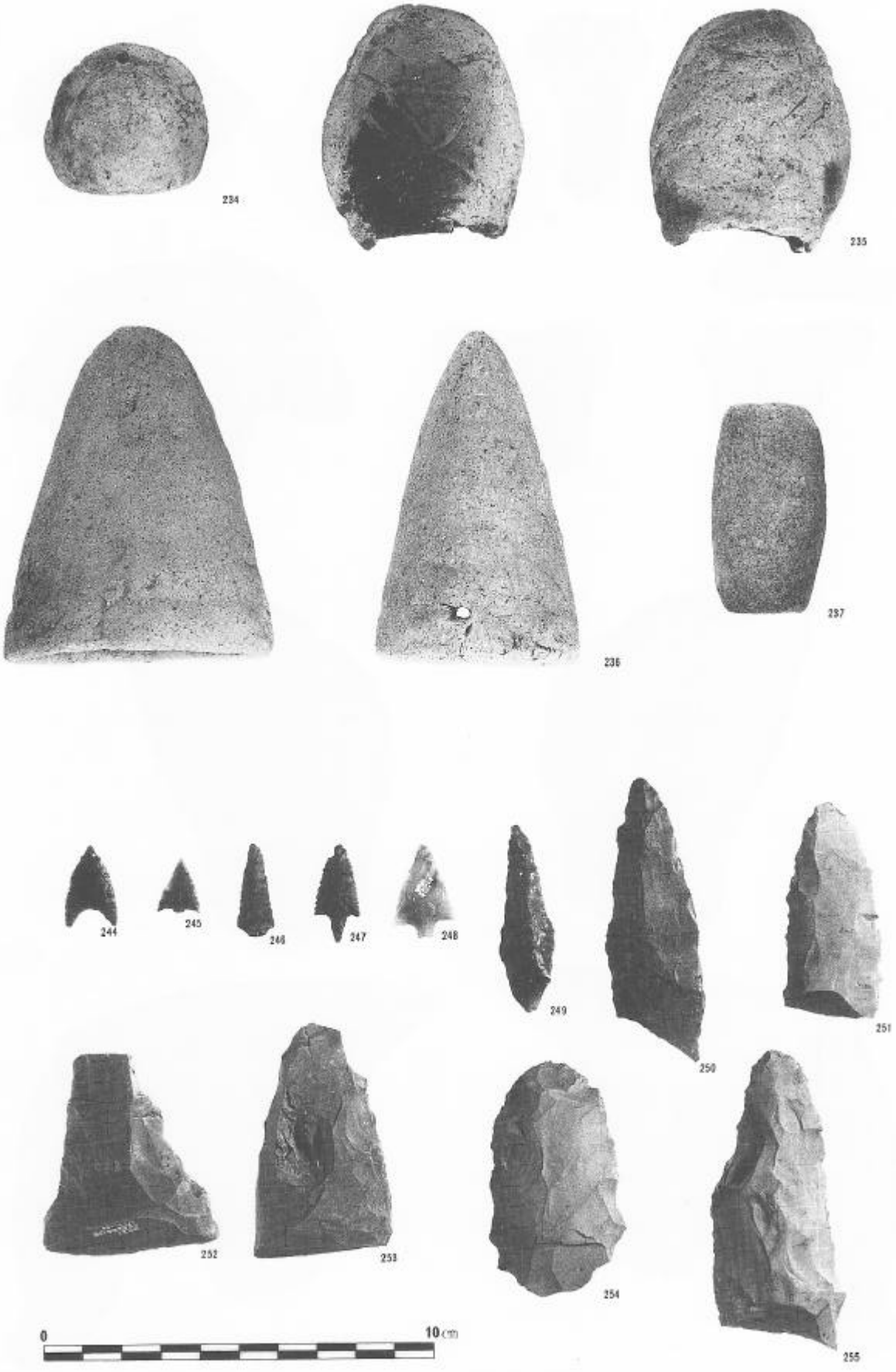


出土遺物（8）

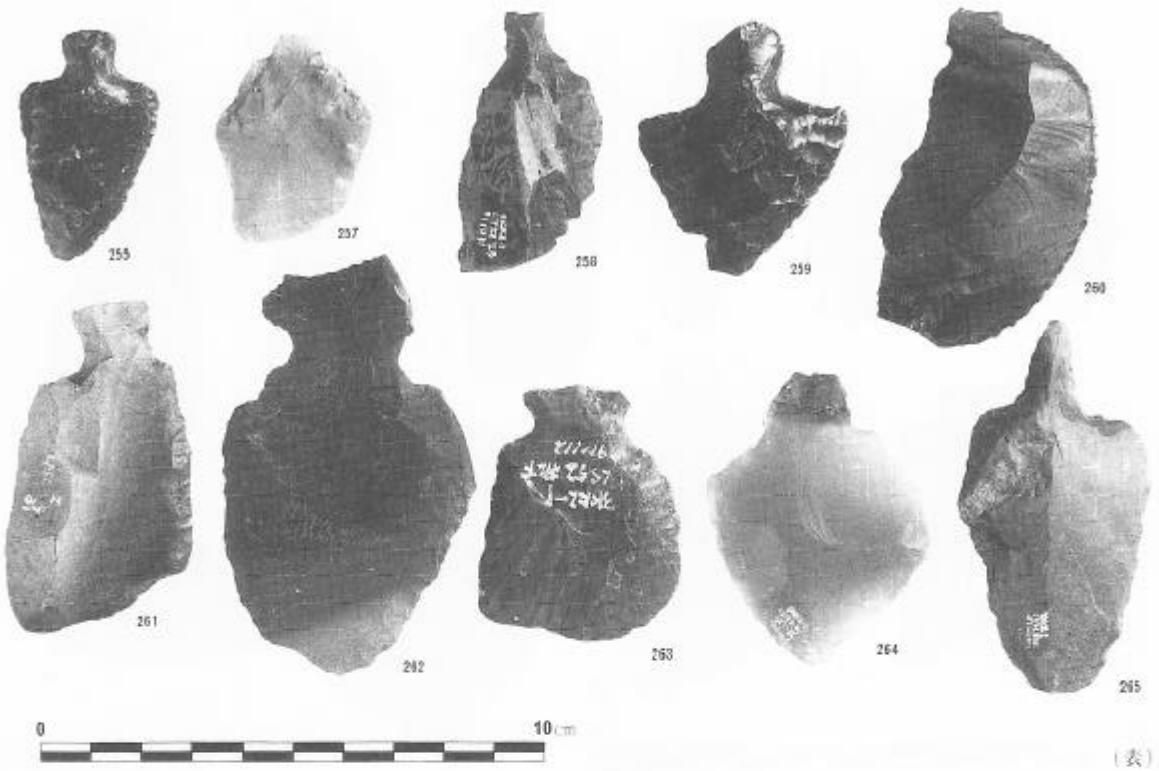


出土遺物（9）

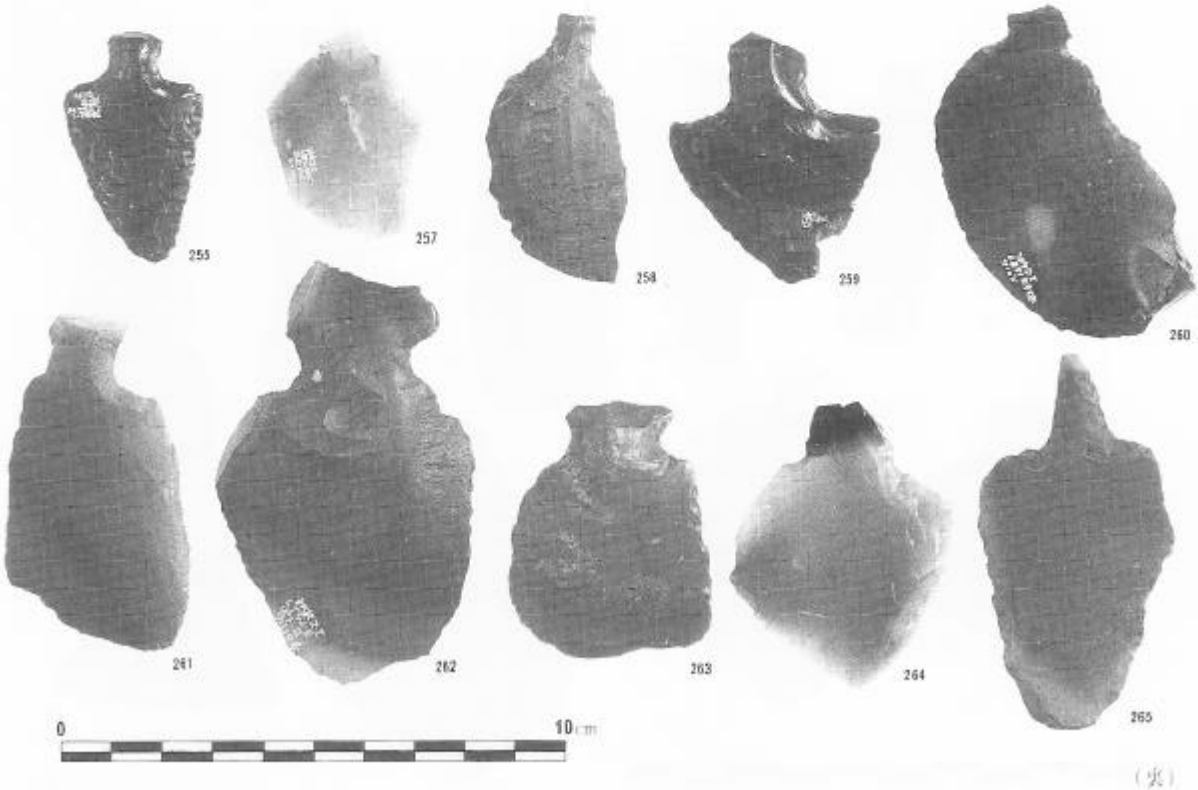
図版14


234
235
236
237
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
0
10(cm)

出土遺物（10）


255
257
258
259
260
261
262
263
264
265
0
10(cm)

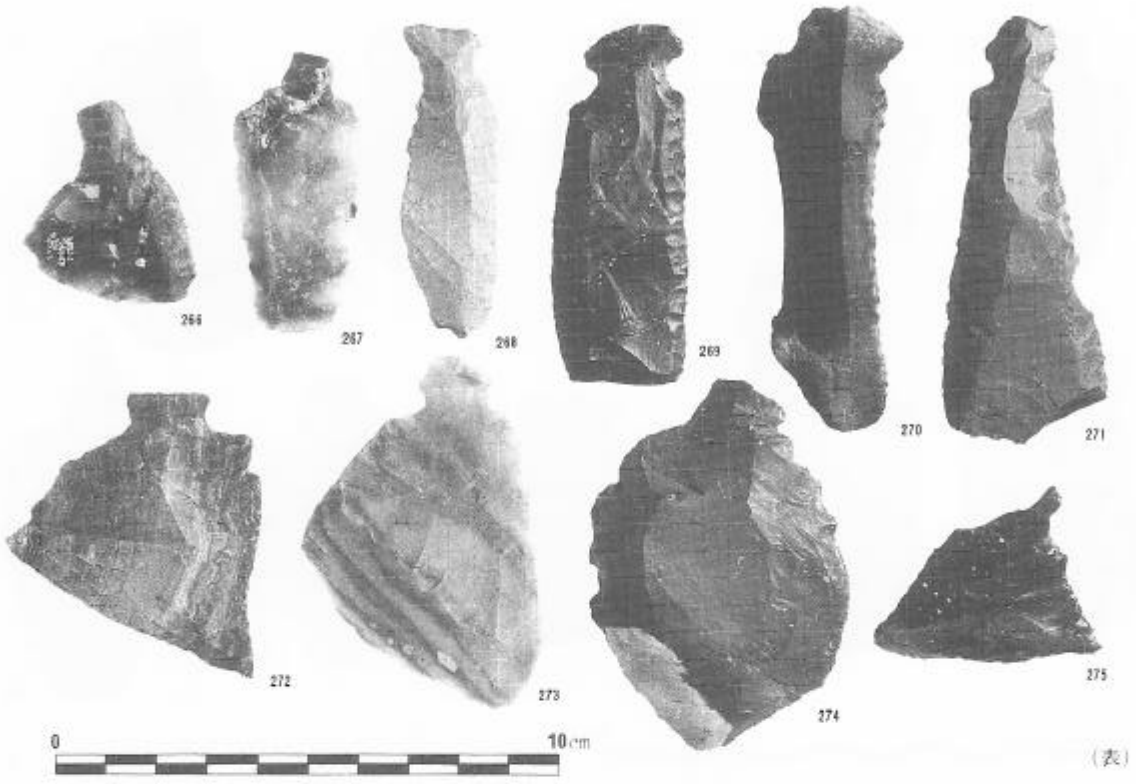
（表）

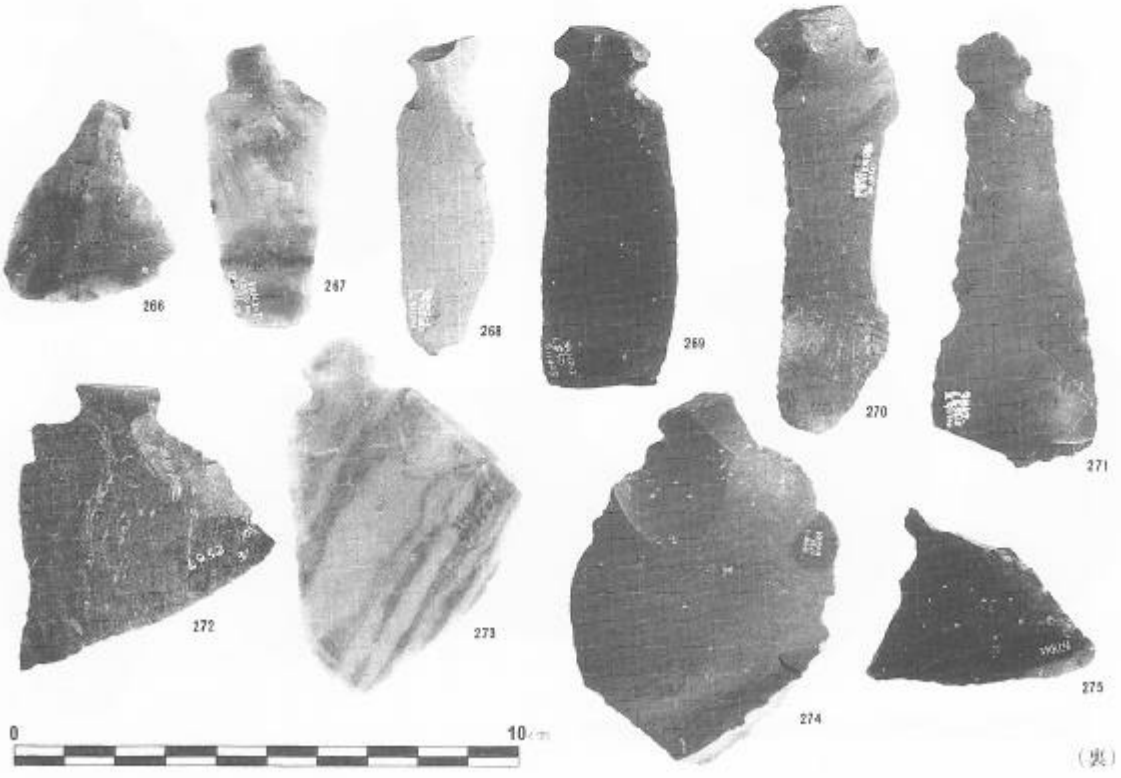

255
257
258
259
260
261
262
263
264
265
0
10(cm)

（裏）

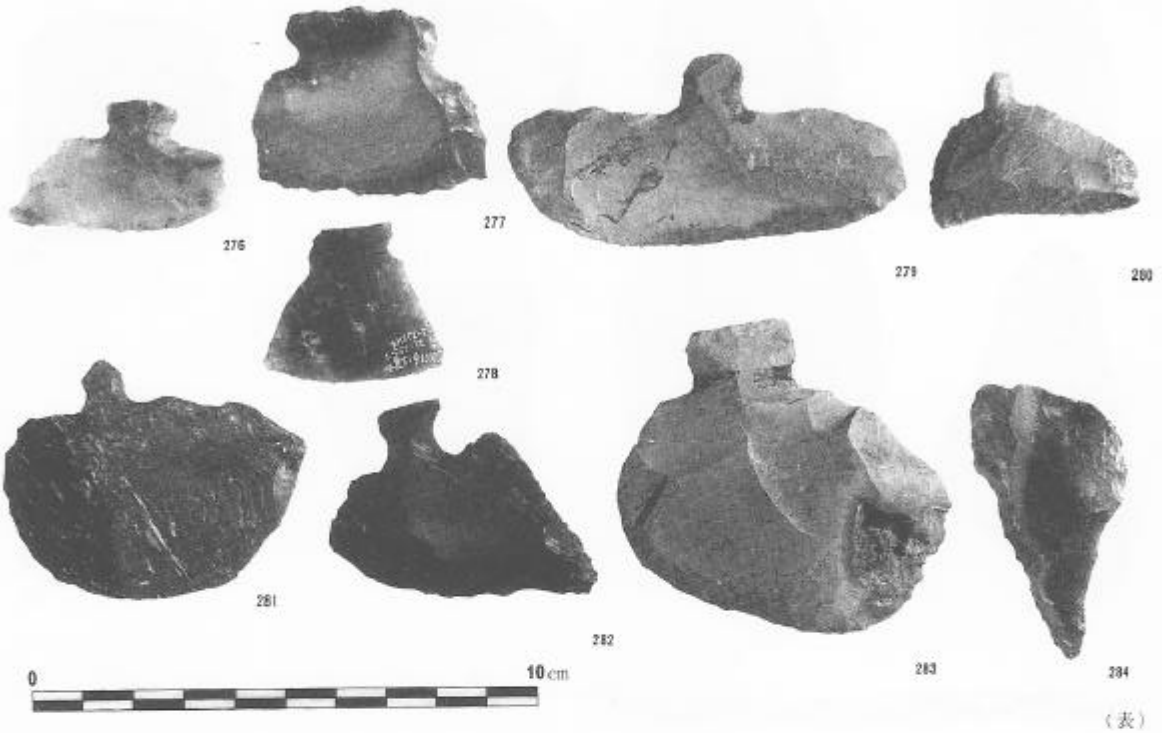
出土遺物（11）

図版16

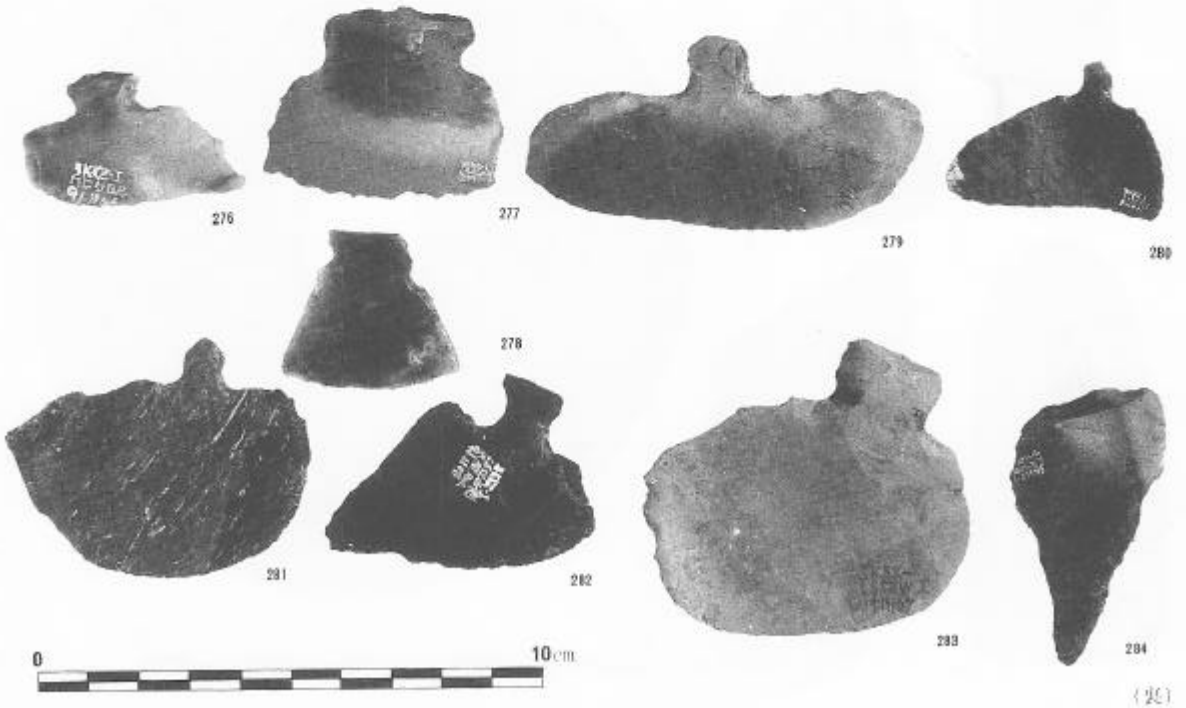

266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
0
10cm
（表）


266
267
268
269
270
271
272
273
274
275
0
10cm
（裏）

出土遺物（12）


276
277
278
279
280
281
282
283
284
0
10cm

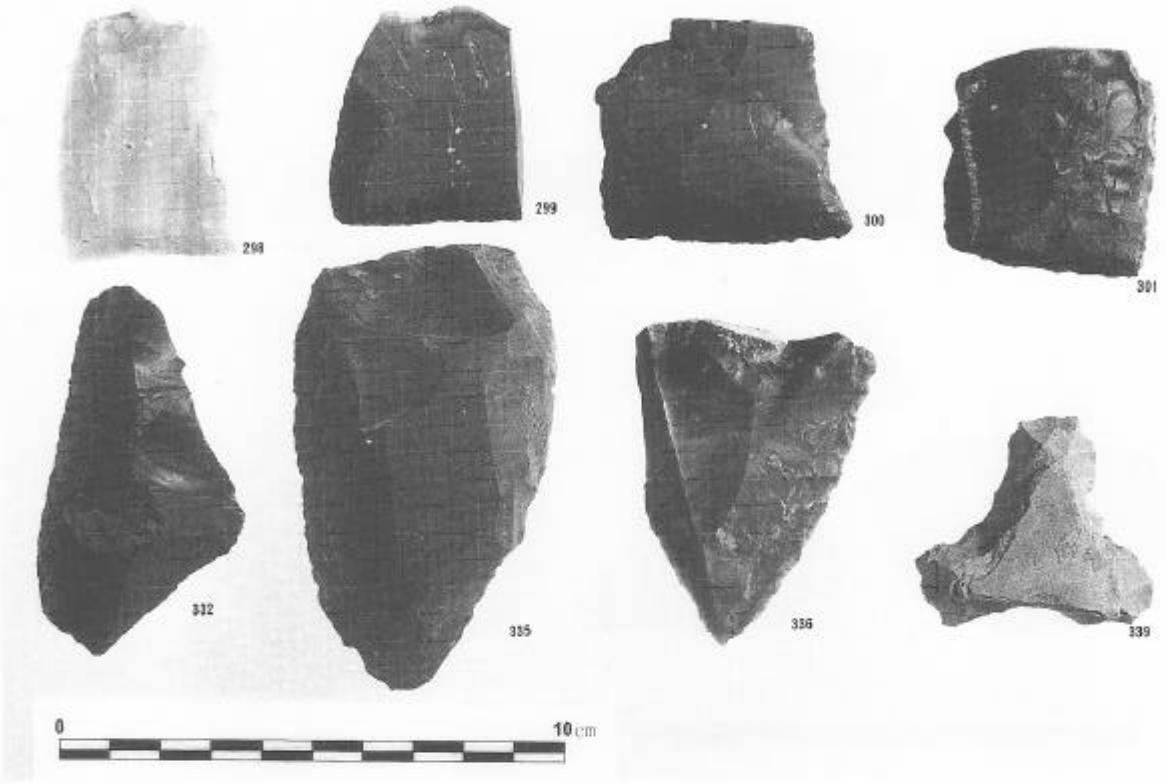
（表）

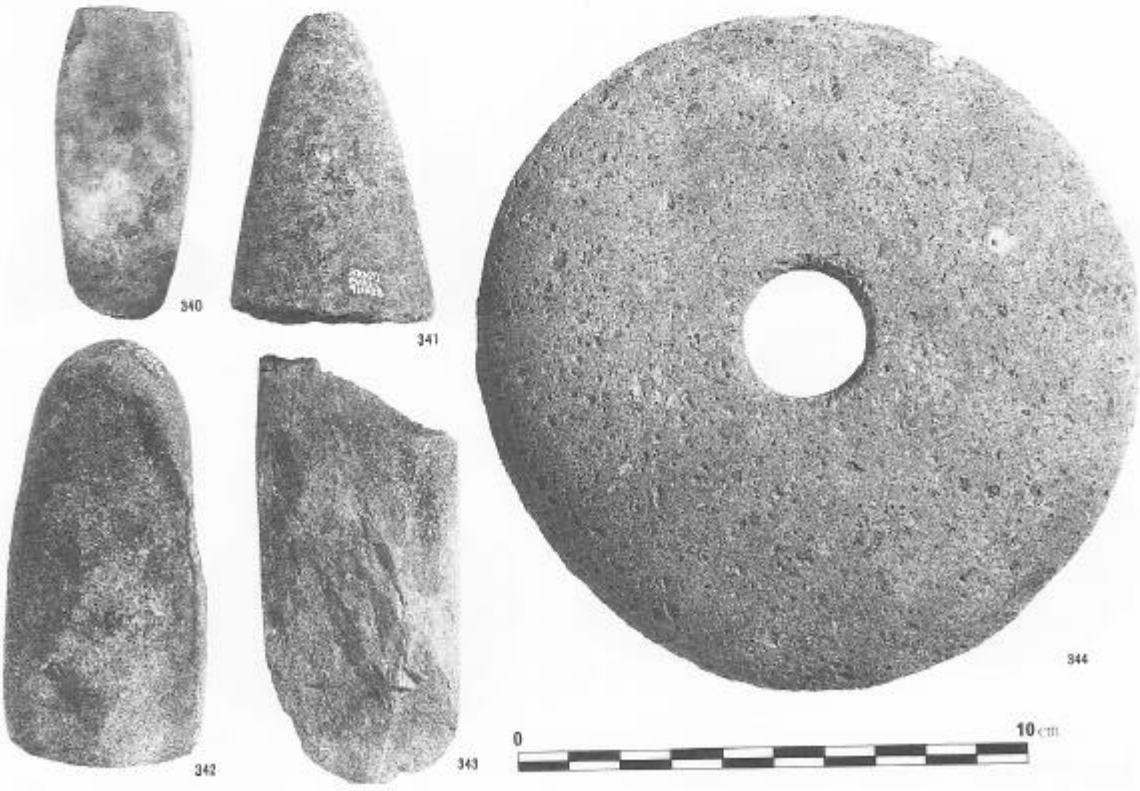

276
277
278
279
280
281
282
283
284
0
10cm

（裏）

出土遺物（13）

図版18





出土遺物（14）

出土遺物（15）

図版20

出土遺物（16）

萱刈沢II遺跡

（3KKZ－II）

第１章　調査の概要

第１節　遺跡の概観

萱刈沢Ⅱ遺跡は、北緯40°6′41″、東経140°0′48″に位置する。能代市から国道７号線を秋田市方向に南下し、八竜町に入って間もなく萱刈沢の集落に至る。集落の北側にはやや大きな沢が形成されており、遺跡はその沢を東に500mほど逆上った左手の台地上に立地している。

台地は、標高28～31mとほぼ平坦であるが、台地南縁部は西から東へ切れ込む沢の浸食作用により一段低い平坦面が形成されている。したがって、台地南縁部は階段状の地形となっており、北から南に向かって標高26～30mの平坦面（上位面）、約８mの比高差をもって一段低い平坦面（下位面）、さらに３～４mの比高差をもって沢に達する。下位面の標高は、18～20mである。

沢の上流には寒堤と呼ばれる溜池が造られているが、その下流（西側）にも小規模な堤を設けて遊水池が造られている。計画道路は、この遊水池を跨いで南北に台地を貫くように通る。平成元年５月に実施された遺跡範囲確認調査では、縄文時代中期の竪穴住居跡、土坑、平安時代の竪穴住居跡等が確認されており、縄文時代と平安時代の集落跡と推測されていた。計画道路は、その集落跡のほぼ中央部にかかることになったのであるが、その後工事の工法変更により、沢を跨ぐ橋脚部分と工事用道路部分のみが調査対象となった。このため、調査は台地南縁部を部分的に行うこととなった。

なお、本遺跡と沢を挟んだ南側の台地には萱刈沢Ⅰ遺跡が立地している。

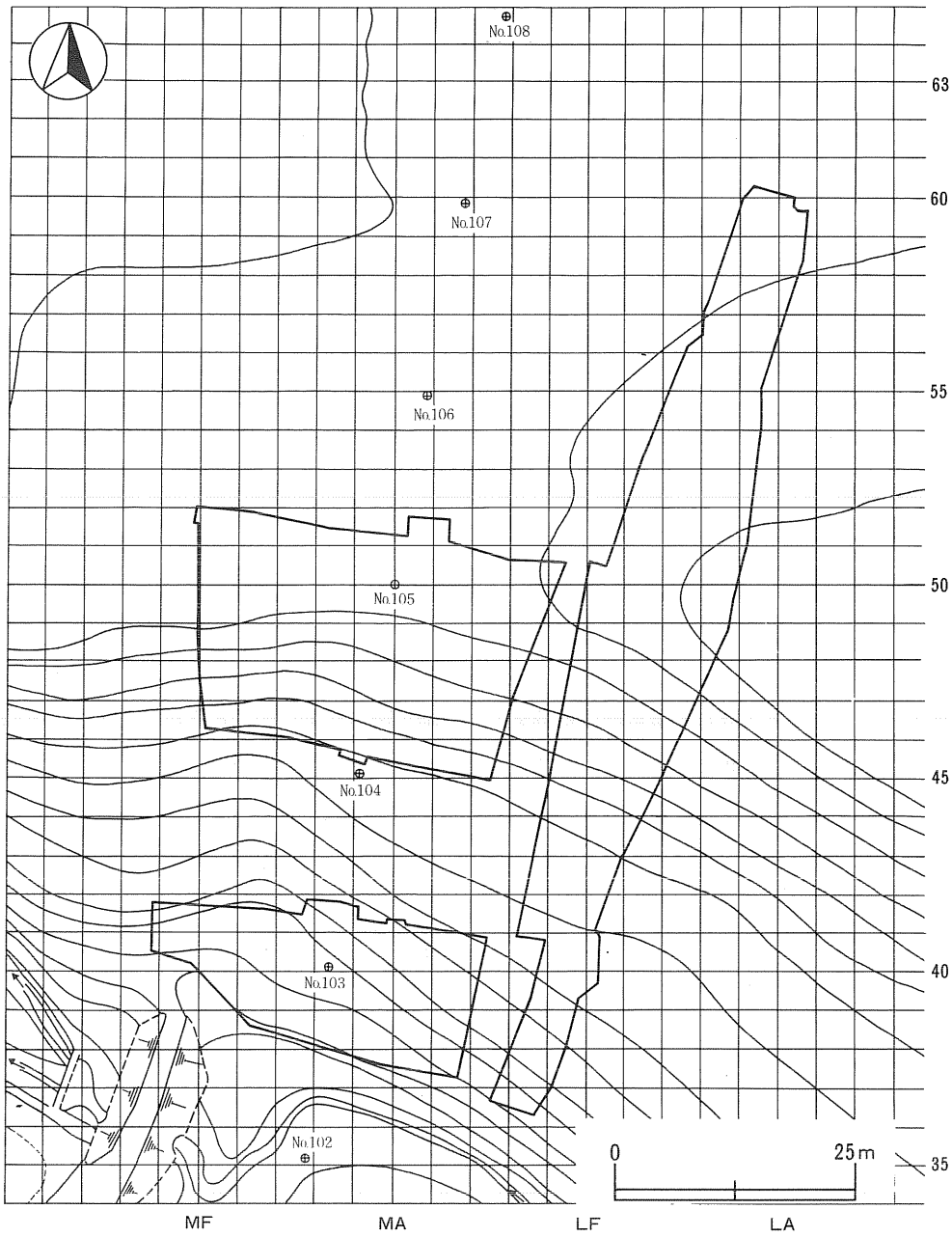
第２節　調査の方法

１．調査区の設定

調査対象区に４m×４mのグリッド（方眼）を設定した。グリッドの設定にあたり、調査区内に所在する道路計画センター杭No.105を原点として国家座標第Ⅹ系座標北を求め、この座標北のラインを南北基線Ｙ軸とし、これに直交するラインを東西基線Ｘ軸とした。基準交点No.105をＭＡ50とし、Ｙ軸に２桁の算用数字、Ｘ軸に２文字のアルファベットを付し、各グリッドの南東隅の杭で両者を組み合わせてグリッド名とした。

２．発掘方法および記録の作成

調査区は、上位面、斜面、下位面と大きく３つに分けられるが、斜面と下位面の調査面積が



第69図　萱刈沢Ⅱ遺跡グリッド配置図

大部分を占めていた。一方、沢は寒堤の用水流路を確保する必要上排土を置けないことから、排土場所の確保が問題となった。そこで、上位面に排土を置くこととし、このためベルトコンベアー40数台を導入した。また、斜面部には比較的大きな木根が残っていることから、バック

ホーにより抜根を行った。

遺構の検出は、地山漸移層または地山上面において行い、断面図、平面図、遺物出土状況図等を作成した。縮尺は、20分の１を原則とした。

遺物の取り上げは、出土位置と出土層位またはレベルを記録して行った。

写真による記録は、35mm判と６×4.5判のカメラを用いて行い、モノクローム、カラーリバーサルの２種類のフィルムを使用した。

３．遺物整理の方法

出土した遺物は、コンテナ14箱分である。これらの遺物を洗浄し、出土位置、出土年月日等を注記後接合を行った。実測図の作成は、縮尺1/1で行った。

第３節　調査の経過

10月２日　萱刈沢公民館において作業について説明を行った後、調査区、排土置場等の刈り払いを行う。

10月６日　調査区斜面上方の抜根作業をバックホーにより行った。

10月11日　斜面上方と上位面の粗掘りを開始する。下位面南端の沢に面した斜面部に土留柵を設置する。文化課熊谷学芸主事来跡。

10月12日　斜面上方で等高線に平行するように溝１条を検出した。

10月16日　ＭＣ39、ＭＢ39グリッド第Ⅱ層中で土器片、石器剝片が出土している。

10月17日　雨または霰が降る天気の中で粗掘りを行ったが、斜面部は滑りやすいため、斜面下方に地点を移して行った。

10月24日　斜面部の遺構プラン検出作業を行った。その結果、溝２条、土坑５～６基、柱穴様ピット５基を検出した。また、溝２条を中心とする検出状況を撮影した。

ＬＦ40グリッドで焼土と炭化物を検出した。竪穴住居跡の地床炉の可能性がある（ＳＩ05）。

ＫＪ58、ＬＡ57・58グリッドで平安期の竪穴住居跡を検出した（ＳＩ03・04・19）。

10月25日　斜面で検出した土坑の調査に着手。ＳＫ06・07・08・09・11・12は、等高線に沿って並んでいる。

ＳＩ03・04・19の調査に着手。壁は残っておらず、壁溝と貯蔵穴と思われる落ち込みを検出した。

10月26日　ＭＢ40グリッドで遺物がまとまって出土しており、遺構の可能性あり（ＳＩ17）。

10月27日　溝状遺構の平面図を作成した。

10月30日　ＳＩ17の遺物出土状況を撮影。ＳＫ08埋土中から復元可能な土器が出土した。建設省能代工事事務所 姉崎氏、伊藤氏、今野氏来跡。

10月31日　ＭＡ45、ＭＢ45グリッドで土坑と思われるプランを検出した。かなりの急斜面に立地している。ＳＩ05の精査を行い、柱穴と思われるピットを検出した。ＳＫ08の掘り込みは、下方に広がる様子がみられ、フラスコ状土坑となるものと推測される。

11月２日　雨のため遺構の精査が進まず、作業を中止する。

11月６日　雨のため図面と遺物の整理を行った。

11月８日　ＬＣ50グリッドで長軸４ｍ、短軸３ｍの炭化物を含む落ち込みを検出し（ＳＩ25）調査に着手した。ＳＫ08については、脂肪酸分析用の土壌採取を行った。また、ＳＫ06・07・08・09・21はいずれもフラスコ状土坑であり、深さは２ｍをこえるようである。遺物は、埋土上位に縄文土器が含まれるが、中位以下には含まれない。

11月14日　ＳＩ17土層観察用のベルトを除去し、遺物の取り上げを行った。

11月15日　浜口小学校児童（４～６年生）遺跡見学。

11月16日　ＳＩ17とＳＫ28の平面図作成。

11月17日　ＬＥ42グリッドで条痕文土器を検出した。

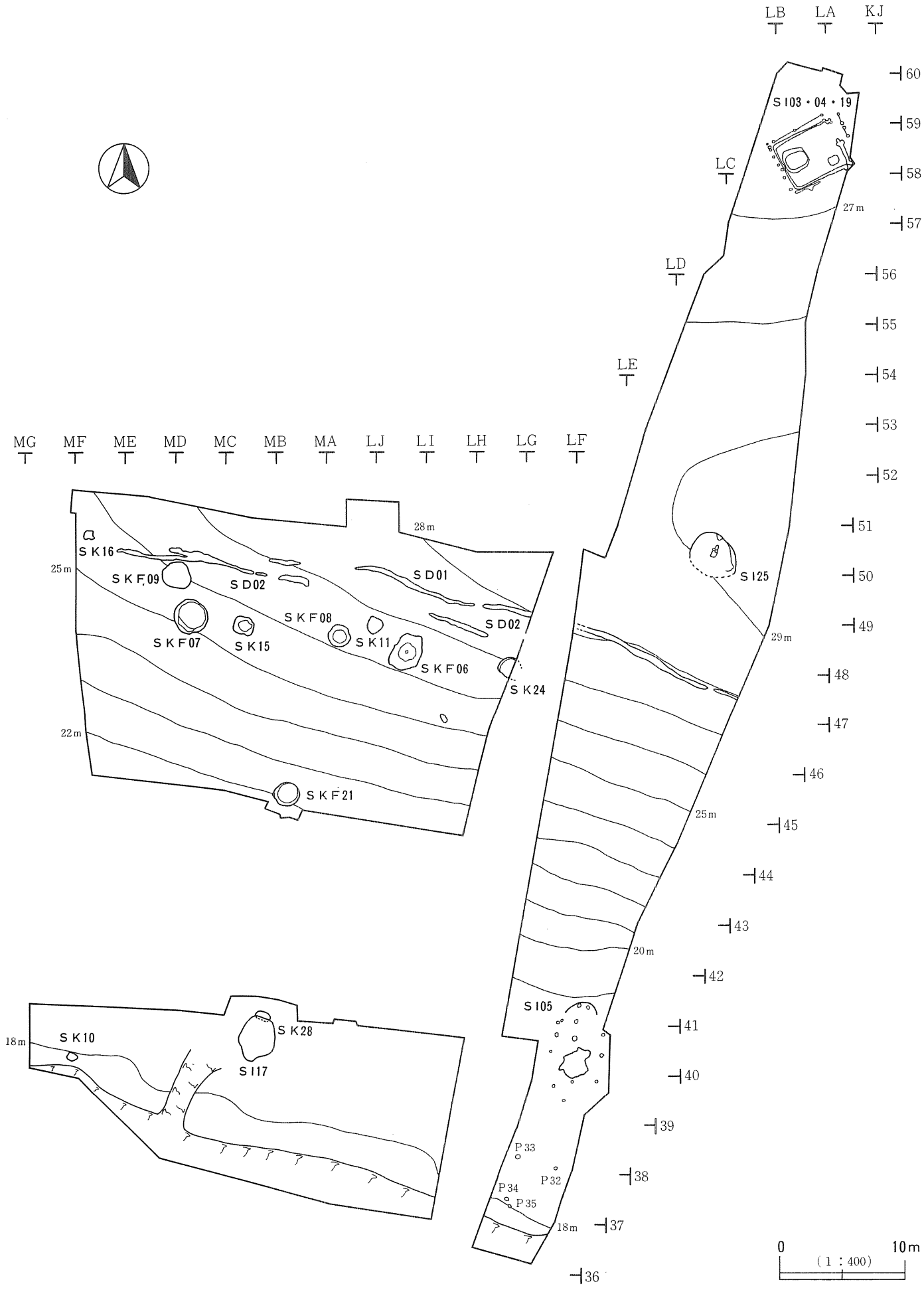
11月20日　ＳＫ06の平面図を作成。斜面部の全景写真を撮影した。

11月21日　ＳＫ08の調査を終了した。下位面東端の柱穴様ピット調査終了。上位面および下位面の全景を撮影した。

11月22日　地形測量に着手する。湖北小学校児童遺跡見学。

11月27日　撤収に向けての作業を行った。基本土層実測も行う。

11月30日　すべての作業を終了し、撤収する。

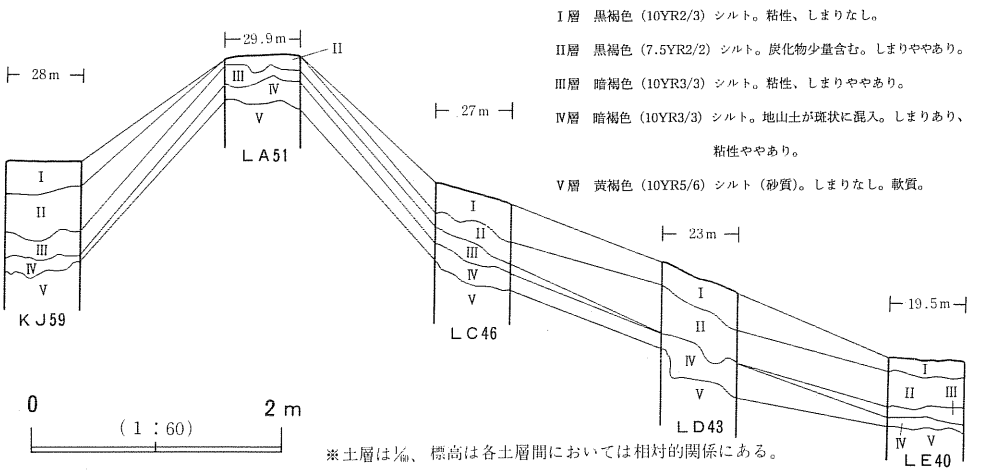


第70図　萱刈沢Ⅱ遺跡遺構配置図

第２章　調査の記録

第１節　遺跡の基本土層

第71図に示した基本土層は、調査区東端において北（左）から南（右）にかけて観察・記録したものである。地形の上で斜面部を含むことから、それぞれの土層は地点によって微妙に異なるが、ほぼⅠ～Ⅴ層に大別された。Ⅰ～Ⅲ層は遺物包含層、Ⅳ層が地山漸移層、Ⅴ層が地山である。遺構検出面は、ⅣないしⅤ層である。



第71図　萱刈沢Ⅱ遺跡基本土層図

第２節　検出遺構と出土遺物

遺跡の地形は、第１章第１節で述べたように大きく３つに分けられる。すなわち、標高26～30mの上位面、標高18～20mの下位面、上位面から下位面に至る斜面の３つである。本節においては、この地形ごとに検出された遺構と遺物をみていきたい。

１．上位面の遺構と遺物

上位面は、斜面に近い南東側の標高が高く、台地の奥に行くにしたがい低くなっている。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡１軒、平安時代の竪穴住居跡３軒である。

(1)縄文時代

ＳＩ25竪穴住居跡（第72・73図、図版23・24）

［位置・確認状況］　ＬＢ49・50、ＬＣ49・50グリッド地山面に不整円形のプランを検出し

た。本遺構は、上位面南東寄りに位置し、調査区の中で最も標高の高い場所にある。また、南隣に倒木痕がみられる。

［形態・規模］　南側半分について壁が不明確なこともあり、北西南東方向にやや長い楕円形と推測される。その規模は、長軸方向が396cm、短軸方向が推定で360cm、確認面から床面までの深さ９～16cmである。

［床面・柱穴］　床面は小さい凹凸はみられるが、全体としてはほぼ平坦である。東側の壁に近い床面はゆるい段を有する。北東壁寄りに暗褐色の落ち込みが検出された。それは北東南西方向に細長く約106cmあり、これと直交する方向の幅は最大で43cm、床面からの深さは３～８cmである。この埋土中には焼土粒と炭化物が混入していたことから、炉跡の可能性もあるが、熱を受けて硬化した面が認められないこともあり明らかでない。

柱穴と思われる落ち込みは、合計15基検出されたが、P_4、P_6、P_8、P_{11}については、土層断面から本住居跡より新しいことが判明している。P_{15}については、本住居跡に伴う可能性が高いと思われる。これ以外の柱穴の帰属については不明である。

［埋土の状況］　第72図中では８層に分けられたが、本住居跡の埋土のみをみると、１・２・２′・５の４層のみであり、床面に褐色土が部分的に堆積し、その上を大量の暗褐色土が覆っている。

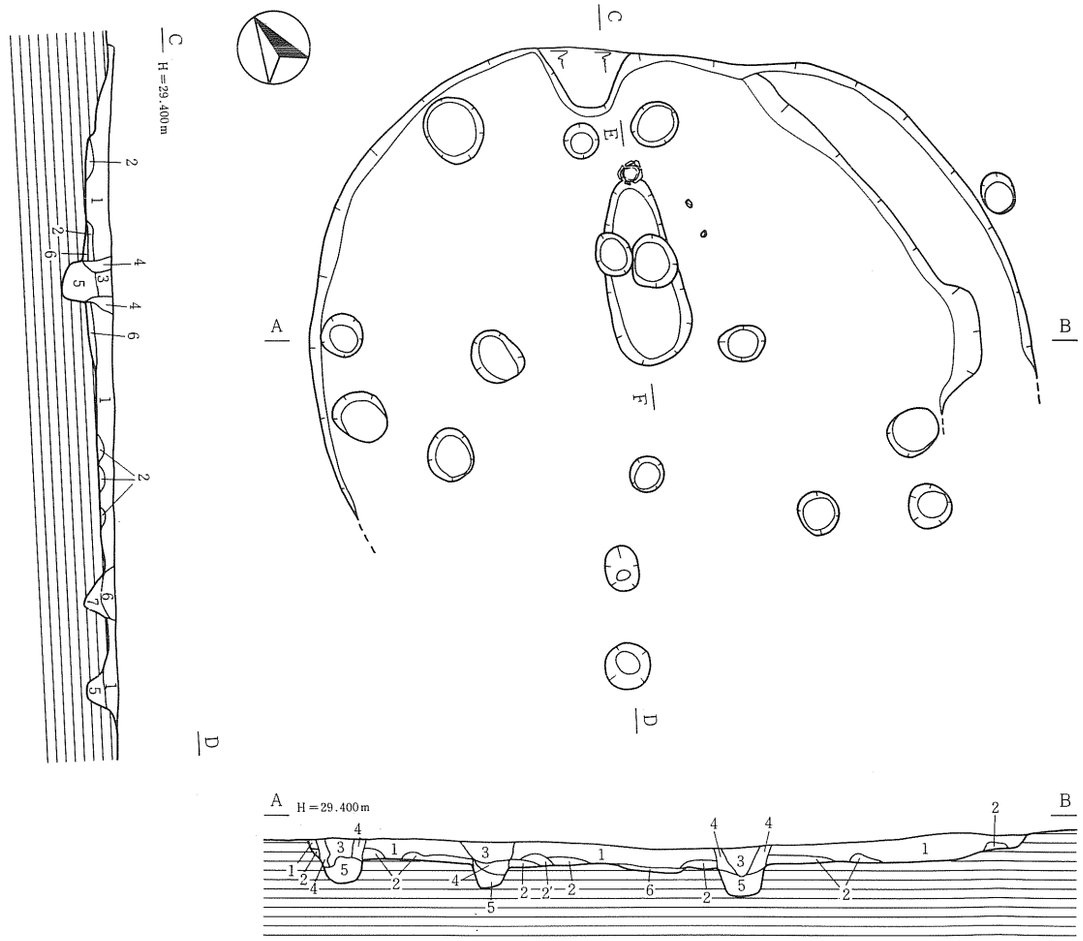
［出土遺物］　前述の炉の可能性が指摘される落ち込み（P_zと略。以下同じ。）の近くから土器片が出土している。１は、P_zの長軸の北東側に伏せられた状態で見つかった。深鉢形土器の底部から体部にかけての資料であり、器形は底部の張り出しが強く、一旦内側に屈曲したのち体部に移行する。ＬＲ縄文が横位又は縦位に施されている。内面には煤状炭化物が付着している。胎土は砂粒が少なく、繊維の混入は認められない。底径は8.6cmである。１のほかにP_zの東側から土器片２点が出土しているが、１点は１と接合し、もう１点は無文の小破片であり１とは別個体であった。

［時期］　出土遺物の中に、施文されている文様等から時期を決定できるものはない。あえて時期を求めようとすれば、１の器形からある程度導くことが可能かもしれない。１の器形で注意されるのは、底部の張り出しである。これに類似するのは、ＳＫＦ08出土の15の土器底部と思われ、遺構外出土の前期のものとは異なる。この点に注目すれば、本住居跡の時期を中期中葉と推測することができる。

(2)平安時代

ＳＩ03・04・19竪穴住居跡（第73・74図、図版24・25・26）

［位置・確認状況］　上位面のやや奥に位置し、若干標高の低い場所にある。調査区の中では最も北に位置する。ＫＪ57～59、ＬＡ57～59、ＬＢ58グリッドで長方形を描く壁溝のみを検



［ＳＩ25］

１．暗褐色（10YR3/4）シルト。炭化物、地山粒を含む。粘性、しまりあり。
２．褐　色（10YR4/6）シルト。炭化物、地山粒を含む。粘性強く、良くしまっている。
２′.暗褐色（10YR3/4）シルト。２に較べ軟質。
３．黒褐色（10YR3/2）シルト。粘性、しまりあり。
４．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山粒を含む。粘性、しまりあり。
５．褐　色（10YR4/4）シルト。地山ブロックを含む。粘性あり、軟質。
６．黒褐色（10YR2/2）シルト。粘性あり、軟質。
７．暗褐色（10YR3/3）シルト。地山粒を含む。粘性あり、軟質。

［ＳＩ25地床炉］

‘８．暗褐色（10YR3/4）シルト。焼土粒、炭化物、地山粒を含む。粘性、しまりあり。

第72図　ＳＩ25竪穴住居跡実測図

出した。これは竪穴住居跡の掘り込みが地山まで及んでおらず、地山漸移層を床面としていたところ、表土除去の段階で壁を取り去ってしまったことによる。

［形態・規模］　数箇所に土層観察用のベルトを残して掘り進めたところ、１軒単独ではなく数軒が重複していることが明らかになった。壁溝の切り合いから２軒、柱穴の配置から１軒の合計３軒の存在が推測される。

ＳＩ03としたものは、P_{1}～P_{10}とそれらと重複する壁溝の範囲で、長辺490～510cm、短辺400～405cmの長方形と推測される。壁溝は、幅13～23cm、深さ５～15cmである。

ＳＩ04としたものは、柱穴配置から推測したもので、P_{11}～P_{27}により囲まれた範囲であり、長辺480～510cm、短辺455～490cmのややいびつな長方形を呈する。

ＳＩ19としたものは、壁溝および柱穴の切り合いから、ＳＩ03よりも古い時期のものと推測され、P_{28}～P_{31}とそれらと重複する壁溝で、その規模は約390cmである。他の３辺は不明であるが、ＳＩ03の壁溝を共有していた可能性がある。

［床面・付属施設］　床面はほぼ平坦であるが、硬くしまっている面は認められなかった。北東辺内側の中央やや北寄りに焼土の付着がみられ、その範囲は25×25cmの隅丸方形である。カマド構築材とされる粘土等が検出されていないが、その位置からカマド火床と考えられる。

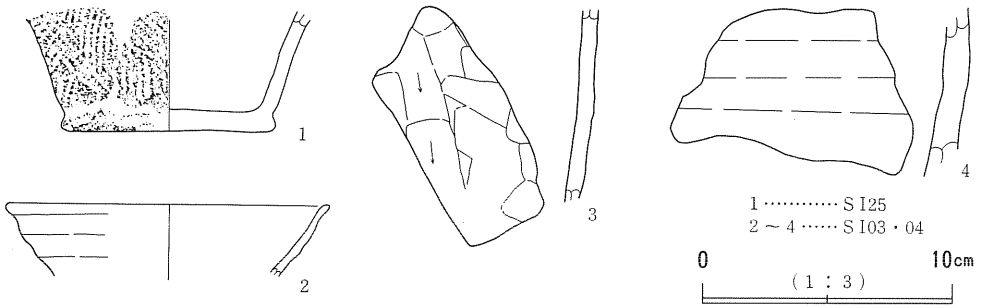
東隅と西隅近くに方形の落ち込みがそれぞれ１基検出された。竪穴住居跡と方向性が同じであることから、３軒のうちのいずれかに伴うものとして調査を行った。東隅の落ち込み（Ａ）は、長辺85cm、短辺72cm、深さ33～42cmの規模である。壁の中部から上部にかけて焼けており、それに伴うものと思われる焼土を含む土が埋土上位に堆積している。西隅近くにある方形の落ち込み（Ｂ）は、長辺195cm、短辺185cm、深さ13～18cmの規模である。底面は、平坦で硬くしまっている。ところで、（Ｂ）の土層断面をみると、竪穴住居跡の埋土を切っていることがわかる。したがって、（Ｂ）は竪穴住居より新しい時期のものということになる。

［埋土の状況］　前述のように、プラン確認前に埋土の大部分を掘り出してしまっているのでその詳細は不明である。ただ、竪穴住居跡北側コーナー部分が調査境界にかかっており、その部分の断面でみる限りでは黒褐色土一層の堆積である。

［出土遺物］　２は、方形の落ち込み（Ｂ）の埋土下位から出土した土師器坏である。ロクロにより成形されており、内湾ぎみに立ち上がったのちややひらいて口縁に至る。色調は浅黄橙色10YR8/3で、胎土は緻密である。推定の口径は13cmである。３は、落ち込み（Ａ）の埋土中位から出土した土師器甕の胴部破片である。外面はヘラケズリ、内面はナデ調整が施されている。また、内外面に煤状炭化物が付着している。胎土は、砂粒を多く含む。４も土師器甕の胴部破片であるが、ロクロ成形されている。胎土には小砂利が多く含まれている。色調は、

浅黄橙色10YR8/3である。

［時期］　平安時代後半と推定される。



第73図　上位面遺構内出土遺物

2．斜面の遺構と遺物

斜面部の遺構の配置状況は、上位面から斜面に移る肩口のところに溝状遺構が東西方向に伸びている。その直下の標高25～27mに土坑が集中している。

(1)縄文時代

①フラスコ状土坑

ＳＫＦ06フラスコ状土坑（ＳＫ06）（第75図、図版27・28）

［位置・確認状況］　ＬＩ48グリッド地山面において、当初は２ないし３基の土坑が重複したものとして確認された。調査を進めたところ、堆積した埋土の違いであることがわかった。

［形態・規模］　開口部は斜面に沿ってやや長い不整円形であり、長径333cm、短径237cmである。頸部も不整円形であり、径132～140cmの大きさがある。底部は径約200cmのほぼ円形である。底面はほぼ平坦であり、中央部に径24×26cm、深さ５cmのピットを有する。確認面から底面までの深さは、200～220cmである。

［埋土の状況］　最下層には自然堆積と思われる黒褐色土があり、その上から埋土上位にかけて壁の崩落土と思われる褐色土がやや多くみられる。

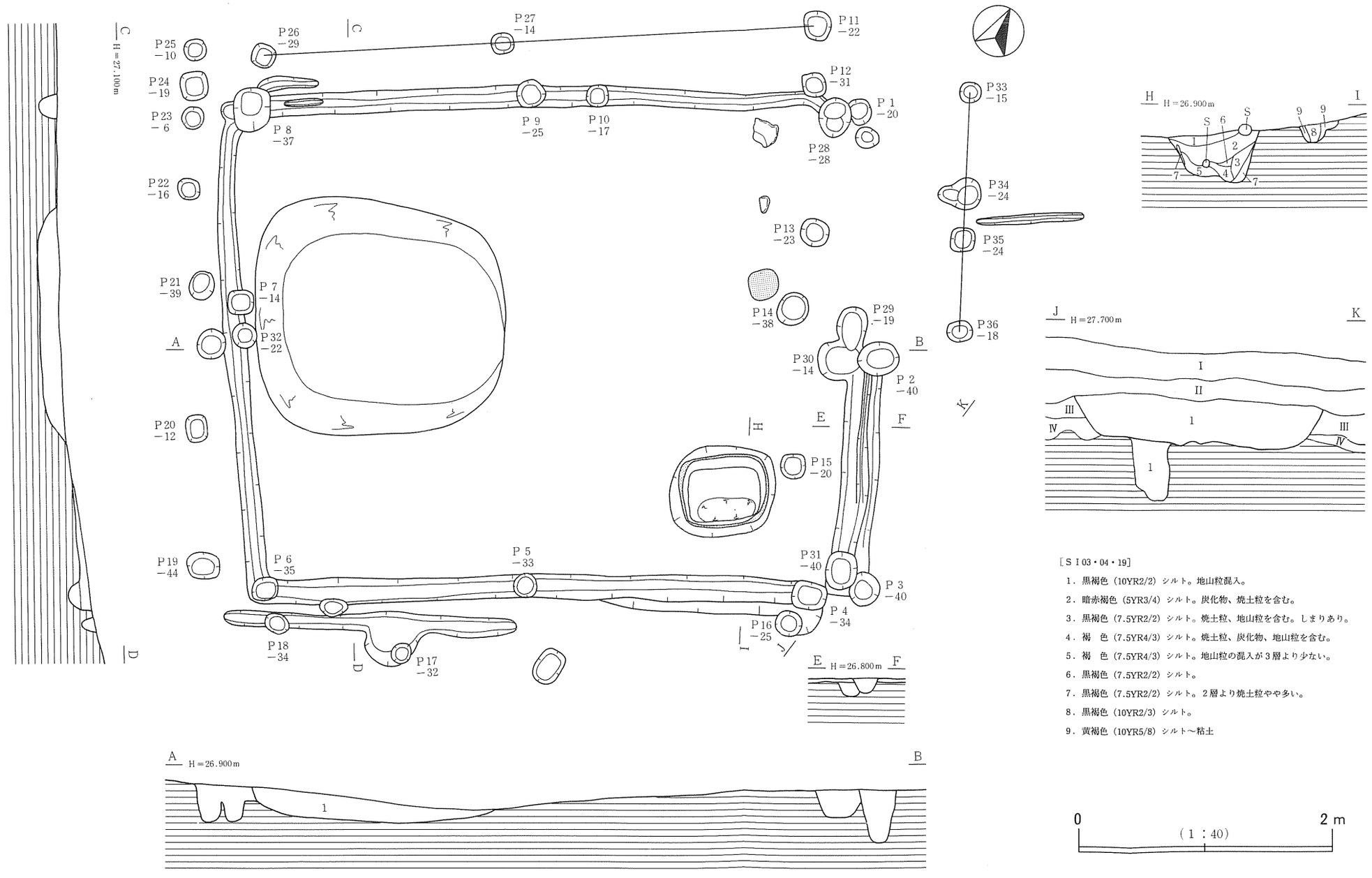
［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ07フラスコ状土坑（ＳＫ07）（第76・82・90図、図版28・29）

［位置・確認状況］　ＭＣ49グリッドの南西側、地山漸移層中で砂を含む黒褐色プランを検出した。

［形態・規模］　平面形は円形、断面形は鍋状を呈するが、中間に緩いくびれがみられる。開口部径は263～285cm、底部径は202～225cm、深さは斜面上方の北側で203cm、斜面下方の南側は150cmである。

［埋土の状況］　最下層に暗褐色土、上位に暗褐色または黒褐色土がレンズ状に堆積してい

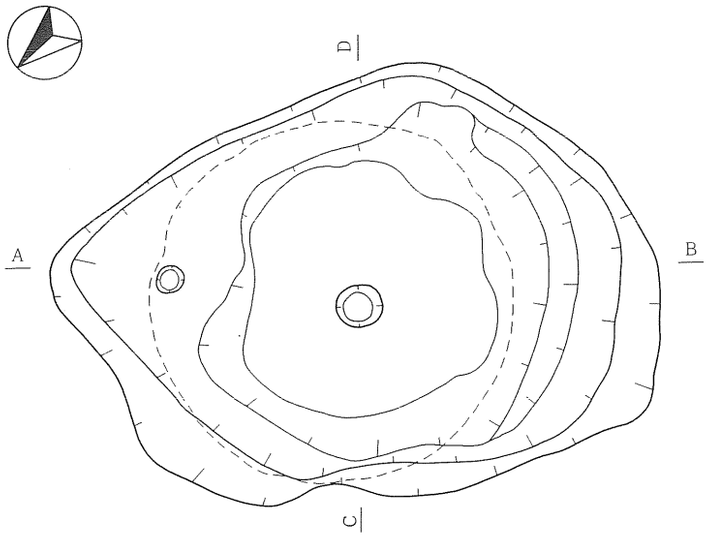


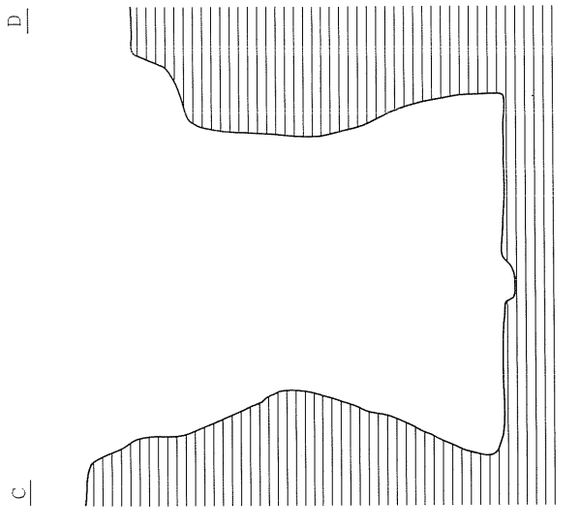
［ＳＩ03・04・19］

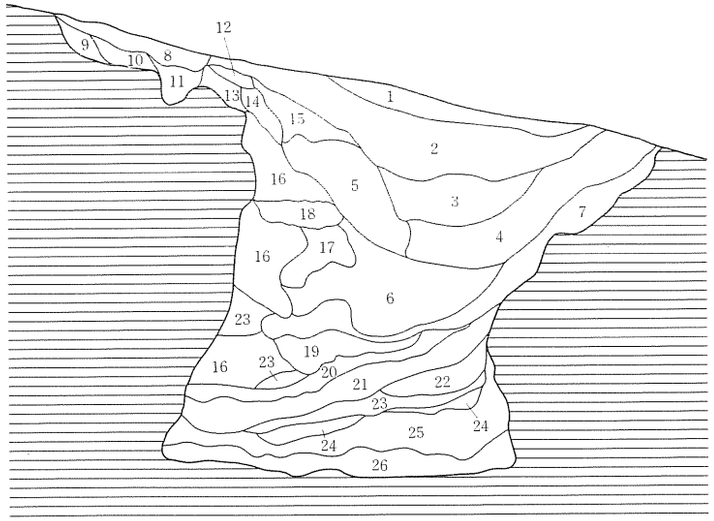
1．黒褐色（10YR2/2）シルト。地山粒混入。
2．暗赤褐色（5YR3/4）シルト。炭化物、焼土粒を含む。
3．黒褐色（7.5YR2/2）シルト。焼土粒、地山粒を含む。しまりあり。
4．褐　色（7.5YR4/3）シルト。焼土粒、炭化物、地山粒を含む。
5．褐　色（7.5YR4/3）シルト。地山粒の混入が３層より少ない。
6．黒褐色（7.5YR2/2）シルト。
7．黒褐色（7.5YR2/2）シルト。２層より焼土粒やや多い。
8．黒褐色（10YR2/3）シルト。
9．黄褐色（10YR5/8）シルト～粘土

0　2 m
（１：40）

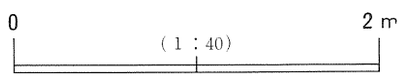
第74図　ＳＩ03・04・19竪穴住居跡・ＳＫ18土坑実測図







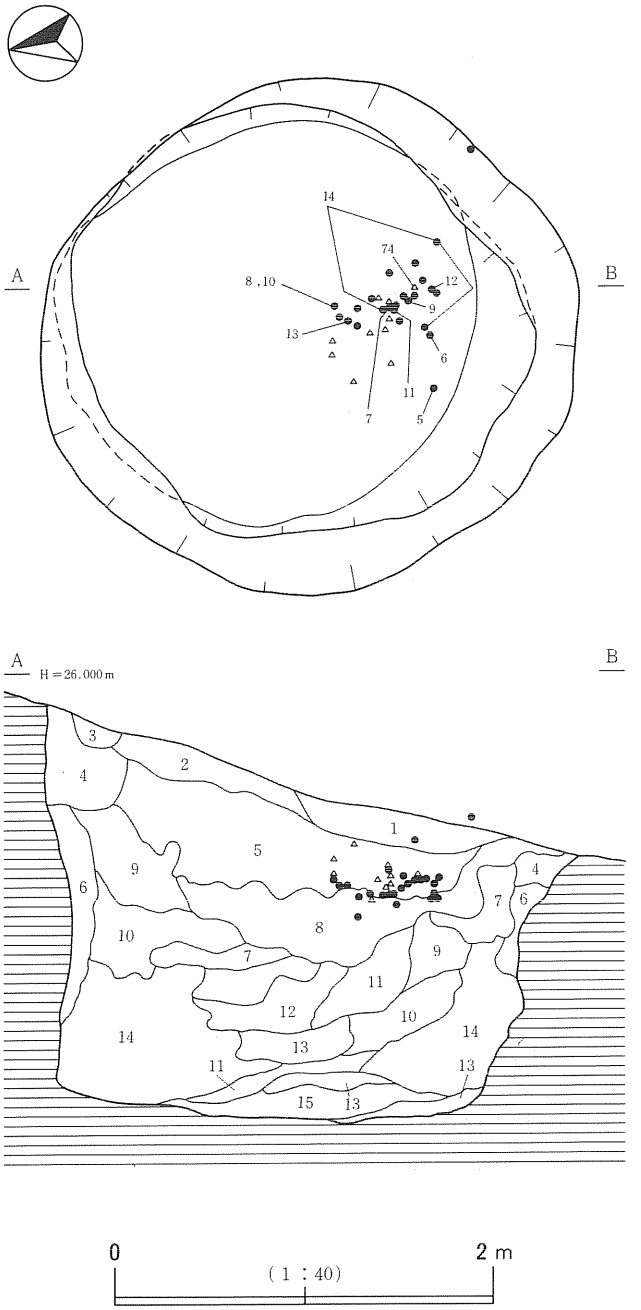
水糸レベル　27.000m



［SK06］

1．黒褐色（10YR2/3）シルト。軟質でしまりに欠ける。
2．黒褐色（10YR3/2）シルト。砂、炭化物を含み、しまっている。
3．黒褐色（10YR2/3）シルト。砂を含み、しまっている。
4．暗褐色（10YR3/3）シルト。砂、炭化物を含み、しまっている。
5．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山崩壊土がブロック状に入る。しまっている。
6．黒褐色（10YR3/2）シルト。地山崩壊土を含み、しまっている。
7．暗褐色（10YR3/3）シルト。砂、炭化物を含み、しまっている。
8．黒褐色（10YR2/2）粘土。炭化物、地山ブロックを含む。粘性があり、良くしまっている。
9．暗褐色（10YR3/4）シルト。粘性がなく、しまりがない。
10．暗褐色（10YR3/3）シルト。地山ブロックを含み、粘性がない。
11．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山ブロックを含み、しまり、粘性ともない。
12．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山粒をやや多く含む。しまりがない。
13．暗褐色（10YR3/4）シルト。暗褐色土がブロック状に見られる。
14．褐　色（10YR4/4）シルト。地山粒を含み、良くしまっている。
15．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山粒をやや多く含む。
16．黄褐色（10YR5/6）シルト。地山崩壊土がブロック状に入る。しまりややあり。
17．褐　色（10YR4/4）シルト。16層より地山崩壊土の混入が少ない。
18．黄褐色（10YR5/6）シルト。地山粒をやや多く含む。粘性はない。
19．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山粒を含み、良くしまっているが、粘性はない。
20．褐　色（10YR4/4）シルト。地山粒、地山ブロックを含む。良くしまっている。
21．にぶい黄褐色（10YR5/3）シルト。地山粒を多く含む。良くしまっている。
22．黒褐色（10YR3/2）地山粒を多く含む。良くしまっている。
23．明黄褐色（10YR6/6）砂。地山崩壊土。良くしまっている。
24．黒褐色（10YR3/2）シルト。地山粒を多く含む。良くしまっている。
25．暗褐色（10YR3/3）シルト。地山粒を含み、良くしまっている。
26．黒褐色（10YR2/3）シルト。地山粒を含み、非常に良くしまっている。

第75図　ＳＫＦ06フラスコ状土坑実測図



［ＳＫ07］
1．黒　色（10YR2/1）シルト。炭化物をムラなく含む。粘性強い。
2．黒褐色（10YR3/2）シルト。しまりなし。
3．暗褐色（10YR3/3）シルト。黄褐色土粒微量含む。
4．明褐色（7.5YR5/8）砂～シルト。粘性、しまりなし。
5．暗褐色（10YR3/4）シルト。炭化物、明黄褐色土粒を含む。粘性強く、良くしまっている。
6．明褐色（7.5YR5/8）砂～シルト。壁の崩落土。粘性なし、非常に良くしまっている。
7．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。ブロック状の壁崩落土が堆積。非常に良くしまっている。
8．暗褐色（10YR3/4）シルト。炭化物、黄褐色土粒を含む。粘性、しまりあり。
9．黄褐色（10YR5/6）砂～シルト。壁の崩落土がブロック状に入る。
10．黄褐色（10YR5/6）砂～シルト。良くしまっている。
11．褐　色（10YR4/4）砂～シルト。明黄褐色土粒を含む。粘性強い。
12．褐　色（10YR4/4）砂～シルト。11層に較べ明黄褐色土の混入少ない。粘性強い。
13．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。４層の土をやや多く含む。
14．明褐色（7.5YR5/8）砂。壁崩落土。良くしまっている。
15．暗褐色（10YR3/4）砂～シルト。粘性強く、良くしまっている。

0　2m
（１：40）

第76図　ＳＫＦ07フラスコ状土坑実測図

るほかは、壁の崩落土と思われる褐色土が中位から下位にかけて堆積している。

［出土遺物］　遺物は、埋土上位の暗褐色土または黒褐色土中からすべて出土している。これらの土は、本遺構が壁の崩落を繰り返し半分以上埋まった後に斜面上方から流入した土と推

定される。5は、小型の鉢形土器の口縁部と思われ、撚糸文が施文されている。胎土には、細かい砂粒がみられる。6は、深鉢形土器の口縁部で、小波状を呈する。単節斜縄文ＬＲの下端を横位の沈線で画し、その沈線に沿って刺突が施されている。胎土に細かい砂粒を含み、焼成は良好である。7は、縦位の条線が施され、煤状炭化物が付着している。8は、木目状撚糸文が施され、胎土に繊維を混入している。9・10は同一個体であり、隆帯間に複節斜縄文Ｒ（ＬＬ）を施文した後隆帯に沿って沈線を施している。内面は、丁寧なナデ調整がなされている。11は、単節斜縄文ＲＬを施文し、その下に2条の横位沈線を引きその沈線間を無文としている。外面に煤状炭化物が付着し、胎土に繊維を含む。12は、単節斜縄文ＬＲの地文の上に沈線が施されている。胎土に少量の砂粒を含む。13・14は、単節斜縄文ＲＬが施されている。75は、横長剝片に調整を加えた石篦である。主要剝離面の中央部に第1次剝離面を残し、縁辺部に剝離を行っている。

ＳＫＦ08フラスコ状土坑（ＳＫ08）（第77・82図、図版29・30）

［位置・確認状況］　ＬＪ48グリッドの北西隅寄りの地山漸移層中で円形のプランを検出した。

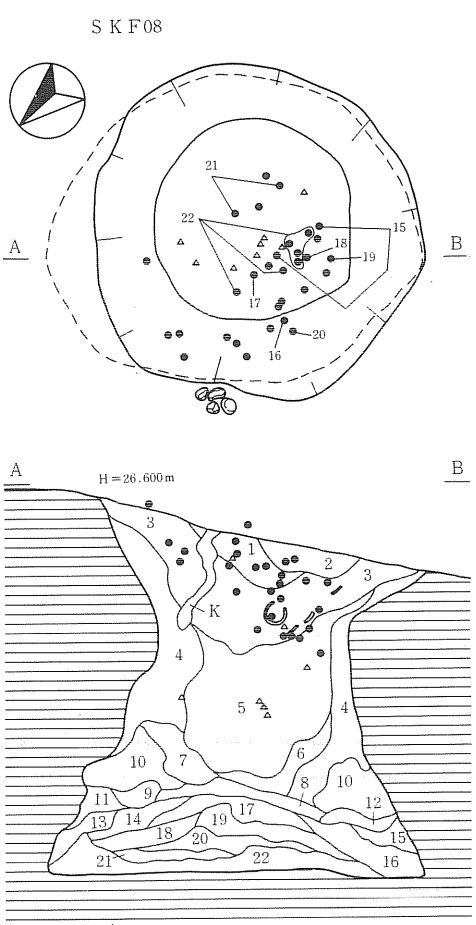
［形態・規模］　平面形は円形、断面形はフラスコ状を呈する。開口部径は173～183cm、頸部径103～110cm、底部は北東南西方向にやや長い円形で長径200cm、短径161cmである。確認面からの深さは、170～193cmである。

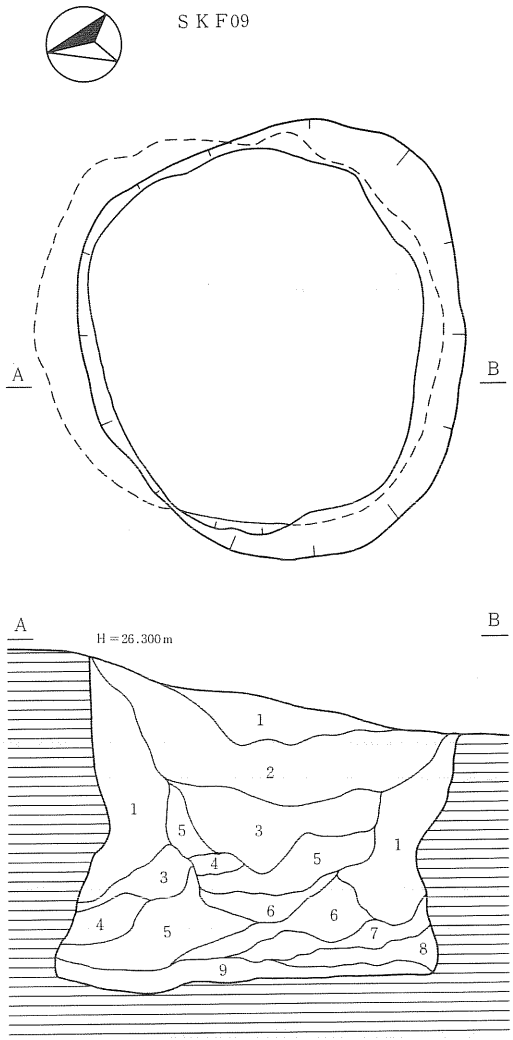
［埋土の状況］　褐色土または明らかに壁の崩落土と思われるブロックが、下位と中位に堆積しており、上から黒褐色土が流入堆積していく途中で壁の崩落が起きていることが推測される。

［出土遺物］　遺物は、埋土の上位の黒褐色土または暗褐色土から出土しており、斜面上方からの流入が推測される。15は、ＬＲの原体による地文に沈線で懸垂文を施した深鉢形土器である。内外面に煤状炭化物が付着している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。底部径6.6cm、現存高15.7cmである。16は、深鉢形土器の口縁部から体部に移行する部分の破片である。口縁部と体部を区画する刺突文を施し、体部に撚糸文を施文した後沈線文を矩形に巡らせている。煤状炭化物が内外面に付着し、胎土に砂粒を少量含む。17は、撚糸文の地文に沈線により円形文を施文している。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。18も撚糸文の地文に沈線が施されている。19は、円文または弧状の沈線、指頭によるつまみ上げ等により器表面に凹凸をつけ、円文内に単節斜縄文を充塡している。凸部は平滑にナデ調整がなされている。20～22は、地文のみの土器で、20は縦位の条線、21はＲＬ縄文、22は付加条が施文されている。

ＳＫＦ09フラスコ状土坑（ＳＫ09）（第77図、図版28・29）

［位置・確認状況］　ＭＤ50グリッド杭を中心とする地山漸移層中で円形のプランを検出し





［ＳＫ08］
1．暗褐色（10YR3/3）シルト。しまりあり。
2．黒褐色（10YR2/3）シルト。しまりなし。
3．暗褐色（10YR3/4）シルト。焼土粒、炭化物、地山粒を含む。しまりあり。
4．褐　色（10YR4/4）砂～シルト。炭化物、壁崩落土を含む。しまりあり。
5．褐　色（10YR4/4）砂～シルト。炭化物、壁崩落土を含む。ボソボソしてしまりなし。
6．暗褐色（10YR3/3）シルト。
7．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。ブロック状の壁崩落土を含む。しまりなし。
8．暗褐色（10YR3/3）シルト。
9．黄褐色（10YR5/8）砂。壁崩落土を多量に含む。しまりあり。
10．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。ブロック状の壁崩落土を含む。
11．褐　色（10YR4/6）砂。壁崩落土。しまりなし。
12．黄褐色（10YR4/8）砂。ブロック状の壁崩落土。しまりあり。
13．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。11層より暗褐色土を多く含む。しまりなし。
14．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。粘性、しまりあり。
15．暗褐色（10YR3/4）砂～シルト。炭化物、地山粒を含む。しまりなし。
16．暗褐色（10YR3/3）シルト。
17．黒褐色（10YR2/3）砂～シルト。壁崩落土を含む。
18．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。壁崩落土がブロックで堆積。しまりあり。
19．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。粘性強く、良くしまっている。湿潤である。
20．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。粘性強く、非常に良くしまっている。
21．暗褐色（10YR3/4）砂～シルト。良くしまっている。
22．褐色（10YR4/4）砂。良くしまっている。

［ＳＫ09］
1．褐　色（10YR4/6）シルト～粘土。良くしまっている。
2．褐　色（10YR4/6）シルト～粘土。粘性、しまりあり。
3．褐　色（10YR4/6）シルト～粘土。暗褐色土ブロックを含む。粘性、しまりあり。
4．褐　色（10YR4/4）砂。粘性なし。
5．褐　色（7.5YR4/6）粘土。粘性強い。
6．明褐色（7.5YR5/6）砂～シルト。粘性強い。
7．暗褐色（10YR3/4）シルト。しまりなし。
8．にぶい黄褐色（10YR4/3）砂～シルト。非常に良くしまっている。
9．褐　色（10YR4/6）砂。非常に良くしまっている。

0　2 m
（１：40）

第77図　ＳＫＦ08・09フラスコ状土坑実測図

た。

［形態・規模］　断面形は、中位に若干のくびれがみられる袋状を呈する。規模は、開口部径203×227cm、頸部径175×197cm、底部径204×217cm、確認面からの深さ130～170cmである。

［埋土の状況］　9層に分けられた埋土のほとんどが暗褐色から褐色を呈し、壁の崩落が終始起こっていたものと推測される。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫＦ21フラスコ状土坑（ＳＫ21）（第78・82図、図版30）

［位置・確認状況］　ＭＡ45グリッドの北西隅寄りの地山面で円形のプランを検出した。斜面部で検出した遺構のほとんどが斜面上方に位置するのに対し、本遺構は下方に位置するもののひとつである。

［形態・規模］　断面形は、中位がやや袋状を呈する。規模は、開口部径183～185cm、頸部径149～152cm、底部径175×193cm、確認面からの深さは160～208cmである。

［埋土の状況］　下位に黒褐色土、中位に壁の崩落土である褐色土、上位に暗褐色土という堆積がみられる。

［出土遺物］　土器片2点が出土したが、出土状況は不明である。23は、羽状縄文が施文された深鉢形土器の体部破片と思われる。内面に煤状炭化物が付着していたと思われる痕跡が認められる。煤状炭化物は割れ口部分にも付着している。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好である。24は、底部の破片であるが、煮炊きに使用されかなり脆くなっている。内面に煤状炭化物が付着している。胎土に砂粒を多く含む。

②土　坑

ＳＫ11土坑（第79図、図版31）

［位置・確認状況］　ＬＪ49グリッド杭を中心とする地山漸移層中で不整円形のプランを検出した。

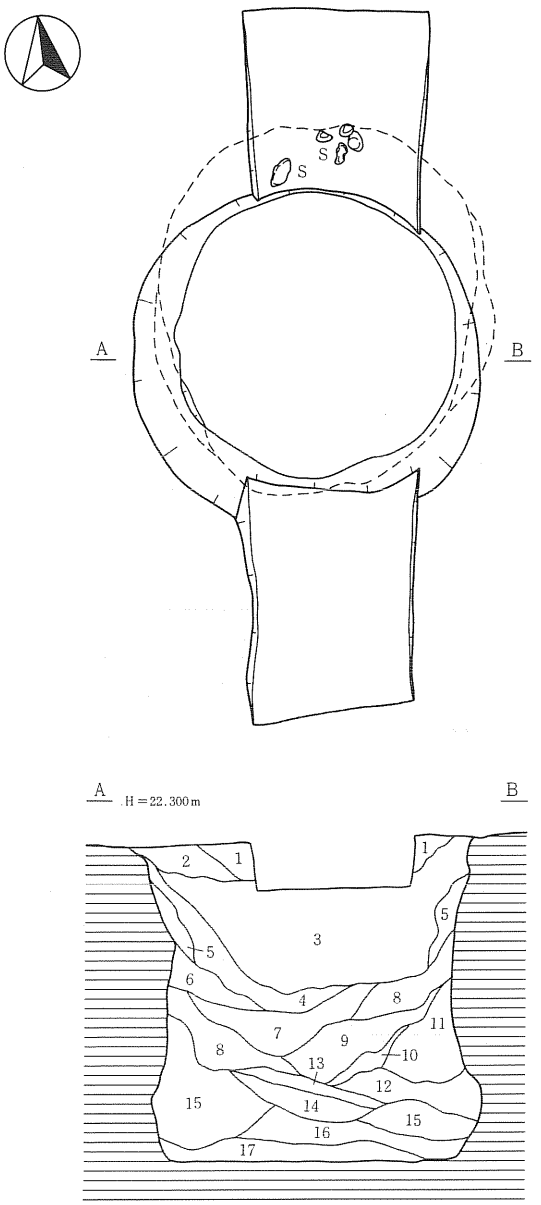
［形態・規模］　断面形は皿状に近い形態であり、規模は南北方向が135cm、東西方向が133cm、確認面からの深さは22～28cmである。底面中央から東寄りにもう一段の掘り込みが認められる。その規模は、南北方向45cm、東西方向55cm、底面からの深さ約16cmである。

［埋土の状況］　砂がちの地山土の混入割合が多く、斜面上方からの流入量が多いことが推測される。

［出土遺物］　縄文土器底部破片が1点出土した。

ＳＫ13土坑（第80図、図版31）

［位置・確認状況］　ＬＨ47グリッド南西寄りの地山漸移層中でプランを検出した。



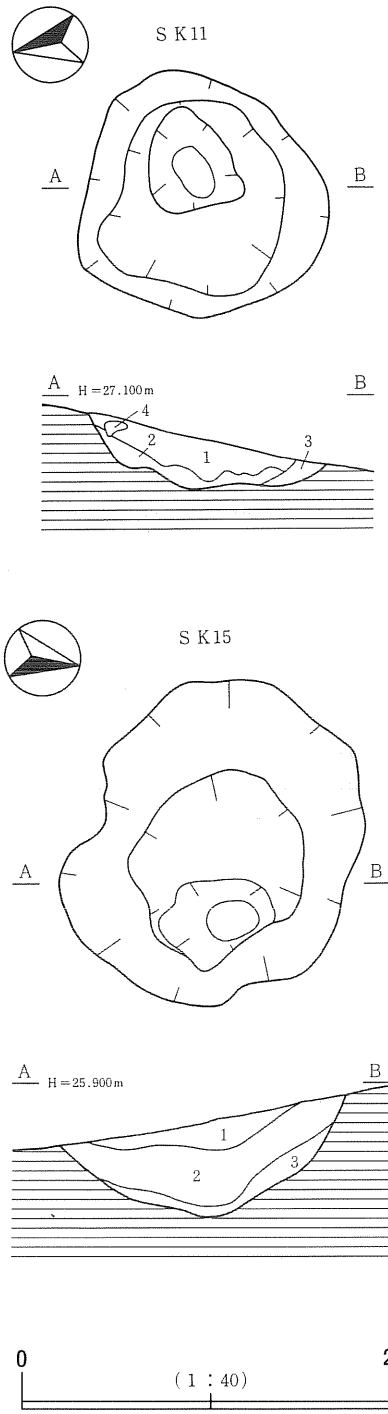
［ＳＫ21］
1．黒　色（10YR2/1）シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
2．黒褐色（10YR2/3）シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
3．黒褐色（10YR3/2）砂～シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
4．黒褐色（10YR2/3）砂～シルト。炭化物を含む。粘性、しまりあり。
5．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。粘性、しまりあり。
6．暗褐色（10YR3/4）砂～シルト。しまりなし。
7．黒褐色（10YR3/2）砂～シルト。粘性あり、良くしまっている。
8．褐　色（10YR4/4）砂。良くしまっている。
9．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。炭化物を含む。粘性強く、良くしまっている。
10．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。粘性強く、しまりなし。
11．黄褐色（10YR5/6）砂。良くしまっている。
12．黄褐色（10YR5/6）砂。粘性あり、良くしまっている。
13．黄褐色（10YR5/6）砂。非常に良くしまっている。
14．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。粘性、しまりあり。
15．黒褐色（10YR5/6）シルト。しまりなし。
16．暗褐色（10YR3/4）砂～シルト。粘性強い。
17．暗褐色（10YR3/4）シルト。粘性強く、良くしまっている。

第78図　ＳＫＦ21フラスコ状土坑実測図

［形態・規模］　平面形は楕円形、断面形が鍋底状である。規模は、長軸方向71cm、短軸方向42cm、確認面からの深さ約20cmである。

［埋土の状況］　粘性のない黒褐色土１層の堆積である。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。



［S K11］

1．黒褐色（10YR2/2）砂～シルト。粘性あり、良くしまっている。
2．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。粘性なく、良くしまっている。
3．灰黄褐色（10YR4/2）砂～シルト。粘性あり、良くしまっている。
4．黄褐色（10YR5/6）砂。粘性なく、良くしまっている。

［S K15］

1．黒褐色（10YR2/3）砂～シルト。炭化物を含む。粘性あり、良くしまっている。
2．暗褐色（10YR3/3）砂～シルト。炭化物を少量含む。粘性あり、良くしまっている。
3．褐　色（10YR4/6）砂～シルト。粘性、しまりあり。

［S K24］

1．黒　色（10YR2/1）シルト。地山ブロックを含む。粘性強く、しまりあり。
2．黒褐色（10YR2/2）シルト。地山粒を含む。良くしまっている。
3．黒褐色（10YR2/2）シルト。地山粒を含む。粘性強く、しまりあり。
4．黒褐色（10YR3/2）シルト。地山粒、地山ブロックを含む。粘性強く、しまりなし。
5．黒褐色（10YR3/2）シルト。地山粒、地山ブロックを含む。良くしまっている。
6．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山ブロックを多く含む。粘性あり、良くしまっている。
7．暗褐色（10YR3/3）シルト。地山粒を含む。しまりなし。

第79図　S K 11・15・24土坑実測図

ＳＫ15土坑（第79図、図版31）

［位置・確認状況］　ＭＢ48・49グリッド地山漸移層中で不整円形のプランを検出した。

［形態・規模］　断面形は鍋底状を呈し、東寄りの底面部にもう一段の掘り込みが認められる。規模は、南北方向135～150cm、東西方向175cm、確認面からの深さ31～47cmである。底面のもう一段の掘り込みは、62×48cmの不整形であり、底面からの深さは約18cmである。

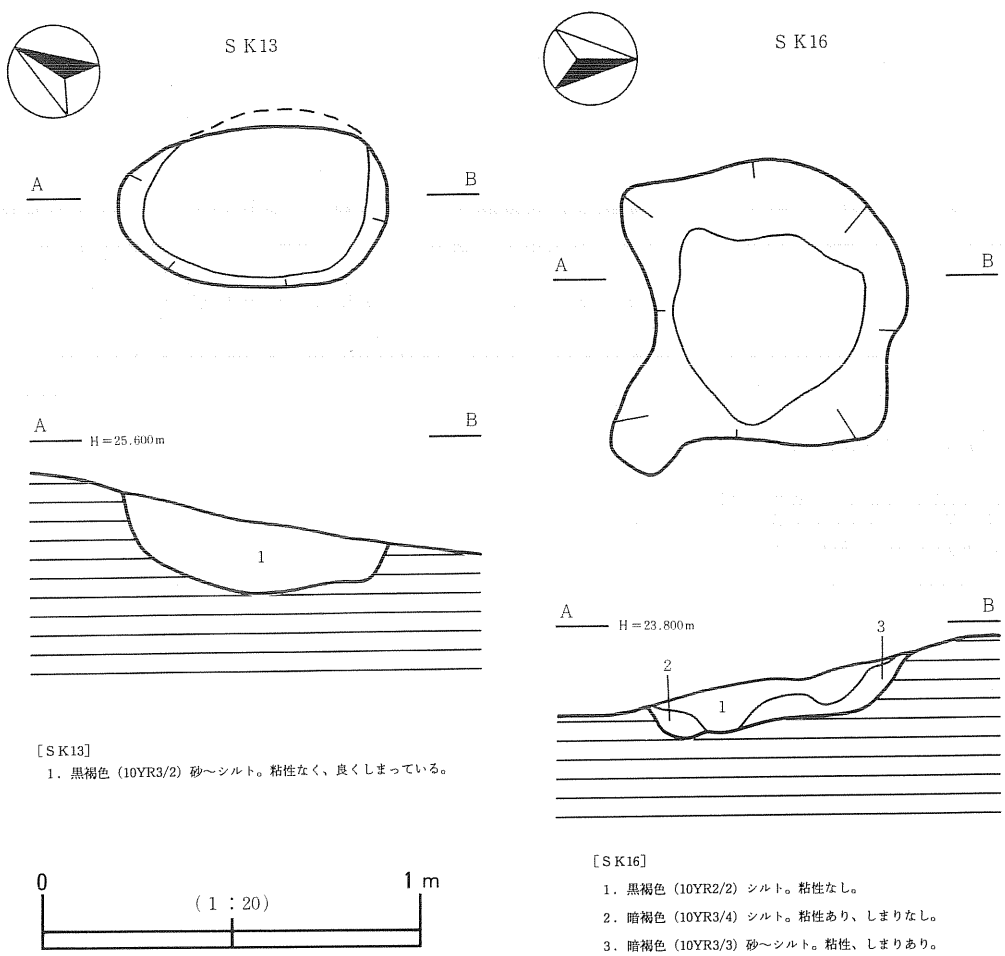
［埋土の状況］　上位から下位にかけて暗褐色土、最下層に褐色土がレンズ状に堆積している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ16土坑（第80図、図版32）

［位置・確認状況］　ＭＥ50グリッドの北西隅寄りの地山漸移層中でプランを検出した。斜面部検出の遺構の中で最も西に位置している。

［形態・規模］　平面形は不整形、断面形は鍋底状である。規模は、南北方向66cm、東西



第80図　ＳＫ13・16土坑実測図

方向74cm、深さ約14cmである。

［埋土の状況］　斜面上方から流入した状況がみられる。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

ＳＫ24土坑（第79図、図版32）

［位置・確認状況］　ＬＧ48グリッド地山漸移層中でプランを検出した。プランの東側は調査境界にかかっており、西半分を調査したことになる。

［形態・規模］　平面形は不整円形、断面形は鍋底状を呈するが、北側の壁は段を有する。南北方向の規模は166cm、確認面からの深さは18～20cmである。

［埋土の状況］　断面図によれば、掘り込み面は第Ⅲ層の上面と思われる。埋土は７層に分けられたが、地山ブロックを含む土が不自然な堆積状況を示している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

(2)時期不明

ＳＤ01溝状遺構（第81図、図版33）

［位置・確認状況］　上位面から斜面に移る肩口のあたりを断続しながら東西に伸びている。地山漸移層上面でプランを検出した。１～２ｍ下方をＳＤ02が並行するように位置している。

［形態・規模］　溝状のプランを呈し、調査区外に伸びており、全長40ｍをこえるものと推測される。断面形はＵ字形または逆台形を呈し、幅25～40cm、確認面からの深さは11～20cmである。断面ＯＰをみると、第Ⅱ層上面から掘り込まれ、第Ⅲ層地山漸移層中で終わっていることがわかる。これによると、本来の溝の規模は、幅約75cm、深さ約40cmということになる。

［埋土の状況］　東西に長いので、地点により若干異なるが、黒褐色から暗褐色土が堆積しており、ＯＰ断面からするとレンズ状の自然堆積と推測される。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

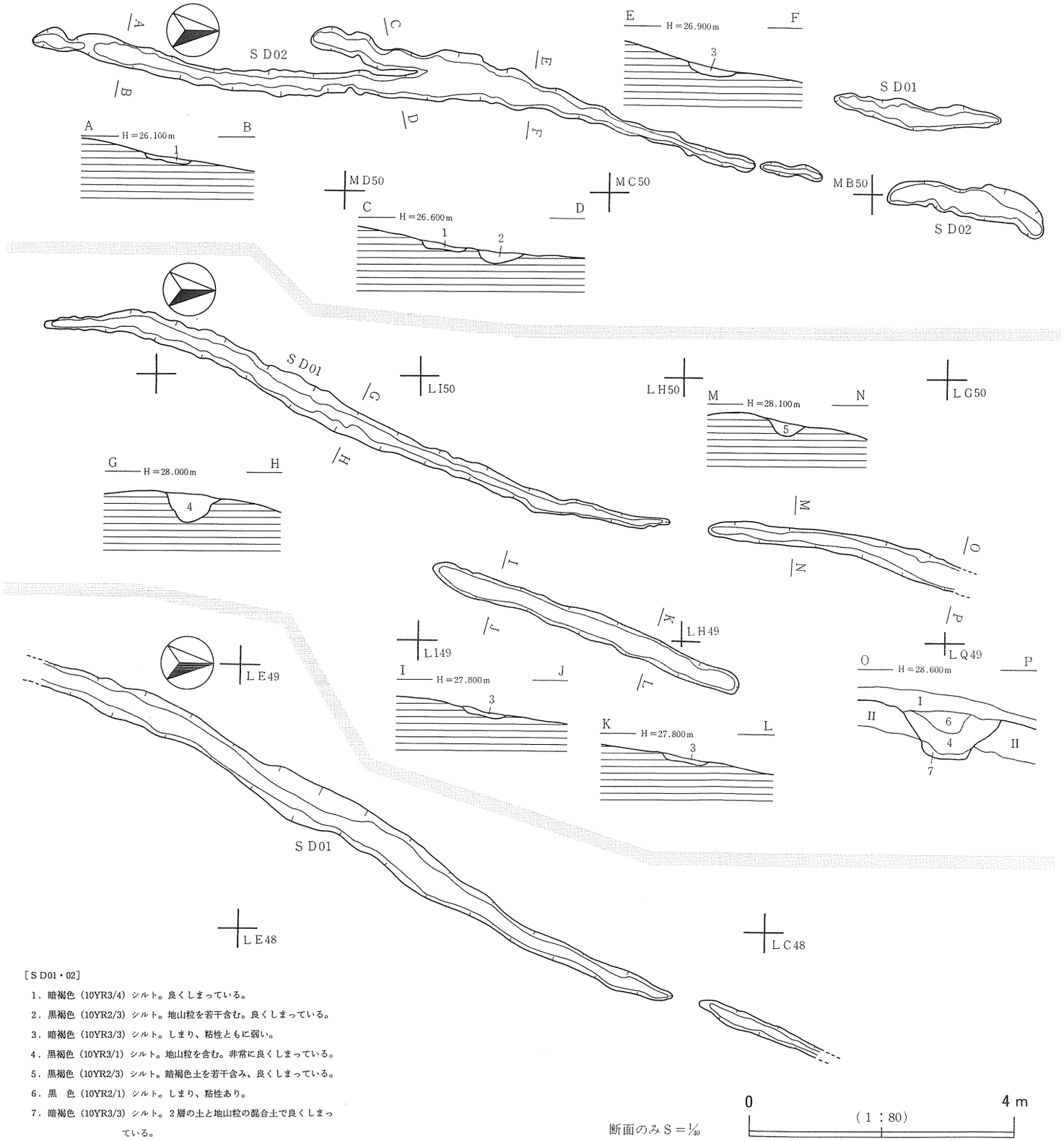
ＳＤ02溝状遺構（第81図、図版33）

［位置・確認状況］　ＳＤ01の南側に並行するように位置している。地山漸移層（第Ⅲ層）上面で断続しながら東西に伸びているプランを検出した。ＭＣ50グリッド西側で二股に分かれている。

［形態・規模］　溝状のプランを呈し、全長は30ｍをこえるものと推測される。断面形は、逆台形である。その規模は、幅30～35cm、確認面からの深さ３～10cmである。

［埋土の状況］　暗褐色土が主体をなすが、部分的に黒褐色土が流入している。

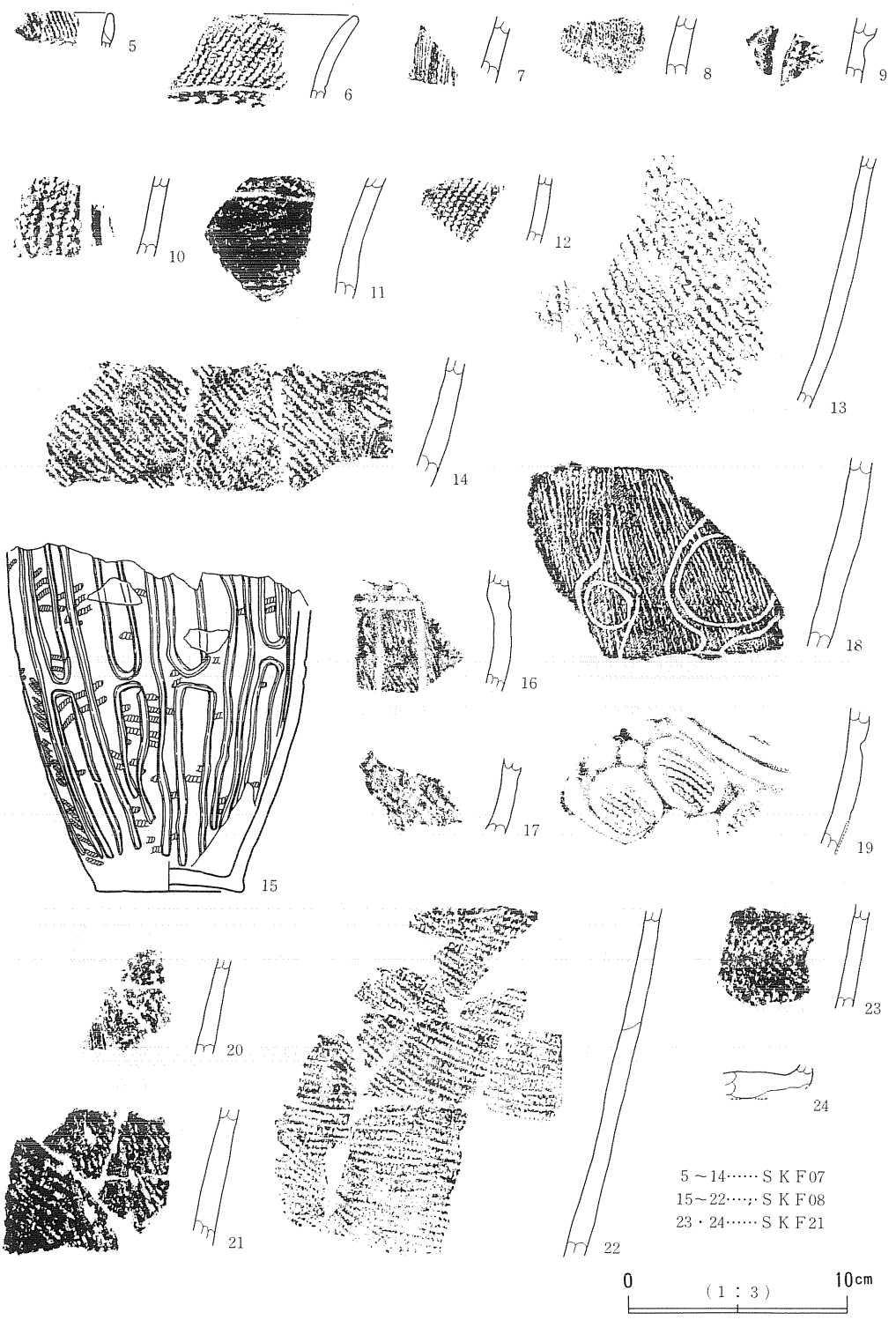
［出土遺物］　遺物は出土しなかった。



［S D01・02］

1．暗褐色（10YR3/4）シルト。良くしまっている。
2．黒褐色（10YR2/3）シルト。地山粒を若干含む。良くしまっている。
3．暗褐色（10YR3/3）シルト。しまり、粘性ともに弱い。
4．黒褐色（10YR3/1）シルト。地山粒を含む。非常に良くしまっている。
5．黒褐色（10YR2/3）シルト。暗褐色土を若干含み、良くしまっている。
6．黒　色（10YR2/1）シルト。しまり、粘性あり。
7．暗褐色（10YR3/3）シルト。２層の土と地山粒の混合土で良くしまっている。

第81図　ＳＤ01・02溝状遺構実測図



第82図　斜面部遺構内出土遺物

3．下位面の遺構と遺物

下位面検出の遺構は、縄文時代の竪穴住居跡２軒と土坑１基、時期不明の土坑１基と柱穴４基である。このうち縄文時代の遺構は、下位面のやや奥の斜面寄りに位置しており、時期不明の遺構は、南寄りの縁辺部に位置する傾向が認められる。

(1)縄文時代

①竪穴住居跡

ＳＩ05竪穴住居跡（第83・88図、図版34）

［位置・確認状況］　下位面の最も東側のＬＥ39～41、ＬＦ39～41グリッドに位置する。ＬＦ40グリッド杭の北側を精査していたところ、地山漸移層中に焼土と炭化物の分布範囲が検出された。竪穴住居跡の炉跡の可能性があったので、さらにその周囲を精査したところ、柱穴と思われるピットと壁の一部が検出され、竪穴住居跡と推測された。

［形態・規模］　北側に検出された壁の一部と柱穴配置から、P_1～P_{11}の外側に壁が巡っていたものと推測される。このため、推測される平面形は、ほぼ南北方向に長い小判形または楕円形である。その規模は、長軸（P_4－P_{10}間）805cm、短軸（P_2－P_6間）436cmを若干こえるものと推測される。北側に一部検出された壁の高さは、３～10cmである。

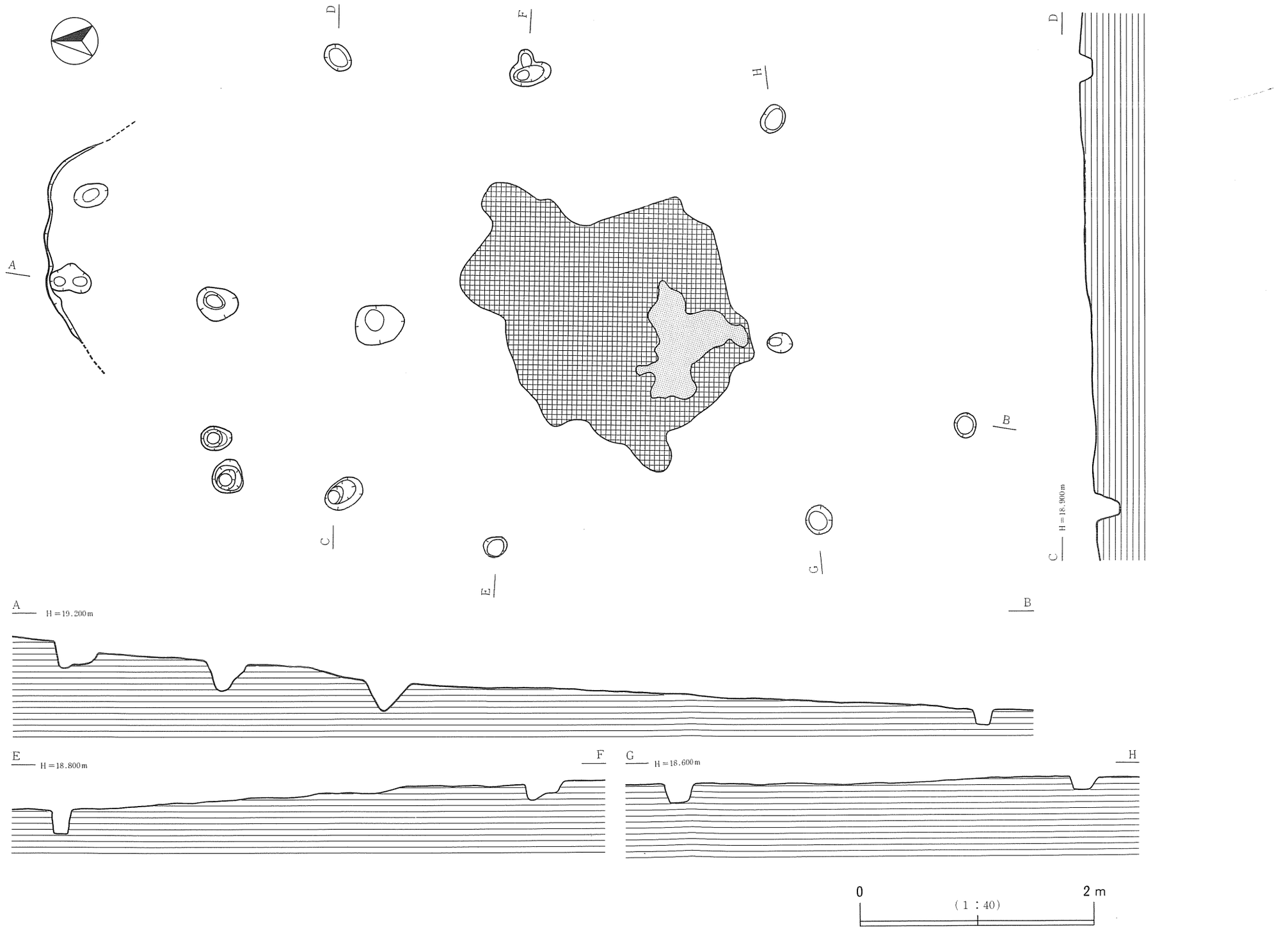
［床面・柱穴］　床面は地山漸移層の上面かそれよりやや高い面と思われ、本遺構の確認時の状況から考えると、踏み締められたような堅致な面は認められなかったと思われる。

柱穴は、P_1～P_6、P_8、P_{10}、P_{11}が主柱穴、P_{12}～P_{14}が棟木を支える柱穴と推測される。

［地床炉］　竪穴住居跡のやや南寄りに位置しており、南北261cm、東西215cmの範囲に炭化物が分布し、その中の南寄りに焼土範囲が認められた。焼土は、床面が堅く焼きしまった状態のものであった。

［出土遺物］　25・26は、地床炉北側の床面近くから出土した。25は、鉢形土器の口縁部である。無節斜縄文（Ｒ）が施されている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通である。26は、ＲＬの原体にＲの原体を付加したものを回転施文した深鉢形土器である。外面に煤状炭化物が付着している。27・28は、撚糸文が施文されており、27の内面には煤状炭化物が付着している。30は26と、31は27と同一個体である。73は、主要剝離面の端部と左側縁に細かな調整を施して刃部とする掻器と思われる。長さ5.7cm、幅2.4cm、重さ13.3ｇである。石質は頁岩である。

［時期］　地文のものばかりで、時期を決定できるものがないが、26の付加条の原体を回転施文したものがある。中期中葉から後葉にかけての遺物を出土しているＳＫＦ08において、付加条のものが共伴していることから、本住居跡の時期を中期中葉から後葉にかけてと推測することが可能である。



第83図　ＳＩ05竪穴住居跡実測図

ＳＩ17竪穴住居跡（第84・85・88・89・90図、図版35・36）

［位置・確認状況］　ＳＩ05から西へ20数ｍ離れたＭＢ40・41グリッドに位置する。ＭＢ40グリッドにおいて表土除去中に土器片がまとまって出土し始め、地山漸移層中で黒褐色プランを確認した。

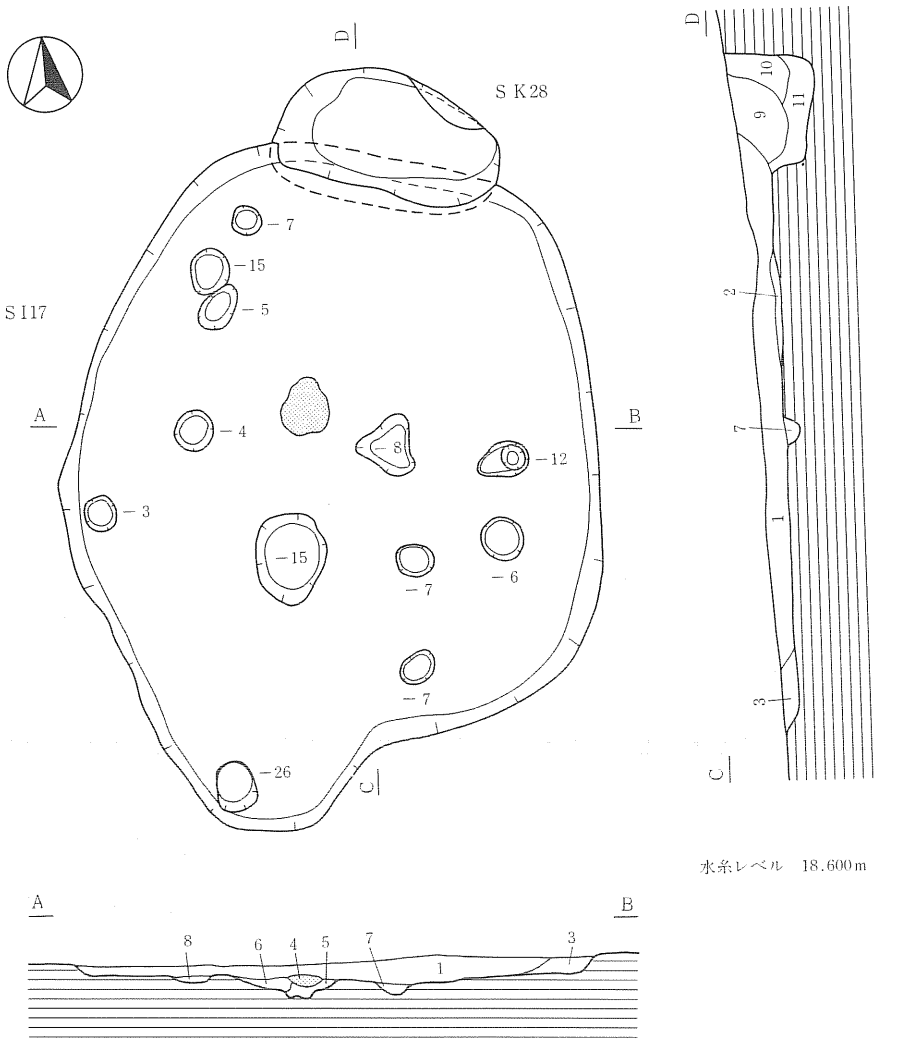
［形態・規模］　確認時のプランは、隅丸方形に近く北隅がやや突出していた。調査を進めたところ、南西側の壁が若干ふくらむ不整方形となり、北隅の突出部は本遺構より古い土坑（ＳＫ28）と判明した。規模は、南北方向300～360cm、東西方向286cm、確認面から床面まで６～13cmである。

［床面・柱穴］　床面はほぼ平坦であるが、踏み締められた硬い面は認められなかった。床面を精査したところ、柱穴様のピットが合計12基検出された。各ピットの床面からの深さは、10cmをこえるやや深いもの（P_1、P_5、P_7、P_{10}）と10cmに満たないものまたは数cmのものがある。Ｐ2とＰ3については、褐色系の土がしみ状に地山に入り込んだものであり、柱穴の可能性は低い。したがって、この２基のピットを除く10基が本遺構に伴う柱穴と考えられるが、主柱穴は前述の10cmをこえるものと推測される。

［地床炉］　竪穴住居跡中央部から少し北に寄ったところに橙色の焼土範囲を検出した。地床炉は、掘り込みを持たないものであり、焼土の周囲に熱を受け変化した地山部分が認められた。

［埋土の状況］　竪穴住居跡の東から南にかけて地山ブロックからなる暗褐色土が堆積し、その後にやや大粒の炭化物と地山粒を含む黒褐色土が堆積している。あとから堆積している黒褐色土中から時期の異なる遺物が一緒に出土していることから、人為的な堆積の可能性が高い。

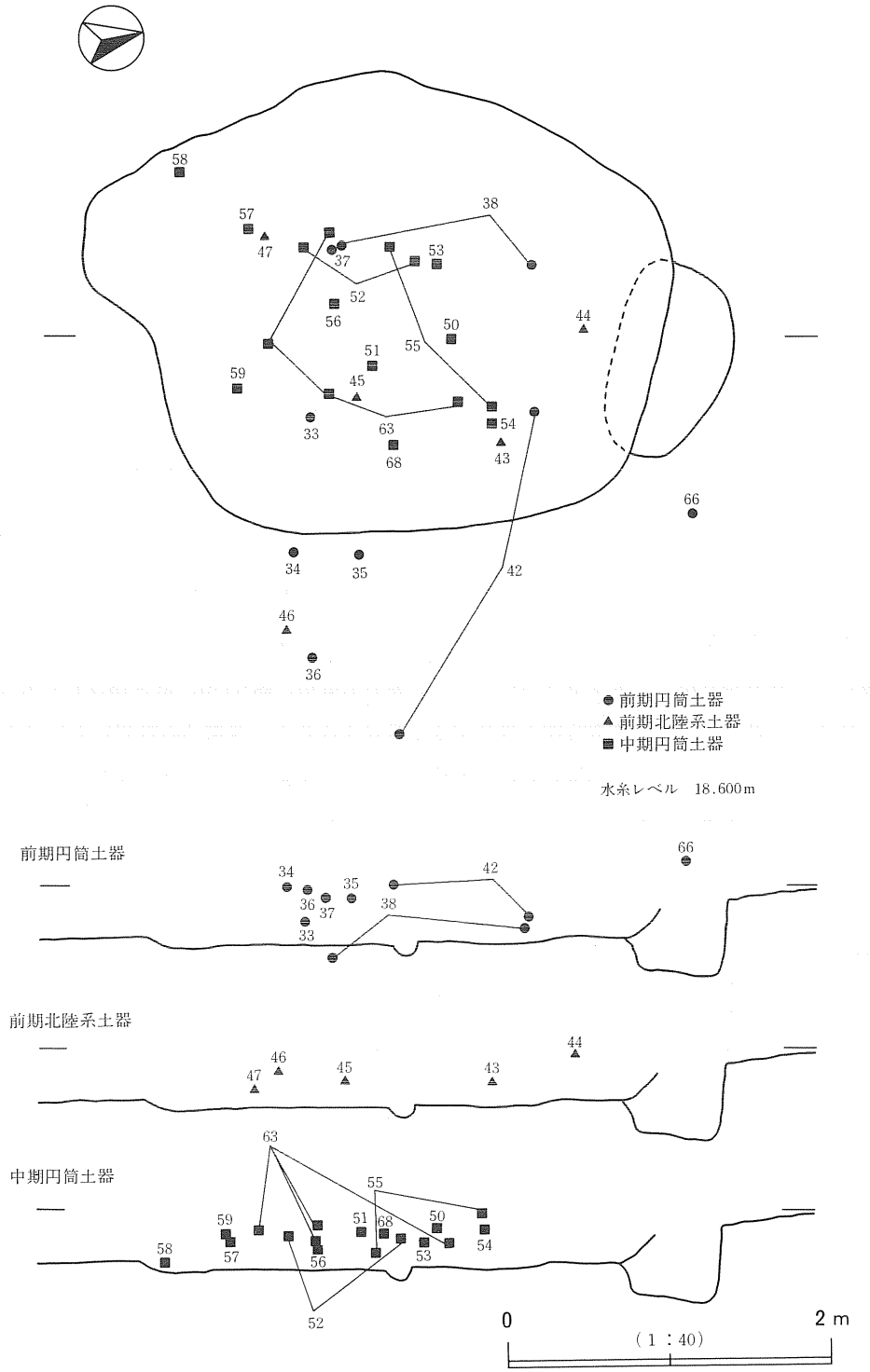
［出土遺物］　本遺構からは縄文前期及び中期の土器が伴出しており、その垂直分布をみると遺構プラン確認面より上で多くが出土している。しかも前期と中期の遺物が、ほぼ同じレベルから出土しているという状況であった。32・33・42は同一個体であり、口縁部に縄の側面圧痕、体部に木目状撚糸文、口縁部と体部を画する隆帯上に半截竹管状工具による刺突が施されている。内面は、口縁に近い部分は横方向に、体部は縦方向にナデられている。34・35は同一個体であり、ゆるい波状を呈する口縁部に縄の側面圧痕、体部に斜行縄文を施文し、口縁部と体部を画する隆帯上と口唇部に半截竹管の押し引きを行っている。35は、体部の斜行縄文が隆帯上にはみ出している。外面に煤状炭化物が付着し、胎土に砂粒を多く含む。36も口縁部に縄の側面圧痕、体部に撚糸文が施文されるが、口縁部と体部を画する隆帯はみられない。37は、36の体部の破片である。38・39は、撚糸文が施された円筒深鉢の体部資料である。40は、円筒深鉢の体部資料であり、ＲＬの原体にＲの原体を付加した縄を回転施文している。内外面に煤状炭化物が付着しており、胎土に砂粒を含む。43～47は、結節状浮線文が施文された土器であ



［S I17］
1．黒褐色（10YR2/3）シルト。炭化物、地山粒を含む。良くしまっている。
2．黒褐色（10YR3/2）シルト。粘性あり、良くしまっている。
3．暗褐色（10YR3/4）シルト。地山ブロックを含む。良くしまっている。
4．橙　色（2.5YR6/8）良く焼けしまっている焼土。
5．暗褐色（10YR3/4）地床炉使用により変質した層。
6．明褐色（7.5YR5/6）地床炉使用により変質した層。
7．暗褐色（10YR3/3）粘弱～中、しまり強
8．暗褐色（10YR3/4）粘弱～中、しまり強
［S K28］
9．黒褐色（10YR2/3）シルト。1層と色調は同じであるが、炭化物のほとんど含まない。
10．褐　色（10YR4/4）シルト。地山ブロックを斑状に含む。しまりあり。
11．暗褐色（10YR3/4）シルト。粘性、しまりなし。

第84図　S I17竪穴住居跡・S K28土坑実測図

る。48は、地文に1段の縄を結束した原体を押圧した深鉢形土器の口縁部である。口唇部にも縄文が回転施文されている。49は、口縁に平行に隆帯が巡り、口縁と隆帯の間に縄の側面圧痕が3条認められる。また、隆帯直下には沈線が隆帯に沿って施されている。胎土に砂粒を多く含む。50は、折り返し口縁上や地文上に粘土紐が貼り付けられ、粘土紐の上にも縄の圧痕が認



第85図　ＳＩ17竪穴住居跡遺物出土状況図

められる。内面に煤状炭化物が付着している。51は、隆帯に沿って１段の縄の側面圧痕が施された口縁部に近い部分の資料である。52・53・63は同一個体であり、口縁が大きな波状をなす深鉢形土器である。口縁部は、粘土紐貼り付けによる低平な隆帯上に縄の側面圧痕、隆帯間には爪形の刺突文が施されている。口唇部はヘラ状工具で面取りされている。体部には、斜行縄文が施されている。内面は非常に平滑に仕上げられており、胎土に砂粒の混入が少ない。54～59は、隆帯と縄の側面圧痕文、刺突文が施された深鉢形土器の口縁部または口縁に近い部分の資料である。55と59は同一個体である。60～62は体部の資料であり、61は羽状縄文が施文されている。64は、底部の資料であり、底部からやや開きぎみに立ち上がり、体部はふくらみ加減に推移するものと推測される。胎土は、砂粒の混入が見られず緻密である。65・66は口縁部の資料であり、外面に煤状炭化物が付着している。65は67と同一個体であり、67は斜行縄文の地文に断続した沈線が施されている。68は、地文に縦方向の沈線が認められる。72・74・76は剝片石器であり、石質はいずれも頁岩と思われる。72は、二等辺三角形を呈し、基部に半月状の抉りを入れた石鏃である。アスファルトが両面に付着しており、着柄の状況を推測することができる。長さ2.9cm、最大幅1.9cm、重さ2.1ｇである。74は、先端部、基部とも折損した石槍である。現存長5.7cm、重さ24.1cmである。76は、鉤形の剝片の主要剝離面側に細かい調整を行い刃部を作り出したスクレーパーである。長さ5.4cm、幅６cm、重さ19.2ｇである。

［時期］　前述の遺物の垂直分布と併せて水平分布をみると、遺構外の東側にも広がりが認められ、出土遺物のほとんどが本住居跡に直接伴うものと判断することはできない。このことと埋土の状況を考慮すれば、住居が使用されなくなって間もなく遺物が廃棄されたものと推測される。このように考えてくると、本住居跡が営まれたのは、前期末から中期前葉にかけての時期かそれ以前ということになる。

②土　坑

ＳＫ28土坑（第84図、図版35・36）

［位置・確認状況］　ＭＢ41グリッドでＳＩ17を精査中に黒褐色のプランを検出した。

［形態・規模］　東西方向に長い小判形で、断面形は逆台形に近い。北東側の壁は、底面からオーバーハングして開口部に達する。また、埋土中に壁の崩落土を含むことから、本遺構が袋状の土坑であった可能性がある。規模は、長さ120cm、幅約70cm、確認面（地山漸移層）からの深さ33～46cmである。

［埋土の状況］　暗褐色土と黒褐色土が流入する途中で北側の壁が崩落している。

［出土遺物］　遺物は出土しなかった。

(2)時期不明

①土　坑

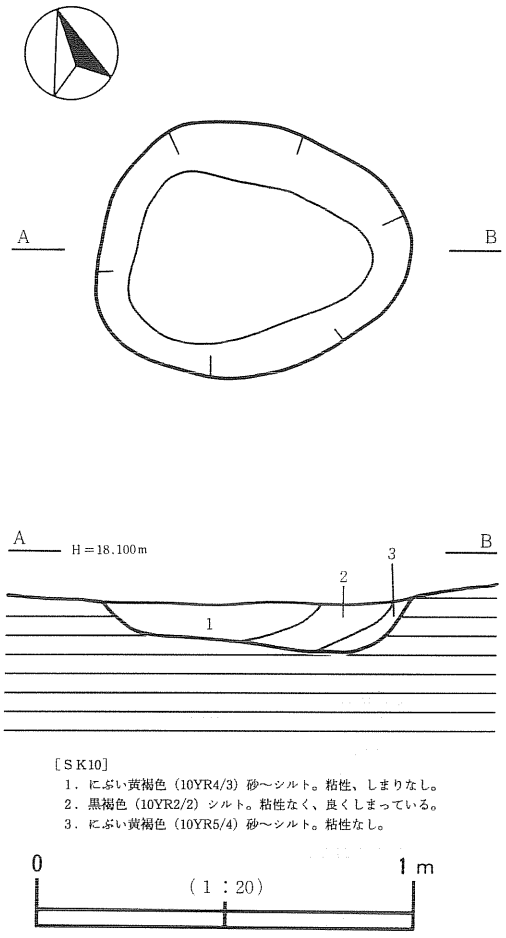
ＳＫ10土坑（第86図、図版37）

［位置・確認状況］　下位面の調査区の最も西に位置する。ＭＦ40グリッドの東側地山上面でプランを検出した。本遺構が位置するあたりは、過去に削平を受けた痕跡がみられ、表土直下に地山が認められる。

［形態・規模］　東西に長い円形であり、断面形は逆台形である。規模は、東西方向83cm、南北方向65cm、確認面からの深さ５～15cmである。底面は平坦であり、西側の壁は木の根による撹乱を受けている。

［埋土の状況］　埋土堆積の当初に壁が崩落し、その後に地山粒を含む土が流入している。

［出土遺物］　遺物は、出土しなかった。

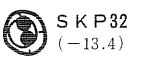


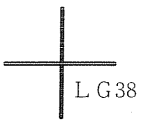
第86図　ＳＫ10土坑実測図

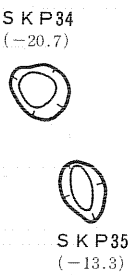
②柱穴様ピット（第87・89図）

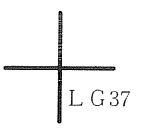
下位面の調査区の南東隅に位置し、ＬＧ38グリッド杭を中心とする４つのグリッドの地山漸移層中で合計４基を検出した。径10数cm、確認面からの深さ10数cmから20cmである。これらの柱穴様ピットにより建物を構成する状況ではなかった。

ＳＫＰ32埋土中から土器片２点が出土している。70は、地文上に結節状浮線文が施されている。器表面がやや脆くなっており、２次的な火熱を受けたものと推測される。71は、底部近くの資料であり、羽状縄文が施文されている。胎土に砂粒を混入する。

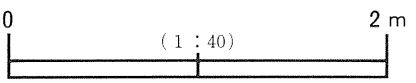




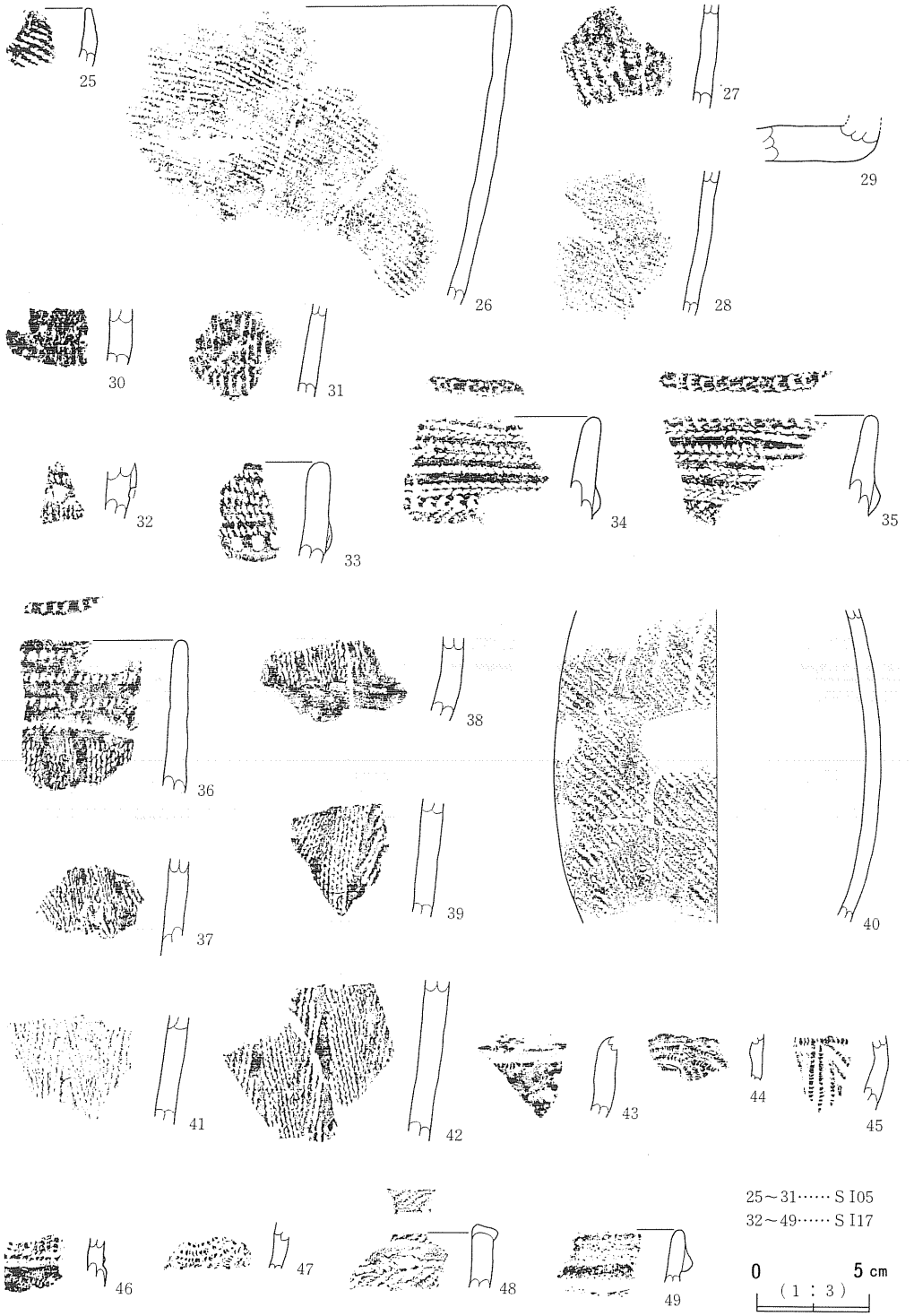




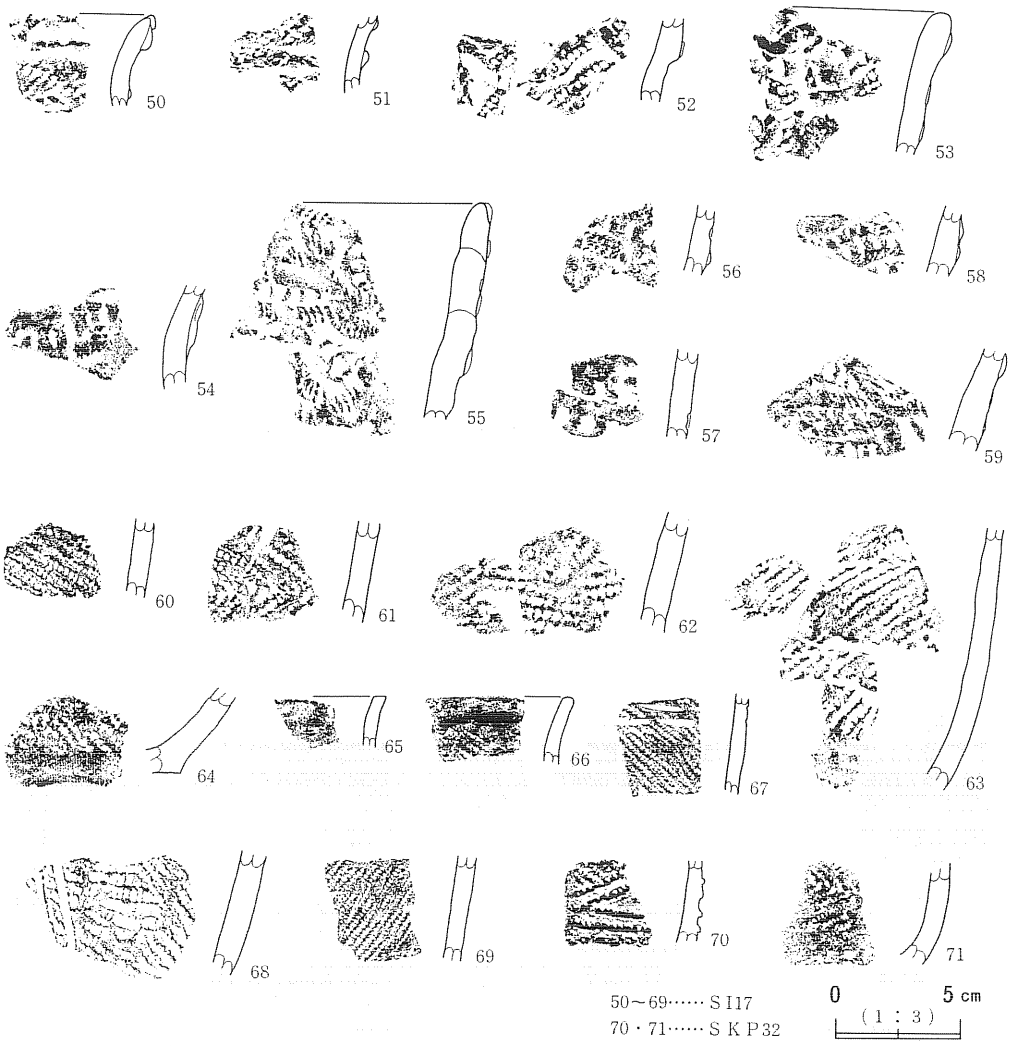
［ＳＫＰ32～35］
ＳＫＰ32：黒褐色（10YR3/2）シルト。地山に含まれる礫を含む。粘性、しまりなし。
ＳＫＰ33：黒褐色（10YR3/2）シルト。地山ブロックを含む。粘性、しまりなし。
ＳＫＰ34：黒褐色（10YR2/3）シルト。炭化物、地山に含まれる礫を含む。粘性あり、しまりなし。
ＳＫＰ35：黒褐色（10YR2/3）シルト。炭化物、地山に含まれる礫を含む。粘性、しまりなし。



第87図　柱穴実測図



第88図　下位面遺構内出土遺物（１）



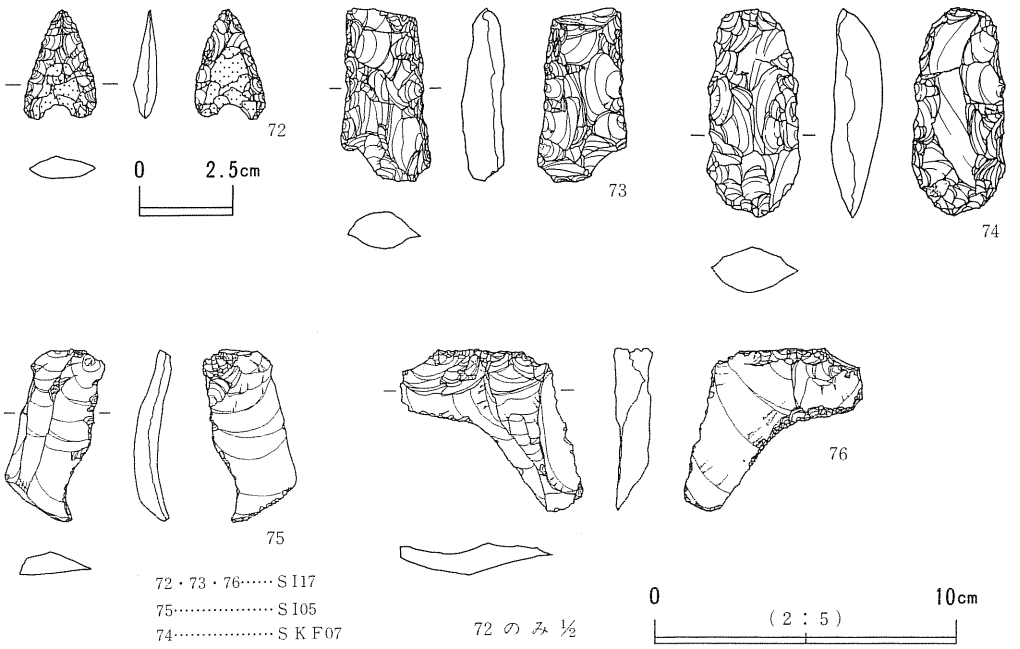
第89図　下位面遺構内出土遺物（2）

第3節　遺構外出土遺物

萱刈沢Ⅱ遺跡の遺構外から出土した遺物は、縄文土器、土製品、石器、土師器、銅銭である。ここでは、土器・土製品、石器、その他に分けて説明を加えたい。なお、文章中の括弧の数字は、遺物に付した通し番号である。

1．土器・土製品

①土器：土器は破片で706点出土し、その内訳は縄文土器677点、土師器29点である。縄文土器については、全体を復元できたものはなかった。ここでは、以下のように土器を分類した。



第90図　遺構内出土石器

第Ⅰ群土器 …… 縄文早期の土器

第Ⅱ群土器 …… 縄文前期の土器

第Ⅲ群土器 …… 縄文中期の土器

第Ⅳ群土器 …… 縄文後期の土器

第Ⅴ群土器 …… 縄文時代の土器のうち、地文のみのもの、無文のものを一括した。

第Ⅵ群土器 …… 平安時代の土器

第Ⅰ群土器（第91図、図版38）

縄文時代早期末葉の土器である。内外面に条痕文または縄文を施文する。縄文原体は、無節、単節、複節、０段多条がある。ほとんどの胎土に少量の繊維を含むが、繊維を含まないものが１点認められる。

１類　内外面に縄文を施文する土器である（77～80）。77・78は内外とも０段多条、79・80は外面に無節、内面に０段多条の原体が用いられている。器厚は９mm前後。78は内面に煤状炭化物が付着している。

２類　内面に条痕文を施文する土器である（81～84）。外面には単節、複節、０段多条の原体が回転施文されている。器厚は１cm前後である。81は、胎土に繊維と細砂を含みやや脆い。内面に煤状炭化物が付着している。84は、胎土に繊維を含まず、本群の中では比較的器厚が薄

く堅致なつくりである。内外面に煤状炭化物が付着している。

3類　外面にのみ縄文が施文されている土器である（85～92）。原体は、85・87が単節、86・88・89・91が無節、90・92が0段多条である。色調は赤褐色～橙色を呈し、87・90・92の内面には煤状炭化物が付着している。

第II群土器（第91・92図、図版39）

前期後葉のもので、主に文様要素から次のように分類した。

1類　口縁部に縄文原体の側面圧痕、体部に撚糸文、羽状縄文を施す土器で、胎土に繊維を含むものとそうでないものがある（93～106）。94～97は、口縁部と体部とを画する隆帯が認められる。95と105は同一個体であり、胎土に砂粒を含み、外面に煤状炭化物が付着している。99・100・103・104は、絡条体を回転施文した体部の資料であり、104の内面には主に縦方向の研磨痕が認めれる。

2類　結節状浮線文を施す土器である（107～117）。内面の調整はあまり丁寧でなく、胎土に砂粒をやや多く含む。107～113は、口縁部または口縁に近い部分の破片である。波状を呈し、内面にも口縁に並行し結節状浮線文を施すもの（107・108）、波頂部の粘土をV字状に抉り取った後、結節状浮線文をそれに合わせて施すもの（109）がある。112は、単節斜縄文（RL）の地文に結節状浮線文を施し、体部から口縁部にかけてやや強く内傾したのち外反して口縁に至る。117は同一個体である。

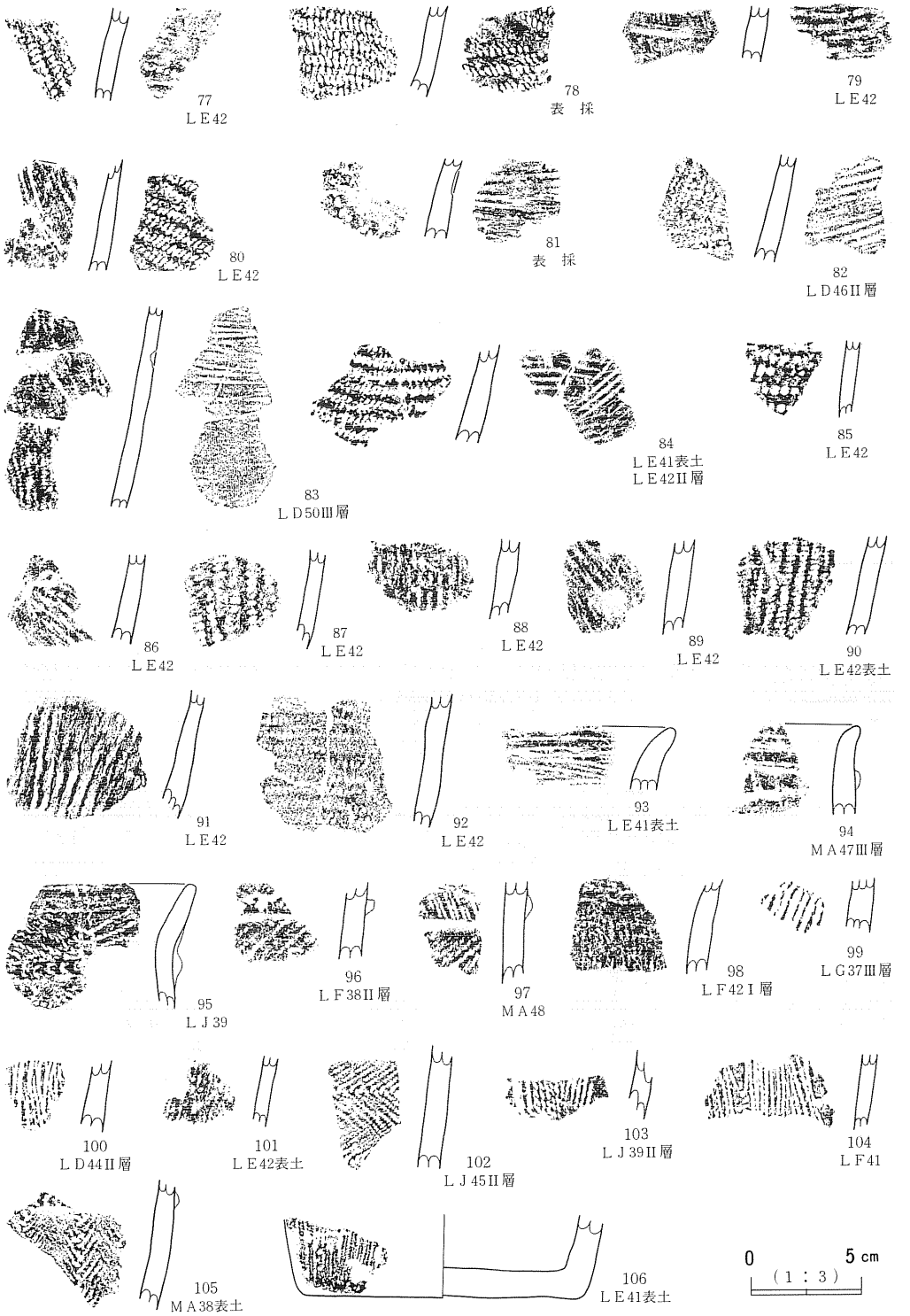
3類　ソーメン状の粘土紐を貼り付ける土器である（118～126）。胎土に砂粒を含む。2類に比べて内面の調整は丁寧である。118は、結節状浮線文と小波状の粘土紐の貼り付けが施され、2類と3類の中間的な様相が認められる。粘土紐を貼り付けただけのもの（120・121・124）と粘土紐に沿って竹管状工具で沈線を引くように平滑に調整を加えるもの（119・122・123・125・126）がある。125は、粘土紐のほか豆粒状の粘土の貼り付けが行われている。123と126は同一個体であり、126は板状の粘土を筒状にした把手である。三角形を基調とした文様が粘土紐で施され、3カ所ある三角形のマドのうち外側の1カ所を除く2カ所は貫孔されている。

第III群土器（第92・93図）

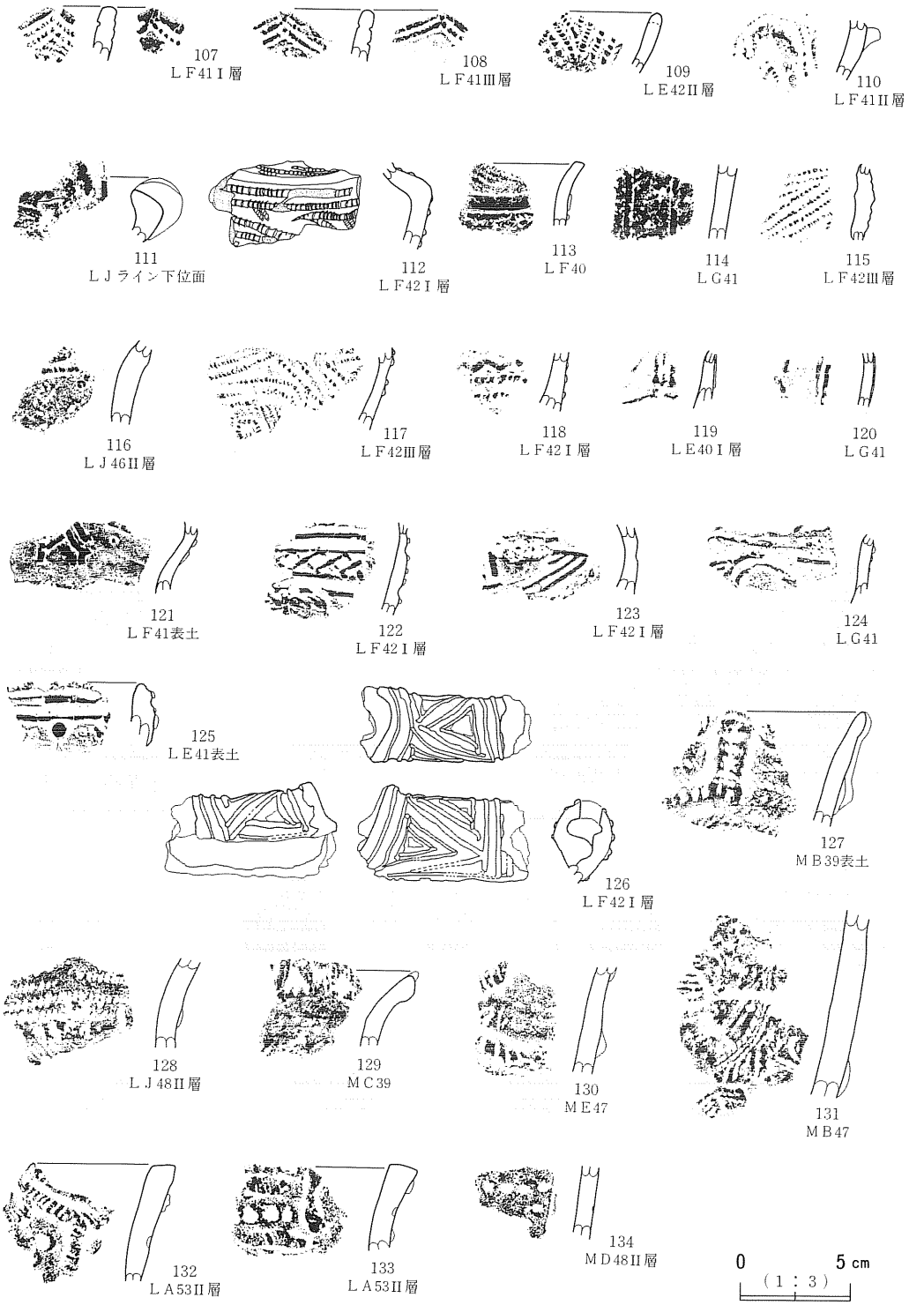
中期前葉から中葉にかけてのもので、胎土に繊維を含まない。

1類　口縁部文様帯に縄文原体の側面圧痕と隆帯が施される土器である（127～131）。口縁は波状を呈するものが多い。127は、口縁が大きく外反する土器で、口縁部文様帯を画する隆帯と口縁の波頂部から垂下させた隆帯上には縄の圧痕が施されている。129は、口縁に沿って細い隆帯を波状に巡らせ、その上に縄の圧痕が施されている。130・131は、爪形の縄の圧痕が施文されている。

2類　刺突文と隆帯により文様が施される土器である（132～134）。縄文の施文は、隆帯上



第91図　遺構外出土遺物（１）



第92図　遺構外出土遺物（２）

に限られる。刺突文の施文には、半截竹管状工具の内側を上にして、器面に対して斜めの方向から行っているものと推測される。

3類　沈線文が施された土器である（135～143）。135～137は同一個体であり、口縁部が波状を呈する大型の深鉢形土器である。口縁に沿って横位の渦巻き文、その下の無文部を挟み地文上に横位又は弧状の沈線が施される。胎土に砂粒を含み、焼成は普通である。138も深鉢形土器であり、体部がやや張る器形と推測される。139～143は、地文上に沈線が施文されるものである。141の地文ははっきりしないが、無節の可能性がある。143は底部付近の破片であり、内面に煤状炭化物が付着している。

4類　竹管により半隆起線文が施された土器である（144）。深鉢形の体部の破片と思われ、内面の調整はあまり丁寧でない。胎土は砂粒を含まず緻密であるが、焼成は普通である。

5類　半截竹管状の工具による沈線文が施された土器である（145）。鉢形の体部破片であり、器面全体にやや深い沈線が密に施され、残された部分が隆帯状に浮き彫りされた効果を出している土器と推測される。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。

第Ⅳ群土器（第93図）

後期初頭から前葉にかけての土器で、胎土が緻密なものと、砂粒を含み粗いものとがある。

1類　口縁から垂下する細い隆帯を有し、隆帯で区画された部分に斜縄文が横位に施文されている（146）。胎土に砂粒を多く含み、焼成は普通である。

2類　地文上に沈線が施文される土器である（147・148）。147は、口唇部に刻みが施され、外面に煤状炭化物が付着している。

3類　地文のみ又は無文の土器である（149～153）。149は、つまみ出したような把手が付けられた浅鉢形の土器である。口縁部は、内側に折り返されている。150は、口唇部に粘土紐を貼り付けと縄の圧痕が施されている。152と153は同一個体で、撚糸文が施文された深鉢形土器である。口縁部は、折り返されている。

第Ⅴ群土器（第93・94図）

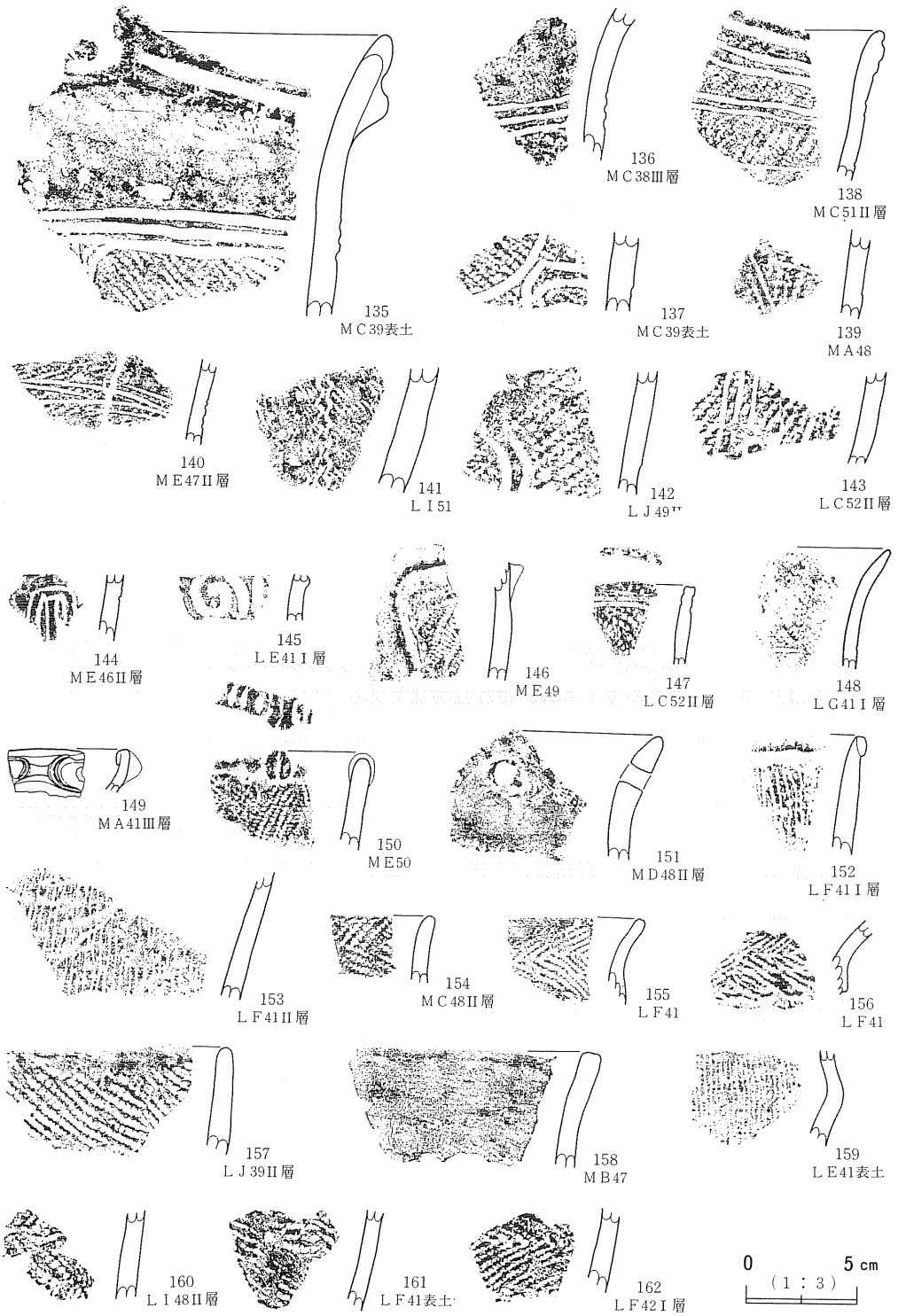
時期の不明な縄文土器で、地文のみ又は無文のものである。

1類　口縁部の破片である（154～158）。154～156は、羽状縄文が施文されている。155と156は同一個体であり、縄の末端に環の付いた羽状縄文が施されている。胎土に砂粒をほとんど含まないが、赤色粒子と黒色粒子を含む。

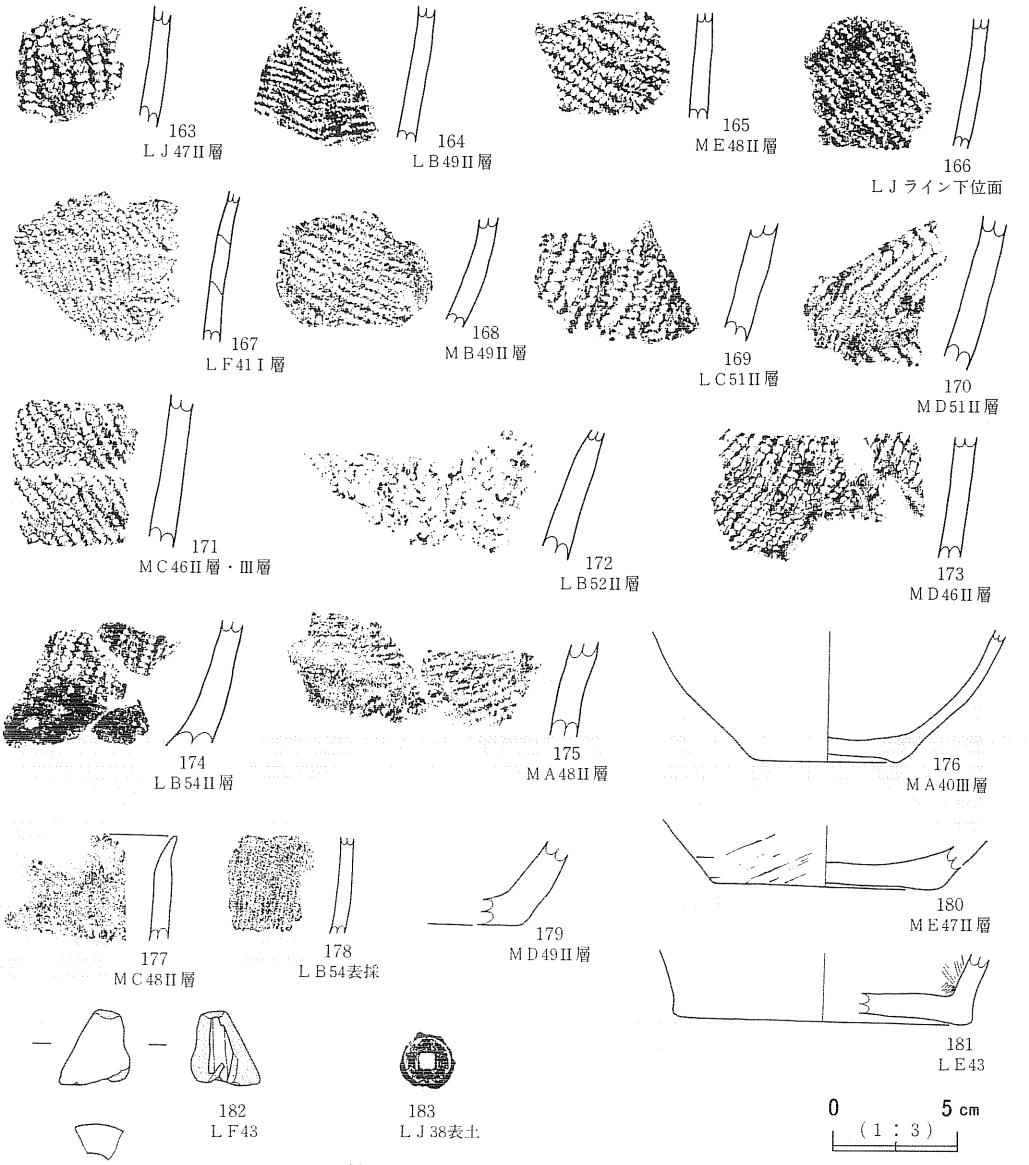
2類　体部の破片である（159～171）。施文されている文様は、撚糸文、無節斜縄文、単節斜縄文、羽状縄文などである。

3類　底部付近の破片である（172～175）。

第Ⅵ群土器（第94図）



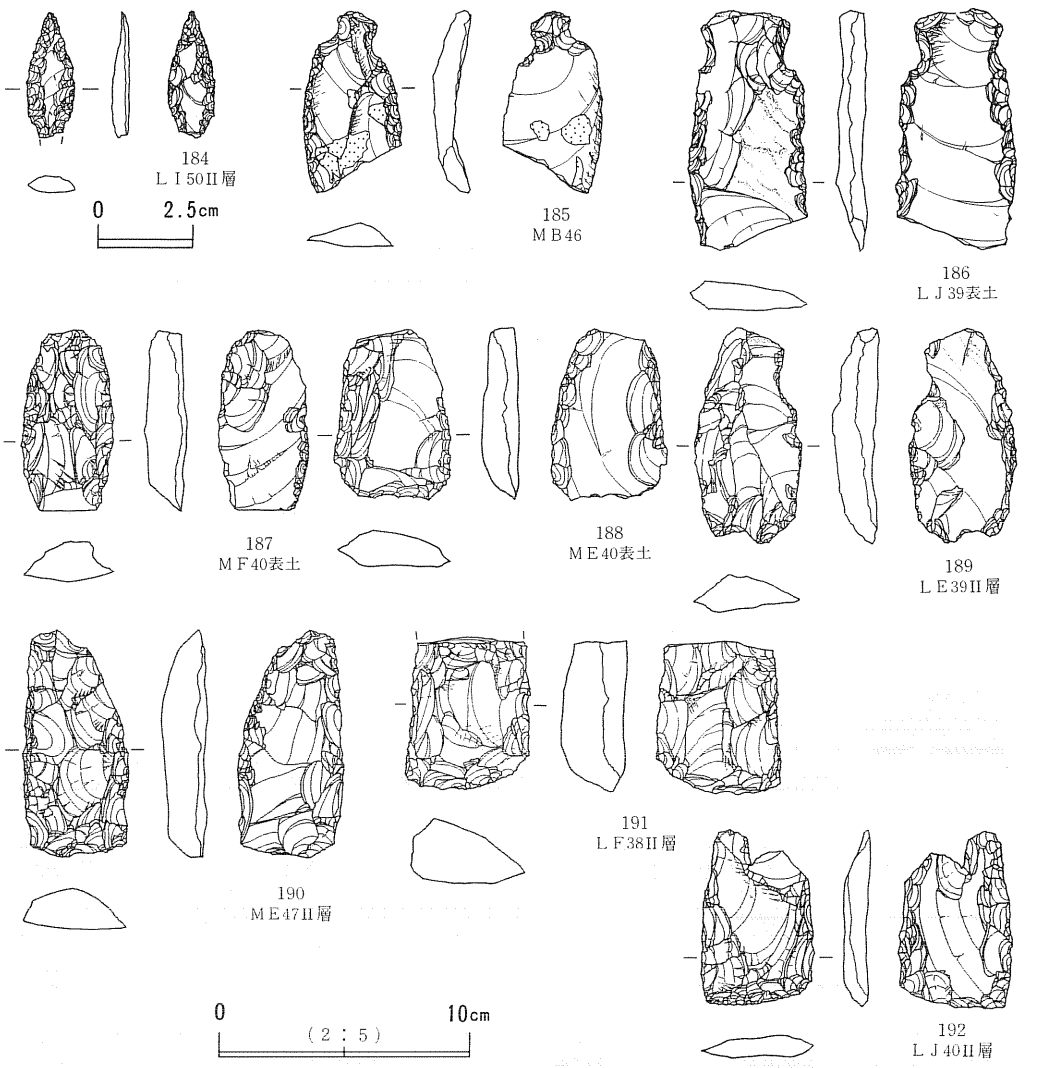
第93図　遺構外出土遺物（３）



第94図　遺構外出土遺物（４）

平安時代の土器である（176～181）。176は、土師器坏である。あげ底ぎみの底部から外反しながら立ち上がった後、内湾して口縁部に至る。成形にロクロを使用せず、内外面ともナデ調整されているが、あまり丁寧でない。胎土に砂粒を少量含み、焼成は普通である。底径5.7cm、現有高5.1cmである。177・178は、土師器甕の口縁部と胴部の破片である。178は、色調が橙色を呈し、外面に縦位のハケ目調整が施されている。179～181は、土師器甕の底部であり、外面に煤状炭化物が付着している。

②土製品：土錘１点の出土である（182）。胎土に細砂を含み、焼成は良好である。



第95図　遺構外出土遺物（５）

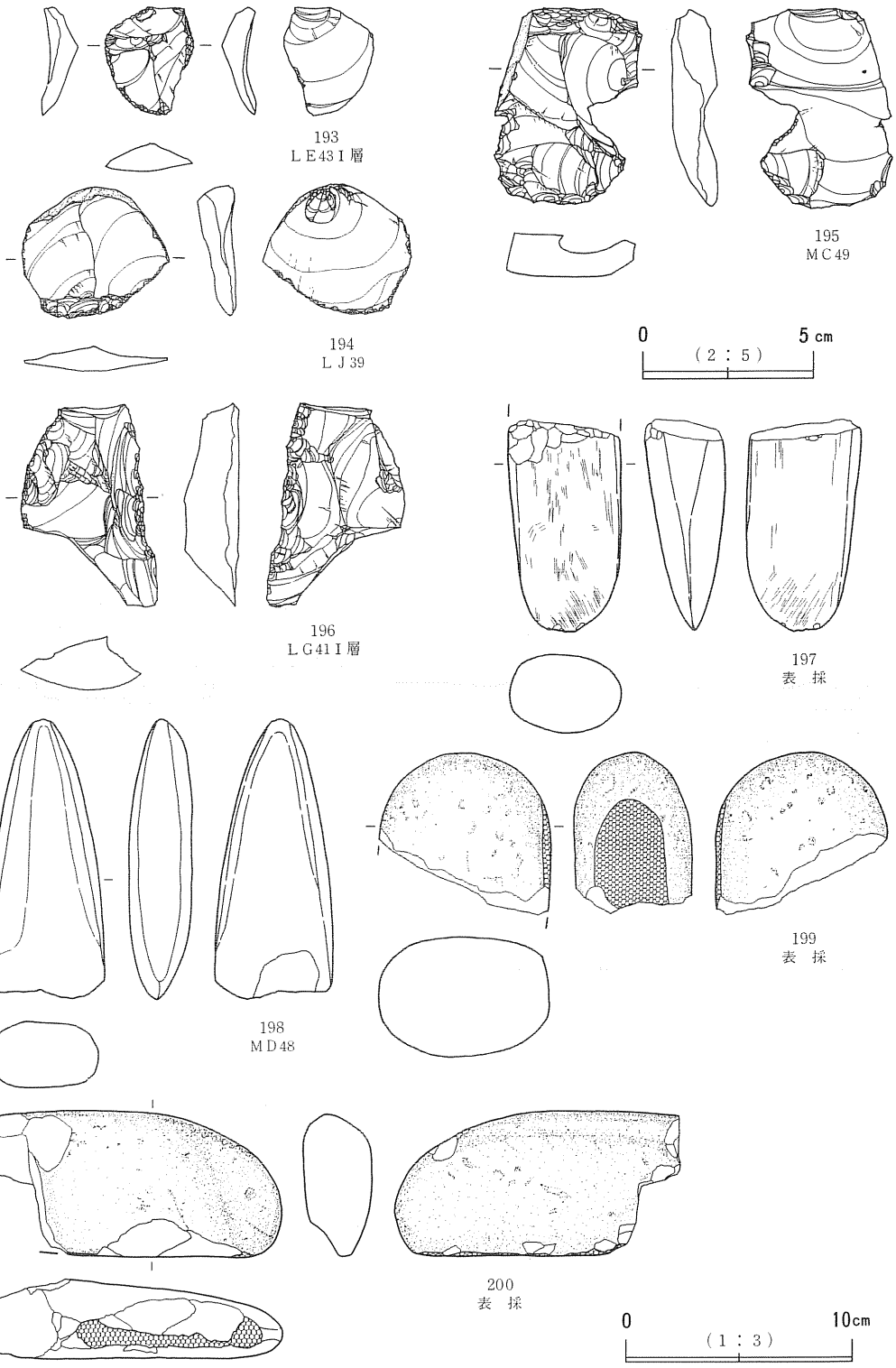
２．石器（第95～97図）

①剥片石器：石鏃（184）、石匙（185・186）、石篦（187～190）、スクレーパー（191～196）の各種石器が出土した。。184は、有茎式であるが、基部が折損している。185は、主要剥離面の背面に調整を施し刃部としており、先端部は折損している。石篦は、第１次剥離面を残すもの（187・188）と全面に調整を加えるもの（189・190）がある。

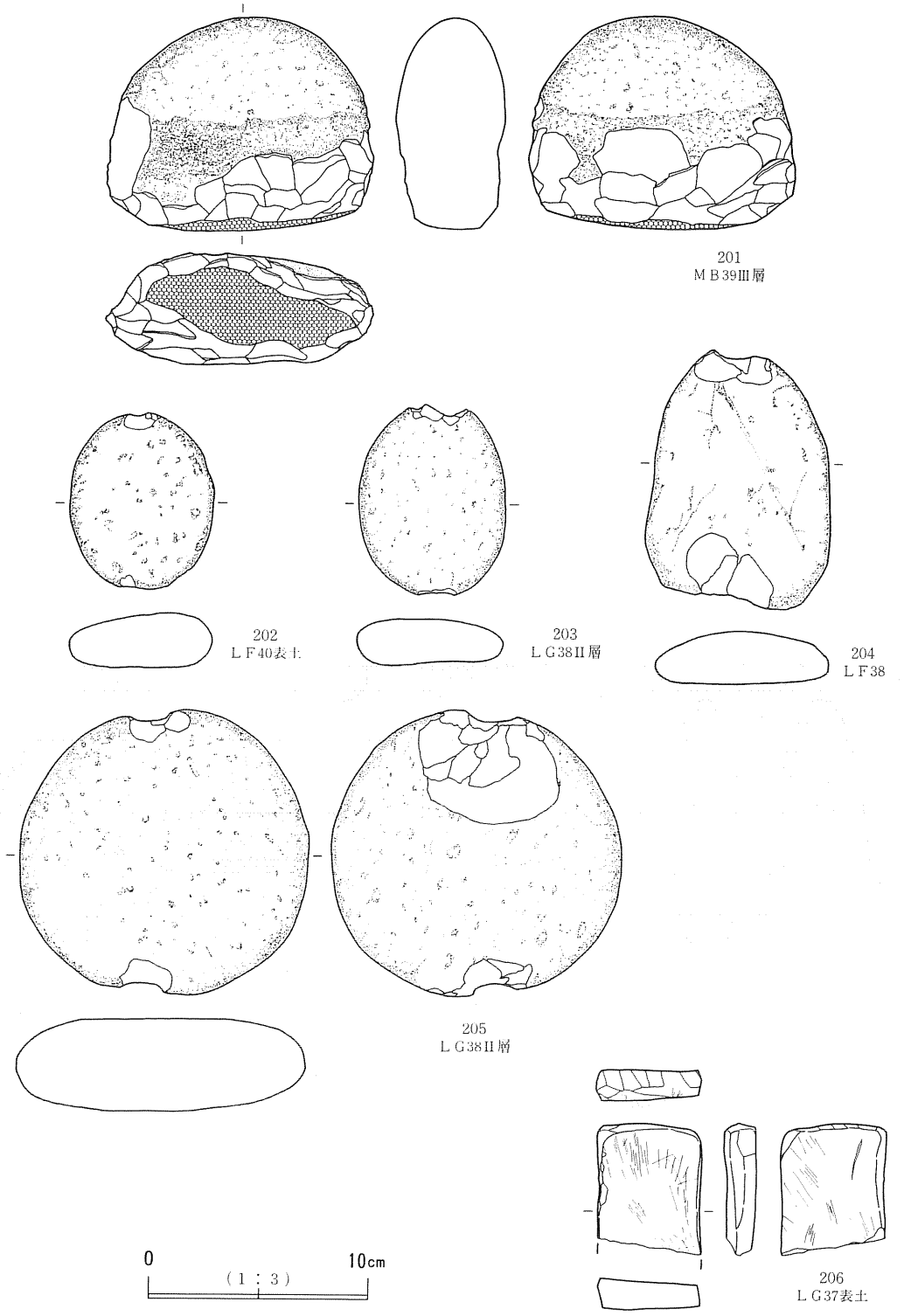
②礫石器：石斧（197・198）、磨石（199・201）、半円状扁平打製石器（200）、石錘（202～205）、砥石（206）の各種石器が出土した。201は、北海道式石冠の可能性も考えられる。

３．その他

寛永通宝１点が出土している（第94図183）。



第96図　遺構外出土遺物（６）



第97図　遺構外出土遺物（７）

第２表　萱刈沢Ⅱ遺跡出土石器計測表

［遺構内出土］

番号	遺構名	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
72	ＳＩ17	石鏃	2.9	1.9	0.6	2.1	頁岩
73	ＳＩ17	石槍	5.7	2.8	1.4	24.1	〃
74	ＳＫＦ07	石篦	6.9	3.1	1.6	34.4	〃
75	ＳＩ05	スクレーパー	5.7	3.2	0.8	13.3	〃
76	ＳＩ17	〃	5.4	6.0	1.2	19.3	〃

［遺構外出土］

番号	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質
184	ＬＩ50	石鏃	3.3	1.3	0.4	1.6	頁岩
185	ＭＢ46	石匙	6.1	3.2	0.9	14.9	〃
186	ＬＪ39	〃	7.9	3.9	0.9	33.6	〃
187	ＭＦ40	石篦	6.0	3.0	1.4	25.2	〃
188	ＭＥ40	〃	5.1	3.8	1.2	31.1	片岩
189	ＬＥ39	〃	5.6	6.2	1.3	30.6	頁岩
190	ＭＥ47	〃	7.5	3.5	1.5	41.3	〃
191	ＬＦ38	〃	5.1	4.0	2.6	54.7	〃
192	ＬＪ40	〃	5.8	3.6	0.8	19.6	〃
193	ＬＥ43	スクレーパー	3.9	3.3	0.9	9.3	玉髄
194	ＬＪ39	〃	4.8	5.3	1.3	24.8	頁岩
195	ＭＣ49	〃	7.2	5.0	1.6	53.0	〃
196	ＬＧ41	〃	7.4	5.0	1.9	58.2	〃
197	表採	磨製石斧	9.3	4.9	3.4	230.7	凝灰岩
198	ＭＤ48	〃	12.2	5.1	2.8	246.4	流紋岩
199	表採	磨石	7.0	7.6	5.2	352.6	花崗岩
200	表採	半円状扁平打製石器	6.3	12.6	3.0	367.4	玄武岩
201	ＭＢ39	磨石	9.6	12.2	5.0	825.9	花崗岩
202	ＬＦ40	石錘	8.1	6.4	2.5	163.1	安山岩
203	ＬＧ38	〃	8.7	6.6	2.1	166.7	〃
204	ＬＦ38	〃	11.7	7.9	2.4	378.6	花崗岩
205	ＬＧ38	〃	12.3	13.1	4.2	962.1	安山岩
206	ＬＧ37	砥石	5.7	4.6	1.4	59.2	凝灰岩

第3章　まとめ

縄文時代の遺構と遺物について

①遺構の立地と変遷について

今回の調査では、竪穴住居跡3軒、フラスコ状土坑5基、土坑6基が検出された。竪穴住居跡は、上位面に1軒、下位面に2軒であるが、この3軒は同一時期に営まれたのでなく、それぞれ時期を異にしている。また、フラスコ状土坑は南向き斜面の上方に4基、下方に1基ある。これを表にすると、次のようになる。

遺構名	営まれた時期		立地
	前期	中期	
ＳＩ　17	･･･		下位面
ＳＩ　25			上位面
ＳＩ　05			下位面
ＳＫＦ	･･･		斜面

註）営まれた時間幅は、最大にみた場合のもので、かならずしもその全期間にわたって遺構が営まれたことを表すものでない。

フラスコ状土坑からは、中期中葉から後葉にかけての遺物が出土している。その出土状況は、フラスコ状土坑が使われなくなり、自然堆積と壁の崩落を繰り返して完全に埋没する少し前に斜面上方から流入したものと推測される。したがって、その時期は、ＳＩ05・25と同時期か少し前の時期が考えられる。また、フラスコ状土坑がまとまって位置する北側の上位面には、フラスコ状土坑を使用した人々の集落の存在が予想される。

ＳＩ17からは前期末～中期前葉にかけての遺物が出土し、それは住居跡が埋没する過程で廃棄されたことが推測された。遺物を廃棄した人々は、ＳＩ17で生活を営んだ人々またはＳＩ17の周辺に住んでいた人々の2つの可能性が考えられる。

本遺跡と同じような地形に営まれた遺跡の類例に大館市上ノ山Ⅰ遺跡がある。上ノ山Ⅰ遺跡は、前期から中期にかけての集落であり、上位面と下位面に主に竪穴住居跡が営まれ、斜面部は捨て場に利用されている。斜面部に多量の生活廃棄物が捨てられるとともに、土砂の流出をも引き起こしており、下位面に生活を営む人々に何らかの規制が働いていた可能性が指摘されている。上ノ山Ⅰ遺跡と本遺跡を比較してみると、斜面部の利用の仕方に大きな違いがある。このことは、捨て場が他の場所に形成されたことを示唆するとともに、前期末～中期前葉における下位面の居住環境が上ノ山Ⅰ遺跡のような状況でなかったことを示している。このように

考えてくると、本遺跡の下位面における竪穴住居跡の立地は、「竪穴住居」の機能・用途にかかわるものと一応推測される。

②遺物について

ａ．第Ⅰ群土器について　当該土器は、調査区東側斜面部、ＬＥ42グリッドを中心に出土している。その特徴は、内面に縄文または条痕文が施文されるもので、ほとんどが胎土に繊維を含む。平縁の口縁部破片が１点あり、体部は直線的あるいは内湾ぎみに立ち上がるものであるが、全体の器形は明らかでない。縄文は、０段多条の斜行縄文が多いが、無節・単節もある。

ところで、東日本における早期後葉から前期初頭の土器様相については、関東地方を中心として貝殻条痕文系土器→羽状縄文土器という変遷が知られている。貝殻条痕文系土器が作られていたころ、東北北部から北海道西南部では「縄文系尖底土器様式」の土器が作られていたとされる。この土器の特徴は、胎土に繊維を含み、口縁は平縁か波状をなす尖底深鉢形であり、器面全体に縄文が施され、内面にも条痕と縄文が施される。第Ⅰ群とした土器は、前述の特徴からこの「縄文系尖底土器様式」に含まれるものと考えられる。しかしながら、その型式名については、断片的な資料であることから特定することができなかった。

ｂ．北陸系の土器について　当該土器は、遺構内外から出土している。遺構内ではＳＩ17、遺構外では第Ⅱ群２類・同３類・第Ⅲ群５類が調査区東寄りの斜面から下位面に移るあたり、第Ⅲ群４類が調査区西側の斜面部から出土している。

ＳＩ17出土土器および第Ⅱ群２類・３類土器は、福浦上層式または朝日下層式に比定されるものと考えられる。その胎土の特徴は、２～３mmの砂粒を多く含み、その砂粒が器表面に露出しているものも認められる。ただし、在地の土器との比較においては、目立った違いはみられなかった。

北陸系の土器を出土している県内の遺跡については、冨樫氏の論文[1)]がある。それによると、北陸系の土器が出土している遺跡は、県内の主要河川（米代川、雄物川、子吉川）の流域と男鹿半島、八郎潟周辺にみられること。ただし、雄物川流域の中期の代表的な遺跡からは未だ出土していないこと。出土している土器は、縄文前期末から中期前葉にかけてのものが多いこと等が指摘されている。本遺跡例もその例外ではない。

註１）　冨樫泰時　「秋田県における北陸系の土器について」『本荘市史研究４』　1984（昭和59年）

（参考文献）

秋田県教育委員会　『国道103号大館南バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ上ノ山Ⅰ遺跡・上ノ山Ⅱ遺跡』　秋田県文化財調査報告書第173集　1988（昭和63年）

冨樫泰時　「東日本の縄文土器」『世界陶磁全集１　日本原始』　小学館　1979（昭和54年）

佐藤達夫　「３　青森県上北地方の縄紋土器」『東アジアの先史文化と日本』　六興出版　1983（昭和58年）

青森県教育委員会　『長七谷地貝塚』　青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集　1980（昭和55年）

能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団　『石川県能都町　真脇遺跡農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係る発掘調査報告書』　1986（昭和61年）

青森県教育委員会　『表館(1)遺跡Ⅲ』　青森県埋蔵文化財調査報告書第120集　1989（平成元年）

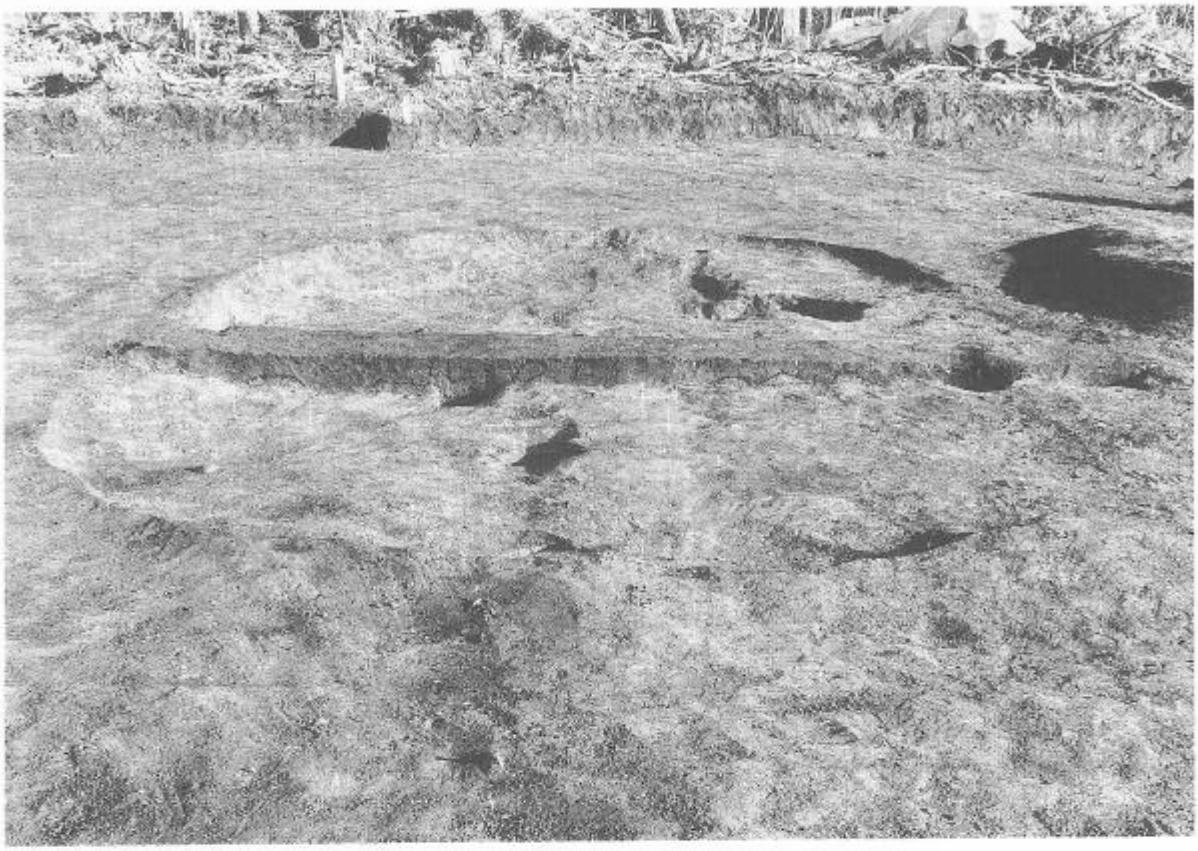
1．萱刈沢II遺跡調査前近景（南西から）

2．上位面調査終了後近景（南から）

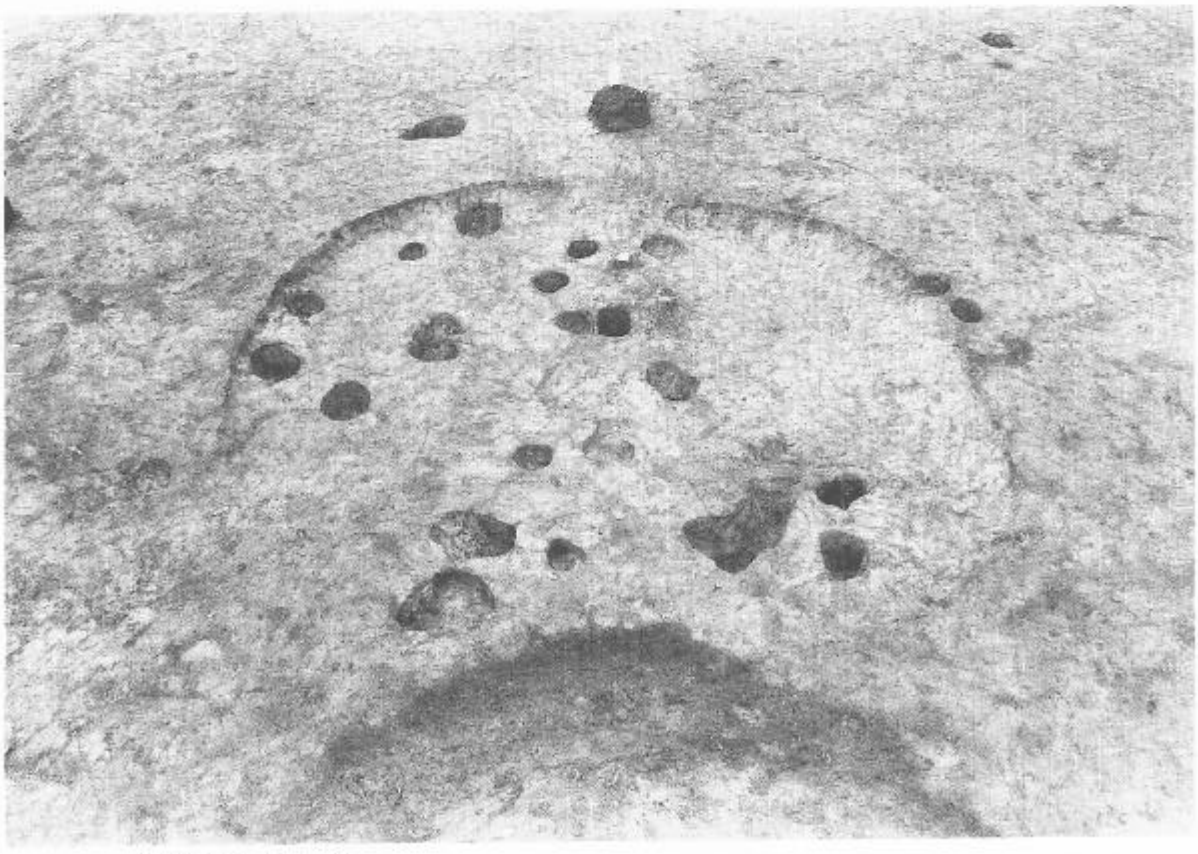
図版22

1．斜面部調査状況（北東から）

2．下位面調査終了後近景（東から）

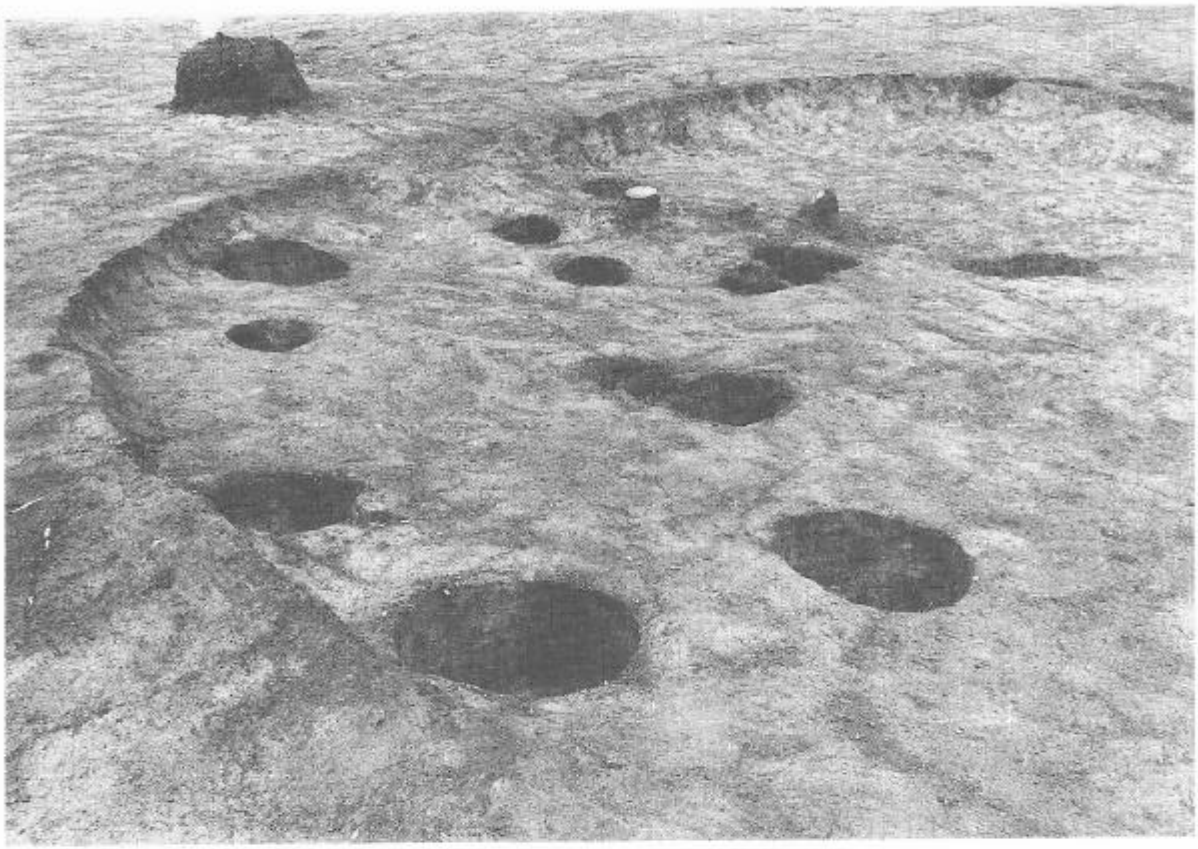


1．SI25土層断面（北西から）

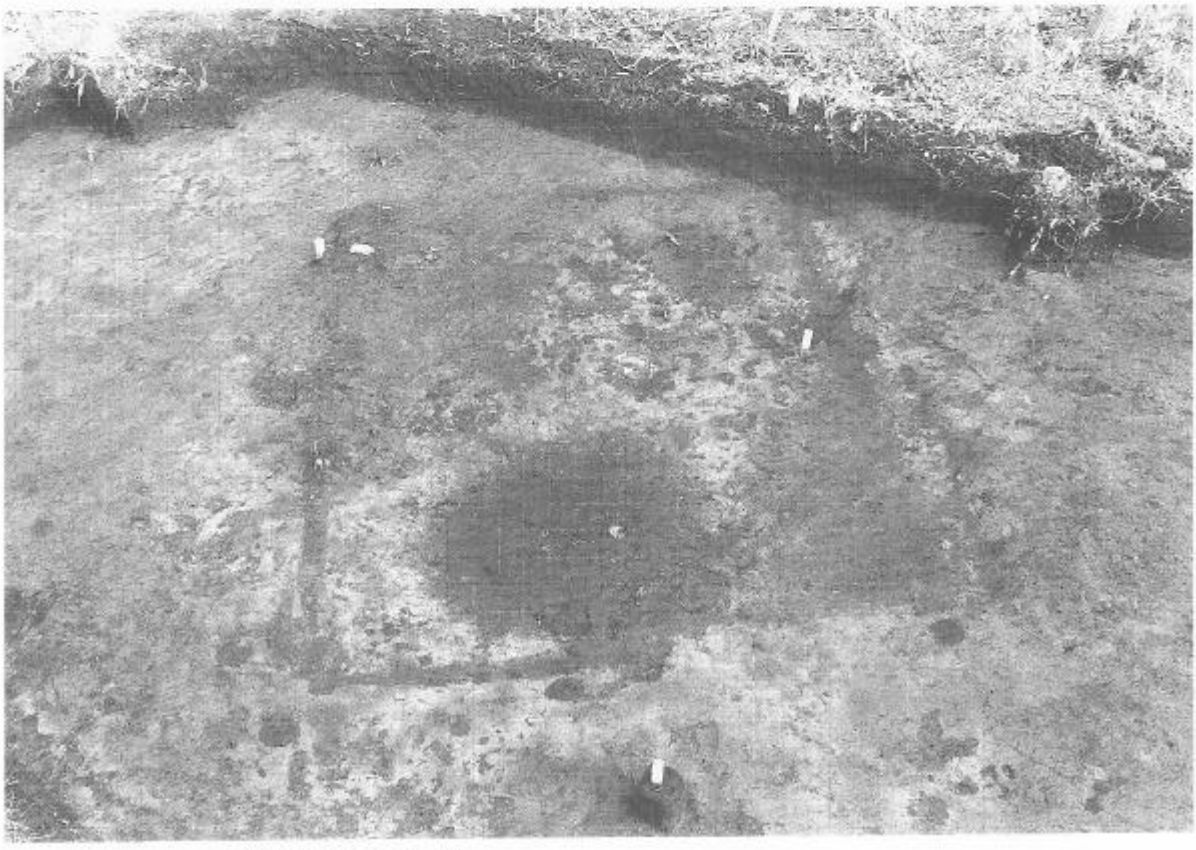


2．SI25完掘状況（南から）

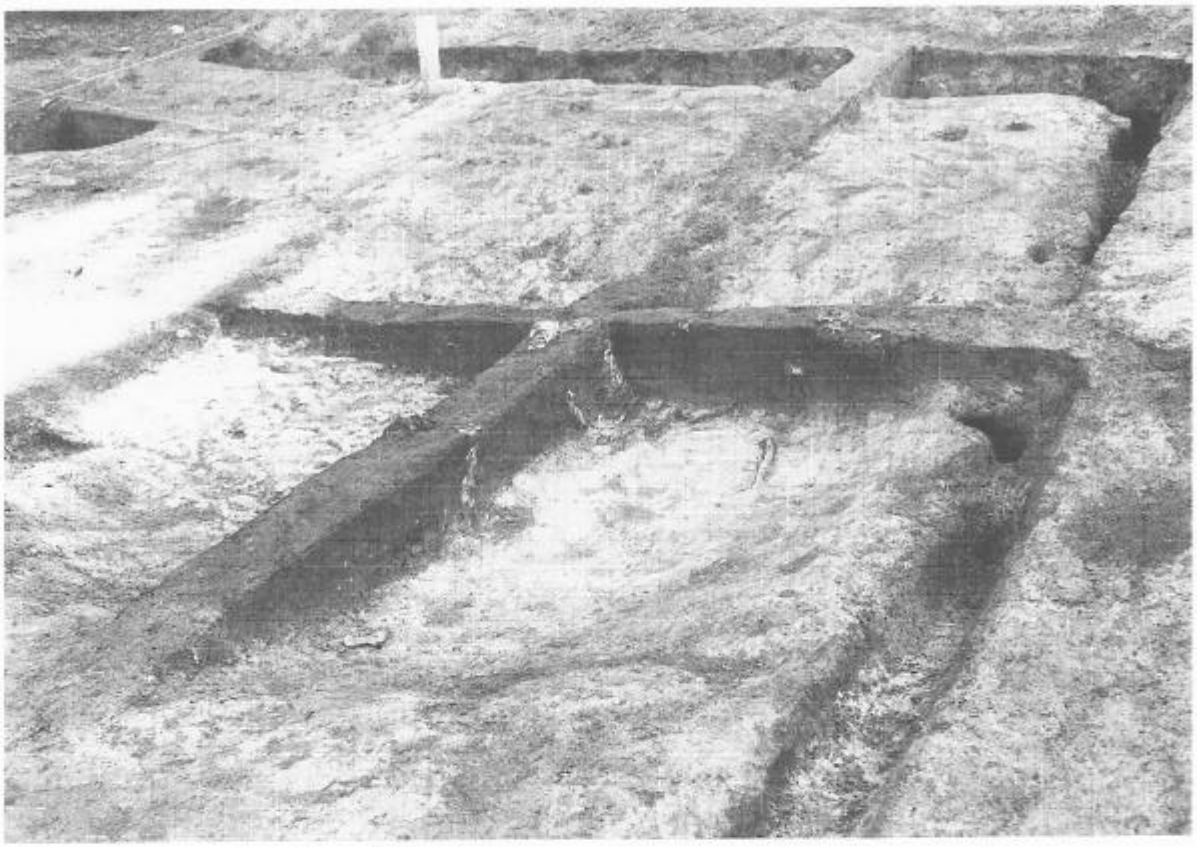
図版24



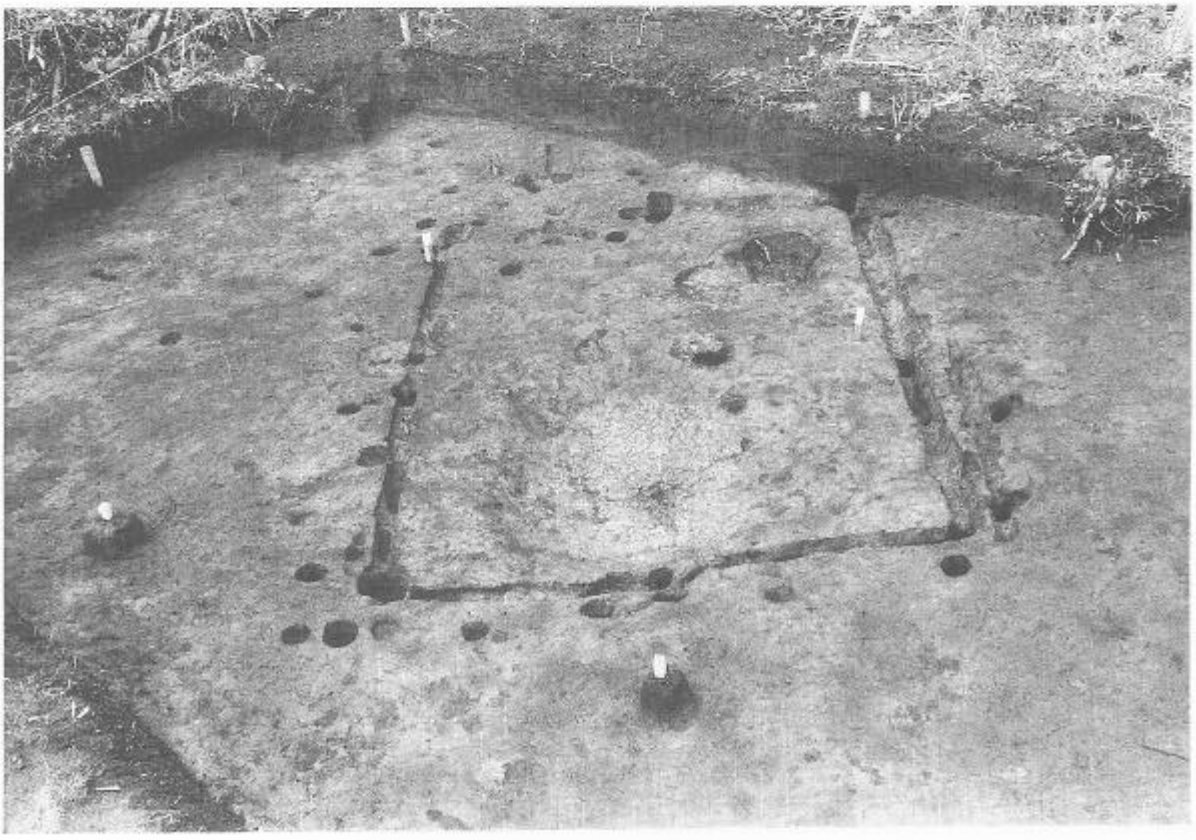
1．SI25完掘状況（西から）



2．SI03・04・19検出状況（西から）

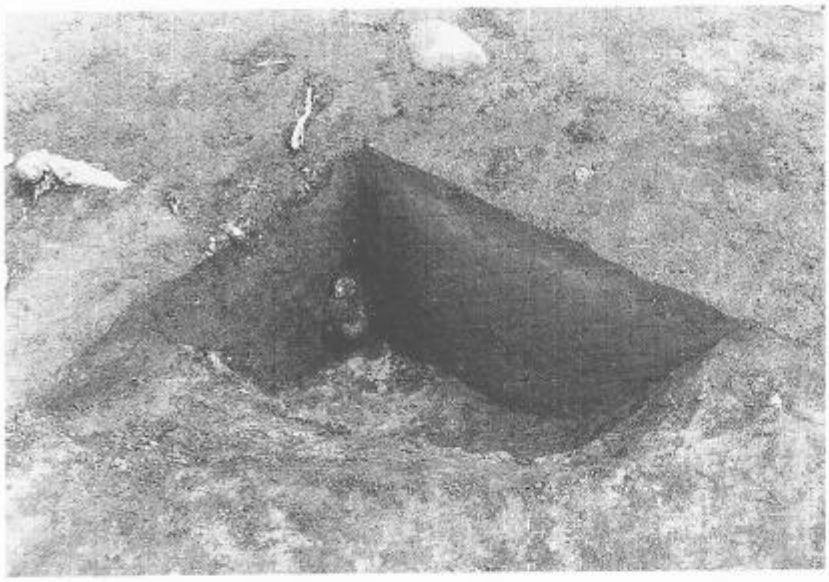


1．SI03・04・19土層断面（北から）

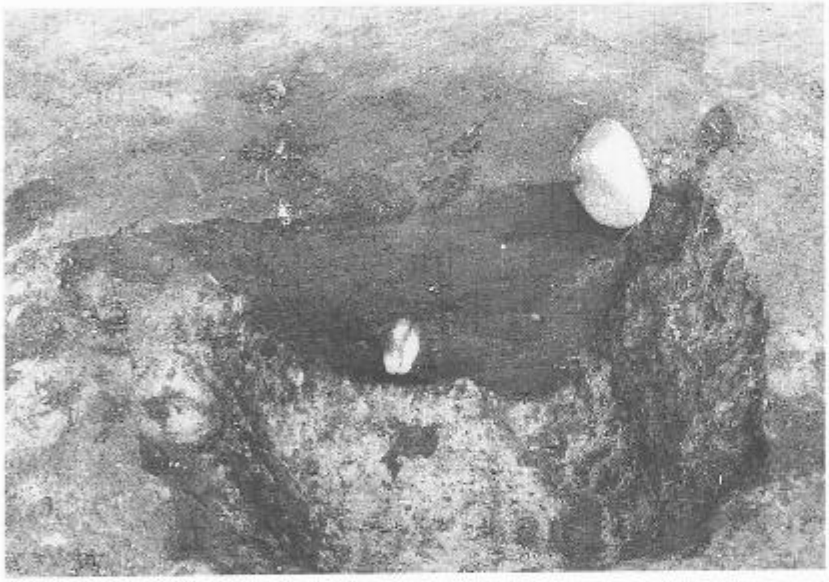


2．SI03・04・19完掘状況（西から）

図版26

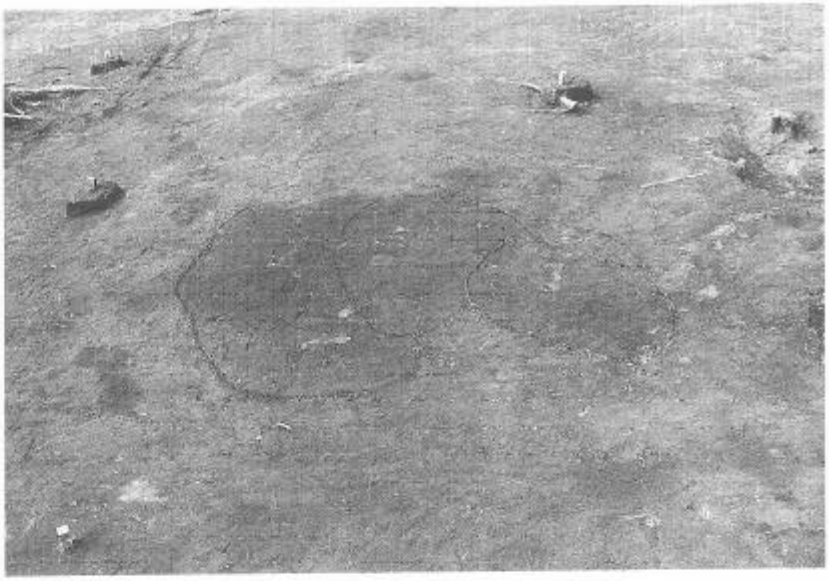


1．SI03・04・19内土坑
土層断面（北西から）

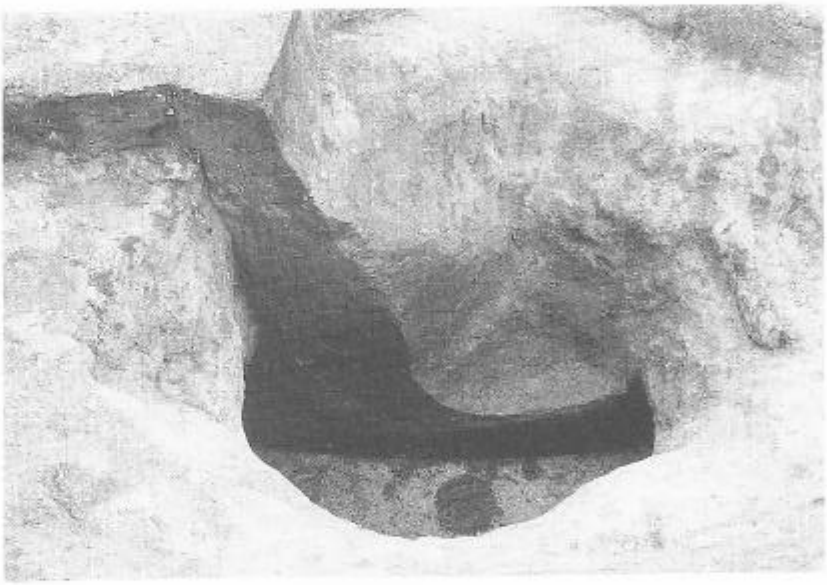


2．SI03・04・19内土坑
土層断面（西から）

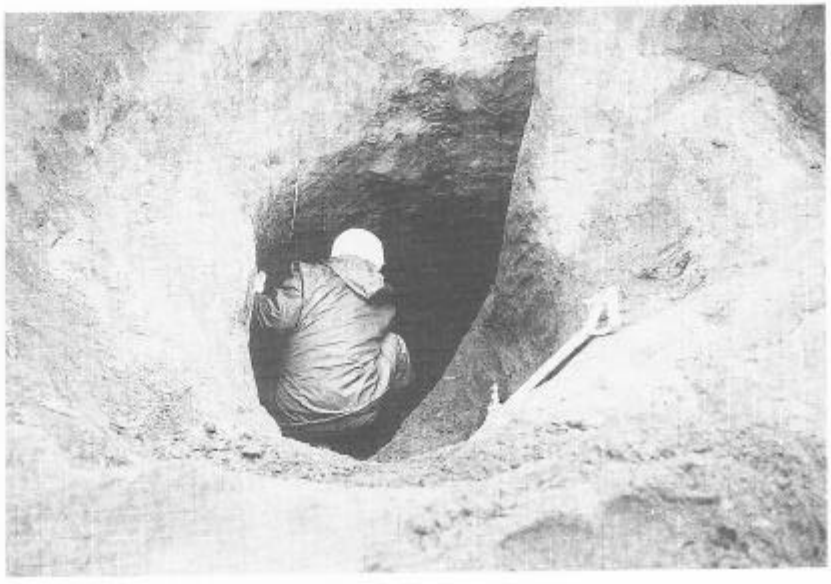
3．SI03・04・19内土坑
完掘状況（西から）



1．SKF06検出状況
（東から）

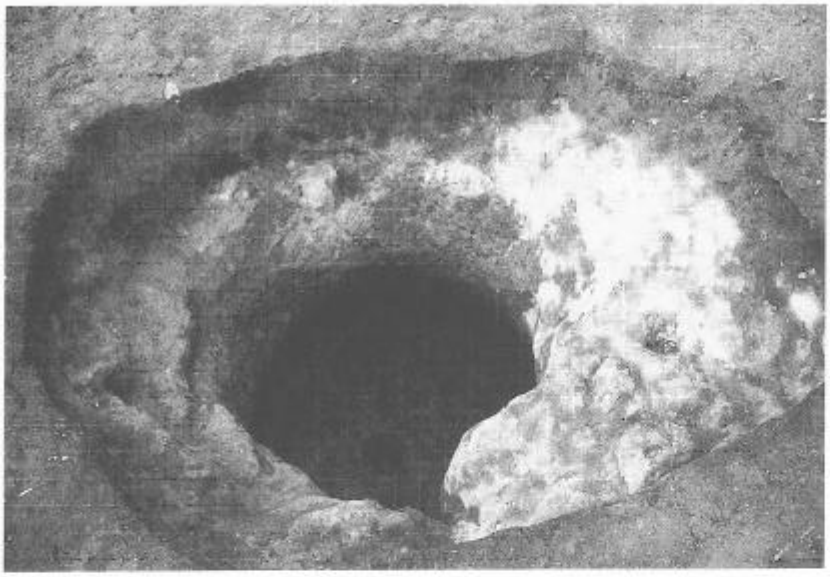


2．SKF06土層断面
（西から）

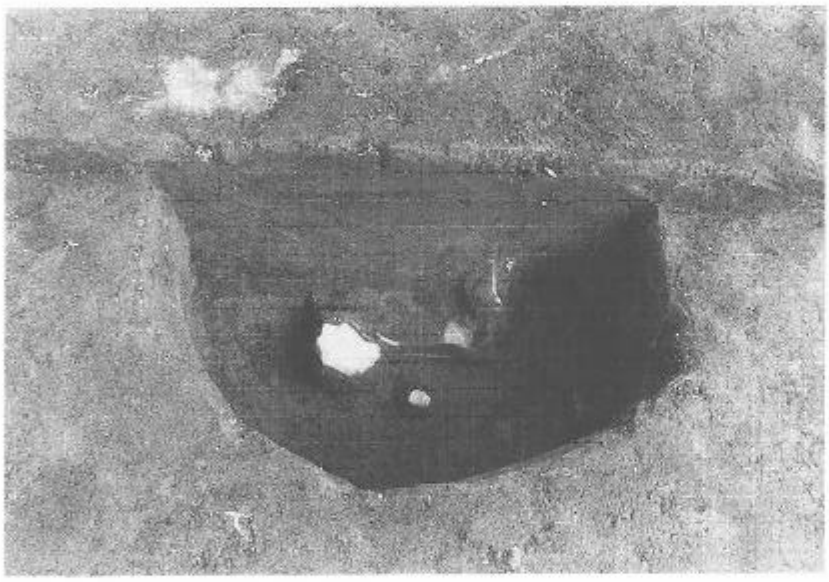


3．SKF06調査状況
（南から）

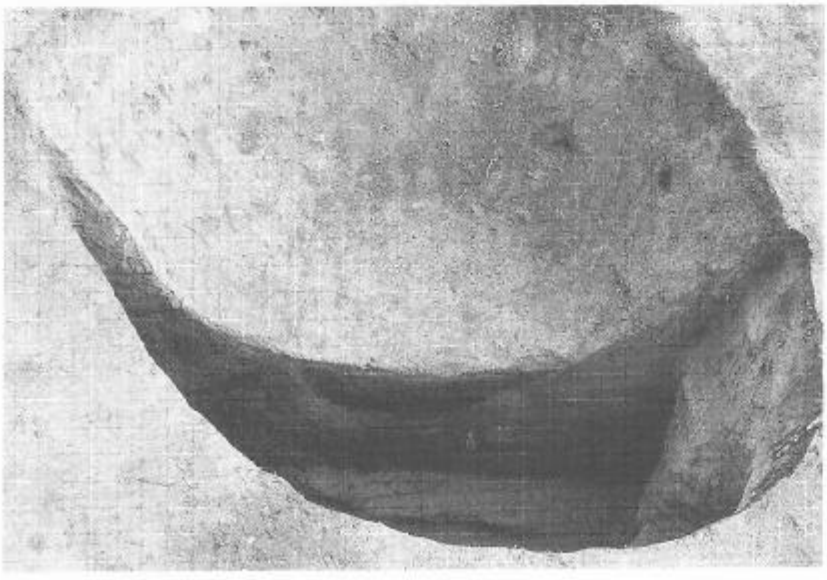
図版28



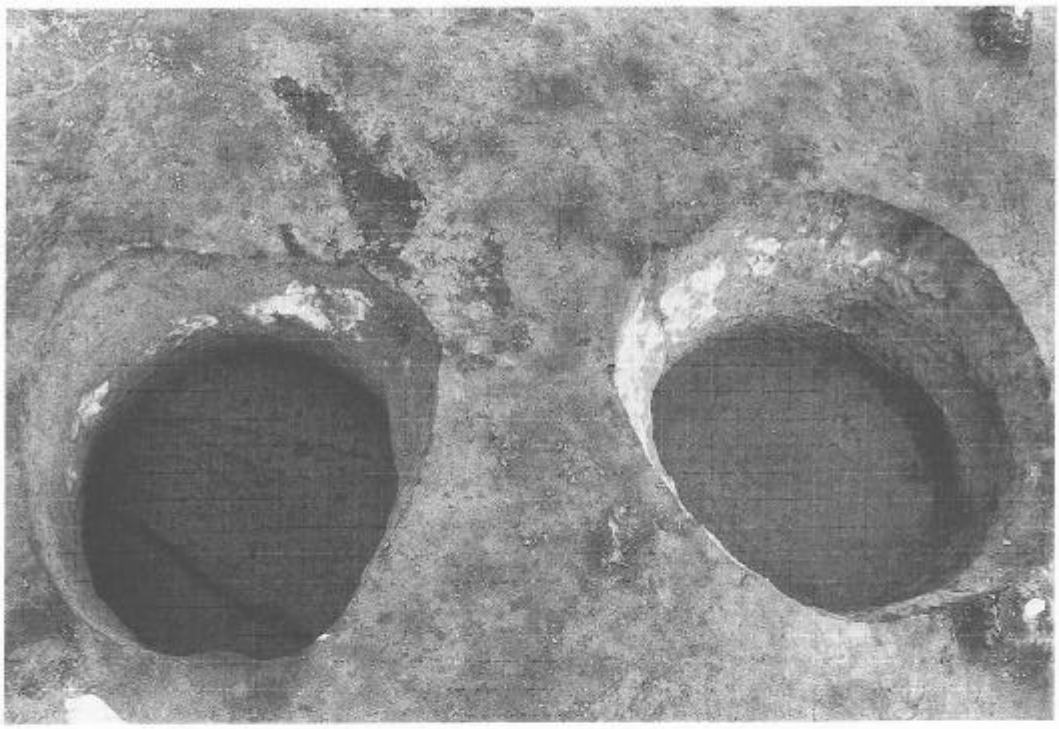
1．SKF06完掘状況
（西から）



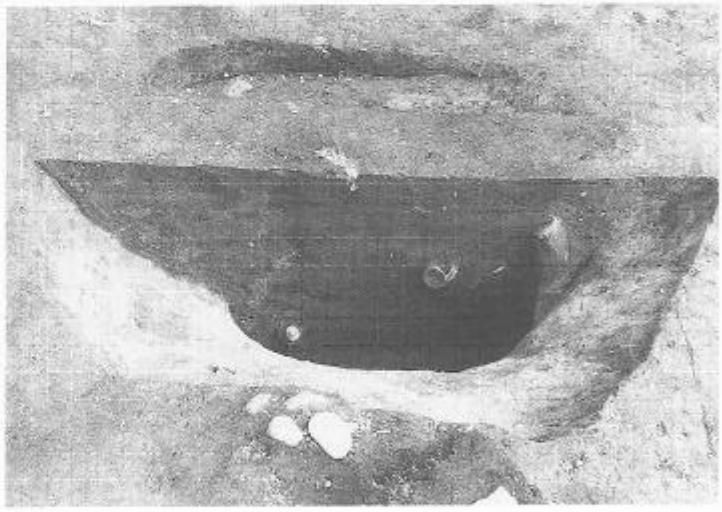
2．SKF07遺物出土状況
（西から）



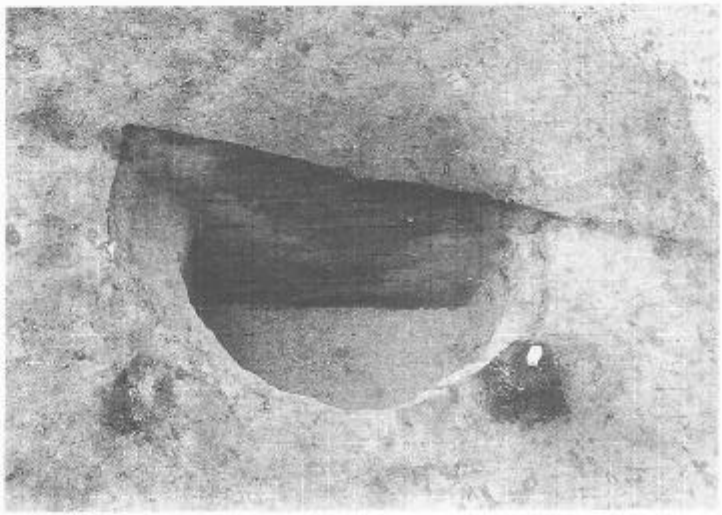
3．SKF09土層断面
（西から）



1．SKF07（左）・SKF09（右）完掘状況（西から）

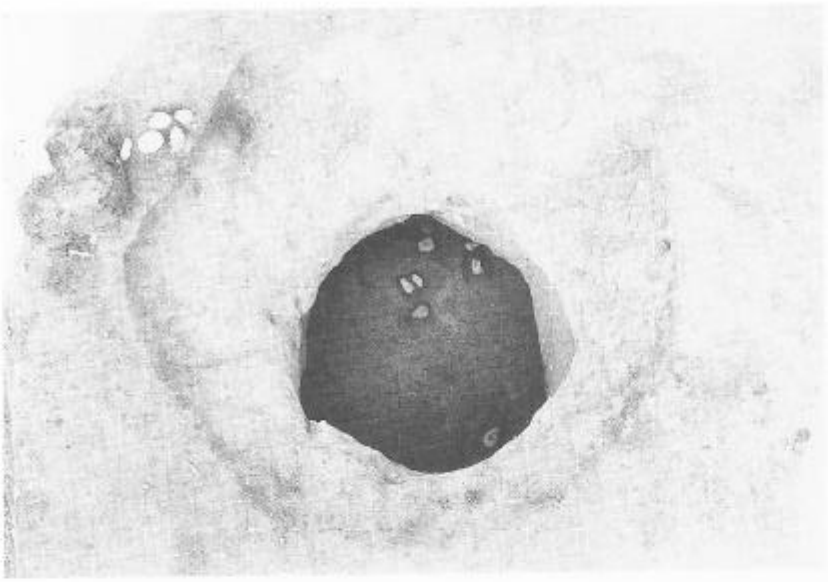


2．SKF08遺物出土状況
（北西から）

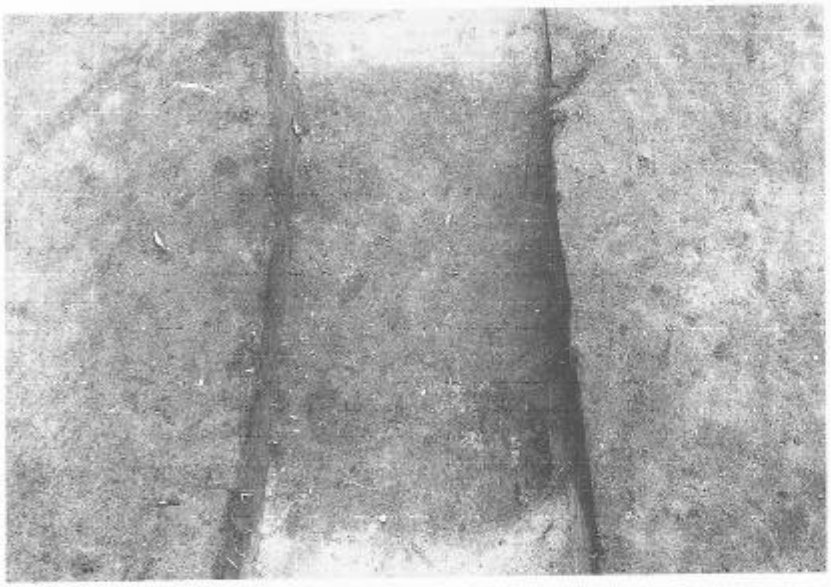


3．SKF08土層断面
（北西から）

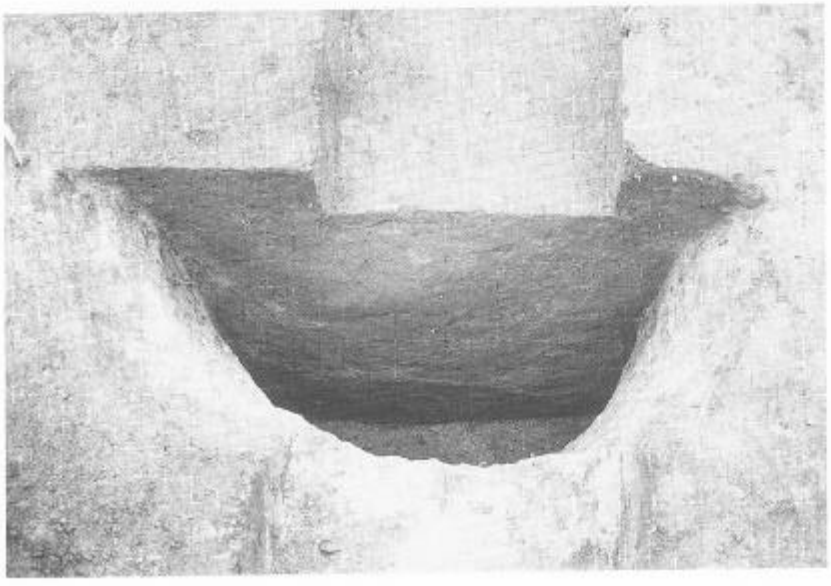
図版30



1．SKF08完掘状況
（南から）

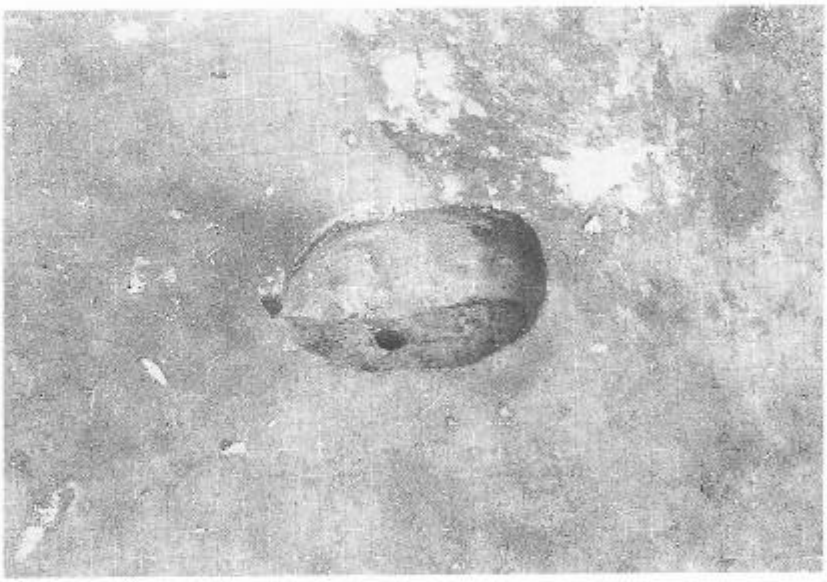


2．SKF21検出状況
（南から）

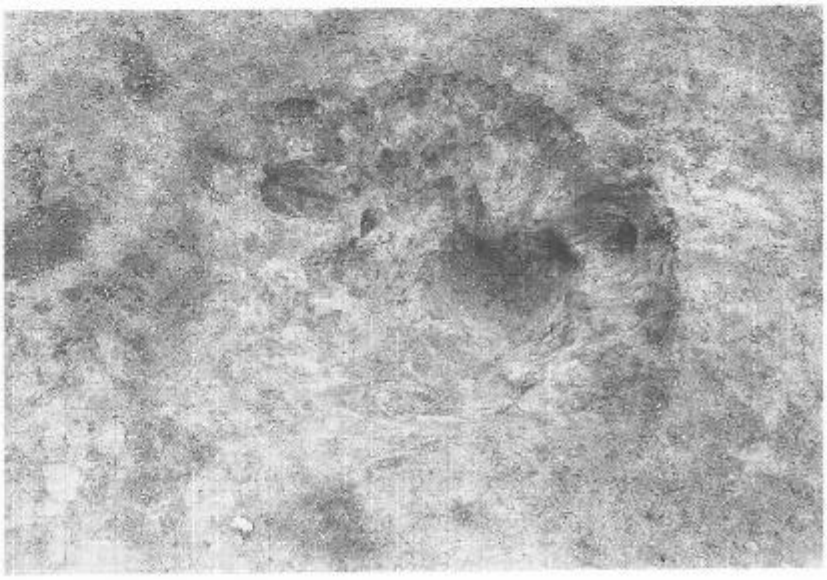


3．SKF21土層断面
（南から）

1．SK11完掘状況
（南から）

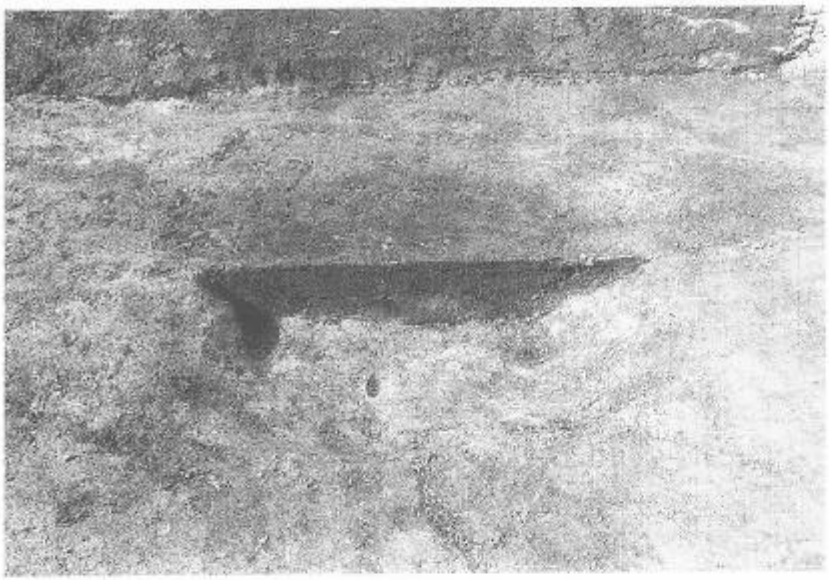


2．SK13完掘状況
（南西から）

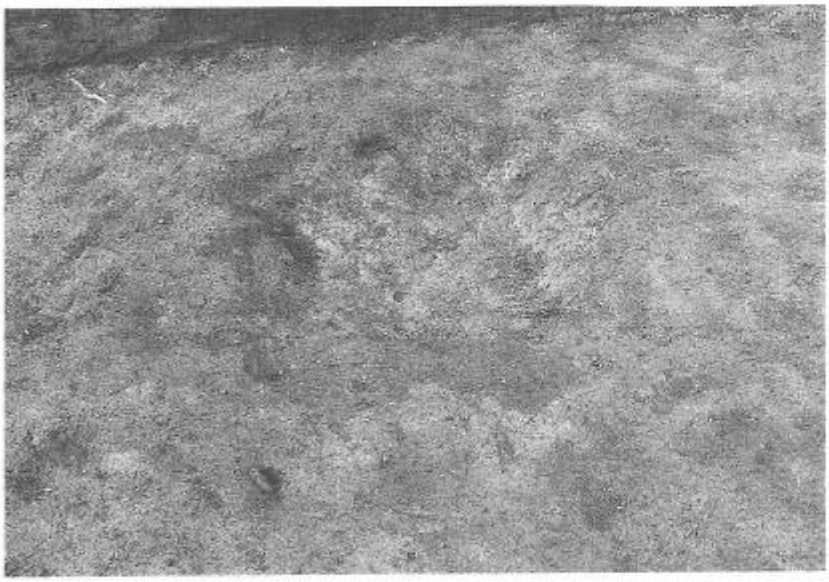


3．SK15完掘状況
（南から）

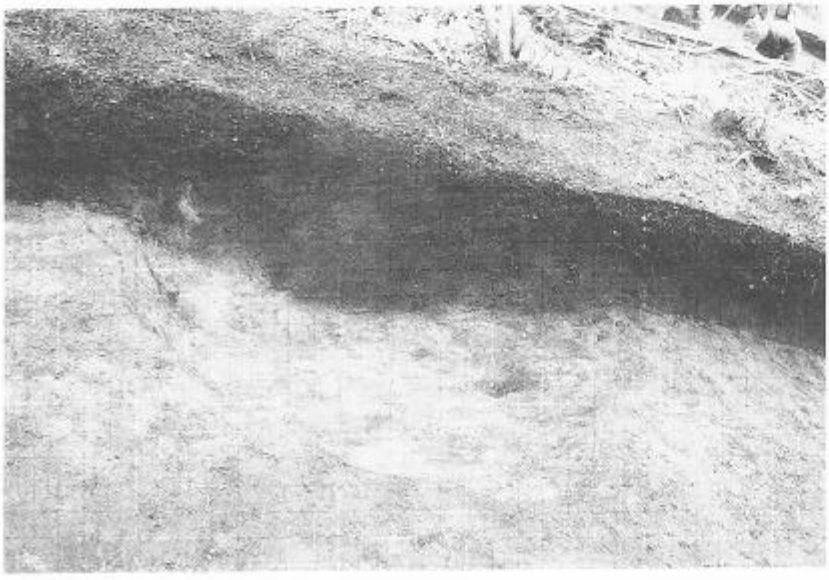
図版32



1．SK16土層断面
（東から）

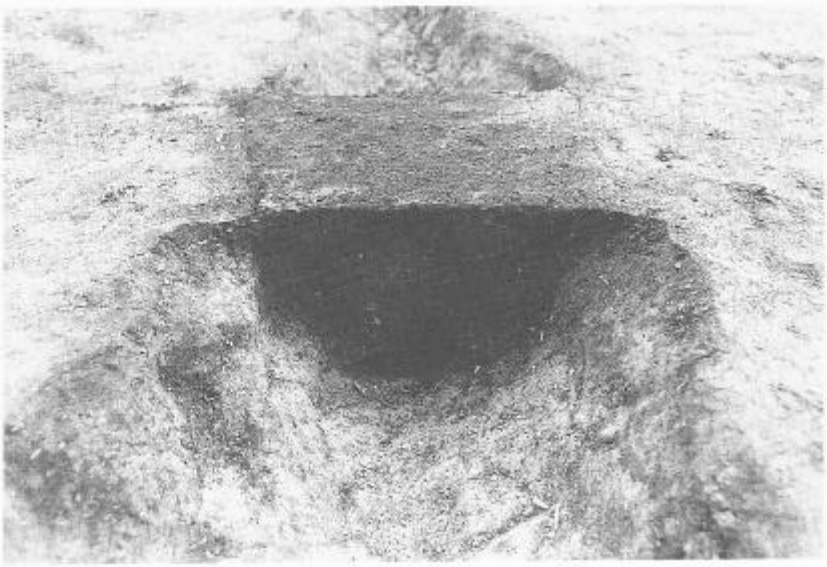


2．SK16完掘状況
（東から）



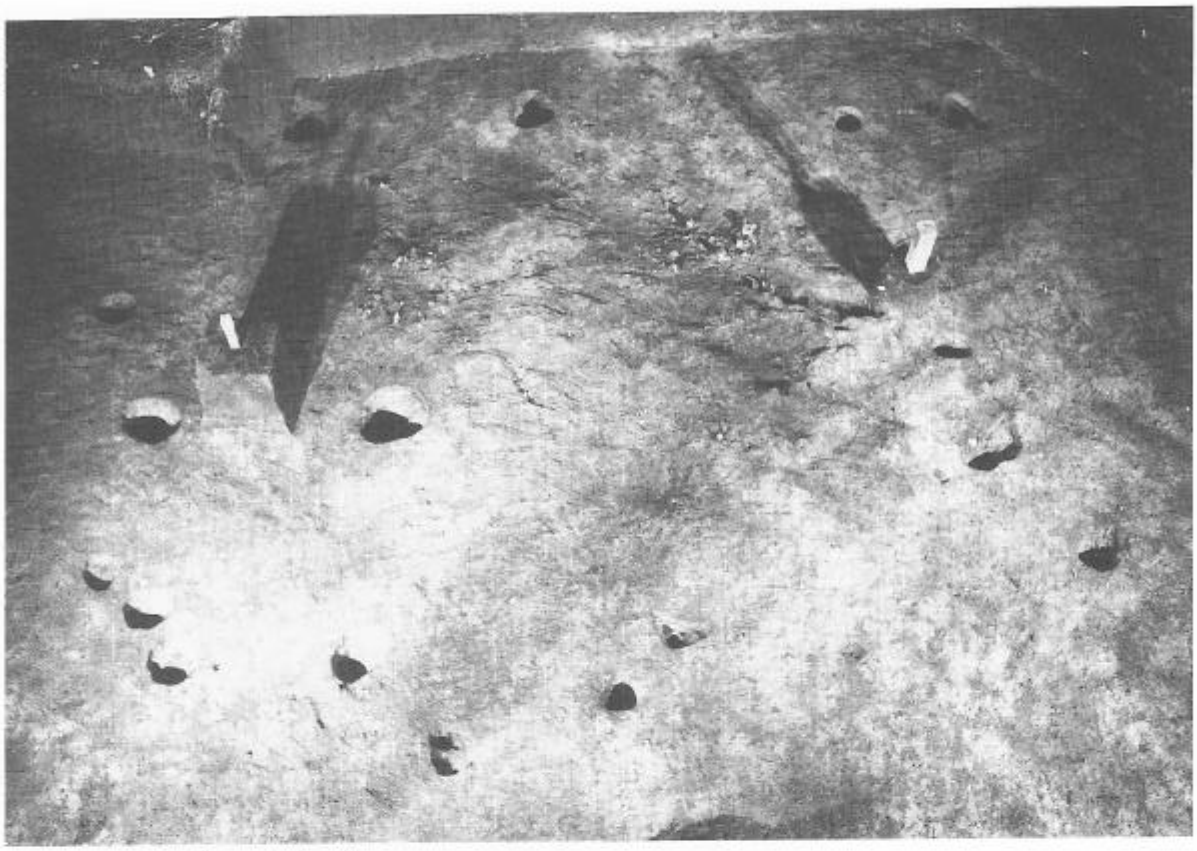
3．SK24完掘状況
（西から）

1．SD01・02全景
及び土坑群（東から）



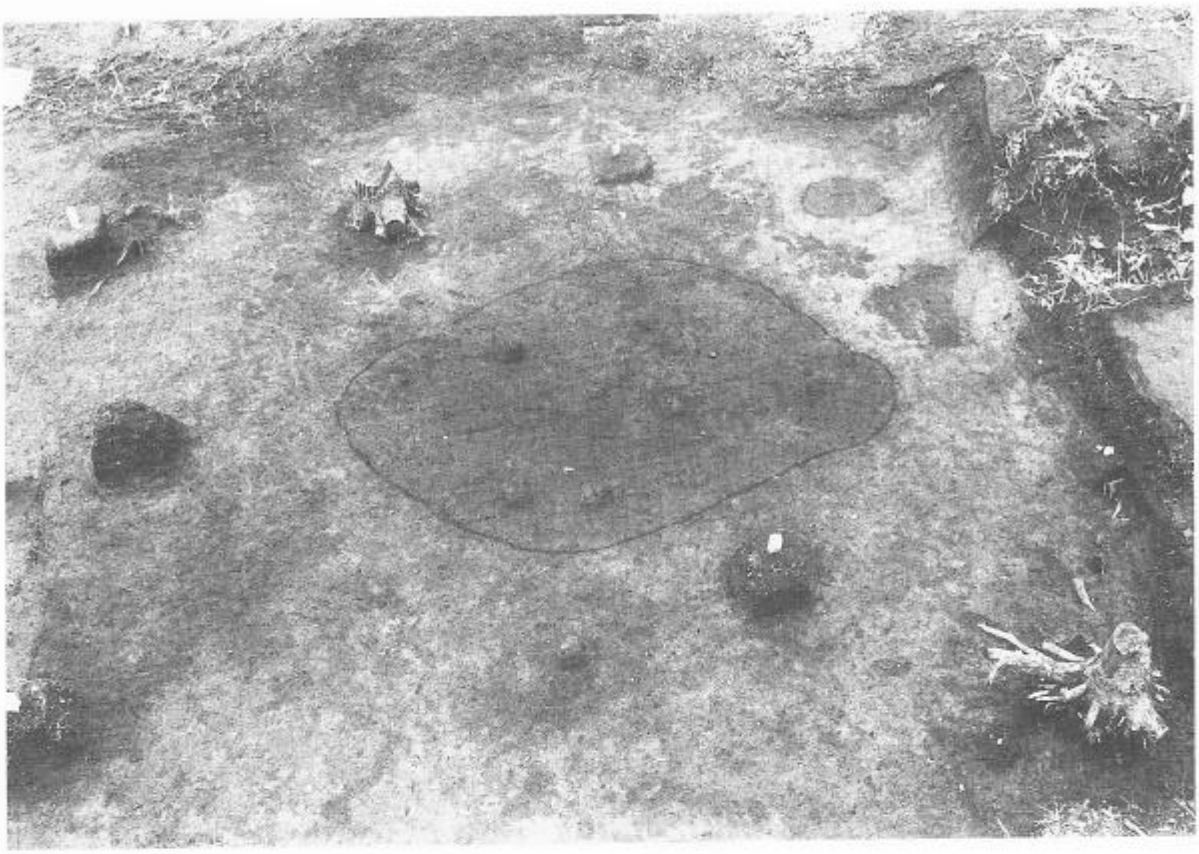
2．SD01土層断面
（西から）

図版34

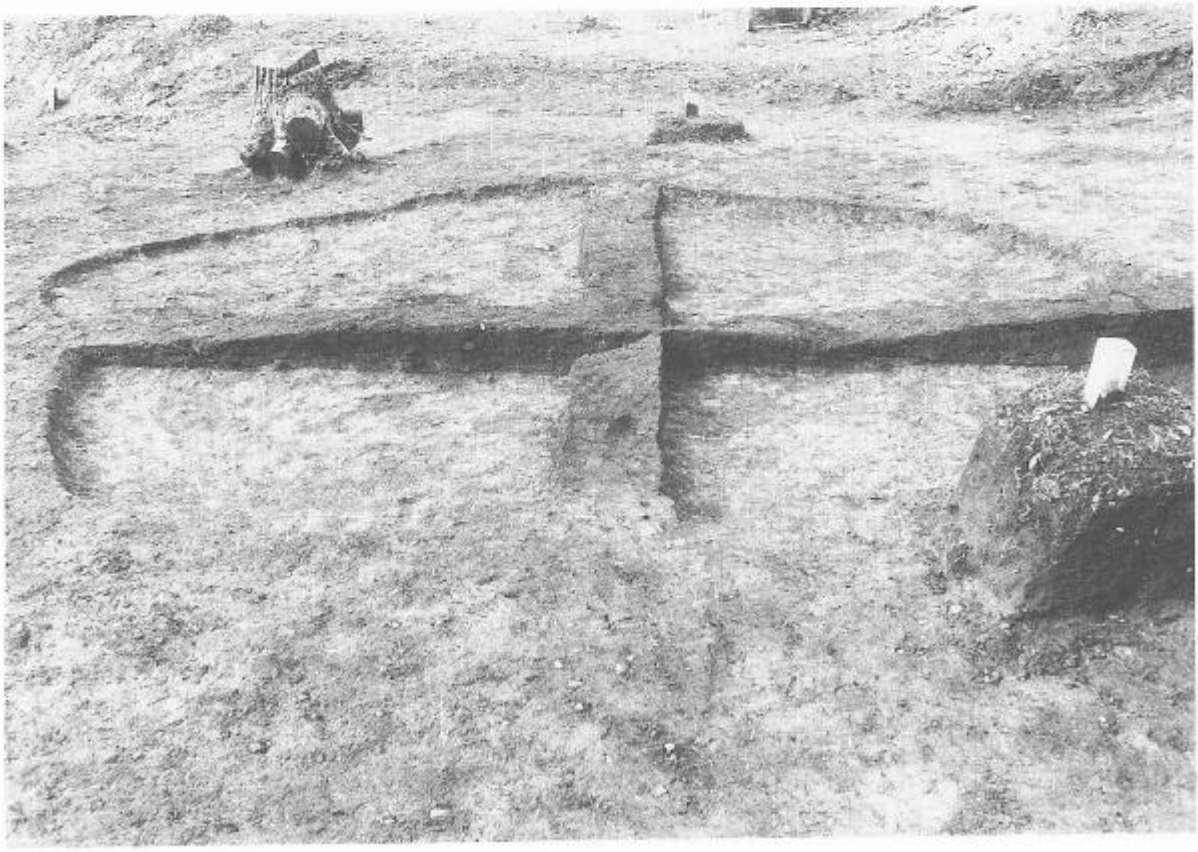


1．SI05完掘状況（西から）

2．SI05地床炉検出状況（西から）

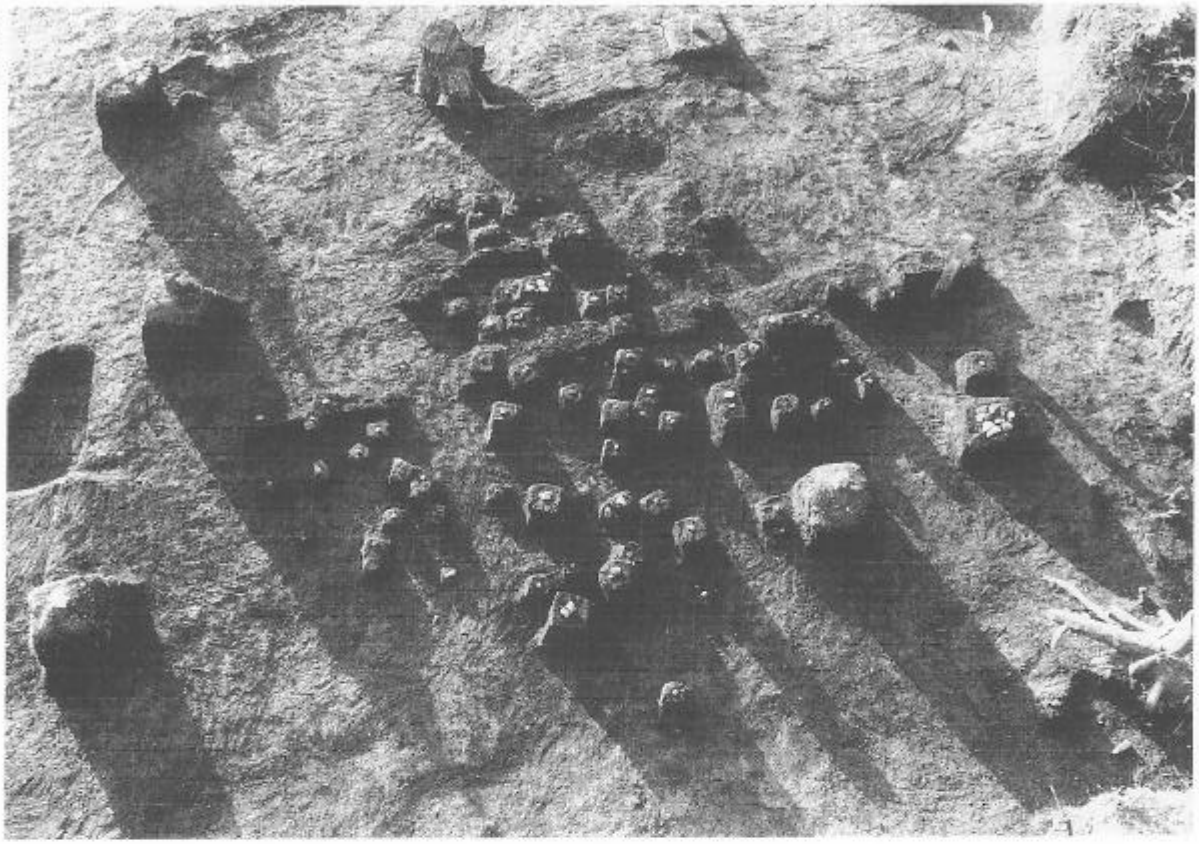


1．SI17・SK28検出状況（東から）

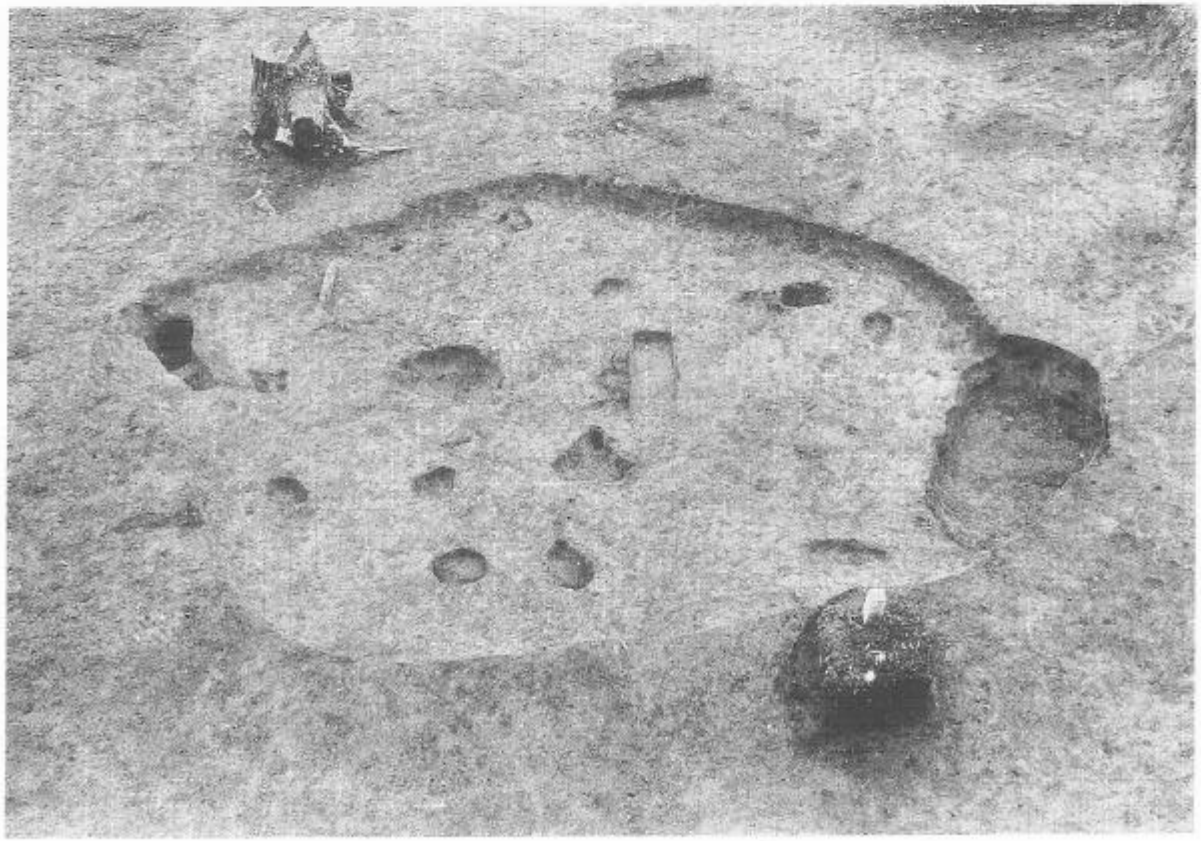


2．SI17土層断面（東から）

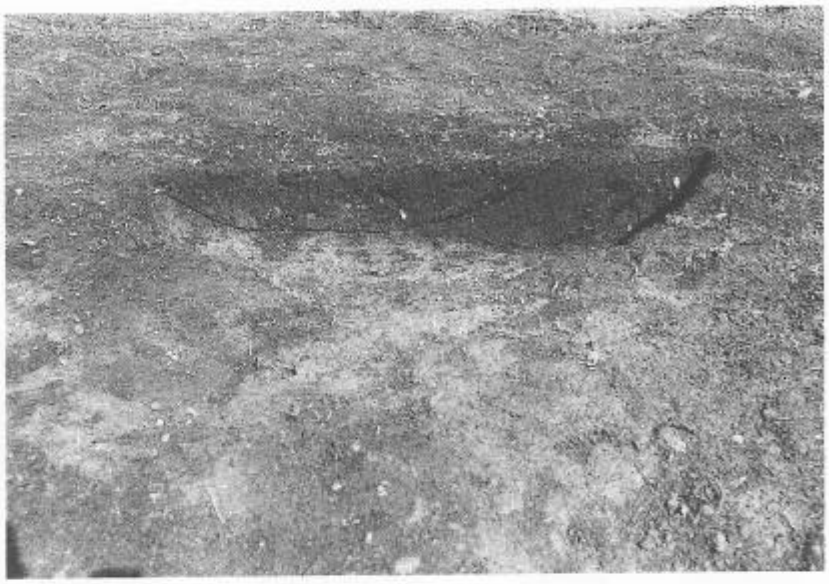
図版36



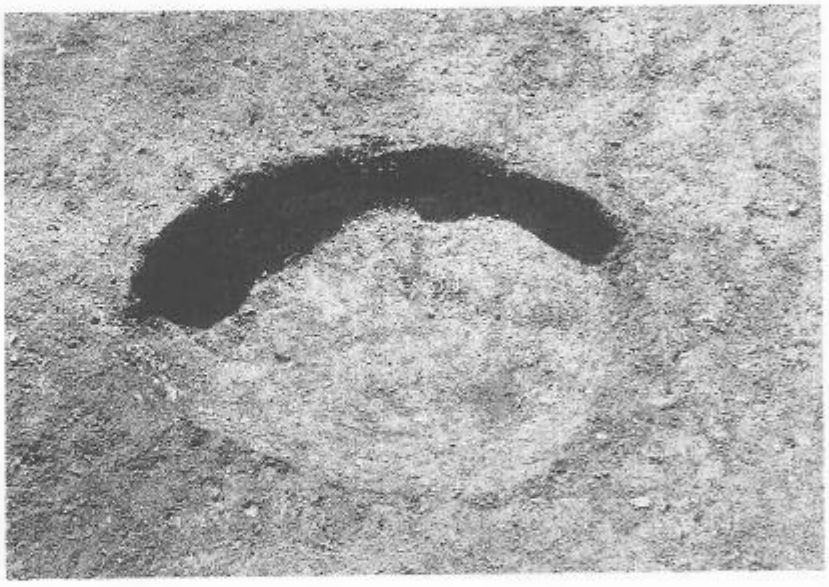
1．SI17遺物出土状況（東から）



2．SI17・SK28完掘状況（東から）

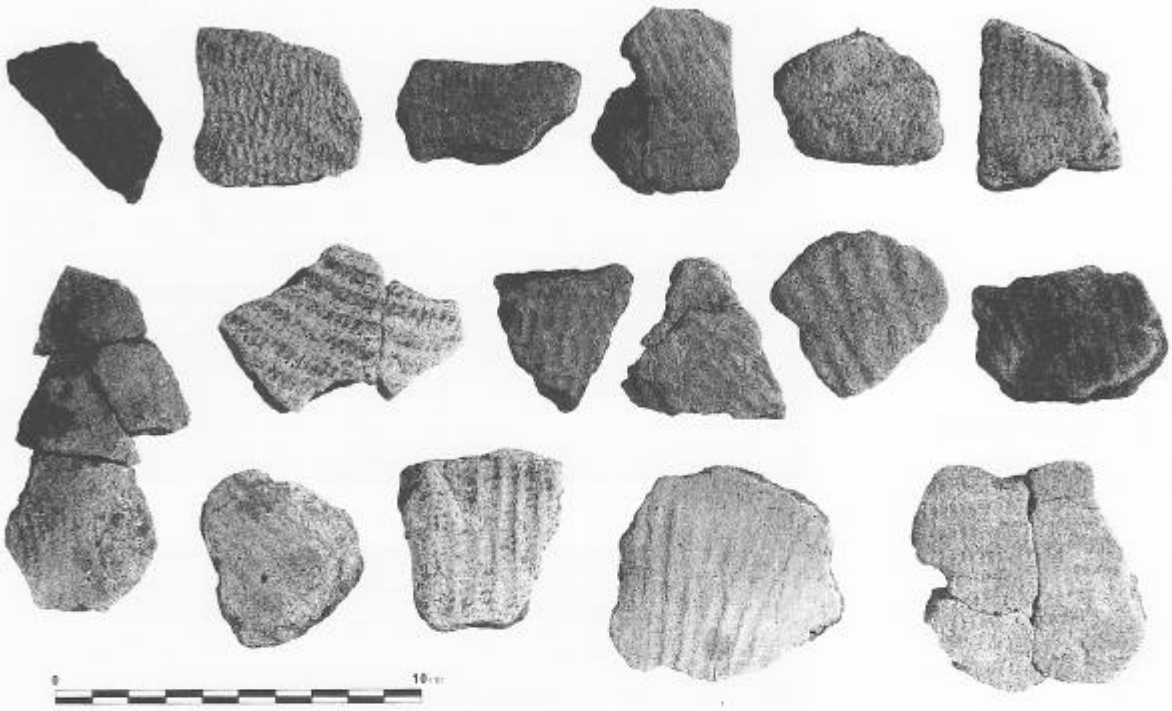


1．SK10土層断面
（南から）

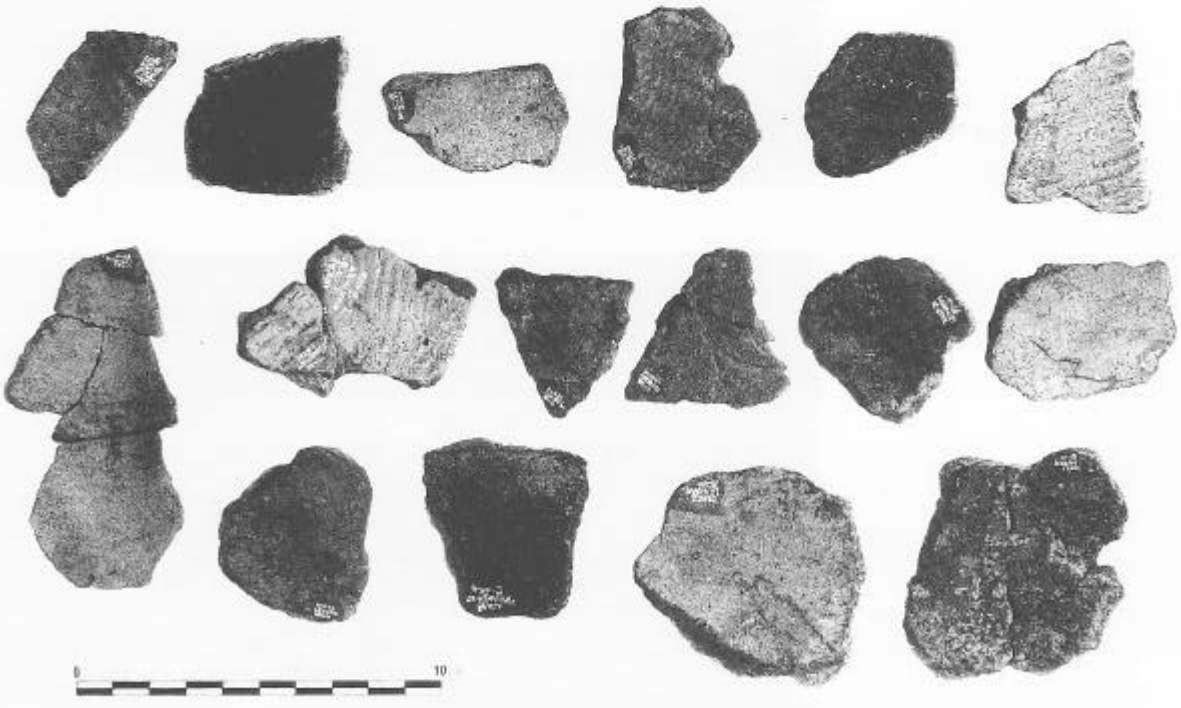


2．SK10完掘状況
（北から）

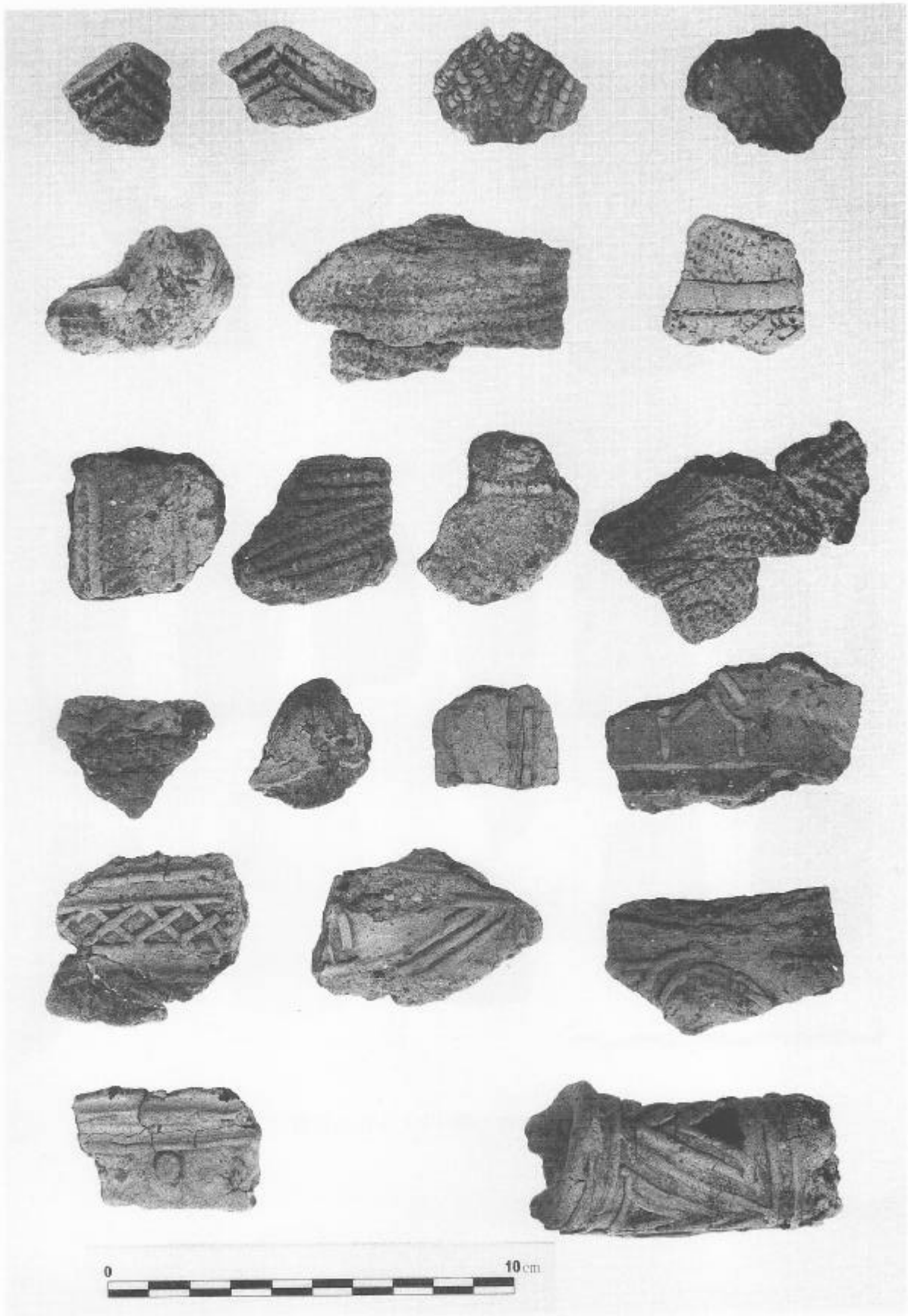
3．調査風景



1．萱刈沢II遺跡第Ⅰ群土器（表面）



2．萱刈沢II遺跡第Ⅰ群土器（裏面）



萱刈沢II遺跡第II群土器（北陸系）

図版40

萱刈沢II遺跡第III群土器（上）・出土石器（下）

付　編

萱刈沢II遺跡の土壙に残存する脂肪の分析

株式会社ズコーシャ総合化学研究所　　中野寛子、長田正宏
帯広畜産大学畜産環境学科　　中野益男、福島道広

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境条件の変化に対しては不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊していくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解していく。これまで生体成分を構成している有機物が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、生体成分の一部、とくに脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年と云う長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。すべての動植物は体内に脂肪を持っており、これらを構成する脂肪酸およびステロールの組成は動植物の種によって異なる。この化学組成と考古学資料に遺存する脂肪の化学組成とを照合させることで“脂肪の持主”を特定しようとするのが残存脂肪分析である。この「残存脂肪分析法」を用いて、萱刈沢II遺跡の土壙の性格を解明しようとした。

1.土壌試料

萱刈沢II遺跡遺構中のＳＫＦ08土壙内外の埋土を各層別に採取した。ＳＫＦ08土壙の遺構内での配置および土壙内外での試料の採取位置を図１－１、１－２に示す。試料は土壙内の上部から底部に向かってⅠ層、Ⅲ層、Ⅴ層、Ⅹ層、ⅩⅦ層、ⅩⅨ層、ＸＸ層、ＸＸⅡ層から採取したものを各々、No.1, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6, No.7, No.8とし、土壙外の土壙底面直下ＸＸⅢ層から採取したものをNo.9とした。

2.残存脂肪の抽出

試料837～999ｇに３倍量のクロロホルム－メタノール（２：１）混液を加え、超音波浴槽中で処理し、得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量分加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表１に示す。残存脂肪の抽出率は0.001～0.0033％、平均0.0018％であっ

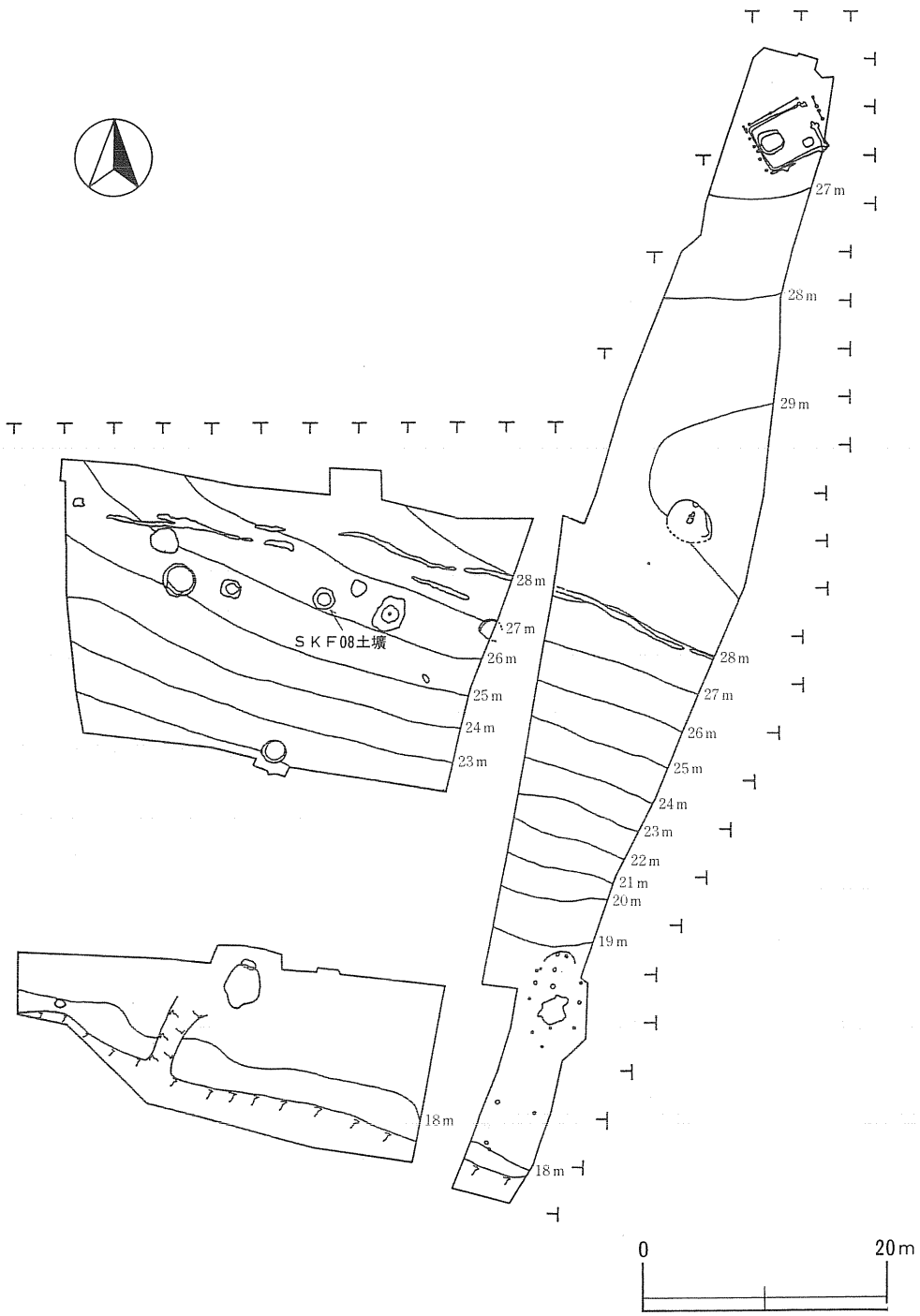


図１－１　萱刈沢Ⅱ遺跡遺構配置図

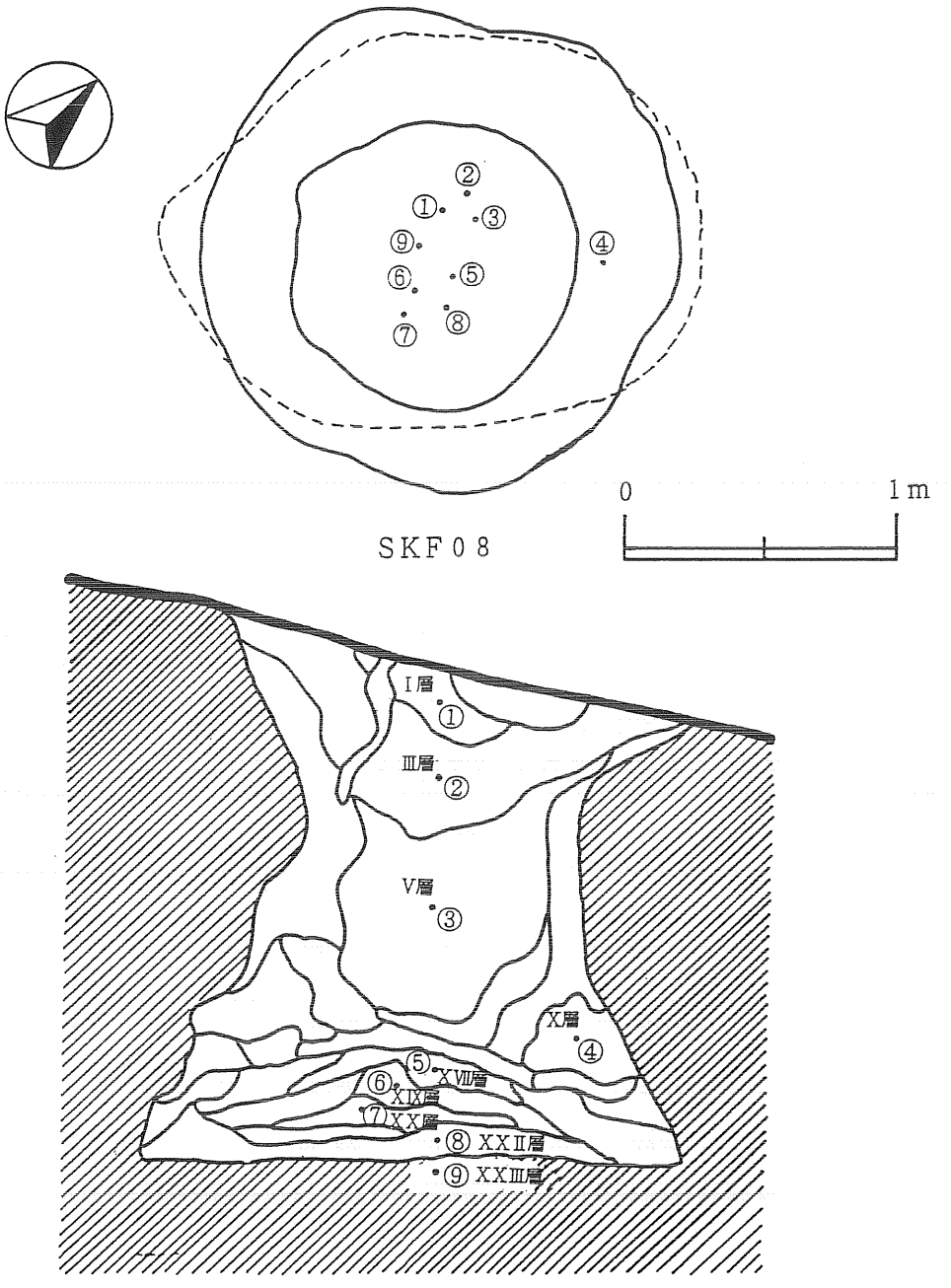


図１－２　ＳＫＦ08土壙内外の土壌試料採取地点

表１　土壙内外の土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採　取　地　点	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	ＳＫＦ08埋土　Ⅰ　層	996.8	33.2	0.0003
2	ＳＫＦ08埋土　Ⅲ　層	996.5	208.	0.0021
3	ＳＫＦ08埋土　Ⅴ　層	991.7	17.5	0.0018
4	ＳＫＦ08埋土　Ⅹ　層	995.4	10.2	0.0010
5	ＳＫＦ08埋土　ⅩⅦ層	997.1	10.3	0.0010
6	ＳＫＦ08埋土　ⅩⅨ層	999.3	11.9	0.0012
7	ＳＫＦ08埋土　ＸＸ層	837.3	14.4	0.0017
8	ＳＫＦ08埋土ＸＸⅡ層	998.3	19.6	0.0020
9	ＳＫＦ08埋土ＸＸⅢ層	996.2	＞ 0.1	＞ 0.0001

表２　試料に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	6.76	65.90	0.1026
2	6.04	58.81	0.1027
3	9.01	53.88	0.1672
4	6.79	57.68	0.1177
5	5.68	56.16	0.1011
6	4.37	68.41	0.0639
7	9.65	67.72	0.1425
8	4.03	60.45	0.0667
9	0.00	100.00	—

た。この値は北海道納内３遺跡の土壙内外の土壌試料の平均残存脂肪抽出率0.0032％とほぼ同じで、福島県西方前遺跡の土壙内外の土壌試料の平均抽出率0.025％よりはかなり低く、秋田県手取清水遺跡や静岡県初音ケ原Ｂ遺跡の土壙内外の土壌試料の平均抽出率0.0005％よりは少し高い値であった。また全国各地の遺跡土壌の平均抽出率0.02％と比較しても低い値であったが分析には十分量であった。

残存脂肪をヘキサンーエーテルー酢酸を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪種は遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリグリセリド、ステロール、炭水化物の順に検出された。

3.残存脂肪の脂肪酸組成

試料の残存脂肪に５％メタノール性塩酸を加え、125°Cで２時間封管中でメタノール分解し、生成した脂肪酸メチルエステルを薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

試料の残存脂肪の脂肪酸組成を図２に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうち、パルミチン酸（C16:0)、パルミトレイン酸（C16:1)、ステアリン酸（C18:0)、オレイン酸（C18:1)、リノール酸（C18:2)、アラキジン酸（C20:0)、エイコサモノエン酸（C20:1)、ベヘン酸（C22:0)、リグノセリン酸（C24:0）など９種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィーー質量分析で同定した。試料No.1からNo.8の脂肪酸組成をみると、オレイン酸、パルミチン酸、パルミトレイン酸、リノール酸が主成分で、これらの脂肪酸が全体の約68～87％を占めていた。一般にオレイン酸を頂点にして山型を描く脂肪酸組成のパターンは植物腐植土に多くみられるものである。これらの脂肪酸の他に、高等植物の臓器、血液、神経組織に多く存在するベヘン酸、リグノセリン酸等の高級脂肪酸も約２～18％分布していた。土壙底面の試料No.8には、ベヘン酸7.8％、リグノセリン酸9.9％と高級脂肪酸の分布割合が高いが、後で述べるコレステロールは４％と低い。これは、植物の葉の表面、種子外殻を構成するワックス成分に由来すると考えられる。土壙底面直下の試料No.9は他の試料とは異なる脂肪酸パターンを示していた。主成分はパルミチン酸で、次にオレイン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸の順で多く分布していた。またベヘン酸やリグノセリン酸等の高級脂肪酸は全く分布していなかった。このことは、土壙外の土壙底面直下のＸＸⅢ層から採取された試料No.9が他の土壙内試料とは性質を異にしていることを示唆している。従って、土壙底面は試料No.8の出土層にあることが確認出来たことになる。

4.残存脂肪のステロール組成

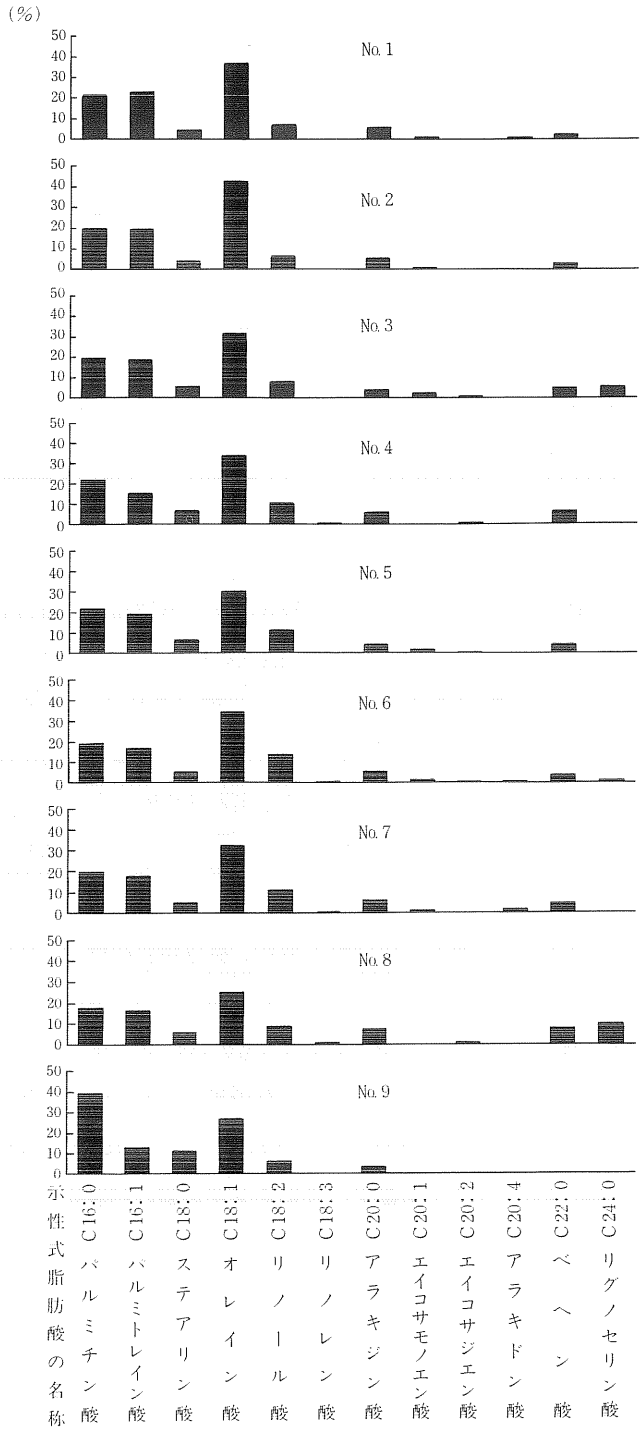


図2　土壙内外の土壌試料に残存する脂肪の脂肪酸組成

試料に残存する脂肪からステロールをヘキサン－エーテル－酢酸（80:30:1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（１：１）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。

試料中の残存脂肪のステロール組成を図３に示す。残存脂肪から１～15種類のステロールを検出した。このうち、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど７種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析で同定した。

試料No.1からNo.8のいずれの試料にも植物由来のシトステロールが約54～68％と高率で分布し、動物に特徴的に見られるコレステロールが約４～10％分布していた。先の脂肪酸分析で動物油脂の分布が見られないことから、このコレステロールは植物の葉の表面、木の実、種子の外殻を構成する微量のコレステロールに由来するものと推定される。土壙底面直下試料のNo.9ではシトステロールが100％を占めていた。これらのステロールのうち、コレステロールとシトステロールの分布比を表２に示した。いずれの試料もその分布比は0.1前後を示している。一般に動物遺体の存在を示す分布比の指標値は土壙で0.6以上である。従って、これらの数値はいずれの試料も植物由来のものであることを示唆している。この結果は、先の脂肪酸分析の成績ともよく一致している。

5.脂肪酸組成からの数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成を重回帰分析にかけ、相関行列距離を基にした群平均によるクラスター分析の結果を図４に示す。樹状構造図に見られるように、試料No.1からNo.7までは相関行列距離が0.1以下で同じＡ群内にあり、同じ性質の脂肪が残存していたことを示している。試料No.8はＡ群に近いＢ群を形成している。試料No.9はその距離が離れていて別の系統、Ｃ群に属しており、他の試料とは性質が異なることを示している。

6.脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をＸ軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をＹ軸にとり、種特異性相関を求めた。この比例配分により、第１象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、胎盤、臓器等に由来する脂肪が分布し、第２象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪が分布する。第２象限から第３象限にかけての原点付近に植物と微生物、第３象限から第４象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図５に示す。試料No.1からNo.7はＡ群を、試料No.8はＢ群を形成し、いずれも第３象限内に分布していた。第３象限内での分布は植物腐植土であることを示唆している。試料No.9はＣ群を形成し、第２象限の原点から離れた第３象限に近い部分に位置していた。この位置には、Ａ群およびＢ群とは多少性質の異なる植物遺体が分布していたことを示唆している。

7.総括

萱刈沢Ⅱ遺跡遺構中のＳＫＦ08土壙内外の埋土から残存脂肪を抽出し、残存脂肪中の脂肪酸およびステロールの分析を行った。その結果、試料No.1からNo.8の土壙内試料も、試料No.9の土壙底面直下の土壙外試料も植物腐植土であり、遺体、遺骨などを埋葬した土壙墓ではないと思われる。今回の分析は数ある土壙中、ただ１カ所の土壙から試料を採取したので、他の土壙との関連や、他の土壙の性格が不明で遺構全体を通しての土壙の性格判定は困難であった。しかし、ＳＫＦ08土壙は埋葬以外の他の目的、例えば採集食品の貯蔵穴などのために掘った土壙とも推定でき、後に自然の植物腐植土で覆われて行ったものである可能性が強い。

参考文献

（１）中野益男：「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻（６）、1984、pp124.

（２）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「納内３遺跡の遺構群に残存する脂肪の分析」、『納内３遺跡』、北海道埋蔵文化財センター調査報告書、第60集、1988、pp141.

（３）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「西方前遺跡の配石遺構に残存する脂肪の分析」、『未発表』

（４）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「手取清水遺跡遺構に残存する脂肪の分析」『未発表』

（５）中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏：「初音カ原Ｂ遺跡の土壙に残存する脂肪の分析」、『未発表』

（６）中野益男、伊賀　啓、根岸　孝、安本教傅、畑　宏明、矢吹俊男、佐原　真、田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40.

（７）M.Nakano and W.Fischer:「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」、『Hoppe-Seylers Z.Physiol.Chem』、358巻、1977、pp1439.

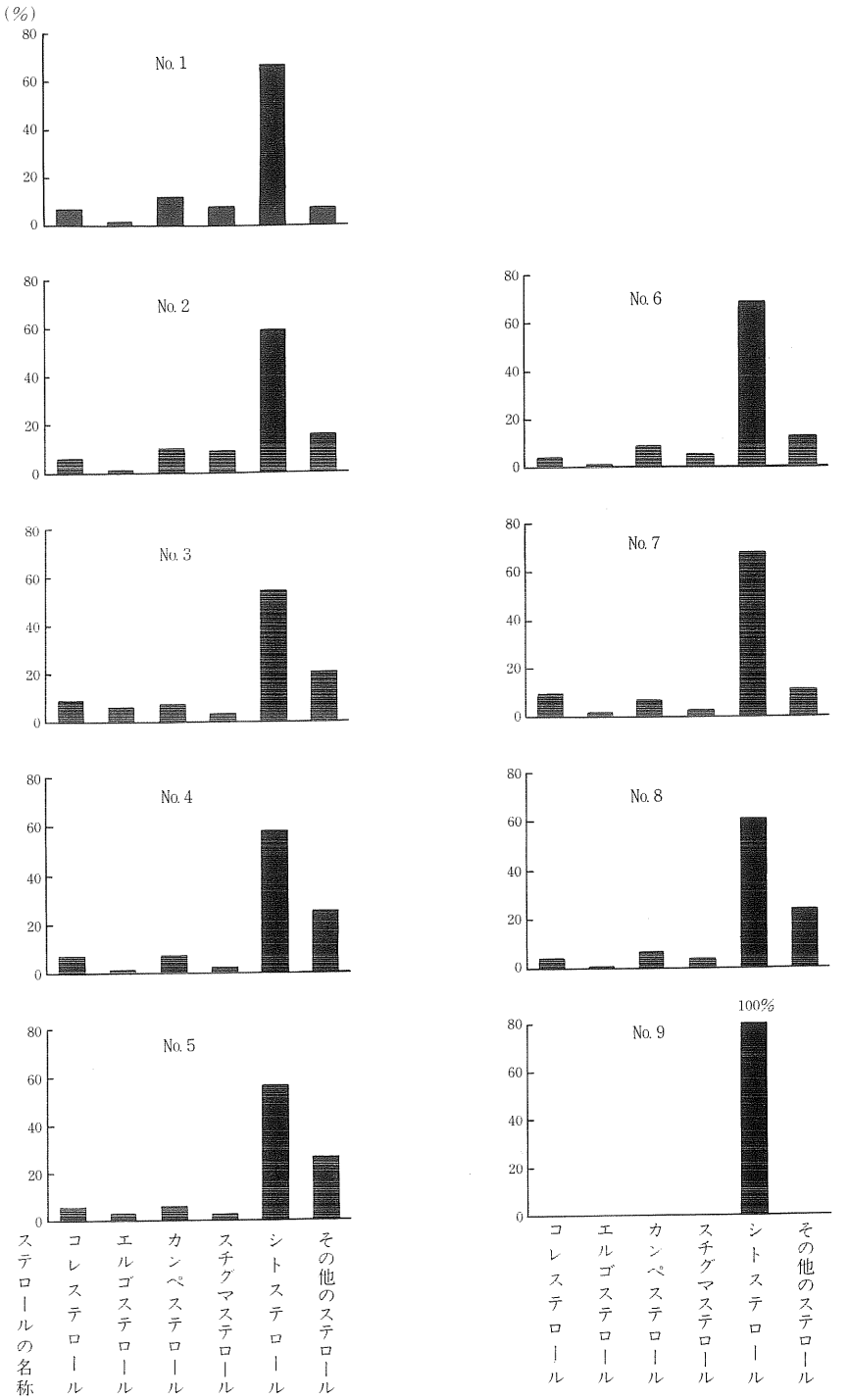


図３　土壌内外土壌試料に残存する脂肪のステロール組成

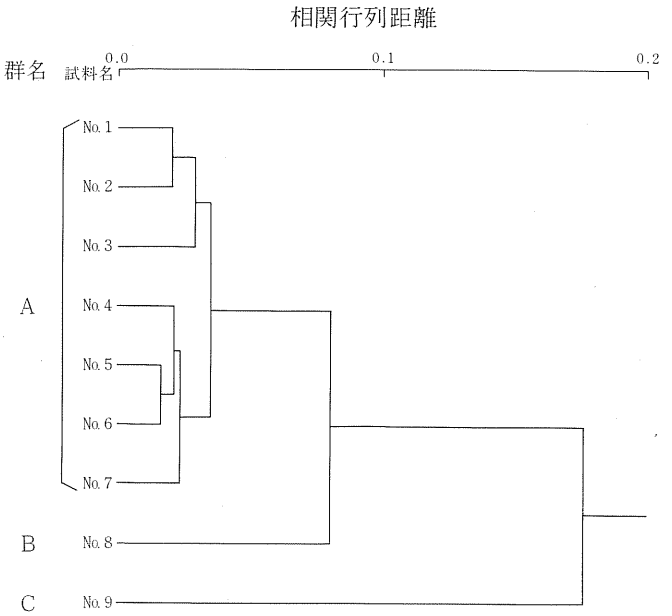


図 4　土壌内外の土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

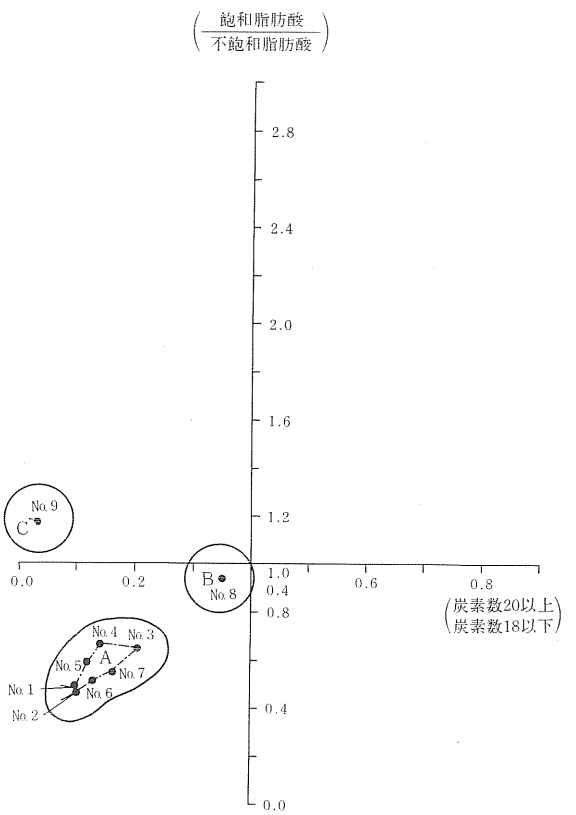


図 5　土壌内外の土壌に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関